仮面ライダーディケイド・IF 仮面ライダークウガ～小野寺ユウスケの幻想録～

ＡＧＩＴΩ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーディケイド・ＩＦ　仮面ライダークウガ～小野寺ユウスケの幻想録～

【Ｎコード】
Ｎ９９４６Ｘ

【作者名】
ＡＧＩＴΩ

【あらすじ】
これは、もしも仮面ライダークウガである小野寺ユウスケが仮面ライダーディケイドである門矢士の旅にオールライダー対大ショッカー、もしくは完結編が終わり着いていかず自分の世界、クウガの世界に帰ってきて幻想入りしたらの物語。
※前に連載していた東方超絶記のリメイク版と言っても過言ではない作品です、リメイク前を愛読していた方々、申し訳ございません、この場で謝罪の言葉を述べます。

第1話『クウガの世界・続』（前書き）

前書きでも書いたようにすみません、そのままがいい意見もありましたが自分じゃ納得できない部分もありましたので。
ディケイド要素を加えつつ進めていきたいです。

第1話『クウガの世界・続』

皆さん、小野寺（おのでら）ユウスケはご存知でしょうか？
はい、仮面ライダーディケイドに登場した仮面ライダークウガの変身者の名前でディケイド、世界の破壊者である門矢（かどや）士（つかさ）の旅を手助けしてきた青年であります。
ですが、もしオールライダー対大ショッカー、もしくは仮面ライダーディケイド完結編で共に旅をせずにクウガの世界に帰ってきたら、そのクウガの世界から始まる新たな物語が始まるとしたら。
これはもしも小野寺ユウスケが完結編の後に旅をせずクウガの世界に戻ったらのお話。

◆◆◆

仮面ライダーディケイド・ＩＦ
仮面ライダークウガ
～小野寺ユウスケの幻想録～

◆◆◆

ここはクウガの世界、この物語の主人公の小野寺ユウスケはある墓の前にいた、墓石には「八代家」と書かれていた。

「あねさん、俺、戻ってきたよこの世界に」

その墓に眠るのはユウスケの戦いを支え、戦う理由を作り導き憧れであった、八代藍（やしろあい）が眠る。

「士達との旅で多くの事を学んで、色んな人達に出会った、色んな経験をした、楽しかった事もあったけど辛かった事もある、だけどそれも全部かけがえのない思い出になった」

手を合わせ目を瞑り目の前にいるはずだと思う八代に話し掛ける。

「だから安心して眠って、俺がこの世界を守るから」

それを言うとユウスケはその場から歩き去っていく。

墓地の出入口の前に停めておいた銀のボディに前部に金色の角のようなヘッドライトのカバーが上部に付けられ赤い模様とクワガタのようなマークがカバーの先と車体の左右両面に描かれたバイク・トライチェイサー２０００にそれの鍵となるグリップのトライアクセラーを差し込むとそれを押して歩き車道に出ると跨って走りだす。

（どうしよっかな……ん？）

何かに気付いてトライチェイサーを一旦停めると掲示板が建てられており警察のポスターが、そのポスターに三つに別れた銀色の角に赤い眼、青い仮面で銀色と青の装甲の仮面ライダーが写っていた。

「Ｇ３か……この世界にも」

それはＧ３と呼ばれる仮面ライダーだった。

（クウガをモデルにしてるからな、クウガの世界にあってもおかしくないか）

Ｇ３はクウガに模して作られた仮面ライダーのため外見がそっくりなのは無理もない、ユウスケはトライチェイサーを再び走らせる。走らせ続けるとトンネルの中に入った、長く暗くオレンジの光が点々と点いたその中を走るのだが出口が見えてこない。

（出口が見えない……まさか心霊スポットのトンネルぅ！？）

とバカな事を思いつつ走っているとトンネルとは別の空間に入った、その中は暗く回り沢山の目が浮かび上がる空間だった。

（まさか本当に！？）

その異様な光景を目の当たりにしてまだ心霊スポットだと思い込んでいるユウスケ、アクセルを思い切り回して早くここから出ようと加速すると光が見えてきた。

（出口だ！）

出口だと確信し更に加速させ光が近付いてくる、少し眩しく感じたがすぐ目の前まで光が見え潜り抜けたが……ユウスケは異変を感じトライチェイサーをゆっくり停車させた。

「ここは……」

トンネルから出たと思った、だがそこに広がるのは車道ではなく緑豊な草原の丘だった。

「海東さんの世界みたいだなってかここどこだよ……」

空は青く空気は澄んでおり都会の重苦しく不味い空気とは大違いだった。

「向日葵（ひまわり）……」

下の方に向日葵が生えている場所が見えそこへ向け走りだした、ユウスケには自然に生えているようには見えなかったからだ、誰かが手を加え手入れをしているようだったからだ。

（どこの田舎だ～？）

ビルの一つもないため田舎だと判断した。

◆◆◆

「着いた着いた」

丘下りると目の前には辺りに生えた何本もの向日葵が広がっていた。

「スゲー……」

その光景に見惚れていた、この膨大な数の向日葵に。

「人いないかな？」

キョロキョロしていると遠くから人が二、三人並んで通れるぐらいの細い道を歩いてくるものが見えた。
ユウスケはトライチェイサーから降りヘルメットを右のグリップに掛けそれを押して歩きだす。

（人がいて良かった～）

そう思っているとすぐに話せる距離まで近付く。

「こんにちは」
「こんにちは」

ユウスケが挨拶すると緑色の短い髪の毛で赤い瞳、赤と白を基準にした服に日傘を差した女性は快く挨拶を返した。
これで第一印象はいい人だと判断したのだ。

「あの、道を聞いていいですか？」
「いいわよ？」
「東京ってどこですか？」

正直に聞いた、率直に、だが彼女は何か納得したように頷いた。

「貴方……外の世界の人間ね」
「外の世界？」
「まずはそこからなのね……」

彼女の話によるとここは幻想郷という所で回りからは見えないように結界で被われており一種の異世界である。
幻想郷には妖怪と人間等が暮らしていると聞いた。

「ここ異世界だったのか……」

簡単に言うとクウガの世界の中にある異世界、日本の中にある忘れられ誰も知らない地域だと。

「物分かりがいいわね、普通なら否定したりするのに」
「いえ、まぁ……」

異世界を旅をした事があるユウスケにとってはそんなの日常茶飯であったため理解は早かった。

「外の世界に戻りたい？」
「はい、戻りたいです」

それが普通である。

「いいわ、今日は機嫌がいいから特別に案内してあげるわ」
彼女は微笑みながら言うとユウスケは少し怯えた、この人何か裏があると。
「俺、小野寺ユウスケです」
「私は風見幽香よ、よろしくね」
「こちらこそ」
二人は歩きだした、幽香によると遠いが神社がありそこの巫女に頼めば外の世界に帰らせてくれるようだ。
「少し時間掛かりそうだな……」
「時間はまだあるのよ、ゆっくりしましょう」
「幽香さんはなんで機嫌が良かったんですか？」
素朴な疑問、機嫌が悪かったら教えてはくれないのはわかるがもしかしたらどちらでもなくても教えてはくれなかったのだろうか？
「花が綺麗に咲いたのよ」
「花が？」
「自分が丹念に育てた花が綺麗に咲くのは嬉しい事じゃなくて？」
あの向日葵も彼女が育てたのかなと思いつつ歩いていると森の中に入る。
「少しなんか……息苦しい森ですね」
「ここは魔法の森と言って魔力やらが漂ってるから人間は普段は入らないけど神社に行くには通らないといけないの、

その魔力に浸ってると人間じゃ少し危ないわね」

その説明を受けるとトライチェイサーのサドルを上げその収納場所の中からヘルメットをもう一個出す。

「なら早く走り抜けよう、これ被って」

幽香は言われるがままヘルメットを被るとユウスケもグリップに掛けていたのを被りトライチェイサーに跨る。

「幽香さんも乗って」

「え、ええ」

少し戸惑いつつ後部に座るが跨らず椅子に座る感覚で乗り日傘は閉じてと言われ閉じて。

「俺にしっかり掴まっててください」

言われた通りに掴まるとトライチェイサーは大きな音を上げ走り始めた。

「これ、走るのね」

「バイクって言うんですよ」

トライチェイサーは一直線に森を駆け、森を抜けると目の前に一昔前の木の板等でできた村が見えた。

「ここが人間が多く住む人里よ」

「このまま走ったら危ないな、迂回して反対側に出ます」

トライチェイサーを右方向へ向け走りだす、規模はそんなに広い訳でもないためすぐに反対側の森に到着し魔法の森とは別の森の中に入る。

「このまま進めば階段が見えるはずよ、そこを上がれば博麗神社よ」

幽香は親切だった、怖いほど親切だった、その親切さが逆に恐ろしかった。

すると言われた通り石で作られた階段が見えそこの前に停まるとトライチェイサーから降り右のグリップを抜き取る。

「ここを上がれば博麗神社よ」

「ありがとうございます」

幽香も少し用があったため一緒に着いていく事にしたのだが何か騒がしかった。

「騒がしいですね」

「いつものことよ」

そう会話をしながら階段を上がりきり鳥居を潜り境内に入る、そこで目にしたのは。

「コイツは……！」

境内は荒れており石の道は剥がれ、凹んでおり、辺りに蜘蛛の糸らしきものが散らばりそれに巻かれた金髪の黒いとんがり帽子を被った少女が倒れていた。

「よう幽香」

「魔理沙、この惨状は何かしら？」

少女の名前は霧雨魔理沙（きりさめ　まりさ）だった。

「変な妖怪が急に現れて暴れたんだ」

「それで貴方は返り討ちにあって霊夢（れいむ）が戦ってるのね」

その人物と妖怪は今どこに、そう思い上を見上げると神社の屋根の上は蜘蛛の糸だらけになっておりその上で戦っていると判断。

「気を付けろ、そいつスペルカードルール無視して全力で殺しにかかるぞ」

「……そう、わかったわ」

幽香は屋根の上に行こうとしたが先にユウスケが動き出し神社を支える柱を器用に手や足を掛け上る。

「お前危ないぞ！」

「大丈夫！心配しないで！」

幽香はその場から浮かぶとゆっくり屋根の上に。

二人は同時に屋根に上がるとそこは蜘蛛の巣のように張り巡らされた糸が張られておりその片隅には赤いリボンを付け黒い髪の毛の少女が糸に巻かれ拘束されていた。

「幽香！」

「あら霊夢、貴方も」

「気を付けて、あいつこの上だと素早い！」

少女の名前は博麗霊夢（はくれい　れいむ）、この神社の巫女。

霊夢が向く方向には人型だが異形な姿の怪物が、頭が蜘蛛の足みたいな左右四本ずつの突起物が並んでおり眼も口も蜘蛛のようで腰に赤銅色の怪物の顔のようなバックルが付いたグロンギ怪人ズ・グムン・バが立っていた。

「奴は……！」

ユウスケは見覚えがあった、外の世界で自分が戦った怪人だと。

「アレ、本当に妖怪？」

グムンは獲物がまんまと引っ掛かった、そう感じ口から長く束になった蜘蛛の糸を発射に捉えようとしたが避けられる。

「貴方、下に降りた方がいいわよ、殺されるわよ？」
「幽香さんこそ」
「私は妖怪だから平気よ」

ユウスケは妖怪だと初めて知った、幽香が妖怪であることを。
幽香は日傘を閉じたまま持ち戦闘体勢に。

「ここにいるならいなさい、死んでもいいならね！」

グムンは突貫してきたが幽香は日傘を振るい殴り飛ばす。

「スゲー！」
「当然よ」

グムンは怒り糸を弾丸のように丸めて口から連射するが幽香はすべて避けながら接近、そして日傘を振り上げて思いっきり体重を掛け

振り下ろしグムンを叩きのめす。
その間にユウスケは霊夢を拘束する蜘蛛の糸を引き契り解放する。

「ありがとう、だけど命知らずね」
「まぁね」

グムンは立ち上がり襲い掛かろうとするが日傘でかっ飛ばされ横に吹き飛ぶ。

「それにしても幽香さん、スゴいな……」
「幻想郷の中でも相当な実力者だからね」

幽香が優勢に立っていた、このままならユウスケが戦わずにグムンを倒せる、そう思っていた矢先だった。

「グゴォ！？」

突然グムンに銀色のメダルが一枚体内に入る、それを皮切りに空から大量の銀色のメダルが注ぎ込まれるとグムンの筋肉はむくむくと膨れ上がり肉体が強化されたようだった。

「グオォォォォォォォォッ！！！！！！！！！！！！！！」

大きく叫ぶ、強化に喜ぶように、幽香は警戒しつつ構えているとグムンは口から糸を丸めた弾丸をマシンガンのように連射していく。

「っ！」

幽香は反射的に避けるのだが足に弾丸が霞め膝を付き掛けるがそれはプライドが許さないため何とか立つ。

「急に強化した……」

グムンは飛び掛かる、それを避けようとするが足が痛み動けなかった、このままで殺られる、そう思った瞬間だった。

「オリャァァッ！！！！」

ユウスケはグムンに飛び掛かりタックルすると一緒に倒れる。

「貴方……！」

なんて無茶な事を、そう思うがグムンは体勢を直し殴り掛かるがユウスケはそれをギリギリの所を避けていく。

「くっ！」

屋根の瓦は剥がれていき隅のから下に落ち割れていく。

「ハァッ！」

グムンは束ねた糸を吐き出す。

「うわぁっ！？」

腹に当たりそのままユウスケを押し出し下に落とす。

「おい大丈夫か！？」

魔理沙は心配し声を掛けるがユウスケは痛みで悶えていた、そこに

グムンが降りてきた。
だがユウスケは痛みに耐えながら立ち上がり腰の前に手を何か包むように添えると銀色のバックルの中心が黒くなっているベルト・アークルを出す。

「ポセパデスドン、クウガ！」

グムンはアークルを見て驚く、ユウスケは右腕を左斜め上に向け伸ばしゆっくり右へ動かす。
屋根から幽香と霊夢が降りてくると。

「変身！」

両手でアークルの左側のスイッチを押すと中心に埋め込まれたアマダムという石が赤く輝きユウスケは姿を変えた。
金の三つに別れた角に二つの赤い眼、赤く燃え上がるような鎧を纏った姿に。

「なんだよありゃ……」

突然の事に驚く事しかできなかった。
ユウスケは現代に甦りし古代の戦士、仮面ライダークウガ・マイティフォームに変身を遂げたのだ。

「行くぜ！」

拳を構えると気合いを入れるように声を上げ強化したグムンに立ち向かった。

「ハァッ！」

クウガは先制攻撃をし殴るが強化したグムンには余り聞いていない様子、そのため連続でパンチを繰り出しグムンの体に浴びせていく。

「効いてない……！」

拳を見て呟くとグムンに殴り飛ばされ鳥居にぶつかり柱が少し凹む。

「ボソギデジャス」

グムンはグロンギ語で「殺してやる」と発すると糸の弾丸を連射しギリギリの所を避ける。

「フン！」

糸のを放ちクウガの首を締め付ける。

「ぐぅぅぅっ！」

糸を掴み引き契ろうとするが束ねてあるため強度が高くなかなか切れなかった。
グムンはその糸を持ちそのままクウガを投げる地面に叩き付ける。

「がはっ！？」

咳込むと頭を掴まれ立ち上がらせると腹を何発も殴られる。
ここでようやく呆然として立って見ていた幽香達が動き出した。

「手伝った方がいいわね」
「そうね」

霊夢はお札を出すとグムンの頭上に白黒の陰陽玉が落下し下敷きになり糸は解ける。

「ありがとう！助かった！」

クウガは大声で礼を言うと何歩か後ろへ下がりグムンとの距離を離す、右腕を左斜め上に向け伸ばし変身ポーズを取ると両手を下げ右足を一歩引き足の裏が赤く燃えるように輝くと走りだす。
陰陽玉は消えグムンは立ち上がるが遅かった、クウガはジャンプし右足を前に向け飛び蹴りを放った。

「ハアァァァァァーッ！！！！！！！！！」

炎の飛び蹴りを放つ必殺技マイティキックが炸裂、グムンの蹴られた胸に人が囲まれるような赤く光るマークが現れる。

「グゴォ！？う゛……ガアァァァァッ！！！！！？」

グムンは断末魔を上げ腹部を中心にし大爆発を起こし倒され、爆炎と爆煙は上に向かって上る。

「はぁ……はぁ……」

クウガは疲れていたが魔理沙の元へ行き糸を引き契る。

「助かった……ありがとな」
「いいさ……」

だがしかし、異変が起きた。

突如灰色の綺麗とは言えないオーロラが現れ神社を抜けると賽銭箱の前の柱に背を付き腕を組む赤い二つの眼で緑色のバッタでメカニカルな姿をしたライダーと同じ柱に腕を付き似たような茶色っぽく白い眼をしたライダーが現れた。

「兄貴……ここにもライダーがいるぜ」

「ああ……」

二人のライダー、緑色のキックホッパーと茶色のパンチホッパーがクウガを見る。

「何なのよアイツら、あんたの知り合い？」

「あまり知り合いたくない……」

霊夢の問いに答えるとキックホッパーは少し首を傾げクウガを見る。

「お前……前に弟を笑った奴だな？」

「え〝……あ！まさかあの時のキックホッパーとパンチホッパーか！」

「兄貴……どうやらそうみたいだぜ」

ダブルホッパーは下を向きながらゆっくりと足をわざとらしく大きく上げながら歩く。

「殺っちまおうぜ、俺達を笑う奴を」

「そうだな……」

視線をクウガに向けると戦う姿勢を見せる。

「やるつもりね」

「カブトライダーズ相手は骨が折れる……」

クウガも仕方ないと思い拳を構えるとダブルホッパーは飛び掛かったのだった。

第1話『クウガの世界・続』（後書き）

最後に出たダブルホッパー達はディケイド本編にも出たあのライダー達です。
因みに退場はしません、ちょっと面白い展開を考えたので。
後、最初に出た怪人が蜘蛛怪人でしたよね？次回出る怪人が何かわかりますか？

次回予告

キックホッパー
「兄貴と呼ばしてください！」

クウガ
「えー……」

霊夢
「怪人ね……」

魔理沙
「アレもグロンギか？」

ユウスケ
「アレはオルフェノク！」

クウガ・ペガサスフォーム
「……そこだ！」

次回【貫く疾風】

第2話『射抜く風』（前書き）

タイトル変わりました、あの白いコウモリも出ますよー。

第2話『射抜く風』

前回のあらすじ……
幻想郷に迷い込んだ小野寺ユウスケは風見幽香と出会い元の世界に帰るため博麗神社に向かったのだがそこで外の世界で現れたグロンギ族である蜘蛛怪人ズ・グムン・バが博麗霊夢、霧雨魔理沙に襲い掛かるがそこでユウスケはもう一つの姿である仮面ライダークウガに変身しグムンを倒すが、
それもつかの間、灰色のオーロラから仮面ライダーキックホッパーとパンチホッパーが襲い掛かるのだった。

◆◆◆

「オラァ！……うわぁ！？」

パンチホッパーがクウガを殴るが拳を受け止め投げ飛ばされる。

「貴様ァ！弟を投げ飛ばしたなぁ！」

その事に逆上したキックホッパーはジャンプして飛び蹴りを食らわせようとしたが。

「ハァァァァーッ！！！！」

足を高く上げハイキックで飛び蹴りを受け止めるり。

「何っ！？……ウボァ！？」

キックホッパーは地面に着地すると突撃しキックを食らわそうとしたが腕で受け止められ殴り飛ばされる。

「兄貴……コイツ、強い」

「なら……」

二人は「クロックアップ」と叫びベルトの右側のスイッチを押し【Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ】と電子音が鳴り響きクロックアップという機能を使用、超高速の特殊移動方法を使い姿が見えなくなる。

「消えた……！」

霊夢はそう呟くがクウガは否定する。

「違う！アイツらは高速移動して……ぐはっ！？」

だが説明する暇もなくクウガは何かに弾き飛ばされた、クロックアップ中のパンチホッパーに攻撃されたのだ、それを皮切りにクウガは弾かれながら宙に舞っていく。

「高速移動ならその中を潜り抜けられない弾幕を張ればいい話だぜ」

「そうね」

霊夢と魔理沙は幻想郷での決闘のルールで使われるスペルカードというものを出すと。

「霊符『夢想封印　散』！」

スペルカードはカード名を叫んで使うと宣言しなければならない。

「魔符『スターダストリヴァリエ』！」

次は魔理沙が宣言、霊夢を中心にしてお札や光弾が周囲に放たれ魔理沙からは星屑が撒き散らされる。

「うおっ！？」

クウガはギリギリ避けたがクロックアップ中のダブルホッパーに命中しクロックアップが解除されてしまう。

「兄貴……コイツら強い……」

「ああ……あのライダー、この前戦った時よりもパワーアップしている……」

ふらふらしながら立ち上がると変身ベルトであるバッタを模したそれぞれのダブルホッパーの色をしたホッパーゼクターのレバーを上げると「ライダージャンプ！」と叫び【Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ】と電子音が響き足にエネルギーが貯まりジャンプしレバーを戻しキックホッパーは「ライダーキック！」、パンチホッパーは「ライダーパンチ！」と叫び必殺技を炸裂する。

「来る……超変身！」

変身ポーズを取り叫ぶとアマダムは青く輝き眼は青に、鎧は青く薄くなり身軽な姿ドラゴンフォームにチェンジ。

「青くなったぜ！」

それに驚く魔理沙、ダブルホッパーの必殺技が当たりそうになった瞬間クウガは、この姿は力を犠牲に素早さを強化した姿であり跳躍力も上がっており高くジャンプし避ける。

「避けられただと！？」

クウガは地面に着地、落ちていた木の棒を拾うと青と金の杖に変化、両先が伸びる、ドラゴンロッドに変化した。

「ハァァァァーッ！！！！！！」

ドラゴンロッドで強く突く必殺技スプラッシュドラゴンをキックホッパーに炸裂し吹き飛ばすと後ろから襲い掛かるパンチホッパーにも前を向きながら後ろへ必殺技を食らわし吹き飛ばす。

「ま、負けた……」

「俺達……兄弟が……」

膝を付いて唖然としているダブルホッパー達。

「あ、さっきと今、ありがとうね」

「いいって事よ、助けてもらったし」

四人は軽く会話しているとふらふらと立ち上がるダブルホッパー達。

「なんだ!?まだやるつもりか!」

戦う姿勢を見せると。

「「兄貴と呼ばしてください!」」

一瞬にして土下座、仮面ライダーが土下座とはシュールである。

「えー……」

三人は変身を解く、キックホッパーの変身者は黒く長いジャンパーを着て踵に何かノコギリの刃みたいな丸いものが付いたブーツを履いた男でパンチホッパーの変身者も似たような格好だった。

「俺、矢車総(やぐるまそう)と申します」

「俺は影山蒐(かげやましゅん)と言います」

丁寧に自己紹介する二人、元々はそんなに悪い人間ではないのだろう。

ユウスケ達も一応自己紹介し取り敢えず神社の中に入り居間で話す事に。

「それでさっきのは何なの?」

幽香に聞かれ正直に話した、仮面ライダーは色んな世界にいる怪人と戦う戦士でこの幻想郷があるのはクウガの世界、グロンギの事などを。

「俺達は数ある内のカブトの世界の人間で組織から追い出されて」

「あんなにやさぐれてたのかよ」

魔理沙は呆れたように言うが。

「自分も似たような境遇じゃないの」

「そうだった……」

霊夢に突っ込まれ少ししょぼんとなる。

「てか総達はどうするの、元の世界帰れるかわからないよ？」

「帰れないなら兄貴に着いていきます」

「いいって言ってないのに」と困りながら呟くが二人の眼差しに折れたのか許可した。

「ユウスケ、聞くわよ、まだあの妖怪……いや、怪人が現れると思う？」

その質問に頷くしかなかった、グロンギはある世界で３００体は確認されている、ユウスケも戦ったのは一体や二体だけではない、まだいると考えた方がいい、総達も来た事によりグロンギ以外の怪人もいると考えた方がいいだろう。

「俺、まだ帰らない」

いきなり何を言いだすかと思えば帰らないと言い出した。

「なんで？」

「だって怪人を倒し誰かを守るのが仮面ライダーの使命だから、俺はその使命を全うする！」

「さすが兄貴！」

「俺達も着いていきます！」

ユウスケの言葉に盛り上がる総と葬。

「それにいつでも帰れるんだろ？」

話を振られ頷く霊夢。

「それなら」

「だけどお前、家族は？」

普通に考え家族が居るはずだと思い聞いてみる魔理沙。

「俺の親父は戦場カメラマンで戦場で銃弾に倒れて、お袋は病気で死んじゃったから天涯孤独の身なんだ、俺を心配する人は“この世界”にはいないんだ」

それを聞いた総達二人は涙を流す。

「兄貴苦労したんすね……」

「俺達一生着いていきます」

泣きながら誓う二人、ユウスケは少し迷惑そうだがそれ以上に楽しそうだった、仲間ができるのは楽しい、それを知っているからだ。

「わりぃこと聞いちまったな」

「気にしないで、“この世界”にはいないだけだから」

だがユウスケを心配するものは結構いるのだ、旅を共にした仲間や旅した世界の仮面ライダー達が。

「で、住む場所どうするのかしら？」

幽香の言葉が深く突き刺さった、幻想郷に自分達の定住がないと。
そして魔理沙の視線の先には霊夢が。

「わかったわよ、住む所探している間はここ使っていいわよ」

住む事を許可した、その事に土下座をし礼を言うのだった。

◆◆◆

「だけど取り敢えず蜘蛛の糸片付けてちょうだい、こんなんじゃ参拝客が来ないわよ」

居候生活最初の生活は神社に散らばった蜘蛛の糸の撤去だった。

「この神社参拝客来るっけ？」
「魔理沙うるさい」
「妖怪なら来るわよね」
「幽香もうっさい」

基本参拝客が来ない神社であった。

「じゃあ私寝るから後よろしくね」

「寝るのかよ！」、三人当時にツッコミが入ったが聞く耳持たず、霊夢は神社の中に入っていった。

「アイツは寝るかお茶飲むか掃除するかしかしないからな」

総と葬にまでそんなんで巫女って勤まるのかと思われたらしいが勤まるから怖いのだ。

「それなのに賽銭箱の中身心配するんだぜ」

「図々しいな！」

葬のその一言が聞こえたのか、陰陽玉が落下し下敷きとなった。

「葬ーーーーー！！」

総は嘆くように叫び救出しようと奮闘する、ユウスケは霊夢には逆らわないようにしようと誓うのだった。

すると……

「キャァァァァァーッ！！！！！！！！」

と可愛らしい女の子の叫びが聞こえ全員キョロキョロしだすが見当たらずどんどん声が大きくなり近付いてくると。

「イデッ！？」

ユウスケの頭に何かぶつかり落ちた、その落ちたものを見る、それは赤い目をした白くて小さいコウモリみたいな生物だった。

「キバーラ！」
「ユウスケ～！」

コウモリは飛ぶ、名前はキバーラ、ユウスケの旅仲間の一人でキバの世界の住人、仮面ライダーキバーラに変身するためのモンスターでもある。

「久しぶり～♪」
「だけどなんでキバーラが？
キバの世界に帰ったんじゃ？」

キバーラも自分の世界に帰ったはず、だがなぜと思い。

「私にもわからないのよ～気付いたら落ちててここに～」

ユウスケは自分が知っている範囲で簡単に幻想郷の事を説明。

「そうなのぉ～……わかった！キバの世界に帰れるまで一緒にいる！」
「またよろしくなキバーラ！」

キバーラも共に住むことに。

「あのキックホッパーとパンチホッパーだったなんてね～」

キバーラは士と敵対する鳴滝の元にも居たためこの二人をクウガの世界に送り込んだ事を覚えていた、ユウスケがキバの世界に来たの

もキバーラに誘われたからだ。

「てかユウスケ、カブトライダーズ二人相手にして勝っちゃうなんてすごーい！」

「俺だけじゃないよ」

確かに霊夢と魔理沙がいなかったら負けていたかもしれない。

「だけどトドメを刺したのはユウスケだぜ」

「いやいや、グロンギだって幽香さんが最初食い止めててくれたから」

「そうね……貸しを作ったわね」

「ここまで案内してくれたから貸し借りなしでしょ」

だが幽香は首を横に、プライドが高いため助けられた事を許せないのだ。

「いいや、案内したのは機嫌がよかったから、今度は私が助ける番よ」

「あ、それは……楽しみにしてます」

困りながら言うユウスケ、蜘蛛の糸も片付け終わっていた。

「てかこんだけの量、よくあんな細い身体で出せるな」

感心していた、そこである事を思い出した。

「なぁキバーラ、銀色のメダルについて何か知らない？」

そう、グムンを強化したメダルについて聞いた。

「それは多分セルメダルね、仮面ライダーオーズの世界の怪人の体を構成してる欲望が詰まったメダルよ」
「仮面ライダーオーズ……まだ俺が知らない仮面ライダーいっぱいいるんだな」
興味が湧いていた、まだ知らない仮面ライダーいるんだなと。
「終わった～ってなんかまた増えてない？」
霊夢が顔を覗かせキバーラが増えているのに気付き居候がもう一匹増えた。
「よろしく～♪」
キバーラは円を描くように回ってウインクする。
◆◆◆
そして夜になろうとしていた、幽香はもうとっくに帰っており魔理沙も魔法の森にある自宅へ帰ろうと箒に跨って飛んでいた。

「ふぅ……今日は酷い目にあったぜ～」

そう呟き愚痴を溢していると森の中から灰色の鋭い刃のブーメランが飛んできた。

「うわっ！？なんだ！？」

ブーメランを避ける、この武器の性質を知っているため戻るブーメランもちゃんと避け戻った先にレーザーを放つと灰色のコウモリに似た異形が羽根を広げ飛翔し姿を見せた。

「グロンギか！？」

「俺がそんな下等な殺す事しか脳がない連中と一緒にするな！」

「喋った！」と驚くとオルフェノクという種族の怪人でコウモリの性質を持ち両肩に先ほどの鋭利な鎌みたいなブーメランが付き銃を持ったバットオルフェノクが姿を見せたのだ。

「銃を使うのか」

銃口を向け引き金を引こうとした瞬間魔理沙は横へ飛ぶと同時にバットオルフェノクは引き金を引き鉄鋼弾を四発同時に放つが銃の弱点は弾道は一直線のため変な特殊能力があるとかなり厄介だがないのがせめてもの救いだが。

「命中精度は高いな……」

だがバットオルフェノクがかなりのやり手だと理解した、夜も近いため都会でもないため真っ暗に近い、だがその中を迷いなく引き金を引く、コウモリの性質を持っているだけの事はある。

「さて、覚悟しやがれ！」
「誰が！」
魔理沙は六角形のアイテム・ミニ八卦呂を出しそれをバットオルフェノクに向けると。
「恋符『マスタースパーク』！」
スペルカードを使うと宣言し巨大な砲撃が放たれた。
「今の光は！？」
境内からマスタースパークの光が見えており。
「魔理沙のマスタースパーク……何かあったのかしら」
霊夢はその光を見て不安になるとユウスケは階段を駆け下り始めた。
「兄貴！」
「二人はそこにいて！」
下に停めていたトライチェイサーに跨るとヘルメットを被り走りだす、横にキバーラが並んで飛び着いてくる。
「この方向で合ってるよユウスケ！」

「ああ！」

変身すると決意し腰にアークルが現れ右腕を左斜め上に向け右へ動かし「変身！」と叫び右手だけでスイッチを押しアマダムは赤く輝きクウガ・マイティフォームに変身しトライチェイサーは森の中を駆ける。

「なんだよ今のバカでかい砲撃は……危うく呑み込まれるところだった……」

バットオルフェノクは背筋が凍っていた、あの砲撃に呑み込まれたら助かってなかったと。

「弾幕はパワーだぜ！」

するとまたスペルカードを宣言、恋符『ノンディレクショナルレーザー』という三本のレーザーを回転させながら放つ。

「危ねっ！」

バットオルフェノクはそれをすれすれで避け弾丸を放つが避けられる。

（まさかスペルカードがここまでのものとは……首領も警戒するわけだ……）

バットオルフェノクは自分が所属する組織の首領の事を思いつつ弾丸を放つが軌道を読まれ避けられるばかりだった。

「甘いぜ！」

「それはこっちの台詞だぜ！」

バットオルフェノクはブーメランを投げてきた、例の如くそれを避けるが。

「しまっ……！」

銃口が自分を向いていたため慌てて弾道から逸れるが。

「それが甘いって言ってるんだぜ！」

気付いた頃は遅かった、後ろから迫るブーメランを、動いたため体に当たる事はなかったが箒が切り裂かれ地面へ落下してしまう。

「やばっ！」

恐怖で目を瞑る、かなりの高さで落ちたら死ぬかギリギリ生きるかだが生きたとしてもバットオルフェノクの的になるだけだ、絶体絶命だと思われたその時、落下がゆっくりになっていく、恐る恐る目を開くと服の襟を噛み付いて羽根をばたつかせるキバーラがいた。

「キバーラ！」

キバーラは魔理沙を地面に下ろすと前にクウガが乗ったトライチェイサーが停まる。

「大丈夫魔理沙！？」
「わたしは大丈夫だぜ」
「ユウスケ！」

キバーラは敵を見て呼び掛けるとクウガは上を見上げバットオルフェノクをギリギリのところで確認。

「オルフェノク……！」

オルフェノクは仮面ライダーファイズの世界の怪人であり死んだ人間が甦生してなってしまう怪人、だがほとんどは力に呑み込まれ使途再生という能力でオルフェノクを増やそうと人間を殺害してしまうオルフェノクばっかだが中には人間との共存を望むものもいるがかなりの少数。

「空飛ぶのか……」

何か武器になるようなものないか探していたが見付からずバットオルフェノクはブーメランを投げる、さっきと同じ戦法を取ったが。

「何！？」

ブーメランはクウガに受け止められ投げ返されてしまい避けるが腕を霞め銃を落としてしまう。
その銃をキャッチして持つと「超変身！」と叫びアマダムは緑色に輝き眼も緑色に左肩の防具と鎧は緑に、右肩は黒い防具がつき変化しペガサスフォームに変身、
それに合わせ銃も金と黒と緑色で金のブレードが上下に付いた銃ペガサスボウガンに変化。

「今度は緑かよ……」

赤、青、緑と変化するクウガに後何個姿があると思いながらクウガを見る。

クウガは上を見上げ左手でペガサスボウガンの後部のレバーを握る、ペガサスフォームは各感覚神経が向上し赤外線や紫外線も見える眼を持つ姿だが向上し過ぎて負担となり５０秒しか保たない、だがその間に敵を見付ける。

「見つけた！」

叫ぶとレバーを引き銃口を上へ向けると「そこだ！」とまた叫び引き金を引きレバーが戻ると銃口から空気が圧縮された弾丸を放つブラストペガサスを炸裂する。

「ギャァァァァァァーッ！！！！！！！！！！？」

弾丸に胸を射抜かれたバットオルフェノクはそこから封印のマークが浮かび上がり青白い炎を上げ空中で爆発をし死亡した。

「……」

その炎を見つめていると５０秒経ち変身が解除されユウスケの姿に戻る。

「強くなったわねユウスケ」

キバーラは感心していた、状況を見てすぐに戦い方を考え敵を倒す事ができるユウスケに。

「まぁね、魔理沙は一人で帰れる？」
「ああ、箒は直してもらえるから」
魔理沙は大丈夫と言い箒の残骸を持ち歩き去った。
「俺達も帰るか」
「そうね」
二人も博麗神社への帰路に着くのだった。

第2話『射抜く風』（後書き）

地獄兄弟がユウスケの舎弟になりましたー。
二人の活躍にもご期待ください。
たくさんの感想お待ちしております。

次回予告

ユウスケ
「人里？」

幽香
「あらユウスケ」

慧音
「またか……！」

総
「情報によるとサソリが」

ユウスケ
「アンノウン！」

クウガT
「一度ダメだからって諦めたりはしないさ……それが、仮面ライダーだからね」

次回『不屈の鎧と剣』

第3話『不屈の鎧と剣』（前書き）

今日はキバーラの出番ナッシング。

キバーラ
「えー！」

次回はあるよ。

第3話『不屈の鎧と剣』

◆◆◆

「今日もいい天気だな～」

賽銭箱の前でユウスケは体操をしながら呟いていた、後ろには総と蒜も居り一緒に体操していた。

（まぁ後ろに変なのが二人いるけど）

「気もちいですね～兄貴！」

朝から元気な総と蒜、まぁ元気が一番だと思いつつ体操を続けていると霊夢の声が響いてきた、「ご飯できたよー」と。

「さて、朝ご飯食べよ」

「「はい！」」

居間に入ると朝食が並んでいた、「いただきます」と挨拶をし食事を口に運んでいく。

「……」

疑問に思う事はあったが、賽銭箱の中身が心配するほどないにもかかわらずこういう風にちゃんと朝食を出せるって……だがそれを

突っ込むと陰陽玉の餌食になると思い言わない三人。

「どうかした？」

「いえ、何も」と三人同時に答え、時間が経ち食事を終え「ごちそうさま」と挨拶し食器を片付けていく。

「そうだ、人里行ってきたら？」

人里、人間が多く住む村の事であるのはユウスケは知っていたが総達は疑問符浮かべていたため軽く説明。

「ほら、少しお金あげるから」

お金までもらったがここで一つ疑問が。

「霊夢？このお金どこから出てきたの？」

とうとう蕀が聞いてしまった、二人は爆弾だと思ったが遅かった。

「一応家にも貯金というものはあるのよ、それを崩して食材買ったりしてるの」

賽銭箱の中身はほとんどなくても貯金はそこそこある、なんだちゃんと巫女してるなと思ったら。

「まぁあんた達がここで働き口見つけたら倍にして返してね」

やっぱり鬼だった、ヤクザかと思いつつ三人は博麗神社から出て階段を降りてく。

「そういえば兄貴はバイクちゃんとあるんですよね」

総がいきなりバイクの話題を持ちかけた、理由は自分達にも専用のバイクがあるが幻想入りしてしまったため自分達の元にはないからだが。

「あれ、バイクじゃない？」

ユウスケが目にしたのは森の中に倒れてる銀色のバイクのマシン・ゼクトロンだった、カブトライダーズのカブト、ガタック以外のライダー専用の共通バイクだった。

「しかもゼクトロン」

ご丁寧に二台倒れており起き上がらせると驚いた、自分達が使っていたバイクだと。

ユウスケはこう推測する、総と蒜が幻想入りした時に一緒に来てしまったのでは、灰色のオーロラ、次元の壁の気紛れではないのかと。

「まぁこれで移動手段ができたからいいじゃん」

「そうですね」

三人は自分のバイクに乗り走りだし人里へ出発した。

その頃、人里ではある事件が起きていた。

それは急激に体温が下がり凍死してしまうという事件が数件だった。

「またか……！」

白い髪の毛に青い服を着た人里にある寺子屋の女性教師の上白沢慧音（かみしらさわけいね）がその被害者が倒れている現場に里を護るものとして訪れていた。

「慧音先生、これで6人目ですよ」

里の人間の一人が話し掛ける、しゃがんで手を目を瞑り合わせてから死体の瞼を閉じさせる。

「慧音ー」

そこに白く長い髪で白く赤い模様が入ったリボンに白と赤の服を着た藤原妹紅（ふじわらもこう）がやってきた。

「妹紅か」

「またやられたんだって？」

「ああ、しかも血縁者ばかりだ……」

この事件の接点は死に方だけではなく最初の被害者が死んだ後その被害者の血縁者の兄と父親が死亡、その後は全く関係ないものが死亡した後にその血縁者の母親、そして今目の前に倒れている男が死亡している。

「この男の家族は？」

「嫁と娘がいる……娘は寺子屋の生徒だ」

二人は今度はその娘が凍死する可能性がある、嫁は血縁関係はない

ため外している。

「だけどどうやって対処すれば……」

「原因がわかってその歴史を隠しても死の運命まで変えられるかわからないからな……」

慧音には歴史を食べる（隠す）程度の能力があり名の通り隠す事ができるが原因もわからなければ死の運命まで変えられるかも微妙なラインだった。

因みに霊夢は空を飛ぶ程度、又は霊気を操る程度の能力、魔理沙は主に魔法を使う程度の能力、幽香は花を操る程度の能力、妹紅は老いる事も死ぬ事もない程度の能力がある。

「運命は紅魔館（こうまかん）の吸血鬼が専門だからな」

遺体を迷いの竹林という場所の中にある永遠亭（えいえんてい）という屋敷に運ぶことに、そこは外の世界で言う病院で死因の凍死もそこでわかったためその死因となった原因をそこで調べてもらっていた。

「原因さえわかれば対応ができるはずなのだがな……」

慧音と妹紅は歩き出し現場から離れる。

「取り敢えずは被害者の近くで何か見なかった聞いてみるか……」

「そうだな、まずはそうしてみるか」

二人は被害者が死亡する前に一緒にいた人間に話を聞くためそのものがいる所に向かった。

里の外にはユウスケ達が到着しバイクを木に寄せて停め里の中に入る。

「結構人がいるんだな」

三人は珍しいものを見るかのようにキョロキョロして歩く、なんだかんだで三人は都会育ちなため田舎や村は珍しいのだ。

「豆腐あるかな……」

総は豆腐屋を探し始めた。

「兄貴は麻婆豆腐が得意料理なんすよ」

「そうなんだ」

麻婆豆腐を作るための材料を探しているようだった。

「食べてみたいな」

そう思いながら里を散策する事にし三人は別れた。

「さて、どこ行こうかな……」

ユウスケはただ歩いていると建物の片隅でしゃがんで泣いている女の子を見付け近くに寄る。

「どうかしたの？」

優しく声を掛けると小さく震える声で喋る。

「お父さんが死んじゃったの……」

その言葉にユウスケは胸を打たれた。

「そうか……辛いだろうな……名前は？俺は小野寺ユウスケ」

「わたしはミカ……」

「ミカか～いい名前だね」

ユウスケは笑顔で振る舞うがミカはやはり父親が死んだショックで曇った表情で目が泣いていたため赤かった。

「……」

だが黙ってしまうため頭を掻いて困った素振りを見せていると視線を下に向けていたためミカに近付く赤くサソリのような長い尻尾が目に入り。

「ミカちゃん！」

「キャッ！」

前へ押し出すと尻尾が伸び先の針がユウスケの腰に突き刺さる。

「ぐっ……」

刺された個所を手で押さえ苦痛の表情を浮かべ尻尾を見る、戻った先にはサソリのような赤紫っぽい体色で胸に羽みたいなバッジが付き盾と斧を持った。

「アンノウン……！」

アンノウンと呼ばれる種族のスコーピオンロードのレイウルス・アクティアが立っていた。

アクティアは狙っていたものとは違うと知ると長居は無用とその場からゆっくり立ち去る。

「待て！」

ユウスケは追い掛けようとしたがミカの怯えた表情を見て追い掛けるのをやめた。

「大丈夫？」

問うが震えて応答できなかった、アクティアがいた場所を見るがもうそこには居らず代わりに。

「大丈夫か！」

慧音と妹紅が駆け付ける。

「何があった？」

「アン……妖怪がさっき……！」

アンノウンと言い掛けたがこの世界ではその名は知られていないため幻想郷での言い方に。

「妖怪だと……どっちに行った？」

ユウスケが指を差すとその方向に妹紅は走りだした。

「……外来人か？」

慧音はすぐに服装等を見て外来人とわかり聞くとユウスケは頷き返

す。

「怪我しているのか？」

「大丈夫……刺されただけだから」

「ちょっと着いてこい」

慧音に腕を引っ張られどこかへ向かった、ミカはその後を着いていく。

◆◆◆

ここは迷いの竹林の中にある永遠亭、先ほど説明した場所でもあるため省略。

「診察の結果は……」

永遠亭の一室の中、いかにも診察室の中にユウスケは慧音といた、前には白くて後ろの方で髪を三つ編みで赤と青と縦半分に別れたまるでどこかのヒートトリガーのような服を着た八意永琳（やごころえいりん）が診察の結果を話す。

「小野寺に刺された傷が今までの凍死の死亡者見られた傷とほぼ一

致した、
解剖しその被害者の体内金属の物体があり今まで起きた凍死した遺体の中に入っていた」

その言葉に慧音は反応した、ここでユウスケはこの村で起きている事件の事を知る。

「その傷を負わせた針から金属を注入しその金属が体温を奪い凍死に至らしめるんだ」
「という事は……小野寺が見た妖怪がそれを」

名前の方はもう紹介済みであった。

「取り出す事はできない？」
「無理だな、例えその歴史を隠したとしても２４時間後には死ぬな」

だがある考えができていた、それならアクティアを倒せば金属は消滅するのでは、大抵はそういう事が多いためゼロとは言い切れない。

（だけど奴を誘きだすには誰かが囮にならないと……だけど奴が狙っていたのはミカちゃん、あの子を囮にするのか……）

それはプライドが許さなかった、誰かを囮にして誘きだすなんてことは。
ミカには妹紅が着いているためそんなすぐに金属を注入される事はないはず。
ユウスケと慧音は永遠亭から出る。

「すまないな、何もしてやれなくて」
「いいって、気にしてないよ」

その後慧音とは別れ一人で里を歩いていると。

「あらユウスケ」

「幽香さん」

幽香と出会う、買い物をしに訪れたようだった。

「そういう事があったのね」

先ほどの事を幽香に話していた、明日には自分は死ぬかもしれないと。

「死んだら向日葵の肥料として埋めてあげるわよ」

「ヒドッ！」

「フフ」

黒い笑みを浮かべる、ユウスケはわかった、この人はサディストなんだ、親切だけど。

「Sだな……」

「Sはサディストで親切で素質なSなのよ」

「ご丁寧にどうも」

苦笑しながら返すと。

「兄貴～！」

葬がやってきた、慌てているのはさしずめ先ほどの事を聞いたからだろう。

「大丈夫だって、倒せばいいんだから」
「ですが……」
「諦めなければ何とかなる、何かするのが仮面ライダーなんだから」
そう言い聞かせていると悲鳴が聞こえ三人はその悲鳴の元へ走りだす。

「コイツ、本当に妖怪かよ」
アクティアはミカをまた狙っており妹紅と交戦していた、妹紅はスペルカードを発動させ攻撃するがアクティアの盾に全て弾かれてしまう。

「大丈夫だミカ、お前のお父さんの仇は私が！」
凍死の原因を先ほど永遠亭から出て別れた後の慧音から聞いていたのだ、妹紅はもうこれ以上犠牲者を増やさないためにアクティアを倒そうとする。

「妹紅！」
別れたのはつい先ほどのため慧音がすぐに駆け付けた。

「アイツだ、犯人は」

それを伝えると慧音はアクティアを見て。

「なぜ人間を殺す！？」

誰もが気になる事を問う。

「人は人のままでいい……人ならざるものは我々以外必要ない」

人は人のままの意味はわからぬが人ならざるものは妖怪の事を意味していると理解する。

「そんなわけのわからないことのために人間を……」

殺す事に怒りを露にし戦う姿勢を見せる、アクティアも一気に三人殺そうと斧と盾を構える。

「慧音、アイツの盾はなんでも弾くから気を付けろ」

「ああ」

そう会話すると後ろからマススパークが放たれアクティアに直撃し爆発。

「誰だ！？」

爆炎の中から盾を前に向けた無傷のアクティアが現れる。

「本当になんでも弾くのね」

「風見幽香……！」

そこに閉じた日傘を持った幽香が現れる、マススパークは幽香

が放ったものだった。

「いたぜ兄貴！」
「ああ！」

後からユウスケと葬がやってくる。

「小野寺！」
「お兄ちゃん！」
「奴を倒せば俺の体内にある金属は消えると思う」

確信があるその推測を伝えると更に倒そうと言う姿勢を見せるがユウスケもその姿勢を見せる。

「戦えるのかお前？」
「ああ……ミカちゃん、お父さんの仇、俺が取るから」
「お兄ちゃん？」

ユウスケは腰にアークルを出すと変身ポーズを構え。

「変身！」

アマダムは紫色に輝きユウスケは紫の眼で銀で紫のラインが流れた分厚い甲冑を纏った攻撃と防御に優れた姿、クウガ・タイタンフォームに変身した。

「その姿は……」
「仮面ライダー……クウガ」

優しい声で教えるとどこからかトライアクセラーを持ち握ると紫で

角を模した鍔が付いた剣のタイタンソードに変化する。

「俺も行くぜ！」

ホッパーゼクターがバッタのように跳ねながらやってきて蒔はそれを掴み腰のライダーベルトのバックルを開く。

「変身！」

ホッパーゼクターを茶色の面を前に向けバックルに装着すると【Ｈｅｎｓｉｈｎ】と響き蒔の姿はパンチホッパーに変わり【Ｃｈａｎｇｅ　Ｐｕｎｃｈ　Ｈｏｐｐｅｒ】と鳴り響き変身が完了しアクティアに挑む。

「風見幽香、アレはなんだ」

慧音は聞いてみた、すると。

「仮面ライダー……ああいう妖怪から命あるものを護る戦士よ」

思った事を率直に言葉にしクウガとパンチホッパーの戦いを見る。

パンチホッパーはパンチを繰り出すが盾で弾かれクウガはタイタンソードを振り下ろすがやはり弾かれ斧による攻撃を食らうが。

「っ！」

胸の鎧タイタンブロッカーには通用しなかった、タイタンブロッカーはダイナマイト級の爆撃を受けても全くダメージを受けない鎧なのだ。

「効かねーよ……お前が殺した人々の痛みと比べたら……痛くないぜ！」

タイタンソードを何度も振るうが盾で防がれ金属がぶつかり合うような鈍い音が響き渡る。

「あの盾、どれだけ頑丈なんだ……あんな強力な鎧があったとしても攻撃を食らわせないと」

妹紅が不安そうに言うのに対しクウガは。

「一度ダメだからって諦めたりしないさ、それが、仮面ライダーだから！」

クウガは諦めず何度もタイタンソードを振るっていく、アクティアも受け流しながら斧で攻撃していく、その内盾に「ピキッ」という音が微かに響く。

「ハァッ！」

パンチホッパーは殴り掛かるが盾で防がれる。

「今だ……ライダージャンプ！」

ライダージャンプをしライダーパンチを繰り出すがアクティアは盾で防ぐ、すると。

「罅が入ったぞ！」

盾は中心から大きな罅が入り。

「ハァァァァッ！！！！！！！！！！」

タイタンソードを両手で握り後ろへ引き思いっきり突き出し貫く必殺技カラミティタイタンを炸裂、やはりアクティアは盾で防ごうとし前に出すが。

「ウギャァァァァァッ！！！！！！！！！！？」

だが罅が入った盾で防げるわけなく盾ごとタイタンソードで腹部を貫かれカラミティタイタンが決まる。
アクティアの頭上に光の輪が現れ苦しんだ後、アクティアは断末魔を上げ爆発を起こしクウガを巻き込むが。

「……」

炎が収まるとクウガは無傷のように見えていたがタイタンブロッカーに罅が少し入っていた、アクティアの斧による攻撃で入ったのだろう、
タイタンソードを下に向け腕を降ろし変身を解くとパンチホッパーも解く。
体内の金属はアクティアが倒されたため消滅したのだった。

「やったね兄貴」
「うん」

だが少し複雑だった、倒しても殺された人が戻ってくるわけもない、倒すのは犠牲者を増やさないための策でしかない事が、だが。

「お兄ちゃん、ありがとう」

ミカに礼を言われた、これだけでも救いなのだ。

「事件の犯人を倒してくれてありがとう小野寺、影山」
「いいよ」

それからミカは母親がいる自宅へ帰り買い物を終えた総と合流。

「また里に来てくれ、歓迎するぞ」
「近い内にまた」

三人は博麗神社へバイクで帰って行くのだった。

◆
◆
◆

その日の夜。

「よし、これで明日の準備はバッチリだ」

慧音は寺子屋の職員室の中で明日の授業の準備をし終えた所だった。

「ふわぁ～……眠い……もう寝るとするか」

寺子屋の中に自分の自室がある、空いている部屋は何個もあるのだ、自室に戻ろうとしたら外から音が響いてきたため外に出る事に。

「誰かいるのか？」

外に居たのは銀色のボディで赤い模様、先端はとんがり赤いラインが流れヘッドライトは黄色く輝き『ＳＭＡＲＴ　ＢＲＡＩＮ　ＭＯＴＯＲＳ』と書かれたバイクに乗った青年がいた。

「誰だ？」

「あー、悪いんだけど道を教えてくれない？迷っちまったんだ」

青年は道を尋ねるのだった。

第3話『不屈の鎧と剣』（後書き）

本当はレントゲンにしようとしたのですがしたらすぐにクウガだとバレるのでしませんでした。

次回予告

鳴滝
「君に頼みたい事があるのだ」

パチュリー
「魔理沙～！」

ユウスケ
「なんで貴方は俺の正体を隠すような事を？」

キバ
「貴方がディケイドと共に世界を破壊しようとしていると聞いたんです！」

カイザ
「邪魔なんだよ……あの方の思い通りにならないものはすべて」

次回『クウガ対キバ！仕組まれた対決！』

第４話『クウガ対キバ！仕組まれた対決！』（前書き）

今回もディケイドのオマージュ、ユウスケも苦労する。
なんかサブタイが昭和臭プンプン。

第4話『クウガ対キバ！仕組まれた対決！』

とある仮面ライダーキバの世界。

「君に頼みたい事があるのだ」

赤い布が敷かれた王室のような部屋にメガネを掛けた中年の男が若い青年に話し掛けていた。

「とあるクウガの世界にディケイドと共に世界を破壊しようとする仮面ライダークウガがいる、そのものを倒してくれないか？」

中年の男の名は鳴滝、幾度なくディケイドに立ち塞がった男だ。

「本当に……その人達は世界を破壊するのですか？」

青年は信用していなかった、理由は突然自分の目の前に現れたからだ。

「私が嘘を言っているとでも？」

「あ、いえ……」

青年は気弱いのか、鳴滝に押されていた。

「……わかりました、その世界に行きます」

戸惑ったが了承してしまった。

「ではこのキャッスルドランごとその世界に送ろう」

鳴滝は笑みを浮かべると背後に現れた次元の壁の中に入っていった。

「おいおい奏歌(そうた)～、本当に信じるのかよあのオッサンの事」

そこに黒と金で赤い眼をしたコウモリのモンスターのキバットバット三世が飛んできた。

「いや……その……」

「はぁ……まぁお前が決めた事だからいいけどさ」

キバットはため息を吐き肩に座るとキャッスルドランというドラゴンが雄叫びを上げる、ここはキャッスルドランの体内の中の部屋なのだ、名前がキャッスルとあるように体は亀みたいに城の中に入っている。

奏歌と呼ばれた青年は小さな声で謝る。

キャッスルドランの目の前に次元の壁が現れその中に入っていくのだった。

その様子を外から見ていた鳴滝。

「……キバだけでは不安だな、ファイズの世界に行くか」

鳴滝はまた次元の壁の中に入っていきキバの世界から出ていった。

◆◆◆

そしてクウガの世界の幻想郷。

「よっ！」

博麗神社に魔理沙が訪れてきた。

「魔理沙こんにちは」

「こんにちはだぜユウスケ」

外を掃き掃除していたユウスケがいた。

「霊夢に扱き使われてるな～」

「居候の身だから文句言えないよ……ん？その本は？」

魔理沙が風呂敷に包んだ大量の本を見て指を差す。

「ああこれは借りてきたんだぜ、死ぬまでな」

借りてきただけならわからなかったが死ぬまでを付けたため盗んだと判断。

「パクったんだな」
「いやいや、死ぬまで借りてきたんだぜ」
何言っても無駄だなと思い諦めようとしたら。
「魔理沙～！」
突然銀髪のメイドの少女と紫の長い髪の毛でパジャマのような服装の少女が現れた。
「なんでここにいるってバレた！？」
「それは貴方の行動パターンはお見通しだからよ魔理沙」
メイドはそう言うと。
「まさかパチュリーが自分から来るなんてな」
「今日という今日こそは全部返してもらうわよ！」
パジャマの少女は小さい声をできる限り出せる大きな声を上げ早口で言うが。
「死んだら返すから待ってろよ～」
だが魔理沙はそう言い残し箒に跨り飛び去った。
「逃げられた……」
「今度会ったら返してもらいましょ？」
メイドはパジャマの少女を宥めるように声を掛けていく。

「あら、自分から来るなんて珍しいわね」
中から霊夢が出てきた。
「今日こそはと思ったのに」
しょぼんとなりながら喋っていく。
「ところでそこの……」
メイドはユウスケが気になったらしくユウスケは名前を言うと。
「私は十六夜咲夜（いざよい　さくや）と申します」
メイドの名前は十六夜咲夜、時間を操る程度の能力を持っている。
「私はパチュリー・ノーレッジよ」
パジャマの少女はパチュリー・ノーレッジ、火水木金土日月を操る程度の能力を持っている。
「貴方が噂の仮面ライダー、文々。新聞（ぶんぶんまるしんぶん）に載っていたわね」
文々。新聞とは幻想郷である妖怪が発行している新聞である。
「ええまぁ」
「それにしても魔理沙には困ったわね……一体何冊借りてるのよ」
「そうね……もう１００は軽く越えてるわ」
そんなに！？と驚愕するユウスケ。

「せっかく外に出てきたのに……コホッ、コホッ」

パチュリーは喋っている途中咳き込む。

「大丈夫？」

「ええ……大丈夫よ……コホッ」

だが咳が続いていた。

「上がってく？お茶飲んで休んでから帰りなさいよ」

二人は言葉に甘えて神社に上がり居間に入っていった。

「喘息持ちなの？」

「そうよ、回りからは引きこもりだのニートだの言われてるけどそれの所為でもあるのよ」

お茶を飲みながら会話をする、総と蒜は里に出掛けている。

「それに私より一番のニートはいるのに」

「認めるのかよ」

ニートは否定しないよう、外出たくないのは髪の毛等が痛むからとか。

「永遠亭の月の姫よ」

永遠亭ならユウスケもこの前のアンノウン騒ぎで訪れていた。

「まぁその永遠亭に診察に寄るけどね」
パチュリーも来たのはそのためでもあった。
「大変だね……」
「慣れたわ……そろそろ行くわよ」
「はい」
俺も着いていくよとユウスケも永遠亭には少しばかり用があったため着いていくことにした。
三人が立つと霊夢が咲夜に話し掛けた。
「……咲夜、あの人は見付かった？」
「……まだよ」
「そう」と返し三人を見送った。
「あれ？ユウスケどこに行くの？」
外に出るとキバーラが飛んできた、永遠亭に行くと言うと一緒に行く事に、二人は空を飛んで向かうと言うためユウスケはトライチェイサーで向かう事にした。
魔法の森の中、巨大な次元の壁が現れキャッスルドランが出てきて森の深い部分に降り隠れると中からキバットと先ほどの青年の奏月（かなつき）奏歌（そうた）が出てきた。

「ここみたいだな奏歌」
「うん……」
「おいおい、もう決めちまった事だぜ？今さらなぁ……」
呆れたように言うが仕方ないと思っている、それが奏歌の性格だからである。
「ごめんキバット……でもどういう人か見てからにするよ、そのクウガが本当に世界を破壊するかどうかは」
奏歌とキバットは里に向かって歩き出したが知らなかった、鳴滝は絶対戦わせるようにするための策をもうこの世界に送っていたのを。
そして永遠亭に到着するユウスケ達。
先にパチュリーが診察する事になった、そしてすぐ終わり次はユウスケが。
「それで今回は何があった？」
永琳は何気なく聞いてみるが。
「なぜ……なんで俺の正体を隠すような事を？」
いきなりだったが聞かれると思い笑みを浮かべていた。

「レントゲンを撮影しましたよね？」

あの時、レントゲン写真を撮ったのだが慧音と一緒にいた時その写真を出さなかったのだ。

「上白沢は小野寺を普通の人間だと思っていたからな」

「なら、もう慧音は俺がクウガだって知ってますよ」

「そうか」と永琳は答えるとレントゲン写真を出し見せる。

「これを見たら少しな」

ユウスケだけならずキバーラも驚いた、レントゲン写真に写ったユウスケの体は普通の人間のものではなかったのだ。

キバーラは思い当たる節があった。

「アルティメットクウガの影響ね」

アルティメットクウガ、それはクウガの二番目に強い最強フォームであり凄まじき戦士や究極の闇とも言われているがその姿となると人間から掛け離れた存在になってしまう。

「小野寺、まだ人間の体だがその内ゆっくりだがだんだん掛け離れたものになっていく、医者としては……」

医者としての考えをぶつけようとしたがユウスケは止めた。

「言わないでいいです、言われても俺の決意は変わりませんから」

医者としての考えは戦う事をやめるようにするものだった、変身し

ていくごとに人間の体から掛け離れていくからだがユウスケは拒んだ。

「俺はみんなの笑顔を護りたいから、その人達の笑顔を護るためなら」

ユウスケの目は梃子でも動かないぐらい戦うという決意に溢れていたため永琳も言うのをやめた。

「……何かあったらここに来い、最優先で診察するから」

礼を言うと診察室から出るユウスケとキバーラだった。

「待っててくれたの？」

永遠亭の待合室、そこでパチュリーと咲夜が待っていてくれたのだ。

「私も待っていてくれたしね」

三人と一匹は永遠亭から出ていき迷いの竹林を抜け里に入りそこで別れようとしたら前を歩いていた一人の人間が突然透明になり倒れてしまった。

「「まさか……」」

ユウスケとキバーラはこの現象に心当たりがあった、透明になった人間に駆け寄り抱き起こそうとしたものがいたがこの人間はガラスが割れるように砕けてしまった。

「うわぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！？」

その事に恐怖し大声を上げると後ろに透明な牙が現れ。

「危ない！」

ユウスケは飛び込み狙われていたものと一緒に倒れ込むと牙は地面に突き刺さる。

「何が起きてるの……」

「ユウスケあれ！」

キバーラの羽根の先を向けられた方向にはステンドグラスのような皮膚にライオンのような姿をした怪人だった。

「ファンガイア……」

それはファンガイアと呼ばれる種族のライオンファンガイアだった。

「しかもチェックメイトフォーの一体のライオンファンガイアよ！」

チェックメイトフォーとは四体の相当な高い実力を持つファンガイアで構成されたチームでライオンファンガイアはその中でかなりのパワーと激しい闘争心を持つ凶悪なファンガイアなのだ。

「逃げて！」

ユウスケは助けた人や回りを歩いていた人々に言うと立ち上がり人々が逃げるまで生身でライオンファンガイアに立ち向かっていく、なぜ変身しないかは変身して正体がバレるのを防ぐのもあるが人が多い中で戦闘をするのは怪我人が出るかもしれないという配慮があ

ったからだ。
ライオンファンガイアに掴み掛かるユウスケはそのまま押していくがビクともせず。

「フン！」

ライオンファンガイアはユウスケを投げ飛ばす、するとユウスケは建物の木の板の壁を突き破り突っ込む。

「いった～！」

全身を強く打ったが大怪我ではなかった、体が変化しているからか、無事だったのだ。

「ありがたいけど悲しいな……」

そう思いつつほとんど人が逃げたのを確認すると建物の中、腰に手を添えアークルを出すと右腕を左斜め上に伸ばし右へ動かし両手で左側のスイッチを押すとアマダムは赤く輝きユウスケはクウガ・マイティフォームに変身すると中から出てライオンファンガイアを睨む。

「アレが仮面ライダー」
「そうよ、アレがユウスケが変身するクウガよ」

パチュリーとキバーラはクウガの戦いを遠くから見ていたが咲夜は……

（似てる……あの子のあの姿に……）

咲夜の脳裏には金の二つに別れた角に赤い眼した黄金の戦士が浮かび上がっていた。
クウガはライオンファンガイアの胸部を殴るがビクともせず、なんともなかったのようにライオンファンガイアはクウガを凄まじい力で殴っていき防戦一方になる。

「ぐっ……う゛っ……！」

腕でガードしつつ反撃のチャンスを伺う、ライオンファンガイアがパンチを力を付け貯めて放とうとしたらそこで隙ができクウガは腹部を蹴り飛ばし距離を取る。

「ウオォォォォォォォォッ！！！！！！！！！」

ライオンファンガイアは怒り狂ったような叫びを上げると突進してくるとクウガも変身ポーズを構え一歩引いてから走りジャンプ、マイティキックを食らわしライオンファンガイアは後退り胸部に封印のマークが現れるのだが。

「何……！」

ライオンファンガイアは気合いを入れ胸部に力を入れると封印のマークは消えてしまう。

「ならまだだ！」

再び走り出しライオンファンガイアにマイティキックを炸裂！
今度は右肩に当たりそこに封印のマークが現れるがまた消えてしまいライオンファンガイアは突進しクウガを跳ね飛ばす。

「うわぁぁぁぁぁっ！！！？」

クウガは今度は押し車に摘まれた荷物に突っ込みそれの下敷きになるが立ち上がる。

「大丈夫なの彼？」

咲夜はキバーラに聞くが。

「大丈夫よ、ユウスケなら大丈夫」

確信があった、今のユウスケは初めて会った時から成長している、チェックメイトフォーのライオンファンガイアも倒せると。

「今度こそ！」

右足の裏に力を入れると炎がまた宿るが少し電気が走るが気付かずまた走りだし。

「ハアアアアーッ！！！！！！」

マイティキックを今度は額に炸裂、着地しライオンファンガイアを見ると。

「ウワァアアアアアッ！！！！！！！！！！！！？」

封印のマークが今までキックを決めた場所に三つ浮かんでおりライオンファンガイアは断末魔を上げ粉々にガラスが割れるように砕け散り絶命した。

「さすがユウスケ～！」

キバーラは飛び回って勝利に喜んでいたがその勝利を見ていたものがいた。

「キバット！」

「ああ、あのオッサンが言っていた事は本当みたいだな！」

奏歌とキバットがそれを見ており走りだす、クウガ達は気付いてないみたいだ。

「ギャブッ！」

キバットは奏歌と手に噛み付くと奏歌の腰に赤いベルトのキバットベルトが現れ。

「変身！」

キバットがバックルに逆さまになって止まると奏歌は鎖に包まれそれが弾け飛ぶとジャック・オ・ランタンのような仮面で黄色い眼で赤い模様が入り鎧も鎖が巻かれている部分もあり胸部と腹部に掛け赤い鎧で回りは銀色に、右足には何かを封印するように巻かれた鎖が付いた仮面ライダーキバ・キバフォームに変身した。

「ハッ！」

キバはクウガを後ろから殴り掛かるがギリギリの所を避ける。

「キバ……！」

キバは素早くパンチを繰り出し攻撃してくる。

「アレも仮面ライダーなのキバーラ？」

「そうよ、仮面ライダーキバ、だけどなんでユウスケを襲うのかしら？」

キバーラはなぜクウガを襲うかがわからなかった。

「待ってくれ！なんで俺を攻撃するんだ！」

「聞いていた通りだ！」

キバはパンチを繰り出しながら喋っていく。

「貴方がディケイドと共に世界を破壊しようとしていると聞いたんです！」

クウガは耳を疑った、なぜ自分がディケイドと関係あると知っているかを。

「世界を破壊！？一体何を言っているんだ！」

「うるさい！」

キバはベルトから青い笛ガルルフエッスルを持ちキバットの口に入れ吹かせる。

「ガルル……！セイバー！」

そう叫ぶとどこからか青く狼の顔を模した置物が飛んできてそれを左手で持つと左腕は青く狼の足のような毛の刺が生えた防具に包まれ鎧も青く、眼も青くなり置物も変形しガルルセイバーという剣と

なりキバはガルルフォームにフォームチェンジする。

「ワオォォォォォォォーン！！！！！！！！！」

狼のような雄叫びを上げると走りだしガルルセイバーで横に一閃しクウガは避けるが鎧に横に薄く傷が入る。

「超変身！」

また斬り掛かられるがそれをドラゴンフォームにチェンジしてジャンプして避け地面に着地すると前へ転がり木の棒を拾い上げドラゴンロッドに変化すると後ろから斬り掛かられるがドラゴンロッドで受け止め上へ払うと何回かキバを突き吹き飛ばす。

「バッシャー！」

今度は緑のバッシャーフエッスルをキバットに吹かせる。

「バッシャー！マグナム！」

今度は緑の魚人のような顔を模した置物が飛んできて右手で取るとガルルセイバーは消えガルルフォームは解除され今度は右腕が緑の魚の鱗のような防具を纏い鎧と眼が緑に変わり置物は銃のバッシャーマグナムに変形しバッシャーフォームにチェンジ。

「ハッ！」

バッシャーマグナムの引き金を引き水の弾丸を高速で連射するがクウガはドラゴンロッドで受け流したり走って避けていくが。

再び弾丸が放たれ避けようとしたが後ろには。

「っ！」

パチュリー達が居り避けたら不味いと考えタイタンフォームにチェンジしタイタンブロッカーには弾丸は通用しなかった。
トライアクセラーを持ちタイタンソードに変えゆっくりとキバに接近し。

「ハアァァアーッ！！！！オリャァァァアーッ！！！！」
「ぐっ！ぐはっ！？」

最初に振り上げるとバッシャーマグナムを弾かれ次に振り下ろし体を切り裂きキバは吹き飛びバッシャーフォームが解除されキバフォームに戻るが。

「力には力だ奏歌！」
「うん！」

紫のドッガフエッスルをキバットに吹かせる。

「ドッガハンマー！」

次は紫のフランケンシュタインみたいな顔を模した置物が飛んできて両手で持つと両腕は紫の分厚い防具が纏い鎧にも分厚い紫の甲冑に、眼は紫となり置物も拳のような巨大なドッガハンマーに変形しドッガフォームにチェンジしドッガハンマーを振り下ろす。
クウガは受け止めようとしぶつかると少し後退るがタイタンブロッカーは凹んでいた。

「くっ……！」

受け止めるのは危険と感じドッガハンマーをタイタンソードで受け止めつばぜり合いに。

「俺は破壊者じゃない！」

「嘘だ！さっきファンガイアを殺したじゃないか！ファンガイアは人間と共存できるのに！」

ここでクウガは自分を破壊者だと決められたきっかけがわかった、キバの世界にはファンガイアと人間が共存する世界もある、かつて自分が訪れた世界もそうだったからだ。

「だけどあのファンガイアはライフエナジーを吸収してた！」

人間の生命エネルギーのライフエナジーを主食とするファンガイア、だが人間と共存するファンガイアはそれは禁忌で処刑ものだ。

「嘘だ！」

だがそれも嘘と一点張り、だが。

「本当よ」

パチュリーが声を上げた、小さいが意識がはっきりとし強い声を。

「彼はあのファンガイアという怪人に襲われそうになった人間を助けたのよ」

「パチュリー様の言う通りです」

咲夜も弁護に入りキバはドッガハンマーを下げる。

「じゃあ……今の話も……」
「本当だ、信じてくれ」
クウガもタイタンソードを下ろし話し掛けると。
「何をしているのだ！」
声が聞こえた、その方向には。
「鳴滝！？」
鳴滝がいた。
「鳴滝さん、またアンタはライダーに嘘を吹き込んで襲わせたのか！」
「嘘ではない！ディケイドは世界を破壊する、その破壊するものの仲間も破壊者だ！」
クウガとキバーラは呆れていた、ディケイドが何か知らないパチュリーと咲夜も。
鳴滝に躍らされていたとわかるキバは視線を下に向け申し訳ないという気持ちを露にしていた。
「だが！代わりのライダーはいくらでもいる！」
背後に次元の壁が現れ中からXを模したような仮面に紫の眼、鎧にもXの黄色く輝くラインが流れ黒いライダー、ファイズライダーズの仮面ライダーカイザが出てくる。

「カイザだと！？」
「カイザよ！クウガとキバを始末しろ！」
鳴滝の指示を聞くとカイザは走りだしカイザブレイガン・ブレードモードという剣を持ち走りだしクウガとキバに襲い掛かる。
鳴滝は次元の壁の中に消え壁も消滅する。

「くっ！」

カイザブレイガンの刃をタイタンソードで受け止めつばぜり合いとなる、キバは騙されていた事により脱力していた、カイザは首を捻りながら。

「邪魔なんだよ……俺達の組織の思い通りにならないものは全部……！」
「組織だと……一体……ん！？」

腹部に何か突き付けられた感触が下を向くとカイザへの変身するための黒い携帯カイザフォンが銃モードのフォンブラスターと変形しており引き金を引かれ光弾が放たれ。

「うわぁっ！？」

至近距離と先ほどから連戦のため疲れているからかダメージが通じ後退るとカイザブレイガンをガンモードにしフォンブラスターと両手に銃を持ち引き金を引いていき光弾の雨をクウガに浴びせていく。

「ぐっ……！」

クウガは膝を地面に付くとカイザはデジタルカメラ型のグローブの

カイザショットにカイザフォンから抜いたミッションメモリを挿入し【Ｒｅａｄｙ】と響きカイザフォンのエンターキーを押すと【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】と鳴り響きカイザショットを持った腕に流れる黄色いラインの中のフォトンブラッドが強く光ると。

「ハアァァァーッ！！！！！！！！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！？」

必殺技グランインパクトで殴られタイタンブロッカーは大きく凹み吹き飛ばされ変身が解けるとカイザブレイガンをブレードモードにし。

「さて、お遊びはここまでだ」

絶体絶命のピンチに陥った。

第４話『クウガ対キバ！仕組まれた対決！』（後書き）

カイザ、因みにこのカイザは小説版ファイズの草加を。
感想お待ちしています。

次回予告

カイザ
「その声はまさか……！」

ファイズ
「……草風か……」

奏歌
「ごめんなさい！」

青年
「また増えた……アイツも……」

次回『疾走する本能！Φ′ｓ登場！』

第5話『疾走する本能！Φ’ｓ登場！』（前書き）

タイトルがやっぱり昭和臭がプンプンするようなタイトルになってしまうな、いい意味で。
仮面ライダー以外からも出ますので悪しからず。
では、ドライブイグニッション！
ちげー！ｗｗｗ

第5話『疾走する本能！Φ′ｓ登場！』

前回のあらすじ
ユウスケがパチュリーと咲夜と出会い、キバーラも加え共に永遠亭に行き永琳に変身し続けると人間の体ではなくなると警告されるが戦う決意は変わらなかった。
里に入るとライオンファンガイアが人々に襲い掛かったがユウスケがクウガに変身！ライオンファンガイアを倒すが。
そこを奏月奏歌が見ておりファンガイアをただ殺しただけと勘違い、仮面ライダーキバに変身しクウガと戦うが、パチュリー達の弁護があり誤解が解けたがそこに鳴滝が現れキバもろともクウガを倒すため仮面ライダーカイザを呼び寄せ消える。
カイザは「組織」という言葉を使いクウガは疑問に思うが連戦だったため疲労が溜っておりグランインパクトで倒され変身が解けてしまいカイザの魔の手が迫っていた。

「さぁて、消えてもらおうか」

カイザは左手をブラブラさせながらカイザブレイガン・ブレードモードを右手に持ち振り上げユウスケに迫っていた。
キバは戦意喪失、パチュリー達はスペルカードを使用しようとしていたが間に合いそうにない、万事休すかと思われたその時！

「何！？」

カイザブレイガンを弾き飛ばす閃光が現れた、武器が飛ぶと次はカイザ自身が弾かれたように吹き飛ばされる。

「グワァッ！？」

突然の事で何が何だかわかっていなかったが【３．．．２．．．１．．．Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ　Ｒｅｆｏｍａｔｉｏｎ】とカウントをする電子音声が響きユウスケやキバ達の前に現れたのは。

「ファイズ……！」

Φを模した仮面に赤く輝く眼、プロテクターが半分に開き両肩にスライドし銀色のフォトンストリームが流れ左腕に腕時計型のアイテムのファイズアクセルが付いた仮面ライダーファイズ・アクセルフォームだった。
ファイズはプロテクターが胸部にスライドし銀色に輝くフォトンブラッドは赤く輝き眼は黄色く輝く通常フォームに戻る。

「ファイズだと……！」

カイザは自分の世界の主役ライダーが現れた事に驚愕していた。

「……草風（くさかぜ）か……」
「っ！その声はまさか……！」

ファイズとカイザは互いの事を知っているようだった。

「小野寺！」

そこに慧音がやってきてユウスケの元に駆け寄る。

「慧音……！」

回りを見て咲夜とパチュリー、キバーラとキバがいるのを確認しカイザと対峙するファイズを見る。

「まさかここで会えるなんてな……」

「草風……てめえだけは許さねぇ、絶対にな」

ファイズは怒りを露にしカイザに殴り掛かる。

「いいな、ここで決着をつけてやろう！」

カイザも殴り掛かるが二人の間に次元の壁が出現する。

「チッ……無理みたいだ、今度また戦ってやるさ」

カイザは次元の壁の中に消えていき壁も消滅した。

「くそ……」

ファイズは静かに呟くと変身ベルトのファイズドライバーに装填されていた銀色の携帯ファイズフォンを抜いて開き電源のスイッチを押し変身は解除され無愛想な青年が姿を現した。

「君が……ファイズなのか」

ユウスケは立ち上がる、キバもキバットがベルトから離れ変身が解除され奏歌の姿に戻る。

「……」

青年はその場から何も言わずその場から去ろうとする。

「おい待て！」

慧音は呼び掛けるが無視されるが青年を追い掛ける事に。

奏歌はそわそわしていた、嘘を吐かれて襲ってしまいどうなるか不安になっていた。

「ごめんなさい！」

とりあえず謝った、これが基本、許してもらえないと思っていたが。

「いいよ、嘘を吹き込んだ鳴滝さんが悪いんだから」

ユウスケは許して、何人ものライダーが鳴滝の言葉に騙されディケイドを攻撃してしまったからだ。

「ありがとう……ございます」

もじもじしながら礼を言うとキバーラとパチュリー達がやってくる。

「誤解は解けたようね」

「キバット族……！」

奏歌はキバーラを見て驚く、奏歌のキバの世界にはキバーラは居ないようだ。

「僕は奏月奏歌と言います」

奏歌が自己紹介するとユウスケ達も名前を教え場所を変えて話す事にした。
場所は変わり里の近くにある団子屋に。

「僕は自分の世界でファンガイアのキングをしています……」

キングはすべてのファンガイアの頂点に立ち、キバはそれの証明となる。

「結構ご身分が高いのですね」
「いえ、ですが従わないものも多くて……半分僕の父親に関係しているんです」

なぜかと思っていたがユウスケとキバーラはすぐに分かり。

「父親が人間だから？」
「はい」

ユウスケが先に言葉に出すと肯定する。

「紛い物と呼ばれていたためファンガイアと認めてもらえず反逆するファンガイアも後が断たなくて……」

しょんぼりとしながら話していく。

「僕は混血のファンガイアでしたがキングになる前は普通の人間としてバイオリン職人として生活していたのですが突然キングを任される事に」

だから自信がなくそんなにもじもじしているのかと理解し。

「その時に鳴滝さんが現れクウガを倒せばすべてのファンガイアは僕に従うと言われたので……」

「それで襲い掛かったのね」

パチュリーの言葉に頷く。

「それにしても用意がよかったわね鳴滝も、ファンガイア用意して倒すとこを見せて怒らせて戦わせるなんて」

「そうだな……用意周到だな……これからまた他のライダーが襲ってくるのか？」

後の事を不安になるがそれでも戦うしかない。

「本当にごめんなさい！」

奏歌はもう一度謝る。

「もういいって……だけどキバの世界には簡単に帰れないな」

鳴滝が送り込んだために自分に逆らう奏歌をキバの世界に帰すわけなく幻想郷での生活を余儀なくされた。

「そうですね……」

これは罰だと思い諦め当分幻想郷に住む事に。

「本当はキングなんてやりたくなかったんです、好きなものに戯れて暮らしていきたかったんです」

好きなものに戯れる、それはパチュリーも同じだった、紅魔館の地下は図書館になっており大量の本がある、その好きなものに戯れていたいからのも外に出ない理由、その気持ちがわかるのだ。

「まぁその気持ちはわかるわね、私も本を読んでいたいから外に出たくない理由だし……奏歌は何が好きなの？」

「バイオリンを演奏するのと作るのが」

演奏家は珍しくないが両方は珍しくパチュリーは興味が湧いた、バイオリン作りを本で読んだ事があるため。

「実際に見てみるのも悪くないわね……」

「ですがそろそろ戻らないと、夕食の支度もありますし」

「そうね……それじゃ私達は帰るわね」

そう言うと一瞬で姿を消した、咲夜が時間を止めて紅魔館に帰っていったのだ。

「奏歌はどこに住む？」

場所がなければ博麗神社に誘おうとしたが奏歌はキャッスルドランと共に来たためそこで住む事に。

◆◆◆

「待て、どこに行く?」

慧音はまだ青年を追い掛けていた、詳しく話を聞くために。

「しつこいな……どこに行こうが俺の勝手だろ」

「行く所はあるのか?」

それを聞かれたら何も返せない、青年は外来人だからだ、それもこのクウガの世界ではなくファイズの世界の住人であるのだから、ファイズに変身したのが証拠である。

「構わないでくれよ、鬱陶しい」

「そうはいかない、外来人で仮面ライダーとしても里の外にでも出たら妖怪に襲われる可能性があるんだぞ?」

「妖怪か……ならなおさら心配する事はないな」

青年は早々と歩きながら腰のファイズドライバーを取りいつの間にか寺子屋に到着しており停まっていた専用バイク、オートバジンの後部に乗せていたアタッシュケースにファイズドライバーとファイズフォンを収納し蓋を閉じて鍵を掛ける。

「なんだかんだでここに戻って来たのか」

「うるせーなー」

イライラしながら応答しオートバジンを押して歩き出した、ここに戻って来たのはオートバジンを取りに戻ったため、青年はそのまま

外へ向かう。

「だから外は」

そろそろ夜も近く妖怪に襲われる危険が高い、里を護るものとしては放っておく事はできず着いていく。

「まだ着いてくるのかよ……いい加減なぁ」

今にでもキレそうな口調で話し掛けるが依然として態度を変えない慧音、すると。

「おーい、慧音～」

妹紅が加わり青年は頭を抱える、また余計なのが増えたという事で。

「また増えた……」

だがまた歩き出す、さっさと行くために、どこに行くかわからない、だがそれでも歩く。

「わたしは藤原妹紅な、でお前は？」

妹紅が名を教えるのだが青年は答えない。

「私も名を教えたのだが教えてくれないんだ」

「もしかしたら名無しの権兵衛だったりしてな」

後ろで会話されてうざたがるがため息を吐くだけでもう何も言わなかった。

「……アイツも口やかましかったっけな……」

小さく呟きゆっくりと歩く。

「何か言ったか？」

「別に、まだ着いてくるのかよ」

「当然だ、無知な外来人を放っておくほど私は鬼じゃない」

ため息を吐く青年、歩いていると里の外に出ていた、すると何かが倒れる音が響いた。

「今の音は……」

青年は面倒だなと思うがオートバジンをその場に停めて森の中に入っていく。

「おい！」

それはもうさすがに危険だと判断、二人も森の中に入り青年を追い掛ける。

深い森の中、博麗神社側の。

そこに大量の灰が散らばっていた。

「なかなかオルフェノクになる奴が出ねーな」

そこにはカマキリに似ており両手に鎌を持ち腰の３０程の羽根のスカートが着いたマンティスオルフェノクと同じくカマキリに似ており大鎌を持った死神にも見えるマンティスファンガイアがいた。

「だが妖怪どものライフエナジーもなかなかだな」

マンティスファンガイアはその場にいた妖怪達のライフエナジーを吸収、殺害していた。

「人間のものよりも生命力が強く濃厚で美味だな」

「ファンガイアはいいな、妖怪じゃ使途再生は使えねーのか？」

マンティスオルフェノクは妖怪がオルフェノクとならないかを実験をしていたらしいが上手くいかないがマンティスファンガイアは妖怪のライフエナジーの味に満足していたところに。

「人間が来たか」

青年がやってきてこの惨状を見て表情は変えていないものも心境は違っていた、この二体に対する怒りが芽生えていたのだ。

「俺がやる、そろそろオルフェノク増やさないと首領のお怒りを受けそうだ」

マンティスオルフェノクは前に出て青年に襲い掛かろうと飛び付くが。

「貴人『サンジェルマンの忠告』！」

スペルカードが発動し赤一色の弾幕が放たれマンティスオルフェノクを吹き飛ばし、後ろにいたマンティスファンガイアにも浴びせる。

「お前ら……」

後から慧音と妹紅が駆け付けた、今のスペルカードは妹紅によるもの。

「まさか怪人がいるとは」

「三人も、ちょうどいい、まとめてオルフェノクにしてやらぁ！」

マンティスオルフェノクは鎌を構えて走りだす、慧音と妹紅は迎え撃つ姿勢を見せるが。

「お前！」

だが青年は相手が武器を持っているにも関わらず生身で迎え撃つ、マンティスオルフェノクはバカにしながら鎌を振り下ろそうとしたその時だった。

「「「「っ！」」」」

慧音、妹紅問わず怪人側も顔色を変えた、青年の姿は灰色で狼の姿をしたウルフオルフェノクとなり鎌を受け止め殴り飛ばした。

なぜファイズに変身しなかった、いや、ファイズギアをなぜ持ってこなかったかわかった、青年はオルフェノクの姿を見せ二人に人間ではないことを教え離れさせようとしたのだ。

（俺の傍にいれば誰もが不幸になる、一匹狼のままな方がいいんだ）

過去に自分がオルフェノクと知ってもなお傍にいてくれた人間がいたらしいが不幸な目にあったらしくそれ以来他人と深いかかわり合いを持とうとはしていなかったのだ。

「行けよ……俺は見ての通りコイツらと同じなんだよ」

二人は黙って聞いていた、ウルフオルフェノクの言葉を。

「行けよ！」

慧音だけはその場から走り去ってしまったが妹紅は残った。

「お前も行けよ」

「いや、わたしはコイツらを倒してから行く」

「……」

ウルフオルフェノクはそれ以上は言わずマンティスオルフェノクとマンティスファンガイアに妹紅と共に立ち向かう。

◆◆◆

キャッスルドランでは王室の棚に飾られていたバイオリン、ブラッ

ディローズが弾いていないのに鳴り響き。

「奏歌！」

「ファンガイア……行くよキバット！」

「おう！」

奏歌とキバットはキャッスルドランから出て赤い血の色をしたバイク、マシンキバーに乗り走りだした。

そしてウルフオルフェノクと妹紅は二体の怪人と激戦を繰り広げていた。

だが妹紅はウルフオルフェノクの戦い方に違和感を覚えた。

（なんでコイツこんなにがむしゃらなんだ）

そう、ウルフオルフェノクの戦い方は変に先走っており空振りが多かったが攻撃が当たると確実にダメージは与えられていた。

「お前、なんでそんなに……」

「……うっせー……」

妹紅は察した、その灰色の姿で戦うのを嫌っているのだと。

「そうまでして一人になりたいのか？」

「……俺は一人でいなきゃいけない男なんだ……俺が誰かと一緒になればそいつは不幸になっちまう」

素っ気なく答えているが少し悲しみが見え隠れしていた。

「何話してんだ！」

マンティスオルフェノクが鎌を振るってくる、ウルフオルフェノクはギリギリかわと腹部を殴り飛ばす。

「このやろう……！」

マンティスファンガイアは大鎌を大きく振り回すため近付けなくなったが。

「っ！」

妹紅の左腕が切り落とされそれを見たウルフオルフェノクは動揺する。

「大丈夫か！？」

「気にするな！目の前の敵に集中しろ！」

傷は気にするなとは言うが左腕切り落とされて肩から血がドバッと流れている、それを気にしない事ができるわけない、だがそこにエンジンの音が響いてくる。

「アイツは……」

マシンキバーに乗った奏歌が変身するキバ・キバフォームが駆け付けるが後部には。

「慧音！」

慧音が乗っていた、アタッシュケースを抱えて。

「おい！」

アタッシュケースをウルフオルフェノクに投げ渡す。

「お前……まさか逃げたんじゃなくて……」

逃げたと思った、だがアタッシュケースを取りに戻っていただけだった。

「お前がどんな姿だろうとこの幻想郷なら受け入れてくれる、私も何となくその気持ちがわかる」

ウルフオルフェノクは青年の姿に戻る、キバはマシンキバーから降り怪人に立ち向かう。

「私も……半分人間で半分妖怪だから」

それを聞くと軽く微笑み。

「妖怪がいりゃ腕を切り落とされて気にするなって言う奴もいやがる……」

アタッシュケースを開きファイズドライバーを腰に巻くと。

「犬神タクミだ」

青年は始めて名を名乗った、辺りは普通の人間ではほとんど回りが見えないくらいに暗くなっていた。

「それがお前の名前か……」

ファイズフォンを開き5を三回押しエンターキーを押す。

【Ｓｔａｎｄｉｎｇｂｙ】

ファイズフォンを閉じそれを持つ右腕を挙げ。

「変身！」

ファイズフォンをファイズドライバーに装填し横に押し倒す。

【Ｃｏｍｐｌｅｔｅ】

ファイズギアを中心にフォトンストリームが流れていきそれを体を包むとフォトンブラッドは赤く、強く輝き辺りを照らす。

「眩しい！？」

「まさか……アイツが！」

光が収まるとタクミは仮面ライダーファイズに変身を完了しておりフォトンストリームと眼の輝きが闇を照らしていた。

ファイズは右腕をスナップさせると走りだしマンティスオルフェノクに殴り掛かる。

「オラァァァッ！！！！」

「グワァッ！？」

オルフェノク時とは違いがむしゃらは変わらないが人間を捨てたような戦い方ではなくまるで喧嘩しているようだった。

「おいおい……まるで喧嘩じゃないか」

「ああ、少し教育が必要だな」

慧音の目は問題児が来たと嬉しそうに輝いていた。

一方キバは……

「奏歌！こうなったらアイツの出番だ」

「うん」

少し圧されていたがこれを打開するための金のタツロットフエッスルをキバットに吹かせる。

「タツロット！」

すると金色の腕時計型で背中にスロットが付いた竜タツロットが飛んでくる。

「ビューンビューン！さぁテンションフォルテッシモ！変身！」

タツロットはキバの肩の防具の鎖を外すと左腕に装着しキバの鎧は銀から金に、眼は赤くなり裏が赤、表は金のマントが背中に現れ黄金の鎧を纏いしキバの最強フォーム、エンペラーフォームに変身する。

「ザンバット！」

タツロットから黄金の剣でコウモリのモンスターのザンバットバットが鍔となったザンバットソードを抜き取り手に持つ。

「オォォォォォォッ！！！！！！」

マンティスファンガイアは大鎌を振り回し迫ってくるがザンバットソードで受け止められ殴り飛ばされる。

「くっ！」

キバはゆっくりと歩きながら近付いていく、マンティスファンガイアはもう一度襲い掛かるが今度はザンバットソードに二、三度斬られ吹き飛ぶ。

「……」

ザンバットバットからザンバットフエッスルを外しキバットに吹かせる。

「ウェイクアップ！」

ザンバットバットを剣先まで上げていき剣が赤く輝き元の位置に下げる。

マンティスファンガイアはやけくそになり走って接近してくるが居合いの構えを取り剣が届く範囲に入った瞬間ザンバットソードを横一文字に振るう。

「グワァァァァァァッ！！！！！！！？」

マンティスファンガイアは断末魔を上げファイナルザンバット斬の

前に砕け散った。

「オラァァッ！！！！！！」

ファイズはマンティスオルフェノクを何回も殴り攻撃していく。

【Ｓｉｎｇｌｅ　Ｍｏｄｅ】

フォンブラスターに変形させて赤いビームを放ちマンティスオルフェノクの体を焼いていく。

「コイツ！」

ファイズはしゃがんで何かしようとしたがマンティスオルフェノクには挑発だと思われ逆上させてしまうが。

【Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ】

次は光弾を三連射しマンティスオルフェノクを撃って近付けさせなくしファイズフォンをドライバーに戻しベルト付いている懐中電灯型のツールのファイズポインターを取りファイズフォンからミッションメモリを抜きファイズポインターに挿入すると【Ｒｅａｄｙ】と鳴り柄の部分が伸び右足に装着するとエンターキーを押し【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】と足に流れるフォトンブラッドは強く輝く。

「……ハァッ！」

ファイズは高くジャンプし右足を伸ばしファイズポインターから赤いビームを放ちマーキングするかのようにドリル状の渦となりマン

ティスオルフェノクを拘束する。

「ハァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！」

渦に飛び込むと高速で回転しクリムゾンスマッシュを炸裂しマンティスオルフェノクを貫きその背後に立つ。

「ギャァァァァァァァッ！！！！！！！！！？」

断末魔を上げ青白い炎を上げ赤く輝くΦの字が浮かび上がると灰となり崩れた。

「……」

ファイズは変身を解除、キバも解除する。

「犬神タクミ……か」

妹紅は名前を呟くと。

「犬神」

「あ？」

慧音に話し掛けられ素っ気なく返すと。

「私がお前を再教育してやる」

「はぁっ！？」

「さっきの戦い、お前は不良か？一から教育してやるから寺子屋の使ってない部屋に住め」

「嫌だぜそんなの」

タクミは嫌がるがそんな事知るかと慧音はがっちりと腕を掴む。

「逃がさないぞ」

「諦めな、こうなった慧音は聞かないから」

妹紅の言葉に諦めるタクミだった。

「己ぇ……またしても作戦は失敗か……」

鳴滝は次元の道を歩いていた、次の作戦を考えながら、すると。

「今のは！」

その横を赤い光が通り過ぎていった。

◆◆◆

そして夜中の人里。

「うわぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！？」

道端に黒いスーツにネクタイをしサングラスを掛けた二十代のおっさんが落ちてきた。

「痛たた……いきなりなんだ……オーロラに呑み込まれたと思ったら……」

おっさんは歩き出したのだった。

第5話『疾走する本能！Φ’ｓ登場！』（後書き）

ファイズの暗闇での描写が大好物です！
漆黒の闇の中で輝くファイズ、もう最高描写！
犬神タクミの名前の由来は乾の“いぬ”に尾上の“がみ”を合わせたリイマジとオリジナルがコラボった名前です。
カイザとの因縁はまた今度、このカイザはクズの中のクズですからすごく、変身者変わるな、カイザ。

次回予告

おっさん
「大丈夫かい？」

ユウスケ
「俺も会ってみたいな、そのおっさんに」

おっさん
「魔物じゃないのか……生兵法は怪我の元だぜ坊や」

？？？
【不動、もう一度共に】

おっさん

「ああ、行くぞゴウリュウガン！
不動銃志郎……もう一度龍となる！」

次回『復活の銃士！マグナリュウガンオー、ライジン！』

第6話『復活の銃士！マグナリュウガンオー、ライジン！』（前書き）

おっさん登場です！
おっさんのかっこよさは最高です！

第6話『復活の銃士！マグナリュウガンオー、ライジン！』

「今日は鯖の味噌煮がいいな……」

総が里に来ており夕飯の買い物をしていた。

なんだかんだで幻想郷に馴染み里の人達とも仲が良かった、特に主婦の方々と。

「お」

目の前に走って遊ぶ子供達が現れる。

「元気があるな」

それを見ていると大量の荷物を積んだ押し車の横を一人二人と通り過ぎ最後の一人が通り過ぎようとしたら。

「危ない！」

積み荷を止めていた縄が切れ荷物が崩れ子供を下敷きにしようとしていた、総は走るが間に合いそうにない距離だったが……荷物は崩れ大怪我したかに思われたが。

「大丈夫かい？」

だが下敷きになり掛けた子供を黒いスーツでサングラスを掛けた男が助けだした、子供を下ろすと。

「無事だったか！」

慧音が駆け付け無事か確かめ男を見て。

「里の子を助けてくれた事を礼を言う」

「いいさ、じゃあこれで」

男は名も言わず去っていった。

「って事があったんだよ」

博麗神社、夕食を食しながら里であった出来事を話す総、最近では変な敬語ではなく普通に話せるように。

「スーツって事は外来人かな？」

「またなの……もう、別世界から来て困ってるのに」

総と霖をジト目で見る霊夢。

「まぁまぁ」

そこをユウスケが仲裁に入る。

「俺も会ってみたいな、そのおっさんに」
「いや、どっから見ても二十代ぐらいの男だったような……」
「それにしてもこの鯖の味噌煮美味しいわね、今度作り方教えてよ」

霊夢のその言葉には裏があるのは、この場にはいない咲夜やパチュリー等の紅魔館のメンバーしか知らない。

（帰ってきた時に作ってあげたいわね……）

そして食事を終えそれぞれ思い思いの時間を過ごしてから眠りに就くのだった。

◆◆◆

「朝か……」

里のすぐ側、スーツの男はそこで野宿していた、まだ寝床を確保していないからだ。

「“ゴウリュウガン”、今……そうだったな、ゴウリュウガンは今は……」

男はサングラスで目が隠れていてわからなかったが悲しそうな目をしていたのは明らかだった。

「どうやって帰るか……」

男は博麗神社に行けば外の世界に帰れる事を知らなかったが無理である、彼もクウガの世界とは別の世界から来た人間なのだからだ。

「さて……動くか」

男は移動を始める、自分の世界に戻るため情報がないかを。
同じ頃、里では建物の裏で住人の男が目の前にいる下半身が宙に浮き上半身が地に付いている砂の怪物と話していた。

「お前の願いを言え、どんな願いでも叶えてやる」
「ど、どんな願いでもかい？なら！」

住人の男はその砂の怪物に願いを喋ってしまった。

そして数日後。

「ふわぁ～眠ぃ……」

タクミは目を覚まし起き上がり慧音がいると思われる居間の方に行く。

「起きたか犬神」
「よ、タクミ」

居間には慧音と妹紅がいた。

「妹紅も居たのか……」
「ちょっとな」

妹紅がいるという事は厄介事だろうと思っていた。

「最近、変な事件が立て続けに起きているんだ」

やっぱり厄介事だった、だが今の自分には聞かないとかそういう拒否権はないため聞いていた。

「それもほとんどの被害者が妖怪や妖精だ」
「妖怪が？」

人間ではなく妖怪や妖精、タクミは思い出したかのように口を開いた。

「そう言えば昨日も妖怪が里に駆け込んで来たな」
「そうだ、話じゃ突然別の妖怪に驚かされたみたいだ」

普通じゃあり得ない、だがそれをやってのけられるのは。

「怪人か」
「ああ、もしかしたら里の人間にも被害が及ぶかもしれん」

できれば見つけて倒せ、そう言いたいのだろう。

「当然だろ」
「はいはい、やってやらぁ」
「やる気なさそうだな」

妹紅はジト目で言うが、前回左腕切り落とされたはずなのだが、元に戻っていた、それは妹紅が不死だからである。

「私は今日、授業あるから無理だからな」

授業と言っても歴史である、てか歴史しかできない、後は体育、他の教科は妹紅がやってくれるからいいのだ。

（歴史しかできないのにな）
（まぁそう言ってやるなよ、歴史バカなんだよ）

こそこそ話しているため慧音には聞こえていない。

（慧音から歴史取ったら残るのは頭突きと口喧しさだけだよ）
「聞こえているぞ」
「ギャーッ！？」

最後のだけは聞こえていたため妹紅は頭突きを受け床に顔から突っ込み穴を空けタクミは背筋が凍った。

「犬神、お前も何か言いたそうだな」
「なんでもない……です」

最後に敬語になるほど少し怯えていた。

「これで満足だろ？」
「いいや、まだだ！」

数日前の怪物と話していた住人の男とその怪物が実体化しカメレオンのようなカメレオンイマジンが密会していた。
イマジンは電王の世界の未来から来た怪人である、実体化する前はエネルギー体で人間に取り付き契約をしなければ実体化できない。
契約はその取り付いた人間の願いを叶える事だがやる事が単純過ぎるため大変な事になってしまう。
住人の男の願いは妖怪や妖精を驚かす事だった、理由は……

「アイツらは俺に恥をかかせたんだ、妖怪達に驚かされて里のみんなに笑われたんだ！」

妖怪に驚かされたために里に駆け込んだまではよかったが更には転んで衣服が脱げてしまい笑い者になってしまったのだ。

「俺の恨みはまだ晴らしてないんだ！」

だが住人の男はまだ満足していないらしく契約が完遂できていない、契約が完遂するとその契約者の思い出深い過去に飛んでいき破壊の限りを尽くし歴史を改ざんしてしまうのだ。

「くそ！てめえどんだけ欲深いんだよ！」
「うわぁ！？」

カメレオンイマジンはなかなか契約を完遂させない住人の男に苛立てていた、そのため怒りを抑えれなくなり契約者の体を痛み付ける。

「次妖怪を驚かせて契約完了しなかったら殺すからな」

カメレオンイマジンは呆れ面倒くさそうにしながらその場から透明になり消えた。

「……」

消えると住人の男はにやける、理由はカメレオンイマジンを利用しているからだ、もっと妖怪を驚かせてこいと、カメレオンイマジンはいつ完了するかわからない契約をしてしまったのだ。

「だけど殺されたらな……」

だが殺されるのは嫌だなと思いどこかで隠れていようとか思い考えるのだった。

◆◆◆

「さっきの魔物ではなかったな……」

先ほどのカメレオンイマジンと住人の男の密会をサングラスの男が目撃していた、この男は刑事なため張り込みは得意なのだ。

「この世界にも悪がはびこるのか……」

男はそれを放っておく事はできなかった、自分の中に宿る正義の炎が燃えていたからだ、だが自分には今、悪を倒す力はなかった、前はあった、だが今はなかった。

「……」

スーツの男は住人の男をマークする事にした、またカメレオンイマジンが現れるかもしれないからだ。
その頃タクミと妹紅は事件を追い掛けていた。

「あだだだ……」
「大丈夫かよ?」

先ほどの頭突きの痛みが退いておらず頭を抑えていた。

「大丈夫だ、いつものこと」

だが痛そうだった。

「あ?」

そこでタクミは住人の男の後を着けているスーツの男を発見、怪しいと感じた、普通に。

「どうする？」
「追い掛ける」
二人も後を着ける事に。

そしてカメレオンイマジンは魔法の森の中で妖怪と妖精達を驚かせまくっていた。

「このぐらい驚かせば契約完了するだろう」

だがここは魔法の森の中、人間が魔法の森にずっといれば害があるがもし怪人がいたらどうなるのだろうか？

「な、なんだこれは！？」

カメレオンイマジンの体に異変が、何かオーラが纏われパワーアップしていくような感覚に。

「力がぁぁぁ！力がみなぎってくるぞ！」

更にはまたもやセルメダルがカメレオンイマジンに大量に注ぎ込まれていき肉体、特殊能力共に強化され。

「こうなれば過去に飛ばなくともこのままこの時代破壊すればいい！」

するとカメレオンイマジンは人里目指し走りだした、手始めに自分を利用した契約者の住人の男を殺すために。

「おいタクミ、アイツすごく尾行慣れしてないか？」
「だな、刑事か何かじゃねーか？まさか蟹ライダーに変身したりしてな」

なぜファイズの世界の住人が蟹ライダーなんて知っているかはともかく尾行を続けていると曲がり角を曲がり二人も曲がると。

「お前達、俺に何か用か？」

曲がった瞬間スーツの男が待ち構えていた、バレていたのだ。

「そんな尾行の仕方じゃ犯人にも逃げられちまうぜ」

タクミ達の尾行は失敗に終わるのだが。

「だけどアンタが追い掛けてた男は？」
「アーッ！」

振り向いたらそこに住人の男は居らずこっちの尾行も失敗に終わっていた。

「おっさん、何か知ってるなら教えな」
「お、おっさん!?俺はおっさんじゃない！まだ２５歳だ！」

だがおっさんに見えてしまう。
すると先ほどの男の悲鳴が聞こえその元へ走りだし向かうとそこには住人の男が腰を抜かして倒れておりカメレオンイマジンが手に掛けようとしていた。

「待ちやがれ！」

タクミは飛び込みカメレオンイマジンを蹴るが。

「何かしたか？」

ビクともせず投げ飛ばされてしまう。

「タクミ！」
「生兵法は怪我の元だぜ坊や」

スーツの男がカメレオンイマジンに立ち向かう、タクミみたいに投げ飛ばされると思いきや。

「懐ががら空きだ！」

拳銃を両手に持ちカメレオンイマジンの懐に飛び込み引き金を引きまくり銃弾を食らわしていく、これにはさすがに至近距離なためダメージを与えられカメレオンイマジンは後退る。

「コイツ……！」

再び襲い掛かろうとしたがまたもや銃弾を連続で浴び後退る、弾切れを起こすがすぐにカートリッジを変えて弾をリロード、連続で銃

撃を食らわしていく。

「おっさん、スゲー……」

タクミはスーツの男の射撃センスに驚いていると。

「タクミ！受け取れ！」

妹紅がファイズドライバーを投げ渡す、ベルトは妹紅が持っていてくれていたのだ。

ベルトを腰に巻きファイズフォンを取り出し開き変身コードを入力し。

【Ｓｔａｎｄｉｎｇｂｙ】

「変身！」

ファイズフォンをバックルに装填し横に倒す。

【Ｃｏｍｐｌｅｔｅ】

タクミはファイズに変身しカメレオンイマジンに立ち向かう。

「魔弾戦士……いや違う」

スーツの男は射撃を止め戦いの行く末を見届ける事に。

「ハッ！」

手首をスナップさせると走りだしカメレオンイマジンの顔をぶん殴る。

「生兵法じゃない……まるで喧嘩だなこりゃ」

スーツの男はそう言っているとファイズは回し蹴りを食らわし吹き飛ばす。

「調子に乗るな！」

カメレオンイマジンは火炎弾を放ち攻撃、近付けなくなりファイズフォンを取り出し何かのコードを入力する、それからフォンブラスターに変形させ光弾を発射していく。

「ぐっ！？」

光弾を体に食らい攻撃を止めると後ろからオートバジンが体当たりし弾き飛ばされる。

「来たか」

オートバジンのΦのマークが描かれたボタンを押すと変形しビークルモードからバトルモードという人型ロボットとなる。

「変形した……マグナウルフみたいだな」

スーツの男はそう感じていた、オートバジンは前輪のタイヤのバスターホイールの銃口をカメレオンイマジンに向けていた、ファイズは接近戦を仕掛け殴ったり蹴ったりしている。

「おいおいまさかな……」

妹紅は察した、オートバジンは何かしでかそうとしているのではないかと。

「おらぁっ！」

思い切りパンチを食らわすファイズ、そして銃声が連続で鳴り響き銃弾がカメレオンイマジンに命中し火花が散る。

「危ねっ！」

だがファイズも巻き添いを食らう羽目に。

「お前な！近くにいる時は打つなって何度言えばわかる！」

怒られて電子音を立ててしょぼんと落ち込む。

「いい射撃手だが状況判断がな……そう思わないかごうりゅ……またやっちまったか……」

ファイズはカメレオンイマジンを羽交い締めにしオートバジンの射撃を食らわす実にチンピラがやりそうな行動に。

「タクミ……」
「なんだよ、文句あるのかよ！」
「お前本当に仮面ライダーか！」

敵にも言われる始末、カメレオンイマジンは払い除けるとカメレオンの特性を活かし透明となる。

「消えた……！」

すると背中に火花が散り振り向くと同時にラリアットするが空振り。

「チッ！」

辺りを警戒するが攻撃は食らう、翻弄されていると。

「タクミ伏せろ！」
「あ？うおわ！？」

すると炎が襲い掛かりしゃがんだため当たらなかったが代わりに透明になっていたカメレオンイマジンの体を焼き尽くす。

「熱い！死ぬ！」
「お前俺を丸焼きにするつもりか！ってうわっ！？」

次はオートバジンの銃弾が当たり掛けたが後ろで熱さに悶えるカメレオンイマジンに命中。

「俺を殺す気か！」
「もっともな意見だな」

オートバジンを殴るとビークルモードに変形し左ハンドルグリップにミッションメモリを挿入し引き抜くと赤い光の剣ファイズエッジとなる。

「後で覚えてやがれよ……おらぁっ！」
「ギャーッ！俺のせい……ウワァッ！？」

ファイズは八つ当たりするようにカメレオンイマジンに斬撃を食ら

わし斬り付ける、本当にチンピラにしか見えない。
倒れるとその立ち上がろうとするカメレオンイマジンの顎を蹴り上げてから腹部も蹴り上げ宙に舞うと回し蹴りで蹴り飛ばす。

「おいお前本当にチンピラだぞそれ！」

スーツの男は突っ込まずにはいられなくなり叫ぶが。

「黙っとけおっさん！」
「またおっさんって……！」

ファイズはエンターキーを押しイクシードチャージをし右腕のフォトンストリームとファイズエッジの刃を構成するフォトンブラッドが強く輝くと。

「おらぁっ！！」

ファイズエッジを振り上げ赤い衝撃波が放たれカメレオンイマジンを拘束し宙に浮かす。

「ハァァァァァッ！！！！！！！！」

走りだし剣が届く範囲に接近するとファイズエッジによる斬撃を食らわし必殺技スパークルカットを炸裂する。

「ギャァァァァァッ！！！！！！！！！？」

Φの文字が浮かび上がり爆発、勝利したかに思われたが。

「何ぃ！？」

炎の中から二つ光が出てきて巨大化し羽根が付いた獣と四足歩行で肩から角が生えた獣となる、これはイメージが暴走し契約者のイメージとは異なる姿をしたイマジンの暴走した姿でイマジンより巨大な羽根のはギガンデスヘブンと四足のはギガンデスヘルとなってしまった。

「デカくなるなんて聞いてねーぞ！」

ギガンデスヘルの巨大な姿に他の住人は混乱する。
ファイズエッジをオートバジンに戻すとフォンブラスターを持ち走りだしギガンデスヘブンとギガンデスヘルに攻撃し注意を自分に向け里から遠ざけようとする。
攻撃には妹紅も参加しギガンデスヘブンとギガンデスヘルは思惑通り里から離れ魔法の森の中へ、だが魔法の森の中では更に力を与えてしまう。

「……俺に、力があれば」

かつてあった力をもう一度使いたい、戦わないでこのまま見ているのは嫌だ、戦いたい、そう願ったその時だった。
赤い一筋の光が天から舞い降りスーツの男を包み込んだ。

「これは一体……」

光の空間の中にスーツの男はいた、目の前に赤い小さい光が近付い

てくる。

「まさか……お前は……！」

赤い光には見覚えはない、だが雰囲気は覚えていた。

【久しぶりだな】

「やっぱりお前か……」

互いの事を知っていた、永遠の別れをしたはず、だが今はそんな事はどうでもよかった、こうして再び出会った、それだけで十分だった。

【永遠の別れをした、だがこうしてまた出会えた】

赤い光も出会えた喜びの方が強かった。

「そうだな……なぁ、もう一度力を貸してくれないかゴウリュウガン」

赤い光を手にする。

【わかった、もう一度共に戦おう、不動銃志郎】

男、不動銃志郎の手に赤く金の龍の頭を模した飾りが付いた銃ゴウリュウガンが握られていた。

「ああ行くぞゴウリュウガン！

不動銃志郎、再び龍となる！」

◆◆◆

魔法の森に誘い込まれたギガンデスヘブンとギガンデスヘルはファイズと妹紅、騒ぎを嗅ぎ付けた魔理沙と奏歌が変身するキバ・バッシャーフォームとキャッスルドランが応戦していた。

「ザバト並にでけーな！」

ザバトとはファンガイアも同じようにギガンデス並みの巨大な怪物になってしまうことがある、それの名前である。

「てかコイツ強くなってないか！？」

ギガンデスヘブンの尾から針がマシンガンのように発射し攻撃。オートバジンはバトルモードになっており針を銃弾で打ち落としていた。

【Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ】

フォンブラスターの光弾で攻撃するがまったく効いてはおらず火炎弾の逆襲を受け地面が爆発し吹き飛ぶ。

「うわっ！？」
「タクミ、大丈夫か！」
妹紅が駆け寄るとギガンデスヘブンが再び火炎弾を放とうと、妹紅は大丈夫だがファイズは危険に、そこに銃声が響きギガンデスヘブンの体に火花が散る。
「さっきのおっさん！」
銃志郎はゴウリュウガンを持ち駆け付けた、危ないから下がれと言うが。
【大丈夫だ、私達も戦う】
「「喋った！？」」
ゴウリュウガンが喋った事に驚く二人。
銃志郎はマダンキーという鍵を取り出し。
「リュウガンキー発動！」
リュウガンキーをゴウリュウガンのグリップに差し込む。
【チェンジ、マグナリュウガンオー】
「轟龍変身！」
銃志郎に銀色で赤い模様が入ったスーツを纏うとゴウリュウガンから銀色のメカニカルな龍が出てきて空を飛ぶと銃志郎に突撃し光に包まれる。
光が消えると銃志郎は龍の顔を模した仮面に金と銀や赤の着色が施された鎧を付けメカニカルな姿に、左手にはマダンマグナムという

銃を持つ仮面ライダーではない戦士。

「永遠を越え今ここに再び無限の炎が燃え上がる！
マグナリュウガンオー、ライジン！」

マグナリュウガンオーに変身したのだ。

「仮面ライダーじゃない……！」

マグナリュウガンオーを二つの銃をギガンデスヘルに向け引き金を引き銃弾を浴びせていく。

「スゲーパワー、わたし好みだぜ」

魔理沙も認めるほどのパワー、ギガンデスヘルにダメージを食らわせた。

「ギシャァァァァッ！！！！」

ギガンデスヘブンが突撃してくるがマグナリュウガンオーは横に飛び込み避け、回転しながら銃弾を食らわしていく。

【不動、嬉しいぞ、また共に戦えて】

「俺もだ、ゴウリュウガン」

地面に着地すると左右からギガンデス達が突進してくるがマダンマグナムとゴウリュウガンの弾丸を食らわせ勢いを殺しジャンプしてギガンデスヘルの頭にゴウリュウガンに収納された刃がスライドしそれを突き刺し至近距離から銃弾を打ち込む。

ギガンデスヘルは苦しみ、マグナリュウガンオーは離れる。

「奏歌！アクアトルネードだ！」
「わかった！」

バッシャーマグナムの後部をキバットに噛ませ。

「バッシャーバイト！」

バッシャーマグナムの銃口のフィンが展開し回転すると巨大な水の弾丸が構成されそれを放ち必殺技アクアトルネードを炸裂、ギガンデスヘルの顎に命中し後ろ足で立つと腹部にクリムゾンスマッシュのマーカーにマーキングされる。

「ハァァァァァッ！！！！！！！！」

ファイズがクリムゾンスマッシュを炸裂、体を貫くがギガンデスヘルはまだしぶとく生きていたが。

「これで！」
「トドメだぜ！」

魔理沙のマスタースパークと妹紅の火の鳥を放つ「不死『鳳翼天翔』」を炸裂、ギガンデスヘルは倒された。

「よっしゃー！」
「後はあっちの飛んでる奴だけだぜ！」

マグナリュウガンオーがギガンデスヘブンの相手をしていたがすぐに決着がつくだろう。

【不動、単体のマグナドラゴンキャノンを強く推奨する】
「ああ！ファイナルキー発動！」

ファイナルキーをゴウリュウガンに差し込むと【ファイナルクラッシュ】と叫びマダンマグナムをゴウリュウガンの銃口と直結させマダンマグナムの刃もスライドし銃口に赤い炎のエネルギーが貯まっていく。

「マグナドラゴンキャノン、発射！」

そして赤い龍の形をしたエネルギーが放たれた、必殺技マグナドラゴンキャノンを発射、エネルギーはギガンデスヘルに命中しギガンデスヘルは爆発し倒された。

「ジ・エンド」

「おっさんのおかげ助かったぜ」
「だからおっさん言うな」

里に戻りタクミと妹紅と銃志郎は話していた。

【不動がおっさんの確率は１２０％】
「ゴウリュウガンもか……」

自分には味方いないとガックリしていた。
元の世界に帰れるまで寺子屋の部屋を使う事にしたのだった。

第6話『復活の銃士！マグナリュウガンオー、ライジン！』（後書き）

ゴウリュウガンはオートバジン並みの癒しキャラ？
タクミが危うく殺されかけてるのが（笑）

次回予告

ユウスケ
「現場に響く殺人予告か……必ず人がいる場所でか」

霊夢
「嫌ね……本当」

咲夜
「そうね」

レミリア
「今度の殺害現場がここね」

ユウスケ
「ゴウ……ラム？」

次回『飛翔する翼、ゴウラム参上！』

第07話『飛翔する翼、ゴウラム参上！』

◆◆◆

ある夜の魔法の森の深く、そこで二体のバッタの性質を持ち外見も似ている茶色い体色のズ・バヅー・バと蜂の性質を持ち外見も似ているメ・バヂス・バは何かから逃げていた。

「バゲジャズサガボボビ（なぜ奴らがここに）！」

バヅーは焦ったような雰囲気を出しバヂスに言う、二体はゲゲル（殺戮ゲーム）を始めようとしていたのだが何ものかが現れ逃げていた。

「ギスバ（知るか）！」

その何かとは……

「グワァァァァァーッ！！！！！！？」

バヅーは突然杖が長い斧で腰のベルトのバックルを叩き切られ爆死、爆炎が闇が照らされ木の陰にはアンノウン、アントロードの兵隊フォルミカ・ペデスが現れた、中には斧を持つ固体もおりバヂスは完全に囲まれていた。

バヂスは飛び立とうと羽根を広げるがペデス達は羽根をむしり取り

地面に叩きのめすと二体のペデスは斧を振り上げ。

「ジャズソォォォォォォォォォォォォッ！！！！！！！！！！」

プライドを捨てグロンギ語でやめろと叫ぶのだがその叫びも虚しく二つの斧は振り下ろされバックルを割られ爆死した。
グロンギ怪人は元々人間がアマダムという石を体内に埋め込み怪人となった姿、クウガもだがそれは心の問題、アンノウンが特殊能力を持った人間を殺すようにグロンギもその特殊能力を持った人間とみなし殺害対象に。
だがアンノウンのその行為は人間を恐れているから、それはあるものになるかもしれぬ前兆だからだ。

「っ！」

ペデス達は何かの気配を感じ同じ方向を向く、炎で明るくしっかりとその姿を確認できた。
金の二本に岐れた角に黒いマスクに赤い二つの眼に銀色の口元の仮面、
鎧もスーツも黒を基準に胸にはその仮面を模したように二つの金色で丸い模様にその間に黒い膨れ上がったような縦に長い四角い石に腹部は金色で腰回りが銀色の鎧となり、
バックルには金色に輝く賢者の石が埋め込まれた変身ベルト、オルタリングが巻かれた。

「アァ……ギィ……トォ……！」

大軍の中の一体が憎らしそうにその名を上げた、その戦士は超能力者の人間が更に進化しアンノウンが特殊能力を持った人間を殺害する理由でもある、その名は仮面ライダーアギト・グランドフォーム。

「……ハッ！」

アギトが走りだすとペデス達も迎え撃つため走りだす。

「ハ、ハッ！」

向かってくる敵を殴ったり腕でを振るい弾いたりすると立ち止まり頭の角、クロスホーンが四枚開き計六枚となると両手を軽く広げ、足元にクロスホーンを模した金に輝くアギトの紋章が現れ右足を一歩引くと腰を低くし紋章を足に吸収、ジャンプし右足を前に伸ばし必殺技ライダーキックを炸裂し一体倒し爆発で何体か巻き込むが減らず。

オルタリングの右側のスイッチを押し賢者の石が赤く輝き鎧も赤く、右肩の防具は赤と金の大きいものに、そして賢者の石から日本刀のような鍔がクロスホーンを模した飾りとなった炎の剣、フレイムセイバーを持ちアギト・フレイムフォームとなる。

アギトは走りだし後からペデス達はそれを追い掛け一列となりそれを見計らいフレイムセイバーのクロスホーンは展開し振り向いて走りだし次々とペデス達を斬っていき、最後に剣を振り下ろしセイバースラッシュを炸裂。

「ア〝……アァァァ……！」

頭に光の輪が現れ斬られた傷が燃え上がりペデス達は次々と爆死していった。

「……」

アギトは変身を解いた、その姿、顔は咲夜に似ていた、髪の毛の色

も銀髪なのだが瞳は咲夜の青っぽい瞳ではなく黄金の魂を宿ったような色で女ではなく男だった。

「……」

咲夜に似た青年は炎を見つめた後、森の奥深くの闇に消えていった。
その上を何か大きな物体が飛んでいるのを知らずに。

◆◆◆

「ライダーキック！ハァァァァーッ！！！！」

夜は更けて昼前の時間帯、総が変身したキックホッパーはライダーキックでグロンギ怪人を倒したところだった。

「これで終わりか」

数体いたらしく総は一人で倒したのだ。

「さて、行く……」

総は歩き出そうとしたら突然叫び声が聞こえ辺りを見渡すと一人の

住人が倒れているのが見付かる。

「大丈夫か!?おい!」

だが住人はすでに息絶えていた。

『次は午後2時半、場所は子供達がいる場所、赤く染まった後の壁で殺人を行います』

どこからかまた声が響き犯行予告でもするかのようにペラペラと教えていた。

「どこだ!姿を見せろ!」

だが声は聞こえなくなり総は先ほどの犯行予告めいた言葉を思い返す。

「子供達がいる場所……寺子屋……!」

先ほどの犯行予告で次は寺子屋で起こると予想し急いでそれをユウスケに知らせるため遺体の方は通りかかった他の住人に訳を言わずに慧音に場所を伝えてくれとだけ言いゼクトロンに乗って博麗神社に向かって走りだした。

「ではお嬢様、里へ行って参ります」

「帰りはゆっくりでもいいからね〜」

霧の湖の畔にある紅い屋敷、紅魔館から咲夜が飛び立った、それをそこの主人の悪魔のような羽根が付いた青っぽい髪で赤い瞳の吸血鬼で外見は少女のレミリア・スカーレットが部屋から見送った。帰りはゆっくりというのはレミリアの咲夜への気づかいから出た言葉でもある。

「ゆっくりでもいいって言うけど……」

だからと言ってゆっくりできないメイド長、さっさと用を済ませて帰ろうと思っているとどこからかバイクのエンジンのような音が響き渡った。

「今のは……！」

辺りを見渡すが何も見付からなかった。

「……ゆっくりしながら帰ろうかしら」

そう思い魔法の森を越えようとしていた。

「犯行予告？」

「ああ」

博麗神社に戻った総は先ほどの事をユウスケ達に伝えていた。

「見えない敵か……」
「気になるわね」

居間にはいつものようにユウスケと総、蒜に霊夢がいた。

「寺子屋でしょ場所は？」
「ああ、子供達がいる場所って言っていたから思い当たるとしたら」

ピンポイントで一家を襲うわけないと考えていたため子供達が多く集う場所と考えていたから寺子屋という答えが出たのだ。

「赤く染まった後の壁で殺人を行うって」

その言葉に霊夢は何かに引っ掛かった。

（赤く染まった後の壁？）

赤く染まった後の壁、その言葉のままの意味だとすると染まっている壁の前で誰かを殺すのだが染まった後の壁となると意味は違ってくるが。

「どーかした霊夢？」

そこにキバーラが話し掛けてきた。

「いや……ちょっと引っ掛かるのよ、赤く染まった後の壁が」
「私もよ、けど」

もう三人は寺子屋に行こうと意気込む、子供だけが狙いではなくそこに訪れる大人や妖怪も狙いだと感じていたからだ。

「となりゃ寺子屋に急行だ！」
「「ああ！」」
ユウスケ達三人は神社から出て寺子屋に向かおうとしていた。
「私も行く！」
霊夢も着いていき共に四人は寺子屋へ向かい見えない敵から人を守る事に。
「じゃあ私は先に」
キバーラは先に出て寺子屋に素早く向かうのだった。

その頃魔法の森では魔理沙が霧雨邸から飛び立とうとしていた。
「さて、そろそろ霊夢ん所に行くか」
箒に跨り飛び立つと。
「うわぁ！？」
突然黒く巨大な影が通り過ぎ危うくぶつかり掛けた。
「な、なんだぁ今の！？」

振り向くが即にもう影はいなくなり見失っていた。

「ん？」

魔理沙は博麗神社へ進路を向け飛んでいったが里が騒がしい事に気付き寄る事に、そこで初めて殺人事件と犯行予告があったのを聞き寺子屋に行く事に。

「霧雨か」

「よっ、なんか大変な事になってるみたいじゃねーか」

寺子屋に到着すると慧音が出迎え先ほど聞いた話をする。

「ああ、この寺子屋で誰も殺させはしない、だからお前も」

誰もの中には魔理沙も入っている、そのため帰らせようとしていたが。

「ならわたしもいるぜ、わたしも誰も殺させたくないからな」

「……まったく、すまないな」

「いいって」

ニッと歯を見せながら笑うとユウスケ達が到着、魔理沙が来る前にキバーラが訪れ犯行予告の事は伝えてあった。

「来てくれたか」

「もちろん」

やはりほとんどは寺子屋で起こると認識してしまっていた。

「どーかしたのか霊夢？」

魔理沙は話し掛けたが霊夢は「何も」と素っ気なく返していた。

「誰かさんの事でも考えてたか？」

「っ！“咲一（しょういち）”の事なんて……」

「誰も咲一なんて言ってないぜ？」

まんまと引っ掛かり顔を真っ赤にするとその名前で頭に電気が走った。

「咲一……まさか！」

引っ掛かていた何かにやっと気が付いた。

「ユウスケ！今何時！？」

ユウスケは腕時計を見て「２時２０分」と答えた。

「犯行現場はここじゃない！」

その発言に全員疑問符を浮かべ霊夢に注目。

「子供がいる場所でみんな場所を寺子屋だって思い込んでいたのよ！赤く染まった後の壁、赤く染まった壁、紅魔館よ！」

慧音と魔理沙は納得した、そこなら外壁は赤く塗られているためその後の壁で殺人、それなら意味が通る、だが子供は……

「レミリアとフランの事ね……」

フランドールとはレミリアの妹で二人とも幼女体型、姿だけで子供と判断できる。

「１０分しかねーぞ！」

犯行予告の２時半までは残り僅か、紅魔館がある霧の湖は午後になると名の通り濃い霧が掛かる、もう掛かっているはず、ユウスケは頭より先に体が動きトライチェイサーに乗り走りだそうとしたが。

「小野寺！」

タクミがファイズフォンを投げ渡した、ペガサスフォームの事は聞いているため遠くから狙えてトドメを刺せるならユウスケに渡した方がいいと判断し渡したのだ。

「ありがとうな！」

「紅魔館なら魔法の森を抜けた霧の湖の畔にある！」

慧音はそれを伝えると今度こそ走りだす、後から霊夢と魔理沙が追い飛翔する。

◆◆◆

「ふわぁ～……霧が掛かってきましたね～」

紅魔館の門番で中華風な服で赤い髪の毛の妖怪、紅美鈴（ほんめいりん）が欠伸をしていた。

「今日も紅魔館異常な～し？」

だが遠くに人影が薄ら見えていたがすぐに消えてしまった。

「何かいたような～……まぁいいか」

そのまま寝ようとし始めついには寝に入ってしまった、いつもなら咲夜が注意するがその咲夜もいない。

「むにゃむにゃ……」

立ったまま寝るとは器用な。

魔法の森の中をユウスケはトライチェイサーで駆けていた、これ以上誰も死なせないためにも。

「森を抜けて少しすれば湖よ！」

だが時間は迫っていた、時計を見ると後1分、間に合わないと感じていた、俺も空を飛べればそこから狙い射てるのにと思う、クウガに変身すれば空を飛ぶ能力を追加される、だがその能力を使うとペガサスフォームどころか他のフォームの能力も使えずトライチェイサーで移動するのと変わらない。

（翼が……俺を飛ばしてくれる翼があれば！）

強く願った、願うだけでは何も変わらない、だが願わずにして何をすればいい、森を抜けたその時だった。

「何よアレ！？」

ユウスケの上を巨大な黒く金色の模様が入ったクワガタのような物体が飛ぶ。

「あ、さっきわたしが見た奴かも」

それの名はゴウラム、ゴウラムの背中に埋め込まれた緑色の発行体はアークルに埋め込まれたアマダムと同じものでクウガの仲間として古代の人間であるリントが作ったものである。
ユウスケは上を見てゴウラムの足を見て思った、コイツに掴まれば飛べると。

「こうなりゃ一か八かだ！」

ファイズフォンをフォンブラスターに組み立て。

「変身！」

アークルを出し変身ポーズを取るとアマダムは緑色に輝きクウガ・ペガサスフォームに変身、フォンブラスターはペガサスボウガンに変わり後部のレバーを引っ張りジャンプしゴウラムの足に左手で掴まる。
ゴウラムはそのまま上昇しクウガは味方と判断。

「先に行くから！」
「頼んだぜユウスケ！」
「気を付けてね！」

ゴウラムはほどよい高さまで上昇すると霧が濃い地点を見付ける、霧の中は何も見えないがペガサスフォームの視力に掛かれば他愛もない。
敵の足音にも耳を澄まし音を聞き逃さないように集中すると。

「そこだぁぁぁぁぁーっ！！！！！」

銃口を向け空を切りながら飛行するゴウラムとクウガ、引き金を引くと風が吹き銃口に風が集まっていき手首の装飾に電気が走ると矢は放たれた。

「行けぇぇぇぇぇぇぇーっ！！！！！！！！！！！」

空気の矢、ブラストペガサスは霧の中に消えた。

紅魔館の少し前、そこには透明になっているからわからないがカメ

レオンのグロンギ怪人、メ・ガルメ・レが走っていた。

「こんなに霧が濃ければ見つかるまい

ガルメは走って最初のターゲットを美鈴に絞り込み後から他の面子も殺害しようと目論むが。

「グガァァッ！！！？」

背中を空気の矢が貫きその傷に封印のマークが現れ。

「むにゃむにゃ……ふえっ！？」

ガルメは美鈴に手を出す前に爆発、その音と爆風で美鈴は目を覚ました。

「よし！」

爆音を耳で聞き取りゴウラムは下へ降りていき、クウガは手を放すと地上に降りる。

「ありがとうな」

そしてゴウラムはどこかへ飛び去った。

後ろを振り向くと森の中に人影が、顔を見て。

「咲夜？」

顔付きは咲夜に似ていた、見られた事に気付いた人影は森の奥深くに消えていった。

「あらユウスケ」

そこに咲夜がやってきて頭が混乱していたが変身を解きユウスケの姿に戻る。

「あれ？」

ユウスケは先ほど向いていた方向と咲夜を交互に見ていた。

「どうかした？」

「いや……さっき……咲夜、アッチにいなかった？」

森の方向に指を差すが咲夜は首を横に振る。

「さっきまで里にいたけど……」

「あ、よく見たら目の色違った、咲夜は青っぽいけど俺が見たのは……」

次の一言で咲夜はその人物を特定した。

「黄金……だったかな？」

「っ！」

その一言を聞き激しく動揺していた、嬉しさと心配が顕になっていた。

「咲一……！」
「えっ……」

霊夢と魔理沙が合流、“咲一”、その名を聞き二人の中で一番反応したのは霊夢だった。

「咲一がいたの……ねぇどこ！どこにいたのユウスケ！」

霊夢はユウスケに掴み掛かり声を荒げ問い質す。

「咲一って……」

だがその咲一が知らなかったのはこの場ではユウスケだけ、咲夜が走りだし、その後を霊夢は着いていく。

「魔理沙、咲一って誰だ？」

この場に残っていた魔理沙に聞く事に。

「十六夜咲一（いざよいさくいち）、咲夜の双子の弟で、霊夢の……恋人だ」

第０７話『飛翔する翼、ゴウラム参上！』（後書き）

次回からアギト編に入ります、長編になるライダー他に何が……
…いましたね、電車の中の電車王が。

次回『目覚めてしまった戦士の行方』

第０８話『目覚めてしまった戦士の行方』（前書き）

短いです、なので前回次回予告をサブタイだけで済ませました。
後、十六夜咲夜という名前ははレミリアからもらった名前ですがこれでは名前は最初から咲夜と咲一で変わったのは名字だけです。
因みに前の名字は……お楽しみに。

第０８話『目覚めてしまった戦士の行方』

◆◆◆

数年前、外の世界で海上にあかつき号という船が東京に向け航行していた。
あかつき号には二人の少年と少女が乗っていた、なぜ東京に行こうとしていたのかは二人は姉がいた、だがある事故で死亡してしまったらしくその直前手紙が届いた、それは自分が死ぬ事を予知し、二人を東京に来るように誘うような文章だったのだ、真相を確かめるべくこのあかつき号に乗っていた。

「ねぇねぇ！海が綺麗だよ！」

少年と少女は双子の姉弟だった、少年は弟、少女は姉。
少年は船に乗っている、そういう事もありテンションは高くはしゃいでいた。

「ホントね」

少女は反対にクールで海風に打たれ銀髪の髪を揺らしていた。

「咲奈（さくな）姉さん、なんで死んでしまったの……」

だがクールを気取るがその裏腹、姉の死をとても悲しんでいた、こ

の二人には両親はおらず咲奈という姉しかいなかったのだ、だがその姉もいなくなってしまった。

「元気出してよ咲夜……」

そう、この少女こそが紅魔館メイド長の十六夜咲夜、だが旧姓は津川咲夜、十六夜の名はレミリアからもらったものだったのだ。

少年は元気付けようと声を掛け咲夜は次第に微笑む。

「ありがとう……私は大丈夫だから……」

姉を一番慕っていたのは咲夜であるためショックは大きかったのだ。

「うん、はい飴」

少年は飴玉を出し渡すともう一つあった飴玉を口に含む。

咲夜も口に飴玉を含み「美味しい」と言う。

だがそこで、異変は起こり始めていた、晴れていた空に黒い雲が被われ強い風は吹き、雨が降り、雷が鳴り始めすぐさま嵐となる。

「早く中に！」

二人は船内に入ろうとしたのだが目の前に杖を持ち額にΩの文字が描かれ牛みたいなアンノウンが現れたため中に入れず甲板に出たままになりだんだんと追い詰められ柵にぶつかり逃げられなくなる。

「人は人のままでいればいい」、そう吐くとアンノウンは二人を船から投げ出し、二人は海中に沈んでいくのだった。

◆◆◆

そして二人は気が付くと岸に打ち上げられていた、先に咲夜が起き、次に少年が、目の前に見えていたのは紅魔館だった。
空は暗く満月が浮かんでいた。

「あら、人間の子供が二人も」

そこで二人は出掛けようとしていたレミリアと爆睡中の美鈴と出会ったのだった。

「これが私達のお嬢様との出会い」

そして現在、ガルメとの戦いから次の日の紅魔館、中で咲夜がユウスケ、総、舜、キバーラに話していた。
霊夢と魔理沙は前に一度聞いた事があった。

「そして一緒に流れ着いて俺が見たのが……」
「十六夜咲一（いざよいしょういち）、私の双子の弟よ」

だがやはり疑問に思う事があった、なぜ咲一は姿を消したのかが気になった。

「それは……」

咲夜や霊夢、魔理沙はユウスケを見ていた、最初は「俺が原因？」と一瞬でも思ったが違った。

「クウガの姿が、似てるのよ……咲一がなる異形の姿に」

「クウガの姿に似た異形……アギトか」

クウガに似ている仮面ライダーと言えば仮面ライダーアギト、もしくはそれを模した仮面ライダーＧ３とＧ３－Ｘ、仮面ライダーガタックに仮面ライダー電王・ロッドフォームが今まで自分が見た中でクウガに似ている仮面ライダー、特徴は眼は赤で黄金の体に黄金の曲がりぐわいがいい角でユウスケはそれがアギトと判る。

「そしたら私達もクウガの世界にある幻想郷、だからクウガの世界の住人のはずなのになんでアギトに？」

「ライダー大戦があったからかな？」

ライダー組以外は首を傾げユウスケを疑問が込められた目で見つめた。

ライダー大戦とは、破壊者である仮面ライダーディケイドを全ての仮面ライダーが倒そうと起きた戦いだがディケイドにより全ての仮面ライダーは倒され、

が、仮面ライダーキバーラがディケイドを倒し全ての仮面ライダー、世界が元に戻り倒されたディケイドもユウスケやその仲間達により蘇ることに成功したとユウスケとキバーラは当事者として語る。

「それの影響がまだ残っているのか？」

総が言う事は当たりとも言えるが間違いでもある、クウガとアギトの世界はほとんど同じなのだ、クウガの世界でグロンギがクウガに倒された後、そこにアギトとアンノウンが現れ新たな物語に繋がる可能性もある、必然的にクウガの世界はアギトの世界になってしまう事もあるのだ。

「まぁアギトは超能力者の能力が進化してなれるものだからね、超能力者なんてどこの世界にもいそうだし」

だからどの世界の人間が超能力があればアギトになってしまう可能性もあるという事。

「私達は双子で時間を操る程度の能力を持っていた、だからかしら」

咲夜は懐中時計を見て呟く。

「だけど咲一だけは物を浮かばせる程度の能力と物事を予知する程度の能力があったわ、後者はお嬢様の運命を操る程度の能力に似ているのよね」

咲一が持つ時間を操る程度の能力以外は一般的に知られる超能力のサイコキネシスと予知能力と判断、十分アギトになってしまう可能性があった。

「これはもうアギトになる要素……もしかしたら咲夜もあるかもしれない、アギトに」

「私が……仮面ライダーに」

もし自分もアギトになっていたら弟はいなくならずに済んだのかもしれない、そう自分を責め始めていた。

「咲一はどこにいるのかしら」

そこで霊夢の口は開いた、居場所は誰にもわからない、咲夜でさえ、だが幻想郷にいるのは確かかもしれないと思っていると。

「彼はもう幻想郷にはいないわよ」

突然声が響いた、回りを見渡すが誰もいない、だが霊夢達には聞き慣れていた。

「紫（ゆかり）？」

すると目の前に空間に亀裂が入り出入口が現れる、中は無数の目が浮かんでおりそこから銀髪の女性が出てきた。

「はーい」

彼女の名は八雲紫（やくもゆかり）、幻想郷最古の妖怪で幻想郷を包む結界の管理者の一人。

◆◆◆

「咲一がいないってどういう事かしら?」

睨むように咲夜は紫を見て問う。

「文字どおり外の世界にいるのよ、彼は、私がスキマで送ってね」

紫は境を操る程度の能力を持ち先ほどの出入口のスキマもその能力で作ったもの。

「なんでそんな事したのよ」

霊夢もすごい目で睨んでいた、自分の想い人を遠くに遠ざけるような真似をしたため。

「もしこのまま幻想郷にいさせてもあなた達の前に戻るかしら?」

言われてみれば確かにそうだ、何度も会うが逃げられてしまう。

「なら一回外の世界に帰してから戻しましょ」

紅茶を飲みそう言う。

「なんでそれが咲一が戻ってくるのよ」

「彼は逃げるためだけではなく確かめに行ったのよ、姉の死の真相を」

もしかしたら自分のこの異形の姿と関係あるかもしれない、確かめるには外の世界に行くしかない、もし判れば自分達の元に帰るかもしれないと思い始めていた。

「だから……小野寺ユウスケ」

「はい！」

いきなり呼ばれ飛び跳ねるように返事をする。

「あなたも外の世界に行ってきて彼を手伝ってあげて、それがあなたの今のやるべき事よ」

なぜ紫はその事を知っていたかは知らない、やるべき事は各世界に到着した時に言う言葉だ、だが十六夜咲一を手伝う、それだけで理由は十分だった。

「わかりました、行きます」

快く了承した、外の世界には銃志郎も行く事に。

「あなたも行くわよね？」

だが咲夜は紅魔館の仕事があるのだが。

「いいわよ行っても」

レミリアは許してくれた、理由は咲一の料理が食べたいから、料理が上手いらしく味も天下一品らしい。

「ありがとうございます、お嬢様」

「霊夢も行ってもいいわよ？」
「え！？」

結界を管理するものの一人として幻想郷から離れていいのかと思ったが。

「その間は私達が支えるから」

霊夢がいない穴を紫が支える事で外の世界へ行く事が決定した。
外の世界にはユウスケ、総、銃志郎、霊夢、咲夜、魔理沙が行く事に。

「蒜、こっちは任せたぞ」
「任されたよ」

蒜は博麗神社で留守番となった。

「さて、スキマツアーに六名ご案内～」
「っていきなりかよ！」

そして寺子屋にいた銃志郎とこの場にいたユウスケ達はスキマで落とされたのだった。

第０８話『目覚めてしまった戦士の行方』（後書き）

次回から本格的にアギト編に突入！
長編ライダーは今のところは電王、キバ、オーズが有力候補です、
え？なぜキバが？電王とキバの組み合わせならわかりますよね？
悪の組織（仮）が……（笑）
後みてみんにある人に代理で自分が書いた小野寺ユウスケの絵を公開してもらっています、良かったら見てください。

次回予告

霊夢
「まったく紫の奴……いきなり落として……」

咲夜
「名前は木野星也、医者らしいのよ」

二条
「Ｇ３－Ｘ、出動します」

次回『クウガの世界のＧ３－Ｘ』

第０９話『クウガの世界のＧ３－Ｘ』（前書き）

Ｇ３ユニットの名前の由来はあとがきで。

第09話『クウガの世界のG3－X』

前回、咲夜はユウスケ達に自分の過去とレミリアとの出会いについて話し、そこで十六夜咲一という双子の弟がいたのが判る。
だが咲一はアギトに目覚め変わっていく自分に耐えれなくなり失踪、八雲紫が外の世界へ出したと教えられる。
そこでユウスケ達も外の世界に行くと決意、ユウスケ、総、銃志郎、霊夢、咲夜、魔理沙を紫はスキマで外の世界に連れていくのだった。

◆◆◆

「あたた～……大丈夫かみんな？」

どこかの墓地、ユウスケ達はそこの中に落ちてきたのだ。

「まったく紫の奴……いきなり落として……」
「一体何が……」

銃志郎はまったく把握していなかった、さしずめ何も知らされずにいきなり落とされたのだろう。
簡単に銃志郎にも説明すると幻想郷組はあることに気付いた。

「服が変わってる?」

霊夢は頭の紅いリボンや髪飾りはそのままだが服が変わっていた、巫女服ではないが紅いスカートに白いノースリーブの紅白な服装、魔理沙は帽子は無くなっており白いズボンに黒い服と言った格好で咲夜もメイド服ではなく白いワイシャツで紺のネクタイとスカートという格好に変わっていた。

「まぁあのままじゃ目立つからね、紫さんの計らいでしょ」

ユウスケはそう推測した、紫は結構はっちゃけているがこういうのはキチンとしている性格だったらしい。
咲夜は元々外の世界の人間だから着慣れているが霊夢と魔理沙は着慣れていないため珍しいという雰囲気だった。

「さて、咲一を探して咲奈さんの死の真相を確かめるぞ」

今回の目的は十六夜咲一の捜索と二人の姉、芦川咲奈の死の真相を探る、この二つである。

「いつもこの手紙だけは持ってるのよ」

そこで咲夜が咲奈から送られた手紙を出す、同じ文章を書いてそれを咲一が持っていると付け足す。

「手紙に姉さんの恋人の名前が書かれていたの」

手紙を広げるとそれを持って海に投げ出されたため字が滲んでいたがなんとか読めていた。

「名前は木野星也、医者らしいのよ手紙によると」

だが肝心な住所と所属している病院の名前は潰れていたため読めなかった。

「木野星也か……聞いた事があるような……」

ユウスケにはその名に聞き覚えがあった、なんとか思い出そうと頭をフルに回転させていたがそこで目に入った墓石があった。

「あっ……ここだったんだ」

考えるのをやめ止められるが思いのままある墓の前に立つ、そうここは八代藍が眠る墓がある墓地だったのだ、ユウスケは手を合わせて挨拶する、そこでみんなにここに前に話した八代が眠っていると教えた、咲夜と銃志郎は初耳だが大事な人だったと思い全員手を合わせた。

「さて、行くか」

【そうだな】

最後にゴウリュウガンが答え墓地を後にした、その後ろ姿を薄らした姿のコートを着た女性が見つめていたのを知らなかったがこの先知ることはないのかもしれない。

◆◆◆

ユウスケ達が現代入りしたその頃、警視庁の対未確認生命体対策班、通称ＳＡＵＬが所持する荷台に作戦室が設けられたらGトレーラーの中に三人の男女がＧ３－Ｘと呼ばれるパワードスーツの点検をしていた。

「二条くん、あなたは休んでいなさい、あなたが一番働いているんだから」

「ありがとうございます、野沢さん、俺は大丈夫ですから」

会話した三人の中の二人の男女は、最初に男性警官に話し掛けたのは野沢澄子（のざわすみこ）、Ｇ３－Ｘを開発した責任者、そして返したのは二条誠（にじょうまこと）、このパワードスーツを着て未確認生命体と戦う警官。

「そうですよ二条さん、休んで休んで」

「ではお言葉に甘えて」

野沢の言葉を後押しするように休むのを進めたのは小室次郎（おむろじろう）、Ｇトレーラーのオペレーターで究極の凡人の警官。

「二条くんは真面目過ぎるわよ、もう少し誰かを利用するように」

「利用って……言葉悪過ぎませんか野沢さん？」

結構言葉が悪いらしく利用とかという汚い言葉を平気で口にする。

「悪いかしら？」

威圧感たっぷりで小室に聞くが。

「いえ何も」

その威圧感で怯み退いてしまった、ここでは誰も野沢には逆らえないのだ。

だが野沢は一番活躍する二条には甘く小室には厳しいというか舎弟的な扱いをしており相手により態度は変わる。

だが一番態度が悪い相手がいた。

「おやこれはまたお山の大将を気取っているのですか野沢さん」

「あら？また来たの東条くん？」

そこに現れたのは部署は違うが捜査一課の東条透（とうじょう　とおる）だった。

野沢とは性格が近いのか口喧嘩が絶えず、それと二人はいわゆる天才でそれもあり喧嘩している。

「で、どんな用件？まさか嫌味を言うためだけに来たわけじゃないわよね？」

「まさか、あなたじゃあるまいしそんな幼稚な事は私はしませんよ」

二条と小室はまた始まったと思いながら二人の天才の小競り合いを見ていた。

「二条さん、そろそろお昼ですからいつものラーメン屋に」

「そうですね、終わらなそうですし」

二人はそーっとGトレーラーから出て天才達の小競り合いを放置す

るのだった。

◆◆◆

「これと言って手掛かりなしか」

ユウスケ達は木野星也なる人物の居場所を調べていたが成果はなく路頭に迷っていた。

「そいね……てか飛んじゃいけないなんて外の世界は不便ね」

「そうだぜ、飛んじゃえば移動楽なのに車って奴とバイク使わないと早く移動できないなんてな」

霊夢と魔理沙は主に空を飛んで移動するため飛べないのにイライラしていたが咲夜は普通だった。

「幻想郷には幻想郷のルールがあって外の世界には外の世界のルールがあるのよ、郷に行ったら郷に従えよ」

やはり外の世界出身は違かった、もちろんユウスケや総、銃志郎は違う世界と言えども外の世界から来たのには変わりなく普通だった。

「それにしても木野星也って奴の居どころが判らねーな」
魔理沙は手紙を取って文を睨むが咲夜に取り上げられた。
「無くされたら困るのよ、これしかもう手掛かりがないんだから」
手紙を折り畳みポケットにしまう。
「てかお腹空いたわね」
霊夢の言う通りもう12時は過ぎていた、全員腹に手を当てて空腹を確かめる素振りをするとやはり空腹だった。
「どこか食べに行こうか？お金は俺が幻想入りする前に持っていた残りがあるし口座も残ってるから」
と、ユウスケが昼食の代金を出すことになり近くのファーストフード店に入り食事を取る事に。
「何これ、すごく美味しいじゃない」
「外の世界じゃこんなうめぇーもんがあるんだな～」
ハンバーガーやフライドポテトをガツガツと食っていた、何分珍しいからだ。
「やはり俺達の世界と変わらないなゴウリュウガン」
【変わるとしたらあけぼの町があるかないかだ】
回りに気付かれないように会話をする銃志郎達、総も久しぶりなためこれを蕀にも食べさせようとテイクアウトを注文した。

「まぁ口座もあるから大丈夫か……」

なぜ天涯孤独のユウスケに口座が結構残っているかは八代がグロンギを倒してくれるからと振り込んでくれていた資金がまだ残っていたからだ。

（ありがとう……あねさん）

八代が他界してもなおまだまだ世話になり情けないなと思っていた。咲夜は外の世界にいた時、咲一と咲奈と一緒に食べたなと思い出していた。

（咲奈姉さん……何も姉孝行な事ができなかったわね）

何もお礼というお礼ができなかった事を悔やんでいたが今回の死の真相を探る事により最初で最後の姉孝行をしようと誓う咲夜、まず最初に弟を探そうと意気込みハンバーガーをがつりと豪快に食べる。

「咲夜、いい食べっぷりね」

あまり見れない豪快な咲夜を物珍しそうに見る二人。

「ハンバーガーって言うのはこうやって食べるものなのよ」

自慢気に言うのだった。

昼食を食べ終え再び木野星也の捜索を始める一同、医者なため病院のあちこちを回れば何か手掛かりが見つかるかと思い手分けをして探す事に。
ユウスケに霊夢、総に咲夜、銃志郎に魔理沙と二人一組で別れた。
まず始めに銃志郎達がすぐに病院を見付け中に入る事に。

「すみません、木野星也という医師をご存知ないでしょうか？」

銃志郎は警官のためもあるか丁寧な口調で聞き込む、だが看護婦は回りにいた医師達に聞いたが知らないと答え最後に魔理沙も釣られ一礼をしその病院を後にした、二人は小さな病院、大きな病気を問わずに探した。

「木野星也という方をご存知ではないでしょうか？」

総と咲夜は病院関係者だけではなく患者にも聞いて回った。

「すみません、木野星也さんというお医者様を知らないでしょうか？」

総がものすごく丁寧口調になり患者に聞くがやはり手掛かりは掴めない、これに苛立てる事なく総は聞き込む、かつていた組織で仕事はへそでするもの、納豆のように粘り強くと嫌っているが言っている事は正しい男の言葉を思い浮べながら聞き込みに回り。
そしてユウスケと霊夢は関東医大病院に訪れていた、ここは八代の友人が勤める病院でその医師とは少しだけ面識がある。

「すみません椿山さん」
「いいって」

医師の名前は椿山秀一（つばきやましゅういち）、八代の大学時代の同級生だ。

「いきなり行方不明になったって聞いたから少し心配してたよ」

「心配？」

少し驚いていた、まだ自分を心配してくれている人がいるとは思わなかったからだ。

「そうだぞ？お前の腹にはアレが埋まっているんだからな」

椿山もユウスケがクウガと知る数少ない人物の一人であり検査もよくしたものだった。

「はい……」

「それとそこの子は彼女か？」

「違います」

「違うわよ」

即否定した。

「だよな、お前は八代にゾッコンだったからな」

それを言われるとユウスケは浮かない表情となり言った本人は「悪い」と一言詫びを入れた。

「それで聞きたい事ってなんだ？」

本題に入った、木野星也なる人物の事を尋ねると椿山は少し苦い顔をした。

「未確認の被害者だな……聞いた事あるだろ?弟を庇ったがその庇った弟は死んでしまいその兄の右腕は潰されたって」
「はい、あります」
その頃自分を認めてもらうためだけに戦っていたユウスケ、だが今はみんなの笑顔を守るために戦っていた、そのまだ青い時のユウスケもその兄弟の事は知っていた。
「木野星也、すごい医者だったらしいよ」
椿山が使う診察室に案内され中に入りコーヒーと紅茶を貰う、霊夢は日本茶がいいなと思うがそこまでワガママ言うわけにもいかないため紅茶を飲む。
「だが未確認に右腕をやられて死んだ弟の右腕を移植、医学界はそんな木野星也に手術は不可能と判断し医師免許を剥奪」
それではどこの病院にも属していないため探し出すのは更に困難になる。
「だが闇医者として裏で活躍してる、移植された右腕でもこれまでのようにな、医学界も表には出してないが裏では失敗したと戒めてる」
話はこれで終わったかと思い立ち上がり去ろうとしたが。
「小野寺」
呼び止められある一枚のメモを渡された。

「これが木野星也の電話番号とメールアドレスに住所だ、何の用があるか知らないが渡しとくぞ」
「ありがとうございます」
最後に礼を言ってから二人は関東医大を後にした。

◆
◆
◆

その頃咲一はあまり手掛かりがないまま都会の中をさ迷っていた。
（何も手掛かりはなしか……これじゃ外に出た意味がないじゃないか）
時間も遅くなり夕日が見えていた。
人気がない路地裏に入ると殺気を感じ振り向くとそこには豹に似た青い体で剣を持つジャガーロードのパンテラス・キュアネウスと剣を持ち赤い体の豹の怪人パンテラス・ルベオーが戻る道を塞いだ。
「アンノウン……！」
なぜ幻想郷にいた咲一がアンノウンという呼び名を知っているかは

こちら側に来た時捨てられた新聞を読んで名前を。
そして前をクイーンジャガーロードの黒豹で杖を持つ女性体格のパンテラス・マギストラが行く手を塞ぐ。

「囲まれたか……」

左手を拳にし曲げて後ろへ引くと右手を左に向け前に伸ばしそして引いて指が上を向くように腕を曲げると腰にオルタリングが現れゆっくり前へと伸ばす。

「変身！」と叫ぶと自身が嫌うが生きるためにはならないといけない姿、仮面ライダーアギト・グランドフォームに変身するがすぐにオルタリングの左側のスイッチを押し左肩は青と金の防具に変わり鎧も青くなりストームフォームに変身、賢者の石から黒く両方の杖先が金色の飾りが付いた棒常の武器を持つと飾りはスライドし展開、刃となり杖も長くなり青い模様も見えたストームハルバードを手に持つ。

ストームフォームは素早く動ける超精神の姿で使いやすいフォームなのだ。

ジャガーロード達は唸りながら走りだし剣を構え襲い掛かるがリーチの長いストームハルバードで剣を受け止められ蹴りの逆襲を受ける。

「フッ！」

背後からマギストラが杖で攻撃してくるが杖を右手で掴みストームハルバードで斬ろうとするが避けられる。

「ハッ」

この狭い路地裏では思うように戦えない、そう感じると高くジャン

プし建物の屋上に、ジャガーロード達も屋上に立ち夕日を背にし戦う。

◆◆◆

「確かこの先だよこの住所は」

ユウスケ達は合流し椿山から教えてもらった住所を見て道を歩いているとパトカーが何台も道路を通過していった。

「慌ただしいな……」

電気屋のテレビでニュース番組がやっておりそれを見るとアンノウンが現れたと報道されていた。

「アンノウン……やっぱりこの世界に……」

見過ごすわけにはいかない、それを悟っていたのか咲夜はユウスケに行くように勧める。

「わかった……じゃあおっさん」

「おっさんじゃない」

「メモ渡すから後よろしく、総、行くよ」
「ああ」

後は銃志郎に任せユウスケと総はパトカーの後を走って追った。

「ゴウリュウガン、ナビ頼むな」
【了解】

銃志郎はゴウリュウガンにメモ用紙に書かれていたものを見せると途中で拝借した地図と一緒に読み込ませる。

「ゴウリュウガンすげーな、威力だけじゃなくてそんな事も」
「俺の相棒だから当然さ」

会話しているとすぐにゴウリュウガンは覚え四人を木野星也の自宅までナビゲートを始めた。

そしてパトカーが向かう現場には黄色い豹のジャガーロードのパンテラス・ルテウスと雪豹の弓を持つパンテラス・アルビュス、黒豹の槍を持つパンテラス・トリスティスが警官隊と交戦していた。

「射て射て！」

リーダーらしき人物が指示し敵を発砲し攻撃するが効果はあまりなく追い込まれていたがそこにサイレンと共に白バイが走ってきた、それに乗るのは青い装甲に腰に赤く光るゲージが付いたベルトが巻

かれ赤い二つの眼に銀色の三本に別れた角が付いた仮面ライダーＧ３－Ｘが到着し降りてサブマシンガン、ＧＭ－０１スコーピオンを発砲し食い止める。

「早く退避を！」

Ｇ３－Ｘを装着しているのは二条であった、Ｇ３－Ｘは警官隊を退避するように促しながらジャガーロード達を攻撃していく。
Ｇ３－Ｘは三対一では接近戦は危険と判断、ＧＭ－０１で距離を取りながら戦っていく。

「フゥッ！」

アルビュスが弓矢を放つと電磁コンバットナイフ、ＧＫ－０６ユニコーンを使い切り払いをすると止まっていたアルビュスに弾丸を打ち込んでいき距離を保つ。

「拉致が開かないな……」

白バイのガードチェイサーを見て後部に搭載されていた黒く四角い武器をチラっと見る。
そして再びＧＭ－０１の引き金を引き銃声を響かせていく。
そこにユウスケと総が到着。

「アレはＧ３－Ｘ！まさか完成していたなんて！」

戻って来た頃はまだその発展前のＧ３だったのが強化後のＧ３－Ｘというのに驚きを隠せなかったが。

「兄貴、取り敢えずあのライダーの加勢しようぜ」

「そうだな」

ホッパーゼクターが跳ねて来て腰にアークルが現れ「変身！」と同時に叫びユウスケはクウガ・マイティフォーム、総はキックホッパーに変身しＧ３－Ｘに加勢しジャガーロードに挑む。

「第４号！？」

クウガは未確認生命体第４号で扱われておりＧ３－Ｘは姿を消していたクウガが現れたのに驚きを隠せなかった。

「それとあっちは……」

キックホッパーは見た事がないため動揺していた。

「野沢さん、第４号が目の前に……」

【見えているわ】

Ｇトレーラーの作戦室からＧ３－Ｘのカメラを通し現場の映像が映し出されていた。

「まさか第１０号と一緒に消えたと思っていた第４号がね……」

第１０号とはこの世界でのディケイドの名前で通っている。

「大丈夫です、俺達は味方です」

「喋った……！？」

驚く素振りを見せているとクウガとキックホッパーはトリスティスとルテウスに接近戦を挑む。

「ハッオリャーッ！」

トリスティスの槍による攻撃を掻い潜りながらパンチ連続で食らわしていくクウガ。

「フッハッ！」

キックホッパーは手を使わず名の通りキックでルテウスを追い込んでいく。

「すごい……」

Ｇ３－Ｘは二人の戦いを感心しながら見ているとアルビュスが弓矢で攻撃してきた、それを後退しながら避けガードチェイサーに固定された武器をＧトレーラーが固定を解除、それの１２３のボタンを１、３、２と押し隣の大きなボタンを押すと【解除シマス】と電子音声が響き武器は巨大なガトリング、ＧＸ－０５ケロベロスに変形する。

アルビュスは弓矢を放つが腕で払われ銃口を向け引き金を引くと銃口は火を吹き弾丸は放たれていきその弾丸はアルビュスの腹部に浴びせていく。

「ウガガガガッ！！！！！？」

腹部から火花が散りアルビュスは頭に光の輪が現れ爆死した。

「ライダージャンプ！」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ】

ライダージャンプをしキックホッパーは高く飛び上がると。

「ライダーキック！」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｋｉｃｋ】

飛び上がりその落下の勢いを利用、更にタキオン粒子のエネルギーを貯めた足で放つライダーキックをルテウスに炸裂し倒すと。

「超変身！」

クウガはトリスティスの槍を掴んだままドラゴンフォームに変身、槍はドラゴンロッドに変わり腕を引いてからドラゴンロッドでトリスティスの胸を突きスプラッシュドラゴンを繰り出す、封印のマークと光の輪が現れるとドラゴンロッドで軽く押しトリスティスは後退り爆死した。

「ふぅ……」

二人はその場を立ち去ろうとしたが目の前にＧトレーラーが停車し行く手を阻まれた、当然だろう、クウガも未確認扱い、キックホッパーも新たな未確認として見られているのだろうと。

作戦室から野沢が降りてくるとＧ３－Ｘも仮面を外し素顔を露出させる。

「ちょっと話、聞かせてもらっていいかしら？」

仕方ない、面倒な事は起こしたくないと考え変身を解除しＧトレーラーに入った。

◆◆◆

アギトに変身しクイーンジャガーロード達と戦う咲一は苦戦を強いられていた。

「くっ……」

ストームハルバードを落とし屋上から地上に降りていた。
目の前にキュアネウスとルベオーが立ち剣を振り上げていた、ここで終わりかと思ったその時、一台の緑色のバイクが突撃し二体を跳ね飛ばした。

「っ！」

アギトは驚愕した、バイク、ダークホッパーに乗ったものが自分によく似ているが姿は生物感が溢れ小さく常に展開されたクロスホーンに牙も生えておりオレンジの二枚の羽根のようなマフラーが目立つ、アナザーアギトが乗っていたからだ。
アナザーアギトはダークホッパーから降り「大丈夫か？」と問い頷き返すと「わかった」と言い両腕を曲げ右腕は拳が上に向くように、左腕は後ろに引く構えを取ると走りだしジャガーロードに立ち向かう、圧倒的だった、アナザーアギトはキュアネウスとルベオーに攻撃の隙を作らせず接近戦だけで追い込んでいく。

「今だ」
「は、はい！」

ストームハルバードを持つと走りだしアナザーアギトは離れるとアギトは必殺技ハルバードスピンでジャガーロード達を横に一閃、ジャガーロード達は光の輪を出し爆死するとマギストラは逃げようとしていたが前にアナザーアギトが立ちはだかり先ほどの構えの前に腹部の前で腕を交差させてから構えると牙が上がり足下に緑色に輝くアギトの紋章が現れ吸収されていくとマフラーが羽根が羽ばたくように上がるとジャンプし。

「ハッ！」

必殺キックであるアサルトキックを放ちマギストラに浴びせる。マギストラは最初は平気な素振りを見せていたが胸に手を当ててから爆死倒された。

「あなたは……」

アギトは変身を解くとアナザーアギトも変身を解く。

「私は……木野星也」
「あなたが！？」

まさか自分が探していた人物も異形の姿になっていたとは思いもよらなかった。

「君は？」

名前を問われ答えようと口を開く。

「俺は十六夜咲一……いや、芦川咲一です」

「君が……！」

十六夜の名字ではピンとは来なかったが芦川の名字で自分と関係がある人物と判断した。

「君が……咲奈の……ここではアレだ、近くの喫茶店でお茶を飲みながら話そう」

咲一は木野に誘われその場を後にした。

◆◆◆

そして咲一が木野と会ったのを知らない霊夢と咲夜達の四人は木野邸の前に来て門の前に立って住所を確かめここだと判断、インターホンを押そうとしていたが。

「そこで何している？」

赤いバイクに乗った青年が現れた、青年はゴーグルとヘルメットを

取り素顔を露に、髪の毛は茶髪っぽく目付きは鋭かった。

「私達木野星也さんという方に用があって来たものです」

用件を聞くと青年はバイクから降り押して門の前に立ち開く。

「入れ、俺はここの住人の一人だ」

「そうですか、お名前は？」

「葦原（あしはら）涼二（りょうじ）だ」

第０９話『クウガの世界のＧ３－Ｘ』（後書き）

二条誠、一条さんに一を足して氷川さんの名前を付けた。
野沢澄子、小沢さんを野に。
小室隆弘、文字変えただけ。
東条透、北を東に。
葦原涼二、文字足しただけ。
木野星也、これはリリマテでも……ゲフンゲフン。
感想待ってます、もしかしたらこれが最後かも……Ｔ○Ｐがェ……

次回『仮面ライダーになってしまったもの達』

第１０話『仮面ライダーになってしまったもの達』（前書き）

因みにこの長編の名前は「再会！プロジェクト・アギト！」という名前ですので名前にちなんだあのライダーも。

第１０話『仮面ライダーになってしまったもの達』

前回、外の世界にやってきたユウスケ、総、銃志郎、霊夢、魔理沙、咲夜の六人。
咲一は姉の死の手掛かりとなる人物、木野星也と出会う、ユウスケと総はアンノウンが現れた現場に行き二条誠が装着するＧ３－Ｘと共同しアンノウンを倒しＧトレーラーに誘われる。
そして残った銃志郎、霊夢、魔理沙、咲夜の四人は木野邸に到着すると葦原涼二なる青年と出会うのだった。

◆
◆
◆

「木野なら今は出掛けているはずだ、どこかの病院でオペしているはずだ」

闇医者というのは聞いていたためそういう事もあると思いながら出された緑茶を飲む、霊夢は嬉しそうに飲んでいた。

「どう言った用件だ？」

今回訪れた理由を話すと葦原は少し考え。

「帰ってくるまで待っていればいいさ」

リビングに四人を残し別室に移動していった。

「無愛想だなアイツ」

「そうね」

三人には無愛想な青年としか見えていなかったが銃志郎の目には「何かを無くして藻掻いているような」青年と写っていた。

（アイツの目、深い悲しみが見えたな）

夜も遅く欠けた月が夜空に浮かんでいた、ユウスケ達が帰って来ないと思いつつ葦原の許可を取り夕飯を自炊する事に。

「何よこれ」

霊夢の手にはインスタントの焼きそばとカップラーメンが握られていた。

「それはインスタント焼きそばとカップラーメンね」

咲夜は魔理沙と一緒にそれらの作り方を教えていた。

「そんな簡単に……」

「野菜もあるし焼きそばと卵焼きを作りましょ」

三人は調理を始めた、そして数分経ち焼きそばはできる。

「お、簡単で美味いなこれ」
「そうね」

本当に美味しそうに焼きそばをすする二人。

「焼きそばでここまで……」

銃志郎はジトーした目で見ていたが確かに焼きそばは美味しいため深くは突っ込まなかった。

「作る奴が違うだけで味は変わるんだな」

葦原も食べており感心していた。

ユウスケ達はGトレーラーから場所が変わり焼肉屋で夕飯を食べていた。

「あなたみたいな若者が4号だったなんて、思いもよらなかったわ……生お代わり」

野沢は焼けた肉を頬張りながら生ビールをガツガツ飲みお代わりと繰り返していた。

「そうですか……」
「後別の世界ね……あの10号も別の世界のものなら説明がつくわ……生お代わり」

「士か」と小声で呟きながら焼けた肉を食べていくユウスケ、肉の焼き加減は総が見ていた。

「これ焼けてますよ」

「気が利くわね……生お代わり」

その肉をガツガツ食べていく野沢はまた生ビールをお代わりする。

「光栄です、まさかグロンギを倒した第４号、クウガに会えるなんて」

「グロンギを倒せたのは俺の力だけじゃないですよ」

烏龍茶を飲みつつ二条に返す。

小室は会話に入れず総が焼いていき焼けた肉をこっそりと食べていた。

「もう一度聞くけどあなた達は知り合いの姉の芦川咲奈の死の真相を確かめるべくこちら側に来て木野星也なる人物に会おうとしていたのね……生お代わり」

幻想郷の事は口外しないのを条件に教え目的を教えていた。

「はい、どうしても真相を知りたいんです」

「他人の事に一生懸命になれるなんて、思った通りの人物だったわ、４号は……生お代わり」

野沢の言葉は胸に深く突き刺さった、他人の事に一生懸命になれる、最初、グロンギと戦っていた時は自分のためだけに戦っていたのに、複雑だった。

「後で警視庁のデータベースを見てみましょう、芦川咲奈の事件が載っているかもしれないわ……生お代わり」
「よろしくお願いします」
深々と頭を下げてまた肉を食べていく。

一方咲一と木野は喫茶店で和風たらこスパゲティを食していた。
「遠慮なく食べてくれ、私のおごりだ」
「いただきます」
食事を終えてからコーヒーで一息吐きながら会話を始める。
「咲奈との出会いは彼女が私の病院に研修で来た時だった……」
芦川咲奈は看護婦になるために東京に上京、その間咲一と咲夜は両親が残した貯金や近所の人達の協力があった、咲奈は看護婦になるのを諦めていたが双子や近所の人達が背中を押してくれたおかげで大学行くのを決意し上京したのだ。
「研修先の病院で木野さんと」
「ああ、彼女は優しく思いやりがある人だった」
「はい、いつも姉さんの世話になってました俺達」
その後は研修期間を終えて正式な看護婦となり木野が当時勤めてい

た病院に就職、それから関係は発展していき恋の仲に。

「彼女が双子の姉弟がいると聞いた時、私が君達をこちらに来させ一緒に暮らそうと言ったのだが……咲奈はそれを躊躇った」

咲一にも超能力があれば血が繋がってるため姉の咲奈にもあっておかしくない、木野も超能力があると知っていたが信じたくなかった、その能力は予知能力、先の未来が見えるというもの。

だが咲奈は折れ二人に手紙を送った途端に事故で死亡しあかつき号に乗り海難事故に会い海に投げ出され幻想入りをしてしまった。

「まさか本当になるなんて思わなかった、咲奈が死に、君達は幻想の地に辿り着くなんて」

咲奈はそこまで予知していたのだ、まるで運命を知っていたかのように。

「……木野さん、なぜあなたはあの姿になって戦っていられるんですか？」

自身はアギトの姿を嫌っている、だが木野は躊躇わずその姿、自分より更に異形な姿をしたアナザーアギトとなり戦っているのかが。

「それは……確かに嫌だ、あの姿は」

「でしたら！」

「だが、もうあんな悲しみを繰り返したくないんだ……俺は二人の大切なものを失った」

感情が高ぶったのか、私から俺と変わっていた。

二人とは最初は咲奈、そして弟の事だろう。

「もう失いたくない、だから俺はあの姿で戦うんだ、誰かが大切なものを亡くし居場所が無くなるのを見たくないから」
「居場所が……無くなるのを……」

「ああ」と返しコーヒーを飲み切ると携帯に着信が入り通話に出る、用件を聞くと通話を切り携帯をしまう。

「俺の家に君の姉と恋人が来ているらしい」
「咲夜と霊夢が……！」

驚いた、まさかここまで追い掛けてくるとは思わなかったからだ。

「君は、俺と同じ過ちを繰り返すなよ、咲奈を守り切れず、未確認の事件で弟を失った俺みたいに」
「……」

「はい」とはまだ返せなかった、アギトの姿を認めていないからだ、木野も承知していた、もう少し時間が必要だと。

「今日は俺の別宅に泊まるといい、まだ会える覚悟ができていないだろう？」

咲一は静かに頷くと会計を済ませてから二人は別宅に向かうのだった。

◆◆◆

Gトレーラーの作戦室、過去の事件のデータベースを見ていた。
一覧を眺めていると数年前に起きたあかつき号の海難事故と芦川咲奈の事故の事が記載されていた。

「これか……あかつき号の事は咲夜からだいたい聞いているから……芦川咲奈さんの事故だな」

事故の詳しい詳細を調べ当時の現場の現状や場所、死因等を見ていたが何かおかしかった。

「死因は爆発の衝撃に巻き込まれ全身打撲と火傷、脳の損傷による死亡……現場は……自然公園の中！？」

まずはあり得なかった、爆発は埋められていた爆破装置によるものと、だがその装置の破片は見付からず、目撃者によると何か宙に紋章が現れ落ちてきて爆発したと証言したが警察は非現実的と言いありもしなかった爆破装置を原因としてそのありもしない犯人を追い続けていたと。

「当時は未確認も出ていなかったから非現実的な事故はほとんどそんな風に片付けられていたのよ」

グロンギが現れるようになってからそういう事件や事故もちゃんと調べられるようになったらしい。

「私はこれをアンノウンの最初の犯行だと思っているわ、人間が進化して力を付けないようにするための、彼等はグロンギが暴れていた頃、影からグロンギを殺害していたと思っているわ」

アンノウンが現れ始め似たような犯行がないか過去の資料を調べた野沢の結論だった。

「この頃から……俺のこの世界でのやるべき事はまだ終わっていなかったのか……！」

拳を震わせ悔しさを露にしていた。
だが野沢はまだ気にしている事があった。

（この前自衛隊から研修に来た深見理沙も気になるわ、調べたら自衛隊の名簿に彼女の名前はなかった、一体……）

前にＳＡＬＵに深見理沙という自衛隊員が研修に来たのだが一週間弱でやめ姿を消し自衛隊の隊員名簿には彼女の名前はなかったらしい。

木野の本宅では葦原に咲夜達は詳しく目的を話していた。

「姉の死の真相か……それを調べるためにわざわざな」

幻想郷の事は話しておらず遠くから来た事にしていた。

「そしてその真相を調べるために姿を消した弟が先にか」
「ええ……」
すると葦原は何かを感じたのか出掛けると言い外へ、霊夢と咲夜は気になり後を追うとそこにはステンドグラスの体で全身を硬質な甲羅で被い腕に盾のような亀の甲羅が付いたトータスファンガイアが人間を襲っていた。
「アンノウンじゃない……！」
なず葦原はアンノウンではなくファンガイアの気配を察したか理解どころか相手の種族もわかっていなかった。
「ファンガイア！」
だが咲夜は一度ファンガイアを見た事があるためその名を叫ぶ。
「知っているのか？」
「ええ……まぁ」
トータスファンガイアは三人に気付き突進してくる、巨体には似合わないスピードで迫りくる、もしあの硬質な甲羅に激突したら一溜まりもない、葦原は横にサイドステップで避け咲夜は懐中時計を出しスイッチ押すと霊夢といつの間にかトータスファンガイアの背後に。
「今のは……！？」
「説明は後よ、人はいないから存分に戦えるわね咲夜」
「ええ」

霊夢は札を出し、咲夜はナイフを出し戦う素振りを見せる。

「お前達は逃げろ、ここは俺が！」

腕を顔の前で交差し「変身！」と叫ぶと緑色のカミキリムシのような姿に、赤い眼にクウガのように二本に分かれた緑色の角に牙が付いた口に胸に黄色いワイズマンモノリスという賢者の石が付きベルトは赤く綱のように赤い触手が体に巻かれている仮面ライダーエクシードギルスに変身した。

「アギト……いや違う」

エクシードギルスもアギトの力を持つ仮面ライダーだが少し怪人寄りの姿だった。

「ガアァァァッ！」

エクシードギルスは両腕から赤い鋭い爪エクシードクロウが伸びると走りだしトータスファンガイアに立ち向かう。

「ハアァァッ！」

エクシードクロウで切り裂いていくが傷一つ付かず咲夜もナイフを投げ付けるが硬質な甲羅に弾かれてしまう。

「効かない……」

霊夢は人がいないのをいい事に札と弾幕を放つがトータスファンガイアは硬い甲羅で防ぎ切る。

「くっ……！」

トータスファンガイアはエクシードギルスを体当たりで吹き飛ばすと更にのしかかろうと倒れてきたがすれすれの所で宙に静止する、背中から生えた赤い触手ギルススティンガーがトータスファンガイアを捕らえ拘束していたからだ、エクシードギルスは立ち上がり何回も高く上げて力を抜いて落としたりとしてトータスファンガイアを地面に叩き付けていく。

「ウガァァァァァァッ！！！！！！！！」

獣のように吠えながらその行為を何回も繰り返す、特殊能力がほとんどないトータスファンガイアには為す術はなくされるがままだった、そして腹部の甲羅に罅が入ると。

「今だ！」
「「ええ！」」

咲夜のナイフと霊夢の札が一直線に罅が入った甲羅に向かっていき命中すると大きな罅が入りエクシードギルスはトドメとエクシードクロウで突き刺し甲羅は砕け散るとギルススティンガーが横に向け宙に釣り上げられ踵にエクシードヒールクロウという刃が生えるとジャンプし右足を高く上げて。

「ハアァァァァァーッ！！！！！！！！」

そして踵落としを炸裂しエクシードヒールクロウを腹部に直に突き刺す。

「ギャァァァァーッ！！！！！！！！？」

トータスファンガイアは断末魔を上げ砕け散り倒された。

「今のはなんだったんだ……それにお前達も」

エクシードギルスは変身を解除し二人を見るのだった。

第１０話『仮面ライダーになってしまったもの達』（後書き）

Ｇ４フラグは即に立っていた……立っていたんです。
因みに豹、亀、と来たのはＶ３とアギトの怪人順で次回は蛇ですが……ヤバイ蛇が、あ〝ぁ～……祭りの場所はここかぁ～……サバじゃない！（笑）
ギルスはエクシードで行こうと思います。

次回『Ｇ４システム』

第11話『G4システム』（前書き）

今回はイチャイチャしています、すごくイチャイチャ。
後最初だけの泥棒が。

第11話『G4システム』

前回、ユウスケと総はGトレーラーで芦川咲奈の死に疑問を抱きアンノウンによる犯行と確信する。
咲一は木野の戦う理由とアギトの姿の受け止め方を聞き考えを改める。
そして霊夢と咲夜は葦原が変身したエクシードギルスと共同しトータスファンガイアを倒すのだった。

◆◆◆

まだ夜が明けない時間の真っ暗な東京タワーの展望台の屋上に一人の青年が立っていた。

「小野寺くんのクウガの世界、いや、クウガとアギトの世界、いったいどんなお宝があるのだろうか」

青年がにやりと笑うと屋上から鉄骨に着地しつつ地上へ向かい飛び降りていくのだった。

夜が明けて外の世界での二日目を迎えていた。

「う〜……胃がもたれ……」

Gトレーラーの作戦室、ユウスケと総はここで寝ていたが昨夜の焼き肉を食べ過ぎたため胃がもたれており腹を押さえ苦しんでいた。

「兄貴……軽く十皿食ってたからな」

総はそれほど食べておらず平気だった、立ち上がったと同時に二条が作戦室に訪れてきた。

「二条さん、おはようございます」

「おはようございます」

二人は背伸びして体を解していた。

「よく寝れましたか？」

「ええ布団があったので……それと二条さんの方が年上なんですから敬語じゃなくていいですよ」

それからコーヒーを用意してもらい後の二人が来るのを待つ事に。

「二条さんはなんでG3－Xの装着者に？」

「俺は……新米だった頃、あかつき号の海難事故を目撃してその乗客を助けた事により上層部から……だが、二人取り残していたとは……不覚だった」

咲一と咲夜を救出できていなかった事に悔しさを露にしていたが。

「二条さん、その事をバネして頑張ればいいんです！」

「小野寺……そうだな」

その後、野沢と小室がやってきてGトレーラーは発車する、Gトレーラーの一日は都内を走り回っており燃料もソーラー発電のためほぼ無限である。

「一日中走り回っているんだ」

「そうよ、いつでもガードチェイサーを発進できるようにね」

ユウスケは外のカメラの映像をモニターで見ていると警官に取り締まられていたバイクを押した女性が一瞬映り。

「あ！野沢さん！停めて！」

「え？」

Gトレーラーを停車させるとユウスケは降りて走っていた道を逆走すると先ほどの警官と女性が見えた、ユウスケの目に止まったのは女性とバイクだったのだ。

「幽香さーん」

「やっと見付けたわ」

その女性は風見幽香だった、幽香が押していたのはトライチェイサーだったのだ。

「知り合いですか？彼女無免許でバイク押していたので取り調べし

ていたのですが……」

何となくわかった、見ず知らずの人間に止められる筋合いないから何も答えずにただイライラしていただけなのだろうとな。

「すみません、バイク持ってきてって頼んだのは俺なんです」

適当に誤魔化して警官には引き取ってもらいGトレーラーに一緒に戻った。

「なんでこっちにいたんですか？」

「それは今朝の事よ」

～回想～

「いい朝ね」

幽香は朝早く起きて太陽の畑を朝日を浴びながら散歩していた。

彼女は一年中花に囲まれて暮らしており主な活動場所は幻想郷の奥地にあるこの太陽の畑である。

花がある場所をゆらりぶらりと歩き回りよく博麗神社にも出没している。

気持ち良さそうに歩いていると行く先の宙に亀裂が入るとスキマが開かれ中から。

「あら紫じゃない、珍しいわね朝早く」
「おはよう、幽香」

紫が出てきた、いつもなら寝ているはずなのだが、スキマから出ると更にスキマは広がり中からトライチェイサーが出てきた。

「それ、ユウスケのじゃない」
「そーよ、これとアレを外の世界に連れていってユウスケに渡して欲しいのよ」

空にはゴウラムが飛んでいた、ただ物運びを頼むためにここに来たのだ、幽香は拒否しようとしたがあのユウスケ達を外の世界にいきなり送り込むような性格している紫が答えを聞くわけなく。

「じゃあよろしくね～」
「ちょっとま……」

幽香はスキマに落とされトライチェイサーとゴウラムをスキマに入れていった。

～回想終了～

「というわけよ」

ユウスケは苦笑いだが総は「俺にはないのか」と思っていた。

「まったく……気持ちがいい朝だったのに」

すごく機嫌が悪そうで何か機嫌を損ねる事があったら自分が危ない、触らぬ神に祟りなし、そう思いながら苦笑し続けた。

「外の世界に来た瞬間バイク押してただけで人間には絡まれるし」

いつ終わるかわからない愚痴を延々と聞き機嫌損ねないように気を付けていた。

「だからユウスケ、虐めなさせなさい」

「却下！」

最終的にはそういう結果となりそれはやはり却下となった。

◆◆◆

「そうか……ああ……」

木野の本宅で葦原は電話で通話しており通話を切る。

「木野から連絡があった、十六夜咲一は今木野といる」

それを聞き一安心する咲夜と霊夢達。

「……贅沢だな、お前の弟は」

「どういう意味？」

突然の言葉だった、葦原はソファーに座り前屈みとなる。

「心配してくれる恋人や姉弟がいるのにな……俺が失ったものを持っているのに」

「失ったもの？」

「ああ……父親、恋人、恩師、みんな俺がギルスになって離れていった、異形の姿を恐れて、だから俺は異形の姿を認め戦う事にした、それから木野と出会い孤独から少し解放された」

自分の過去について語っていく葦原、銃志郎はやはりと思いながら聞いていた、瞳の奥に宿る悲しみ話察していたからだ。

「……ねぇ、今から言うものを買ってきてくれない？」

霊夢は葦原に頼み事をするのを決めたのだった。

◆◆◆

「さてユウスケ、少し案内してくれない？」

興味があったからか、ユウスケに案内を求める幽香。

「えー……」

嫌がるが選択する権利はない、そう思い了承する事に。

「小野寺くん、何かあったらトライチェイサーの無線機で連絡しなさい、それは元々警察のものなんだから」

「わかりました」

ユウスケと幽香は作戦室からトライチェイサーも一緒に降りるとGトレーラーは走り去る。

「まったくはこっちだな～……」

「何か文句あるのかしら？」

胸ぐらを掴みまるで脅すかのように更に素晴らしい笑顔で問い詰める。

「な、何もありません……」

逆らう事はできなかった、逆らったら幻想郷に行けなそうだった、もし行ったら何されるかわからないからだ。

「じゃあ行きましょ？」

「てか……こんな事してていいのかな……」

不安だったがもう目的はほぼ達成しているのと同じなためそれぞれ思い思いの時間を過ごしていたため大丈夫だろう。

（まぁいっか）

ユウスケはヘルメットを渡して一緒にトライチェイサーに乗り走りだした。

「どこ行きたいですか？」

「花がある所」

やっぱりそう来ると思い、頭に浮かんでいた場所へ向け走りだす。

「着きましたよ」

バイクを飛ばして到着した場所は都内郊外にある植物園だった、ここは気温等を調整し一年中四季の花を楽しめるのに有名だった。

「こんな所に花があるの？」

敷地内は建物ばかりのため疑問に思うが「着いてくればわかりますよ」とユウスケは植物園の中に入って行く。

「まずは春からですね」

二人が最初に入ったのは春の棟と呼ばれる建物の中だった。

「桜……」

建物内は外のような一本道が続いており左右に桜の木が並んで生えており枝には花が満開だった。

「ここは気温とか調整していて夏なのに春の花が見れたりするんですよ」

「ふーん、この私に無理矢理咲かした花を見せるの」

「えーっ！？」

幽香は季節感にはうるさくその季節にはその季節の花を楽しむため無理矢理咲かした花とかはあまり好きではないらしい。

「……まぁいいわ、こっちじゃあなたが一番詳しい、あなたの案内に着いていくわよ」

「はい」

桜の花びらが散る中、二人は一本道を並んで歩いていた。

「外の世界はすごいわね、気温も操るなんて」

「そうですか？」

「ええ、こうやって四季の花を咲かして楽しめるようにできるのだから」

隣を歩き桜に見惚れている横顔の幽香を見て「来てよかった」と思っているとその横顔のまま微笑んでおり更によかったと感じていた。道を歩くと次の棟に入る前に職員に長靴とカッパとビニール傘を配布されそれを着て梅雨の棟に入ると中は雨が降っていた、天井から水を撒くような感じだったが降り方は工夫してありちゃんと雨だった。

「梅雨ですね」
「梅雨ね、梅雨と言えば」

やはりここも一本道、その左右にはあじさいが咲いていた、なぜ雨なのかは雨とあじさいは昔からセットというイメージが強いからだ。

「ほどいいぐらいの雨だしこれはいいわね」

長靴のためびちゃびちゃと音が立ちながら歩きあじさいに顔を近付けじっくりと見ていた。

「転ばないでくださいよ」
「私を誰だと思っているのかしら?」

「私は四季のフラワーマスターよ」と言おうとしていたのだが「フ」の所で途切れて。

「えっ……ひゃっ!」

ユウスケが言う通り滑って転びこのままでは床、泥の上に倒れてし

まいそうになったが。

「おっと……っと……」

そこでユウスケは倒れそうな幽香を支えるのだが、自分も足を滑らせ。

「うわぁっ!?」

転倒して泥の上に倒れ傘はその際手放し宙に舞って泥水が跳ね二人に降り掛かる。

「ユ・ウ・ス・ケ～♪」

「はい！」

笑顔だった、素晴らしい笑顔だったが目は笑っていなかった、めちゃくちゃ怒っていた。

「どうしてくれるのかしら?私、泥まみれよ?」

「あっと……えっと……」

対応に困っていると回りからクスクス笑い声が、「だいたんね」とか「若いな」とか「わしも後何年」とか聞こえていた、改め自分達の今の体勢を見る、それはユウスケの上に幽香が倒れこんでいる、幽香がユウスケを押し倒したような体勢になっていたからだ。

「「あ……」」

一瞬固まると「カシャッ」と音が聞こえた。

「一枚撮らせていただきました」

立ち上がり梅雨の棟の出口と次のブースへ繋がる通路に更衣室や脱衣場があり軽く洗濯もできたためここで用意された衣服に着替え通路に出ると職員が「これ、先ほどの写真です」と先のアクシデントの写真を見せた、ここではこのようなアクシデントが多いため写真を撮りそのカップルに配っているらしい。

二人は流れのままカップルという事にされ写真を受け取り先の行為を思い出し顔を赤くしていた。

「……ユウスケ」

「はい！」

「帰ったら覚悟できているわよね？」

「もちろん！」

死んだな、と思い次の夏の棟に入るとその名の通り夏の気温で咲いていたのは太陽の畑でもお馴染みの。

「向日葵ね……」

向日葵だった、太陽の畑ほどのものではないが一面に広がっていた。

「やっぱ幽香さんは向日葵が一番好きかな？」

「当たり前よ、だからあんな奥地で活動しているんじゃない」

やはり自分が好きな花があるからなのか、嬉しそうでさっきまでの機嫌が悪い雰囲気ではなくなっていた。

「よかった……機嫌良くなった」

「いや？帰ったらお仕置きは決定だけど？」

「あれぇ！？」

的外れで少しガクッとなり間が抜けた表情となり、その表情を見て少しクスッと笑い「やっぱ許してあげようかしら」と思っていた。

「フフ」

◆◆◆

「結構楽しめたわ」

洗濯した服も渇いておりそれに着直して植物園を後にしてトライチェイサーに乗らず押して歩く。

「た、楽しんでもらえて光栄です」

幻想郷に戻った後の事を考え笑顔になれないでいた。

（煮るなり焼くなりもう……）

（面白い……ユウスケイジメこんなに面白いのね）

ドSの花が満開し当分は許さないと言い続けて反応を楽しもうとし

ていた。

（当分は楽しませてもらうわよユウスケ）

（死にたくないよ～）

その頃木野の別宅にいる咲一は空を眺めていた、どこまでも続く青空を。

（咲夜もこの空眺めているのかな……霊夢ちゃんも）

やはり名残惜しいのか、二人や幻想郷の友の所に戻りたい、そう感じていたがアギトの姿を受け入れてくれるのか不安だった。

（俺は……できるのだろうか、木野さんみたいに人の居場所を守る事が……）

幻想郷にいた時は影からアンノウンと戦ってきた十六夜咲一、木野は自分のように誰かが居場所を失わないようにするために戦う、それができるのか不安であった。

ため息を吐き部屋の中に戻るとアンノウンの気配を感じ別宅から外へ出て走りだす。

トライチェイサーに入電が入りアンノウンとグロンギが同時に出現したと情報が入り。

「幽香さん、ちょっと行ってきます」

「気を付けなさい」

ユウスケはヘルメットを被りトライチェイサーに跨り走りだしその後ろ姿を見送るのだった。

現場ではスネークロード、コブラのような杖を持つ怪人、アングイス・マスクルスとメデューサのような鞭を持った怪人、アングイス・フェミネウスがグロンギの海蛇の怪人、当たった物を一瞬にして凍らせる鞭を持つゴ・ベミウ・ギと戦っていた。

その戦闘のせいで怪我人は多く出ておりこのままでは被害が広範囲に広がってしまいそうだった。

そこに三体を弾き飛ばす一台のバイクが現れた。

「変身！」

そのバイク、トライチェイサーから降りたユウスケはアークルを出し叫びクウガ・マイティフォームに変身し怪人達に挑む。

「クウガ！」

ベミウは一番に反応し襲い掛かってくる。

「ハアァァッ！」

力強く殴るがベミウはグロンギの中で最上位の怪人の一体であるため並大抵の攻撃ではダメージを与えられず。

「フッ！」

「ぐっ……！」

鞭を振るい肩に叩き付けると一瞬にして白く凍結しこれでは危険と感じ防御と持久力に優れたタイタンフォームにチェンジする。

スネークロード達もベミウより先にクウガを倒そうと共に襲い掛かってきた。

「三体はやっぱキツいか……！」

トライチェイサーまで距離はある、その間に三体相手はキツいと感じていると。

「ハッ！」

そこにアギト・フレイムフォームがフレイムセイバーを持ち割って入り怪人に剣を振るう。

「アギト……君が……十六夜咲一か？」

アギトは静かに頷くと食い止めるから早くやる事を済ませろと言わんばかりに三体の怪人と同時に戦う。

「ありがと！」

クウガはトライチェイサーの横に立ちトライアクセラーを抜くとそれはタイタンソードに変化。
両手で太剣を握り走りだしベミウにカラミティタイタンを炸裂し腹部に突き刺すのだが。

「なっ……」

封印のマークは現れたが一瞬だけですぐに消え剣を握られて抜かれ鞭による連打攻撃を食らいタイタンブロッカーは凍結していく、もしこれで力強い打撃を食らえば鎧は砕け散ってしまう、すぐにドラゴンフォームにチェンジし距離を取る。

「ハッ……」

武器はない、あるのはキックかトライチェイサー、もしくはゴウラムのみ、ベミウは鞭を振るって行くがここでクウガはペガサスフォームにチェンジした、ペガサスボウガンなどになる武器はない、だが考えはあった。
ベミウは鞭を素早く振るうがクウガはいとも簡単に避けていく、感覚神経が発達したペガサスフォームは遠距離射撃だけではなく相手の攻撃の軌道も読んで連続で避けていく事も可能だった、だが制限時間は迫る、ギリギリの所でマイティフォームに戻りトライチェイサーにアクセラーを挿し走りだし体当たりをしベミウを跳ね飛ばす。

（決定的打は無理か……）

するとゴウラムが現れ半分に分かれ頭部と上半身は前部に、下半身は後部と合体し大きな顎は前に突き出すトライゴウラムへと合体を遂げたのだ。

「合体した……！」

これはチャンスだと思い。

「咲一退いて！」

「っ！」

アギトはストームフォームにチェンジし高くジャンプしスネークロードから離れるとトライゴウラムが顎に炎が纏った状態で体当たりをするトライゴウラムアタックで二体を弾き飛ばすと頭に光の輪が現れ爆死、ベミウは後ろから鞭を振り上げ走りだすがUターンしまた加速しトライゴウラムアタックをベミウに、先ほどカラミティタイタンでできた傷にピンポイントで顎をぶつけ跳ね飛ばすとその体に大きな封印のマークが現れ苦しむと爆発し倒された。

「よし！」

クウガはガッツポーズを取り勝利を喜びアギトと視線を合わせるがそこに次元の壁が現れ中からG３－Xに似た黒く水色の眼で角が二本に分かれ四発のミサイルを搭載したロケットランチャーを持つ仮面ライダーが現れた。

「G３－X？」

いや、このライダーの名は仮面ライダーG４、G３－Xより強力な仮面ライダーだが。

そこに二条のG３－Xと総のキックホッパーが到着、カメラを通し野沢は驚愕した。

「G４！？」

そう、この世界でＧ４は野沢が開発しそのシステムの力に恐れ封印したはずなのだが。

「ごきげんよう野沢さん」

隣に一人の自衛官の服を着た女性が立つ、三人はその女性を知っていた。

「深見理沙……！」

研修として自衛隊からやってきたと思われていた深見理沙だったのだから。

野沢はたまらず外に出て問い質した、一体何者なのだと。

「私はデスショッカーの幹部の一人、タブー・ドーパントなんです」

深見はニコニコしながら仮面ライダーＷの世界のアイテム、ガイアメモリのタブーメモリを見せて自己紹介する。

「デスショッカー……まさか、幻想郷に送り込んできたライダーや怪人達は！」

「そう、そこにいるキックホッパーやここにはいないパンチホッパー、そしてカイザや怪人達は我々デスショッカーが送り込んだ刺客なんです、

ディケイドとその仲間をなんとしてでも倒したい偽りのゾル大佐、鳴滝さんと共同して」

深見は笑顔を途絶えさせなかったがその笑顔は邪悪なものであると明白だった、野沢は彼女はＧ４システムを盗み、開発するために研

修に来たと分かり怒りを露にする。

「Ｇ４システムは危険なものなのよ！人間には操作できないわ！」

「人間でなければの話ですよ野沢さん、このＧ４の装着者はそのために作られた改造人間なんですよ？」

改造人間、それは悪の組織ショッカーが人間と様々な生物を合成し手術し生み出される怪人達だがそれに反逆したのがバッタの改造人間となった仮面ライダー１号だった。

「ではＧ４の力を存分に楽しんでいってください、生きていたから今度は私が焼き肉ご馳走しますね」

深見は一礼すると次元の壁の中に消えＧ４はＧＭ－０１改四式というＧ３－ＸのＧＭ－０１を改造したサブマシンガンを持ち発砲してきた。

「野沢さんはＧトレーラーに戻ってください！」

Ｇ３－ＸもＧＭ－０１を持ち発砲し野沢は作戦室に戻る。

「超変身！」

クウガはまたドラゴンフォームにチェンジし落ちていた鉄パイプを拾いドラゴンロッドに変える。

アギトはストームハルバードを持ち二人は小回りが効き素早さに適した姿となり戦う事を選択した。

「兄貴」

「気を付けろ、どんな力があるか分からない」

警戒しながらジリジリと詰め寄りながらクウガ、アギト、キックホッパーは一斉に駆け出し攻撃を仕掛けようとしたが。

「……」

G4はGM－01改四式で同時に打ち三人は体から火花を散らし苦痛の叫びを上げながら吹き飛ぶ。

「くっ！」

G3－XもGM－01を連射するが連射性能はG4の方が上だった。

「二条くん！G4のGM－01はフルオートで連射はあっちの方が上手よ！」

「そんな……！」

G4は走りだしG3－Xに殴りかかりぼこぼこに殴っていく。

「二条さん！」

クウガはトライゴウラムに乗り走りだしトライゴウラムアタックを繰り出すのだが。

「何だと！？」

顎を掴んで持ち上げてしまい投げ飛ばされ合体は強制解除、クウガは倒れ込む。

「クロックアップ！」

キックホッパーはクロックアップでＧ４に近づくが。

「読まれてる！」

Ｇ４システムの前にはクロックアップシステムも無効のようで動きを読まれＧＭ－０１の弾丸を食らい吹き飛ぶ。

「うわぁっ！？」

「ハッ！」

アギトはストームハルバードの刃を前に向け突貫してくるが武器を掴まれ、そのまま圧し折り殴り飛ばされる。

「総！咲一！」

クウガはフラフラしながら駆け寄りＧ４はその間ロケットランチャーのギガントを持ちケーブルをベルトと繋げミサイルを放った。

「っ！」

クウガは自然と前に立ちミサイルは直撃し四人は爆発に巻き込まれた、Ｇ４は消し飛んだと確信し次元の壁の中に入っていった。

「ユウスケ、遅いわね」

そうなっているのを知らず幽香はユウスケが迎えに来るのを待っていた。

第11話『G4システム』（後書き）

王蛇出せなかった……まぁいいか。

次回『G3－X対G4！人間の意地は無限大！』

感想お待ちしています。

第１２話『Ｇ３－Ｘ対Ｇ４！人間の意地は無限大！』

前回、ほとんど目的は達成していた、そんな事も知らず紫にトライチェイサーとゴウラムを運ぶはめになった幽香はユウスケと合流したのだがグロンギとアンノウン、同時に現れクウガ、アギトが倒すとデスショッカーと呼ばれる悪の組織の幹部、深見理沙が野沢のデータから盗みだしたＧ４を完成させ襲いＧ３－Ｘ、キックホッパーもろともミサイルで吹き飛ばしたと確信しＧ４は次元の壁に消えていった。

◆◆◆

炎が収まるとそこにはタイタンブロッカーが大きく凹んだクウガ・タイタンフォームが立っていた。

「兄貴……！」
「小野寺！」
「ああ……！」

三人のライダーがそれぞれの反応を見せているとクウガは崩れ落ち変身は解除され服は焦げ血塗れで傷だらけの姿となったユウスケに

戻る。

「大丈夫か!?おい!」

G3－Xは力を加減し揺さ振るが起きず野沢の指示で関東医大病院に運ぶ事となり変身を解いた咲一はその場からそそくさと立ち去った。

「やっぱり俺は守れないのかな……」

咲一の脳裏には身を犠牲にして自分達を守ったユウスケの姿が映っていた。

別宅に到着すると中には木野ではなく。

「咲夜に……霊夢ちゃんまで……」

「久しぶりね、咲一」

霊夢と咲夜が待っていた、咲一を。

関東医大病院、意識不明の状態のユウスケが運ばれ椿山が担当し緊急オペが行われた。

「死ぬんじゃないぞ……いや、絶対死なせるか……！」

院内には総と二条も居り野沢の立ち会いの元、傷の手当てをしていた。

「Ｇ４システムはＧ３－Ｘが完成したのよ」

野沢はＧ４システム完成するまでの系列を語る、もともとはＧ３－ＸとＧ４もあまり変わらないシステムだったがＧ４は装着者にかなり負担を掛け死に至らしめてしまうため負担が少なく、制御するためのＡＩチップを搭載したＧ３－Ｘを完成させＧ４システムは封印したのだが。

「深見理沙が自衛隊から研修に来たなんて偽ってＧトレーラーに潜入、コンピュータの中から封印したＧ４システムを盗みだしたのよ」

「もっと早く気が付いていれば……」

「Ｇ４は呪いのシステムなんだな」

総がそう言うと野沢は頷きくと「二条くん」と突然呼び掛け。

「Ｇ４を、破壊して、私もＧトレーラーに残っているＧ４システムのデータを消すわ」

消してもデスショッカーにＧ４システムは残る、だが元を消しておけば他の組織に悪用される事はない。

「わかりました、野沢さん」

「ユウスケは？」

魔理沙と出会えた幽香は関東医大に共に行き手術室の前にいた銃志郎と葦原にユウスケの容体を聞く。

「あまりよくないみたいだ、全身打撲と火傷で意識がまだ」

ギガントは通常のミサイルより強力でありデスショッカーが開発したとなるともっと強力な兵器と仕上がっていたのだ。

「そう……」

「まさかお前が人間の心配するなんてな」

幽香にはあまりそんなイメージはなく思った事を口に出す魔理沙。

「そうね」

怒りはしなかった、自分でもまさか人間の心配をするとは思ってもいなかったからだ。

「今はアイツの生きるって気力に賭けようぜ」

「ええ」

手術室の方を向き中で戦っているユウスケが帰ってくるのを祈った、すると葦原は席を外し病院の外へ。

「……木野か？オペをしてもらいたい奴がいるのだが……」

「わかった、すぐに」

先ほど木野は別室にいたため姿を見せていないだけだった、葦原から連絡があり木野は関東医大に向かう事に。

「緊急のオペが入った」

そして関東医大へバイクで向かう、人を助けるために、残ったのは咲一、霊夢、咲夜の三人、中の空気は重苦しかった。

「……一年半ぶりかしら？」

「そうだね……」

「そうよ」

ただそれだけしか会話は進まなかった、咲一は何から話せばいいか分からなかったが咲夜は。

「ユウスケと戦ったのよね」

名前は知らない、だがクウガの事を差しているのと分かり頷く。

「あなた、なんでユウスケがあの異形の姿で戦っているか分からないでしょ？」

これにも頷く、木野の戦う理由は知っていた、だがユウスケの戦う理由は知らなかった、クウガとアギトの姿は近いため自分と同じよ

うに人間ではなくなっているのではないか感付いていた。

「聞いたのよ、永遠亭に行った時、ユウスケと永琳の話を」

そう、咲夜はあの時、パチュリーと永遠亭を訪れた時に聞いていたのだ、ユウスケの体で起きている変化を。

それを咲一と霊夢に話す、霊夢は初耳だった、ユウスケは誰にも喋らずこの事を隠して戦っていたのだ。

「それなのになんで彼は戦っていると思う?戦えば戦うほど人間の体じゃなくなる体で」

木野ならば人の居場所を守るために戦う、そしたらユウスケならば?

「みんなの笑顔を守るためよ」

そこは霊夢が言う、咲夜も知っていたがユウスケの話を最初に聞いた彼女が丁度良いだろう。

「最初は誰かに認めてもらうために戦っていた、だけど大事な人を失ってからその戦う理由に辿り着いた、咲一はまだ私達を失っていないよね?」

咲奈を失い今は目の前にいる二人が自分の大切な人達、この二人を失ってから何かに気付くのでは遅い、咲一は。

「そう……だね」

間が空くがちゃんと言葉を述べる。

「そうよ、咲一は、姿が変わろうとも、咲一のままいればいいのよ」
「もしかしたら私もアギトになるかもしれない、なら私は逃げない、咲一と一緒に立ち向かう、その運命に」
その言葉を聞き咲一は自分はみんなの所に帰っていいのかを聞いてみる。
「いいに」
「決まってるじゃないの」
それを聞いて次第に笑顔になっていく、すると霊夢は弁当箱を出しテーブルに置く。
「この前教えてもらったの、美味しい鯖味噌の作り方」
中には鯖味噌、白米、きんぴらごぼうが入っており質素な弁当だったがそれを勢いよく食べ始めた。
「美味しい」
その一言を聞いて霊夢の表情はもっと明るくなり自分の弟の食べっぷりを見て微笑む姉がそこにいた。
二条は外に出ていた、ああは言ったがG4を倒せる自信はなかった、何も能力がないただの人間が装着したパワードスーツでただの人間ではないそれを装着するために生み出された人間が装着したパワー

ドスーツに勝てるのかと。
二条は思い悩んでいたのだ、葦原と木野とは知り合い、その二人は異形の姿に変身し圧倒的な力で敵を倒す、だがいつも自分は後方に回る、そんな自分が勝てるのか、そう考えながら歩いていた。

（ただの人間が異形な人間に太刀打ちできるのだろうか）

自信を喪失していた、逃げ出したかった、戦いから、だが自分が逃げたら野沢の思いを踏み躙る、本当はＧ４は自分で破壊したいはずなのに彼女は自らが作ったＧ３－Ｘの装着者である二条誠に頼んだ、自分にはそういった力はない、だが自分が作ったパワードスーツで戦い一番に信頼できる部下に破壊を頼んだ、逃げ出したい自分と上司の頼みを成し遂げたい自分との板挟みとなっていた。

（俺は……）

壁に拳を付き逃げ出したい気持ちを抑えていた、約束もあったからだ。

（八代……お前も逃げたかったのか？）

八代、そして椿山と大学の同期なのだ、グロンギに勇敢に立ち向かい殉職し今亡き八代に問うが答えるものは誰もいない、人間ながら異形の存在に立ち向かった八代、そして異形の存在となっても戦ったユウスケ、だがそのユウスケは緊急手術で生死の境をさ迷っている、もしかしたら戻って来ないかもしれない、もし彼が戦えるのなら共に戦いたい、そう申し出るが総も先の戦いで傷ついていた、軽傷で済んだ自分しかＧ４を止められるものはいない、次第にそう思い始め決心した、Ｇ４は俺が倒すと。
すると携帯に着信が、出ると小室から八王子にある自衛隊の駐屯地

がＧ４に襲撃されていると通報が入ったと聞き二条はＧトレーラーに走って戻る。

◆◆◆

八王子にある自衛隊の駐屯地、基地の中でＧ４は破壊の限りを尽くしていた、廊下を歩いていると前方に自衛隊員が数名機関銃を持って現れ一斉射撃をするがそんなものでＧ４の装甲は貫けない、ＧＭ－０１改四式による逆襲を受け死亡、その隊員達の死体を踏み付け前進する、格納庫に入ると戦車やバズーカを構えた自衛隊員達が待ち構えており一斉に砲撃を食らうが効果はなく、戦車の砲身を曲げ向かってくる隊員を射殺、撲殺を繰り返し我が物顔で破壊を繰り返すＧ４、そこに格納庫の壁を突き破りＧ３－Ｘがガードチェイサーで駆け付けた。

「またお前か」

Ｇ４は呆れながら言う、自分に勝てるものは誰もいない、そう考えていたからだ、だがその力はＧ４システムによるもの、そんな事も気付かず、Ｇ３－Ｘはガードチェイサーから降りると同時にＧＸ－０５をパスワードを入力してから床に置くと構える。

「まさか、肉弾戦で戦おうと?面白い、どちらのシステムが性能がいいか確かめるか、まぁ決まっているがな」

G4は走りだし殴り掛かるが。

「何!?」

拳は掴まれ受け止められ逆に殴られた、まぐれだと思い蹴りを入れるが足を掴まれまた殴られ吹き飛ぶ。

「装着者違うのか!?」

装着者が違う、そう考えたが装着者は二条である、そう教える。

「まさか……お前も改造人間!?」

「違う」

「じゃあなんなんだ!」

G3ーXは深呼吸してからこう叫んだ。

「ただの……人間だ!」

関東医大、手術中のユウスケの心臓が止まった、医療器具はずっと同じ音が流れていたが医師達はそれにめげずに電気ショックの準備をしていた。

「戻って……！」

椿山が電気ショックをユウスケの胸に当て電気を流す。

「こい！」

一瞬音が変わるがまた同じ音が流れ続けもう一度電気ショックを使うがやはり同じ結果に、もう一度やろうとしたが手術室のドアが開き黒い手術服を着た木野が入ってきた。

「誰だ？」

「木野星也」

その名前だけで誰かわかった、凄腕の医師であると聞いているからだ。

「私もこのオペに参加させていただきます」

今は猫の手も借りたい、いや、猫の手以上の助っ人、椿山は快く了承し木野を中心に手術を再開する。

「……」

手術室の前、魔理沙、幽香、銃志郎、葦原はユウスケのオペが成功するのを祈っていた。

その時幻想郷組は永琳か幻想郷にいるもう一人の巫女が奇跡を起こしてくれればいいのにと思っていたが今は自分達が奇跡が起きるのを祈るしかないのだ。

「ユウスケ……」

だが誰も気が付かなかった、電気ショックを行った事によりアークル、アマダムに大きな変化が起きているとは。

「ごちそうさま！」

咲一は弁当を食べ終え大きな声で挨拶する。

「ありがとう霊夢ちゃん、おかげで元気が湧いてきたよ」

「それはよかった」

咲夜が紅茶を入れ出すとその咲夜にも礼を言う。

「おじょーやパチュ、フランにこあはどうしてるの？」

「みんな元気よ」

おじょーはレミリア、パチュはパチュリー、余談だがレミリアはパチュリーをパチェ、パチュリーはレミリアをレミィとあだ名で呼び合っている、フランはフランドールのこと、こあはパチュリーの助手みたいな小悪魔の事である、基本様とかは付けないのだ咲一は。

「みんなには心配掛けちゃったな……っ！」

反省している矢先だった、咲一はアンノウンの気配を感じ取り立ち上がると二人にそれを伝え。

「私達も」
「行くわ」
「ありがとう」

三人は咲一がアンノウンの出現場所と予知した八王子の駐屯地に向かった。

Ｇ３－ＸはＧ４を圧していた、性能はやはりＧ４が上で攻撃を食らうと大ダメージを負うがそこは二条の人間としてのプライドで保たれていた、何度もパンチを食らわしていくとＧ４の動きは鈍くなってくる。

「そろそろ調整に戻らないとタイムリミットが」

Ｇ４にはタイムリミット、改造人間が負担に耐えれる時間があったのだ、ただ長く扱えるだけでずっとではない、それをチャンスと思いＧ３－ＸはＧ４を逃がさないように踏ん張る、そして時は来た、Ｇ４の装甲から煙が噴射され苦しみ始めた。
Ｇ３－Ｘを跳ね除けＧＭ－０１改四式を持ち発砲しようとしたが倒れた、Ｇ３－Ｘのマスクの右目は破壊され顔が露出していた。
だが、Ｇ４は動き出す、中の改造人間は死んだ、だがＧ４はそんな事どうでもいい、理由は人間というパーツさえあればＧ４は自分の判断で動けるからだ。

「もういい……」

二条は、気付いていたのだ、戦っている時に装着者の改造人間は苦しんでいたのを、苦痛な声を上げながら戦っていたのを、その苦痛な気持ちを察しやっと楽になれた、それなのにＧ４は動く、それに嘆き。

「もういいだろ！」

声を荒ら上げてそう叫びＧＭ－０１を抜き発砲しＧ４を打ち抜くと倒れ。

「Ｇ４システム、活動停止」

そう報告する、二条誠が人間として勝ったのだ、しかし、回りはアントロードの大軍に囲まれていた。

「まだやるのか……仕方ない」

Ｇ３－Ｘは立ち上がりＧＸ－０５を変形させて持ち。

「命ある限り、俺は戦う……仮面ライダーとして！」

するとそこに咲一達も現れ。

「変身！」

仮面ライダーアギト・グランドフォームに変身した。

「もう俺は逃げない！この姿からも、みんなからも！絶対に！」

二人のライダーと巫女とメイドはこのアントロードの大軍に挑むの

だった。

◆◆◆

「手術は成功した、後は彼が目を覚ますのを待つだけだ」

ユウスケの手術は成功し意識が戻るのを待つだけだったが。

だが、アークルが突然現れ金色の稲妻を放つ。

「な、何が起きているんだ?」

「ユウスケ!」

手術が終わったの知り部屋に幽香達が入ってきて今の状態を目撃する、アークルに金色の着色が施されていたもの、ライジングアークルに変化していたのだ。

次第にユウスケはクウガの姿に一瞬だけ変わる、マイティフォームだが金色のラインが追加されていた姿、ライジングマイティフォームだった。

第１２話『Ｇ３－Ｘ対Ｇ４！人間の意地は無限大！』（後書き）

二条さんが最終回と劇場版の台詞を……氷川さんってただの人間として戦い続け、逃げずに戦ってきた英雄なんですよね。

次回で「再会！プロジェクト・アギト！」編は終わりその次からは妖怪の山で異変が、時の零の列車ライダーが……誰がなるんでしょうかね～

次回『覚醒！三位一体！』

第１３話　覚醒！三位一体！（前書き）

ノンストップで投稿（笑）
今回でアギト編は終了です。

第１３話　覚醒！三位一体！

前回、ユウスケはＧ４の攻撃から皆を守るため自ら攻撃を受け関東医大に搬送され緊急手術に。
咲一は霊夢と咲夜のおかげで自分の戦う理由を見付けだし一緒にアンノウンの出現場所へ向かいＧ４を倒した後の二条と共にアンノウンに立ち向かう、木野の助けにより手術が成功したユウスケのアークルに異変が起きていた。

◆◆◆

「ハッ！」

アギトはフレイムフォームとなりフレイムセイバーでアントロードを一閃し斬る！
アントロードのフォルミカ・ペデスは斧で咲夜に襲い掛かるが目の前から姿を消し背中と頭部にナイフが刺さり爆死、背後に咲夜が立っていた。

「こっちでも使えるかしら……」

スペルカードを出し霊夢は唱えた。

「霊符『夢想封印』！」

すると複数の光弾が放たれアントロードを撃ち抜いていく、スペルカードは発動できたのだ。

「できたゃった、スペルカードルールがない外の世界で」

驚きつつ『殺すため』の弾幕を使用しアントロードを倒していく。G３－XはGX－０５を使い広範囲に弾丸が発射できるように体を捻りながら引き金を引いていく。

「ハアァァァァ……ハァ、ハァッ！」

アギトは襲い掛かってくる敵を斬り倒していき数を減らすが減らした数だけペデスは現れる、更に鎌を持つフォルミカ・エクエスがペデスより少ないが数体現れる。

「キリがない！」

「諦めるな、戦っていれば勝機は掴めるはずだ」

G３－Xにそう言われ意気込むアギト、咲夜と霊夢もアギト……咲一をもっとバックアップするため弾幕の密度を濃くしていく。

「咲一！」

アギトの背後に迫るエクエスにお札を投げ飛ばし怯ませるとセイバースラッシュによる斬撃でエクエスを倒す。

「ありがとう霊夢ちゃん！」
「別にいいわよ、アンタをお嫁に迎えるまでは死なせないわよ」
「お嫁って……俺は男だよ～」
横から飛び掛かりペデスを切り捨てながらしょんぼりとした声で霊夢に返す。

二人の出会いは霊夢が紅魔館に遊びに来ていた時だった。
魔理沙が図書館から本を盗むと対応を相談していた時だった。

「あれ？ここって咲夜以外に人間いたんだ」
「そうよ、十六夜咲一、咲夜の双子の弟よ」

レミリアの言葉に耳を疑った、まさか弟がいるとは思わなかったから。

「どこに行くのかしら？」
「庭に作った自家菜園の手入れよ」

自家菜園に興味を持った霊夢は庭に出る事に。

「もしかして君が俺の姉さん負かした巫女さん？」

紅魔館は前に異変を起こした事がありその時咲夜とスペルカードルールで戦い勝利して咲一は霊夢の事を咲夜から聞いていたのだ。

「そうよ、だけどそっちが異変起こすのが悪いのよ」

「仰る通り」と返し水を撒いていく。

「これ全部アンタが育てたの？」

「うん、キャベツにピーマン、トマトにブロッコリー、今はトウモロコシを育ててるよ」

咲一は菜園で育てている野菜の種類や特徴を教えていった、楽しそうに。

「食べてみる？美味しいよ」

トマトをすすめられ噛り付き味わうと。

「美味しい……」

「でしょ！」

自分が育てた野菜を美味しいと言ってもらえて喜ぶ咲一は生で食べられる野菜を一つずつ食べさせた、どれもすべて美味しいと答え霊夢は満足していた。

「本当美味しい」

「ありがとう霊夢ちゃん」

そこで疑問に、なんで野菜を育てているか、里でも売っているのに。

「だって楽しいじゃん」

それだけだった、他には理由ないか聞いてみた。

「うーん……あ、この野菜が育っていればまだ世の中捨てたもんじゃないと思わない？」

野菜を育てる中、咲一は平和を感じていたのだ。

「それに人生って美味しいじゃん」

「人生が美味しい？」

「うん、大根食べてもキュウリ食べても、何も食べてなくても美味しい、人生ってこんなに素晴らしいじゃん！」

能天気、そう思っていた、だが時が経つにつれ咲一や咲夜の過去を知るきっかけがあった、それはパチュリーが話していたのだ。

「あの二人、姉を亡くしてるのよ」

そう、咲一は死んだ咲奈の分も人生を楽しみ、美味しく感じて素晴らしいと思いたい、それもあるから野菜を育てているのではないか。次第に霊夢は咲一の明るく能天気でお調子者だがしっかりした人柄に惹かれていた、それは咲一もだ、自分よりしっかりしているがぐうたらな部分もあるがすごく優しい霊夢に惹かれていた、気が付けば二人は付き合うようになっていた、だがその幸せはすぐに引き裂かれた。

「これは……！」

咲一がアギトに覚醒してしまった。

（みんなとはもう……）

変わる自分が怖くなりこのままみんなが遠ざかってしまうのではないかと恐怖を覚え紅魔館から姿を消し一年半も帰らず裏でアンノウンと戦い二人や大事な人達を守っていたが本当の自分の戦う理由を見出だせないでいたのだった。

そして現在、自分が戦う理由を見出だし、姉の咲夜、恋人の霊夢と共にアンノウンと立ち向かう自分がいた、もう変わる自分に恐れたりしない、そう決意し戦う十六夜咲一、仮面ライダーアギトがここに！

「ハッ！」

フレイムセイバーを振り下ろし縦に切り裂くアギト。

「「「ギュルルル！」」」

アントロード達は回りを取り囲み一斉に飛び掛かり大軍でアギトを呑み込むが竜巻が起こりアントロード達は吹き飛ばされる、その中心にいたのはストームフォームにチェンジしたアギトだった。

「ハアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

走りだしストームハルバードを回転させながら向かってくるアントロードを風で吹き飛ばしていく。

「ハ、ハ、ハッ！」

G３－XはG４のGM－０１改四式を持ち自分のGM－０１と両手に持ちアントロードの急所を的確に撃ち抜く。

「弾切れ……」

G４の銃を投げ捨て自分の銃はホルダーに掛け拳のみでアンノウンに立ち向かうG３－X、羽交い締めにされるが飛び上がって襲いくるアントロードにドロップキックを食らわしてから羽交い締めにするアントロードの一体を投げ飛ばし倒れ込んだところを銃撃。

「ハアアアアア……！」

アギトはグランドフォームに戻りライダーキックを放つ体勢に。

「トリャアアアアアアアアーッ！！！！！！！！」

そしてライダーキックを炸裂し纏めてアントロードを倒すと一時的に出現は止まる。

「終わったのか……」

だが警戒は怠らない、そこで霊夢は上を見上げると。

「咲一、上！」

「う……ウワァァッ！！！！！？」

だが見上げた時には遅く何かの紋章が降りてきて爆発、アギトに直撃し壁に激突し変身が解け二人は駆け寄りG３－Xは何が来るか分からないため身構える。

そこに牛のような額にΩと描かれ三又の槍を持ったバッファローロードのタウルス・バリスタとクイーンアントロードのフォルミカ・レギアとまたもやアントロードの大軍が現れた。

「まだいるの……」

これだけでも気持ちは落胆する、終わりが見えない戦いに。

「幻想郷の住人か……」

なぜかそれを判った、だが今はそんな事よりこの状況をどう打開するかが問題、だが打開策が見出だせず諦めかけていた。

「くそ……！」

「これでやっと貴様ら姉弟も始末できる」

タウルス・バリスタは咲一と咲夜の事を知っていた、なぜかを問い詰めると。

「貴様らの姉を殺したのはこの私だからな」

タウルス・バリスタこそ姉の仇のアンノウンであるがもう一つ。

「あかつき号で私達を襲ったのも貴様か？」

咲夜の質問を聞くと頷き返す、すべてバッファローロード、タウルス・バリスタから始まっていたのだ。

「あのあかつき号の事件はお前が……」

G３－Xはアントロードに囲まれていたため身動きが取れなかった。主犯が判ったのに何もできずこのまま終わるのではないか、そう思っていると格納庫のシャッターを突き破り、アントロードを跳ね飛ばしていくバイク、トライゴウラムに乗ったユウスケが現れた。

「ユウスケ！」

だがそのユウスケの頭には包帯、頬には絆創膏が貼られており傷は完全に完治していなかった。

「なんとか間に合った……」

トライゴウラムから降りるとアークルを腰に出す。

「貴様、クウガか」

「ああ」

「では貴様の抹殺対象だ、力を持つ人間はすべてな」

アンノウンはアギトになってしまうかもしれない人間を襲う、クウガも抹殺対象だった。

「……人間はお前達に守られて生きていけばいいって言うのか？力を持たずただお前達に従って」

「そうだ、人間は力を持つとすぐに過ちを犯す愚かしいもの、力など不要なのだ」

タウルス・バリスタの主張ももっともだ、確かに人間は力を持つ度に過ちを繰り返してきた、だが。

「確かに人間は愚かだ」

ユウスケの口からそんな言葉出るとは誰も思っていなかった。

「大事な人を守れずもう戦えないという奴もいる、けどな、新しく守りたいものが現れるとそれを守るために立ち上がる、過ちを犯しても直す事ができ正す事もできる、何度転んだって立ち上がる、それが人間だ……だから」

一旦区切り、他のメンバーも駆け付けると口を開く。

「お前達に道案内される筋合いはないんだ！」

ユウスケは咲一に手を差し伸べた。

「俺は誰かの笑顔を守りたい、そのために戦う、コイツは誰かの居場所を守り戦う、そう信じてる」

木野や銃志郎達は変身の準備が整う。

「コイツの笑顔、悪くないかもしれないから」

まだ咲一の笑顔を見た事はない、だがきっと素晴らしい笑顔だと信じていた。

「ありがとう」

その手を握り立ち上がりユウスケに笑顔を見せる。

「貴様、何者だ？」

「通りすがりだった仮面ライダークウガだ、覚えとけ！」

仲間の言葉を使うと二人は変身ポーズを取り。

「「変身！」」

クウガ・マイティフォーム、アギト・グランドフォームに変身。

「俺、分かったよ、大切な人を守るのも大事、だけど一緒に立ち向かう勇気も大事って、だから咲夜、霊夢」

その後の言葉は何か分かっていた、だが聞く事に。

「一緒に戦ってくれるかい？」

「もちろんよ、私はあなたの姉なのよ」

「私だってアンタの……恋人なんだから」

仮面の下微笑み礼を言うとアナザーアギト、エクシードギルス、キックホッパー、マグナリュウガンオー、魔理沙、幽香が駆け寄り。

「幽香いたの？」

「紫に無理やりね」

霊夢と咲夜は居たことに今気付き簡単な説明を聞き納得した。

「さて、行くか」

「あなた病み上がりなんだから無茶しないでね」

「わかってますよ」

先ほど手術が終わったばっかのであり病み上がりなのは当然、無茶して戦おうとしているが誰も止めるものはいないだろう。

「かかれ！」

アントロード達は走りだし襲い掛かるがマグナリュウガンオー、G3－Xの銃撃で返り討ちにあう。

「雑魚どもわたし達に任せておきな！」

クウガとアギトはタウルス・バリスタ、フォルミカ・レギアにはアナザーアギト、エクシードギルス、キックホッパーが立ち向かう。アギトはフレイムフォームにチェンジ、クウガもタイタンフォームとなり落ちていた斧を持ちタイタンソードに、タウルス・バリスタに斬り掛かる。

「くっ……ハッ！」

三又の間で受け止め押し合いとなるが二人は蹴りを浴びせ攻撃。

「フ、ハッ！」

アナザーアギトは腕と足にバイオクロウというエッジを生やし攻撃、エクシードギルスもエクシードクロウ、エクシードヒールクロウを生やしてアナザーアギトと共に攻撃していく。

「ハァッ！ハッ！」

キックホッパーは素早く足蹴を繰り出しフォルミカ・レギアにダメージを与えていく。

フォルミカ・ペデスやエクエスを外に誘導し弾幕やナイフ、銃弾が飛び交っていた。

「この蟻ども多過ぎるな！」

「こんなのがいたら花も育たないわね、普通に考えて」

近寄ってくるのには閉じた日傘でぶん殴る幽香。

「ゴウリュウガン、敵は何体だ？」

【魔的反応がないため測定不能】

「だよな……ダブルショット！」

ゴウリュウガンに問うが今まで戦ってきた相手とは違うため測定できず数は分からないがこの二人に取っては数はどうって事はない、この魔弾銃士に取って一万居ようとも一億居ようとも変わらないのだ、マグナリュウガンオーとゴウリュウガン、この二人が居れば数など関係ないのだ。

「おっさんスゲーな！」

「誰がおっさんだ魔理沙！」

地の文を読んだかのように誉めるが一言余計だった。

「一気に消し飛ばした方がいいじゃないのかしら？」

それも一つの手、だがそうするには一ヶ所に集めなければ効果はない、散らばったままではただ消耗するだけ。

その矢先、【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ．．．】と聞こえ【ＧＬＡＢＥ　ＬＡＲＣ　ＲＵＮＳ】と続けて響き金と赤、緑のライダーが現れ戦い始める。

「お前達……一体？」

だが答えない、まるで操り人形のように。

「まさか意思がないのか……？」

三人のライダーはアントロードを一ヶ所に集めていき。

「彼等は操り人形だから倒しても構わないよ」

声が聞こえた、だが今はその通りにするしかない。

「マグナドラゴンキャノン！」

「恋符『マスタースパーク』！」

Ｇ３－ＸはＧＸランチャーというミサイル、マグナリュウガンオーはマグナドラゴンキャノンと魔理沙と幽香はマスタースパークと砲撃系の攻撃が放たれ三人のライダーを巻き込みアントロードを全滅させた。

「ん？これは……」

爆発の後、そこに三枚のカードが落ちていた。

格納庫、エクシードギルスのエクシードヒールクロウによる踵落としが炸裂してからアナザーアギトのアサルトキック、キックホッパーのライダーキックでフォルミカ・レギアを倒した。
タウルス・バリスタは槍を振るうがアギトはそれをフレイムセイバーで受け止めオルタリングの左側のスイッチを押すと左肩はストームフォームの防具となりストームハルバードが現れそれを持つ。
アギトは大地、炎、嵐、三位一体の姿、トリニティフォームに変身。

「ハアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！」
「グワアアアアアアアッ！！！！！！！！？」

アギトは二つの武器を振るい炎の竜巻を起こしタウルス・バリスタを宙に上げ落下してくるのにファイヤーストームアタックという二つの武器で同時に攻撃する技で追い討ちを掛ける。

「「ハアアアアアッ！！！！！！！！」」

同時に飛び蹴りを食らいタウルス・バリスタは空を飛んで逃走を測る。

「待て！」

クウガはジャンプするとゴウラムのような姿、クウガゴウラムに変形して追い掛ける。

「……」

アギトも追い掛けたかったが咲夜みたいに空を飛ぶ事はできない、

その時目の前に銃を持ったシアンの仮面ライダーが現れた。

「あなたは？」

「僕は海東大樹、仮面ライダーディエンドさ」

海東大樹、ユウスケの旅の仲間の一人のトレジャーハンターであり他のライダーを召喚する事ができる仮面ライダーディエンドだ。

先の三人のライダーもディエンドがディエンドライバーとライダーカードを使い召喚したもの。

ディエンドは赤いカードを装填しスライドさせる【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ．．．】と響いてから引き金を引き【ＡＧＩＴＯ】と鳴り響きアギト・グランドフォームが召喚された。

自分と同じアギトが召喚されたのに驚くがそれだけではなかった、カードを装填すると【ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ．．．】と流れ引き金を、【Ａ　Ａ　Ａ　ＡＧＩＴＯ】と響き。

「痛みは一瞬だ」

召喚したアギトの背中を打ち抜くとクウガみたいに変形、金と赤のバイクのような姿だがサーフボードみたいな乗り物となったアギトトルネイダーに変形した。

「これに乗って追い掛けたまえ」

「ありがとうございます！」

アギトはアギトトルネイダーに乗り天井を突き破り飛んでいく、外から霊夢がそれを見る。

「咲一……」

上空ではクウガゴウラムとタウルス・バリスタが激しい空中戦を繰り広げていた。

「うおぉぉぉぉぉっ！」

大きな顎とスピードで攻撃しつつタウルス・バリスタはプラズマ弾を放つがアマダムはそれを吸収し金色の装甲が取り付きライジングクウガゴウラムに変化。

「これは……！」

本人も変化に驚いていた、そこにアギトトルネイダーに乗ったアギトが駆け付ける。

「それどうしたの！？」
「海東さんって人から借りた！」
「海東さんが！？」

まさか自分の仲間がやってきているとは思わず大きな声を上げると同じように仮面ライダー龍騎を変形させた赤い巨大な龍リュウキドラグレッダーの背に乗ったディエンドもやってくる。

「久しぶりだね小野寺くん」
「海東さん！」

ディエンドはクウガゴウラムを召喚するとライジングクウガゴウラ

ムは通常の姿に戻りその背に乗るが何か違っていた。

「これは……」

右足に金色の装飾品マイティアンクレットが装備されアークルも金のライジングアークル、体にも金のラインが流れるクウガ・ライジングマイティフォームとなっていた。

「それが君の新しい力だ」

「はい！」

クウガゴウラムはタウルス・バリスタの背後に回り大きな顎で挟み込むと下に向かって落下、クウガは高くジャンプし右足を伸ばして必殺技ライジングマイティキックを炸裂し勢いよく落下していくと下にはアギトとディエンドが、まずディエンドライバーに金色のカードを装填しスライドさせると【ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ．．．】と流れる。

「小野寺くん！」

「海東さん！咲一！来て！」

【ＫＵ　ＫＵ　ＫＵ　ＫＵＵＧＡ　Ａ　Ａ　Ａ　ＡＧＩＴＯ　ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵ　ＲＹＵＫＩ】と流れるとアギトトルネイダーからアギトの紋章が浮かび上がりディエンドは飛び上がるとリュウキドラグレッダーが回りを飛び回り飛び蹴りを繰り出しているディエンドに炎を吐き勢いを付ける。

「トリャアアアアアアアッ！！！！！！！！！」

アギトトルネイダーが急に停まってアギトは飛び出しクロスホーン

が開き両足を上に向けライダーシュートブレイクを炸裂、ディエンドは炎で勢いを付けたキック、ディエンドドラグーンを炸裂する。

「ハアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！」

三人の必殺技は挟み込むようにタウルス・バリスタに命中。

「グワアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！！！？」

タウルス・バリスタは大きな断末魔を上げて八王子駐屯地上空で爆発四散し倒されたが爆発の大きさが比べ物にならなかった。

ライジングマイティキックは半径1キロを巻き込む爆発を起こすからだ、上空だったからよかったがもし地上で使っていたらみんなを巻き込んでいた。

三人のライダーはそれぞれの乗り物の上に立ち。

「今のキック……もし地上で使っていたら……」

クウガ自身それを察していた、地上で使えばどうなっていたかを。

◆◆◆

「海東さん久しぶり」
「僕の方こそ」

戦いが終わり一息吐いている時にユウスケと海東は再会を喜んでいた。

「なんで海東さんはここに？」
「僕も自分の世界に帰ったんだ、そしたらデスショッカーって組織が僕を狙って来たんだ、ディケイドの仲間としてね」

もしかしたらユウスケも狙われているかもしれない、そう考えた海東はクウガの世界にやってきて案の定怪人と戦っていたのだ。

「当分はこっちにいる、またよろしくね」
「こっちこそ！」

再び一緒に戦える事を喜びつつ握手を交わす。

「木野さん、俺もみんなの居場所を守るために戦います、姉さんみたいな人を増やさないために！」
「頑張れよ、咲一」
「はい！」

外の世界はアナザーアギトらの木野達に任せる事にしユウスケ達は幻想郷へ帰るのだった。

◆◆◆

その夜、妖怪の山の頂上らへんにある守矢神社と呼ばれる神社の鳥居の前でそこの巫女、東風谷早苗（こちやさなえ）が星空を眺めていた。

「今日も綺麗な星空だな～」

他愛もない事を呟き夜風に髪の毛が揺れながら星空を見ていると流れ星が横切る。

「流れ星！願い事しておこうかな？」

と手を合わせて願い事をしようとしたが後ろに何か落ちる音が聞こえた。

「なんだろうこれ？」

バックルがまるでAと緑で描かれているようなマークが描かれ右に何かカードを入れるような挿入口があり一緒にカードケースのような物も落ち着いた、早苗は手に取り中から一枚のカードが、表は緑だが裏は黄色と赤で無限（インフィニティ）と描かれていた。

「切符？」

そのカードは切符にも見えた、早苗は元々外の世界出身で神社は近

くにある湖ごと幻想入りしたものだった。
このベルトから彼女の物語は大きく変わろうとしていたのだった。

第13話　覚醒！三位一体！（後書き）

いいとこをカッさらうのが海東さんだと俺は思っています（キリッ
ここでライジングが登場、ですがユウスケはあまり使いませんね、
ライジングマイティキックの威力に少し恐怖が。
最後に早苗が……因みにカードは無限に使えます、オーナーのマ
スターパス的なものでカードもインフィニティと描かれていますし。

次回予告

ユウスケ
「妖怪の山？」

霊夢
「行くなら気を付けて、あそこ縄張り意識高い妖怪が集まってでき
た一つの社会だから」

天狗
「余所者はこの山には入れない！」

文
「あやや……あの人はどこに行ったんだろう」

クウガ

「ライジングマイティ使うわけには……」

キバーラ
「アルティメットフォームの影響でここまで……」

次回『妖怪の山』

感想お待ちしています。

第１４話『妖怪の山』（前書き）

はっきし言うとこれも長編として扱われるかと……タイトルは決まっていないので『妖怪の山（仮）』編で。
因みにあややとけーねせんせーともこたんも結構好き。
だけどゆうかりんが！（血涙）

第１４話『妖怪の山』

◆◆◆

「あたたた……」

朝目覚めるユウスケ、そこはいつもの博麗神社の居間だった、小鳥の囀りが聞こえるが寝起きで体が鈍っているため傷が痛む、まだ傷は完治していない。

「まだ痛むな……」

立ち上がり縁側に出て朝日を浴びる、大きく背伸びしていると太陽に黒い影が一瞬だけ写り何か落ちてきた。

「何だこれ？」

その落ちてきたものを拾う、新聞っぽかった。

「ぶん？」

「文々。新聞（ぶんぶんまるしんぶん）よ、読み方は」

起きたばっかで欠伸をする霊夢が出てきた。

「へー、こんな新聞まであるんだ」

物珍しそうに新聞を広げて読もうとすると。

「また号外？まったく記事の内容は薄いくせに量だけは多いんだから」

「どれどれ～」

そこにキバーラがやってきて新聞を取って床に置き開いて記事を読む。

「妖怪の山で妖怪達の死体が発見……妖怪の山？」

聞いた事がない名前で首を傾げていると霊夢から説明が。

「ここから見える山があるでしょ？」

神社の表の方から見える山がある、そこが妖怪の山らしい。

「アレがな～」

「妖怪がそんな簡単に殺されているのを見ると……」

「怪人の仕業か……」

どうするかは決まっていた、妖怪の山に行こうと、だが。

「行くなら気を付けて、あそこ縄張り意識高い妖怪達でできた一つの社会で仲間の妖怪がやられたのにピリピリしてると思うから」

ユウスケは頷き朝食を食べ終えてからキバーラと一緒にトライチェイサーで妖怪の山へ向かう事にし出発した。

「行く前に里に寄ろう、山の事を慧音に聞いてからにしよう」
「さすがユウスケ、情報収集の天才♪」

「いやぁ」と照れていると木にぶつかり掛けギリギリ避ける。

「危なっ！ユウスケ危ないわよ！」
「ごめんごめん」

里に到着しトライチェイサーを適当な場所に停めて中に入り歩いていると慧音がよく挨拶される、ユウスケとキバーラの顔を覚えて受け入れてもらっているのだ、誰も幻想郷の平和を守っている仮面ライダーだとは知らずに。

「なぁキバーラ、ライジングってさ本当は何なの？」

ユウスケの口からその単語が出た事にある事を悟った。

「金の力（ライジング）使えるようになったのね」
「ああ……凄まじい破壊力だった、もし地上で使ったら……なんでライジングマイティになったんだ？」
「アルティメットフォームよ、ライジングフォームは通常フォームと最強フォームの中間の姿なのよ」

キバーラが言うにはアルティメットの前の前の姿でライジングの上にはアメイジングマイティフォームというのがあるらしくアルティメットな更に近付いた姿である、
ライジングフォームには制限時間があるが手術の時に電気ショック、タウルス・バリスタとの戦闘でプラズマ弾の攻撃がアマダムが吸収、前に地の石という物でライジングアルティメットに変身した時のエネルギーも注ぎ込まれており制限時間はなくなっているらしい。

ライジングマイティ以外にもちゃんと水、風、大地の姿も使える、ライジングの属性は雷である。

「どうかしたの？いつものユウスケなら新しい力で喜ぶわよね？」
「いや……もし人が沢山いる場所で金の力を使ったらと思うとね……」

人を巻き込んで敵を倒したくない、その気持ちから出る不安だった。

「ユウスケ……」
「金の力を頼りにしないようにしなくちゃ」

話していると寺子屋に到着、中に入って職員室に行くと。

「なんだ小野寺か」
「妹紅もいたんだ」
「よっ」

室内には慧音だけでなく妹紅も居たがタクミと銃志郎は居らずだった、お茶を出され飲みながら話を聞く事に。

「妖怪の山なぁ……」

タバコ吸おうと妹紅が出すとその手を慧音に叩かれ落とす。

「職員室は禁煙だ、話を戻すが博麗から聞いていると思うが妖怪の山は妖怪達が独自の社会を築き上げて成り立っている国とも呼べる、縄張り意識や仲間意識が高く仲間の妖怪がやられたと聞けば黙ってはいない、今朝の文々。新聞で恐らく妖怪達はピリピリしているだろう」

霊夢から聞いた以外の事も聞けたため寄った甲斐があった。

「行くなら妹紅を連れて行けばいい、いいだろ？」

「もちろんさ」

「頼むよ、ところでタクミ達は？」

その二人はどこに行ったか聞いてみると。

「不動は里の見回りだろう、犬神は……」

慧音が向く方向には妖怪の山がある、タクミはもう文々。新聞を読んで即に出発していた。

「なるほどな～、じゃあ俺達も行くか」

お茶を一気に飲み立ち上がると。

「そうだな」

妹紅は立ち上がって二人と一匹は職員室から出ていくと慧音は窓から外を覗いて空を見る。

「何事もなければいいのだが……」

そしてトライチェイサーで妖怪の山に向かうユウスケと妹紅、キバ

ーラ。

「幽香じゃなくて残念ね」
「キバーラ何言ってんの！？」
「ほほ～お前は風見幽香にホの字なんだな～」
「妹紅まで！」

少しバランスを崩すが立て直し真っ直ぐ走行を進め魔法の森の中に入り道無き道を進んでいく。

「少し早くね？」
「そう？」

魔法の森は魔力が高く薄暗くじめじめしているため茸の胞子が舞いそれを吸い気分を悪くする事もあるからさっさと魔法の森から出たいのだろう。
思惑通り魔法の森から早く出て走行を続ける、数分後には妖怪の山に到着、参道に入ろうとしたら。

「待て！」

前に山の妖怪、天狗が何人か降り立ち行く手を塞いだ。

「この妖怪の山には余所者を何匹たりとも入れさせはせん！」

その中のリーダーらしき天狗１はそう宣言しそこで気になった事が。

「ん？わたし達が来る前に男が来なかったか？」
「お前は竹林の……ああ、来たが追い返した」

追い返した、そうなれば引き返すタクミと会うはず、だが会わなかったとなると。

「あ、タクミ」

ユウスケの目に天狗達の後ろにいるオートバジンに跨り駆るタクミが入る。

「バカ！」

どうやら囮にしたらしいがそんな事を知らずにバレてしまい。

「待て人間！」
「逃げよ！」

そのままタクミは参道を走りだし逃走を測る。

「待て～！」

天狗達はユウスケ達を放っておいてタクミを追い掛けた。

「……行こうか？」
「そうだな」
「そうね」

トライチェイサーから降りて押して歩く事に。

「あれ？小野寺くんとキバーラは？」

海東も神社に寝泊まりしておりなぜか神社の屋根の上から賽銭箱の前に降り立つ。

「ユウスケ達なら妖怪の山よ」

霊夢は答えた、なぜ行ったかは文々。新聞を見せた、その記事の内容を見て把握。

「なるほどね……僕も行ってみようかな」

その際ユウスケにも注意したように海東にも妖怪の山がどんな場所か注意を促す。

「わかった、気を付けるよ」

そして海東は走りだして博麗神社を後にした。

「……仮面ライダーってこんなにじっとしてるのが苦手なのかしら」

総と蒜も見回りのため外出している、咲一もアンノウンの気配を感じたらじっとしておれずよく飛び出すと咲夜から聞く。

「私も仮面ライダーになればわかるのかしらね」

そう思いながら掃除を続けた。

（今日は咲一からもらった野菜で野菜炒め作ろー）

夕飯の献立を考えつつ手を止めない皆の帰りを待つのだった。

妖怪の山の参道、ユウスケと妹紅は歩き進み、キバーラはユウスケの肩に座って羽根を休ませていた。

「あの妖怪達が戻って来ないとなるとタクミが上手く引き付けてくれてるんだね」
「そうだな、アイツには犠牲になってもらったよ」
「妹紅も悪だね～」
「ユウスケほどじゃ～」

怪しい笑みを浮かべながらタクミの犠牲で道を進めていた事に喜んでいた。

「てかさっきの妖怪って何なのよ？」
「ありゃ白狼天狗だな、妖怪の山の警備団の」
「天狗！？　天狗ってあの羽根があって鼻とが長くて長い下駄履いてるあの！？」

オーバーリアクションを取るユウスケ、それを笑いながら見るキバーラ。

「ま、まぁ間違っちゃいないけど……天狗と言っても種類はいるからな、さっきのは白狼天狗って主に警備を担当する奴、文々。新聞とかそういう広告書いてるのは鴉天狗、天狗は昔から幻

想郷に住んでいる妖怪だからな」
「なるほどなるほど」

後は河童もいると聞くと少し苦笑する、河童にはいい思い出があまりないからだ、仮面ライダー響鬼の世界で魔化魍（まかもう）と呼ばれる怪人であるが妖怪に近い種族に河童がおりそれが出現した時すごい声を上げて逃げていたのだ、それから河童が少し苦手となり河童巻きを食べれなくなったとか。

「まだいっぱい妖怪いるんだな」
「ああ、この山に地下に繋がる穴があってな、そこから旧都って鬼や色んな妖怪が住んでる都市があるんだ」
「鬼まで」

響鬼ライダーズは名前の通り鬼で心、技、肉体を極限まで鍛え抜いて変身できる仮面ライダーである。

「仮面ライダーってまだそんなにいるんだな」

響鬼ライダーズの事を話すと他のライダーズの事を話す、ダブルホッパーらのカブトライダーズはクロックアップ使ったりブレイドライダーズはカードを使い能力を解放するとか。

「カード使うライダーは後二つ有ってね、まずはディケイド、色んな仮面ライダーに変身できてその能力も使う事ができる、後は龍騎……」

龍騎ライダーズの事を話そうとしたら声が聞こえてきて空を見上げると何者かが黒い鴉のような羽根を広げ目の前に降りてきた。

「黒くてすばしっこい奴が来たな～」
「あなた方は一体どうやってこの道に入ったんですか？」
降りてきた天狗の少女はかなりピリピリしているように見えた、霊夢や慧音が言っていた通り仲間意識が強く山の妖怪が殺されたのは本当のようだった。
「というか妹紅さん？」
「悪いな、コイツに山の案内していたんだ」
ユウスケとキバーラに指を差してなぜこの山に来たか説明、妹紅が着いてきたため話がしやすかった。
「ですけど、今朝の新聞の通り今ここはかなりピリピリしてまして」
「それが気になるから調べに来たんだよ」
「妖怪の山の問題は山の妖怪で解決しますからお構い無く」
平行線の会話を続け拉致が開かなそうと考えたユウスケは割って入って自己紹介をする、キバーラもつられて名乗る。
「私は射命丸文（しゃめいまるあや）です、文々。新聞を発行している鴉天狗です」
「君があの新聞を……」
「あの記事読んだんなら早く山から降りてください……」
ピリピリした雰囲気だけではなくそわそわした雰囲気も出していた。
「他にも何かあるの？」
「あー……一人迷子になってしまった人がいまして……」
疑問に思い聞いてみると答えてくれたため深く聞いてみる事に。

「数日前、この山に人間が現れたんです、しかも外来人、あの時は博麗神社に行ったのですが霊夢さんが留守で外来人の人間とそこにいるキバーラの二人がいた時です」

ユウスケ達が外の世界に行っている時とわかった。

「酷い怪我だったので永遠亭に運んで診てもらったのですが……そしたら永琳先生はここ（妖怪の山）で見付けたらその山の妖怪で外に帰るまで面倒見なさいって……」

「それで目を覚ましたそいつは興味を持って山ん中探検してるって事か」

「はい」と疲れた表情を見せながら返すと。

「じゃあその外来人を俺達が探すでいいか？　そしたら俺達がここに居てもいいか？」

取引だった、ユウスケは探す代わりに山にいることはつべこべ言わず黙認しろという事だった。

「取引ですか……分かりました、私からみんなに話を付けておきますがその代わり私と一緒に行動してもらっても構いませんよね？」

郷に入ったら郷に従え、先ほどの取引を了承してもらえたためこれ以上何かを求めるのは我儘であると判断、共に行動するのを了承するとすぐさま文は先ほどの取引の事を仲間を伝えるべく飛び去った。

「速いな～あの子」

「幻想郷最速だからな」

するとすぐに戻ってきた、山の妖怪のネットワークならすぐに広まるから一人に伝えれば全員伝わるという。

「では行きましょう」

四人は参道を進み山を登って行くのであった。

◆◆◆

「侵入成功」

海東は参道から入らず木に登り枝から枝へと飛び移って移動していた、天狗が巡回しているのに気付いたからだ。

「何かあるのは確かだな……ここに僕が欲しがるようなお宝はあるのだろうか……」

枝へまた飛び移ると人影が見えた。

「人間？　確かこの山は人間の出入りは禁制のはず、気になるね」

海東はその人影を追い掛ける事にし素早く移動していくとすぐに追い付き。

「待ちたまえ」

人影の前に降り、正体は一人のカメラを持ち肩掛けバッグを肩からぶら下げた青年だった。

「アンタ誰？」

名前を問うと細かい事は気にしない海東は名前を名乗りトレジャーハンターも付ける。

「俺は……城戸シンジ、ジャーナリストでカメラを担当してる」

「城戸シンジくんね……君はどこの世界出身？」

海東にはすぐ判ったのだ、彼はこのクウガの世界の出身の人間ではないと、シンジも判っていたが確証がなく困っていたが海東のおかげで確証が掴めた。

「俺は仮面ライダー龍騎の世界の人間なんだけど……レイドラグーンとハイドラグーンの群れに突撃してそれからは何も」

「君も仮面ライダー？」

「ああ、俺は仮面ライダー龍騎」

シンジはその証拠に龍の顔が描かれたカードデッキを見せる。

「後……」

今度はコウモリの絵が描かれたカードデッキを見せた、それは仮面

ライダーナイトになるための物だった。

「それはナイトの……」

シンジは自分の身に起きた事を話し始めた。

～数日前～

シンジの龍騎の世界、そこではライダー同士が願いを叶えるために戦うライダーバトルが神崎士郎という男が開き戦わし、ライダー達は命を落としていった、神崎の思惑通り。

ライダーの数は少なくなっていき残ったのはシンジの龍騎、秋山レンが変身する仮面ライダーナイト、そして仮面ライダーリュウガと神崎の分身でもある仮面ライダーオーディン。

「残ったのは俺とお前みたいだな」

「そうだな」

シンジとレンはライダーバトルの真実を知っていた、願いを叶える代わりに自分の命を失い神崎の死んだ妹の神崎優衣に注がれると、二人は鏡の世界、ミラーワールドの優衣の命を貰い二十歳までしか生きられない優衣と会い親友でもあったが何回もシンジやレンとい

ったメンバーでライダーバトルは繰り返されていたのだ。

「どうする？　俺達が戦って誰がオーディンと戦うか決めるか？」

「……願いは叶えたい、優衣の命を何とかしたい、だけどな城戸、アイツがそれを願っているとでも思うか？」

「同感、優衣ちゃんはそんな事願ってないんだ、だから俺達は」

二人の考えは一致していた、神崎士郎を、ライダーバトルを止めると。

「城戸、お前はリュウガを任せる」

「お前はオーディンを頼むな、レン」

それぞれ倒すべきものを決めその者が待つ場所へ向かい変身し戦いシンジは自分の影であるリュウガを倒したが。

「レン！」

レンはオーディンと相討ちとなりその命は風前の灯だった。

「城戸……」

「しっかりしろよ！　レン！」

「俺は……お前を唯一の共だと思っている……だから、お前だけには生きていて欲しい……」

「ならお前も生きろよ！」

レンは少し笑うと「バカ」と呟いてから目を閉じ一生を終えた、手にナイトのデッキを持ちながら。

デッキを持つとシンジは空を見る、そこにはミラーワールドと現実世界を繋げる亀裂ができておりミラーモンスターと呼ばれる種類の

怪人の群れが出てきていた、優衣は命を貰うのを拒み自害しその事に絶望した神崎はミラーワールドと現実世界の境を無くしてしまったのだ。

「……変身！」

シンジは仮面ライダー龍騎サバイブに変身しドラグランザーという龍に乗りその亀裂を目指しミラーモンスターの群れの中を特攻したのだった。

～現在～

「その後の事は覚えていないんだ、気付いたらここに」

まさかクウガの世界に飛ばされているとは思っていなかったらしい。

「そうか……オリジナルの龍騎に近い世界、ＥＰＩＳＯＤＥ　ＦＩＮＡＬの世界から……」

海東はその世界を龍騎の世界ではなく龍騎ＥＰＩＳＯＤＥ　ＦＩＮＡＬの世界と判断した。

「俺の世界はどうなったか判らない」
最後に付け足すと物音が聞こえ身構えた、姿を見せたのは。
「酷い目にあった」
オートバジンを押すタクミだった。

ユウスケ、キバーラ、妹紅、文は山に現れた外来人、城戸シンジを探して参道を歩いていた。

「え〝、あなた方が来る前にも人間が？」
「ああ、犬神タクミって奴、この前お前が慧音んとこ来た時にいた」
「あ、あの方の彼氏さん」

何か誤解していた、どこからか違うと二重に響くが気のせいだと思い進んでいるたが、
今度は悲鳴が聞こえ何事かと思いトライチェイサーを置いたまま走って声が聞こえた方向へと向かうと。

「こりゃ……」

天狗達が血塗れで倒れ息耐えていたからだ。

「ど、どうなっているんですか！？」

目の前に鼻先に大きな血に塗れた角が生えたサイみたいなグロンギ怪人、ズ・ザイン・ダと鋭い牙と腕のカッターが特徴的で血に塗れているピラニアのグロンギ怪人、メ・ビラン・ギが立っていた。

「グロンギ……！」

この天狗達を殺害したのはこの二体なのは明白だった。

「まさか……この数日間で妖怪達を殺したのは」

このグロンギ怪人達であった。

ザインとビランは次の獲物が見付かったと思い襲い掛かろうとしたがユウスケが前に出て誰かを守りこれ以上誰かを傷つけない、これ以上奴等のために流す涙と失われる笑顔を増やしたくない、そう願いと決意を込めて叫ぶ……

「変身！」と、ユウスケはだんだん赤く燃えるような姿に変わっていき仮面ライダークウガ・マイティフォームに変身した。

「ユウスケさんが……仮面ライダー」

文々。新聞でも仮面ライダーは特集した事があるがまさかユウスケがクウガとは思ってもみなかった。

クウガは二体の怪人に挑み飛び跳ねて殴りかかる。

「ハァァァッ！」

パンチはビランの顔面に命中するがザインが背後からクウガの首を腕で締め上げる。

「グゥゥゥゥ……！」

腕を震わせながらザインの手を掴み力付くで放そうとするがザインの方が力は強く引き離せなかった。

「グゥゥゥゥ……超……変身……！」

途切れ途切れだが精神を集中させタイタンフォームに変身しザインを背負い投げをし地面に叩き付ける、

トライチェイサーはこの場に向かう時に参道に置いてきてしまったため剣となる武器はなく持ち前の怪力とトドメはマイティキックで決めるしかない。

「ギシャー！」

ビランはクウガに飛び掛かり噛み付いてきた、甲冑を纏っている所ではなくない場所を噛み付いたためダメージを食らい膝を付くが殴り飛ばして距離を離す。

「ユウスケ！」

隣に妹紅とキバーラ、文が駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「なんとか……」

クウガは立ち上がる際に落ちていた木の枝を拾い今度はドラゴンフォームに、ビランはまた飛び掛かるがその枝を突き出した瞬間ドラゴンロッドに変化しその杖先は命中しカウンターの要領でスプラッシュドラゴンを炸裂する。

「グゥゥゥゥゥ～！！！！！！！？」

もう一度突き距離を離すと爆発し死亡、その炎の中からザインが飛び出してきてクウガを吹き飛ばす。

「コイツ！」

スペルカードを使おうとしたが文に止められる。

「あなたの炎だと山火事になります！」

妹紅のスペルカードは火に関係するものが少し多いため、回りは木、かなり危険であった。

クウガは立ち上がるのに時間が掛かった、ドラゴンフォームは耐久力はないためザインみたいな重量系の怪人の攻撃を一発でも食らえば大ダメージなのは確実だが怯んではいられないためマイティフォームに戻り走りだした。

「ハァァァァァァーッ！！！！！！！！」

飛び上がりマイティキックを炸裂しザインに浴びせたが。

「なんだと……」

「効いてないじゃないですか！」

マイティキックは通じずザインは更に怒りが増す。

（こうなったら）

体に電気が走りライジングマイティフォームになろうとしたが思い

止まった。

（……この力を使ったらみんなを巻き込む）

クウガはその場で止まったままでいい的だった。

「なんでユウスケ止まってるんだよ！」

「まさか……」

キバーラに分かった、ライジングフォームを使おうとしたのを思い止まったのを、蹴り飛ばされ更にタックルで跳ね飛ばされてしまう。

「ぐぅっ！」

拳を振り上げられもろに顔面に命中すると次はアームハンマーを食らい地面に叩き付けられる。

「ユウスケ～！　このっ！　このっ！」

キバーラはザインの回りを飛び回り注意を向かせようとするが興奮し切っていたため意味がなく何度もクウガを踏み付けていた。

「その場しのぎでしかないですが……風符『天狗道の開風』！」

文はスペルカードで前に向け竜巻を放つ。

「ひゃっ！」

キバーラはすれすれで避けザインは竜巻で吹き飛ばされる瞬間を直視する。

（竜巻……）

竜巻を見て何かを思った、この竜巻がザインをライジングフォームを使わず倒す方法を思い付かないかと。

竜巻で吹き飛ばされたザインはそのまま逃走するとクウガは立ち上がり力を抜くと変身が解け倒れ込む。

「そういや病み上がりだった……」

ここまで話が進んで覚えている人が居るかわからないがユウスケは病み上がりで外の世界での戦いの傷はまだ癒えていなかった。

「大丈夫かよユウスケ！」と妹紅達は駆け寄る。

「ギリギリ……」

だが糸が切れた人形のようにうつ伏せとなり意識を手放した。

「何か起きたみたいだね」

海東達が今の戦いに気付き向かおうとしたがそこに次元の壁が現れ中から。

「見付けたぞディエンド」

龍騎ライダーズのメカニカルで銀と緑色の仮面ライダーゾルダとフ

ァイズライダーズの一人、Δを模した仮面で眼がオレンジで白いフォトンストリームが流れる仮面ライダーデルタ、カブトライダーズの一人で仮面の眼がトンボの羽根みたいな形で鎧にもその羽根みたいな物が取り付き銃を持った水色の仮面ライダードレイク・ライダーフォームが現れた。

「デスショッカーに歯向かうものは有罪だ有罪」

ゾルダは銃型の武器マグナバイザーを抜き引き金を引いて銃弾を乱射、三人が避けると地面に火花が散る。

「銃使いのライダー達か……」

海東はディエンドライバーを出しライダーカードを装填しスライドすると【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ．．．】と響きディエンドのマークが武器に浮かび上がると【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ】という文字も浮かぶ。

「やるしかないみたいだな……」

タクミはファイズドライバーを巻いてファイズフォンを開いて5を三回押しエンターを押すと【Ｓｔａｎｄｉｎｇｂｙ】と響く。

「あまりやりたくはないけど……」

シンジは龍騎のデッキを持ち変身を決意すると腰に変身ベルト、Ｖバックルが現れる。

「「「変身！」」」

引き金を引き【ＤＩＥＮＤ】と響かせるとディエンドに、
ファイズフォンを閉じてファイズドライバーに装填するとファイズに、
デッキをバックルに入れると影がオーバーラップしシンジは赤いスーツに銀の仮面と鎧、左腕に赤い龍の頭を模した道具、ドラグバイザーが装着された龍の騎士、仮面ライダー龍騎に変身した。

第１４話『妖怪の山』（後書き）

デルタとドレイクは海東がアギトの世界で召喚した仮面ライダーだったりします。
城戸シンジはＥＰＩＳＯＤＥ　ＦＩＮＡＬみたいな世界ですがナイトが死亡という結末で。
因みに文が竜巻放ったのは伏線なんです、ザインを倒すための。
次回はユウスケ、妹紅、文の共同による必殺技が。

次回予告

ファイズ
「１０秒間付き合ってやる！」

龍騎
「あれ？　アクセルベントなんて有ったっけ？」

妹紅
「その体で何する気だよ！」

ユウスケ
「奴を倒す方法が頭の中でできてるんだ……」

クウガ
「文！　竜巻を俺を中心に起こしてくれ！」

文
「わかりました！」

【Ａｌｔａｉｒ　Ｆｏｒｍ】

ゼロノス
「私はか～な～り～強い！」

クウガ
「これが……ライダーきりもみシュートだ！」

次回『巻き起こせ、竜巻！ライダーきりもみシュート！！』

第１５話『巻き起こせ、竜巻！ライダーきりもみシュート！！』（前書き）

内容いつもより薄い気が……

第１５話『巻き起こせ、竜巻！ライダーきりもみシュート！！』

◆◆◆

【ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ．．．ＢＬＡＳＴ】、ディエンドライバーから無数のシアンの光弾が放たれデルタに襲い掛かるがデルタはデルタフォンとデルタムーバを直結させ組み立てたフォンブラスターを抜き「ファイヤ」と音声入力すると【Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ】と鳴り響き白いレーザーを放ちシアンの光弾を打ち落としていく。

「ちっ……やるね……」

だがデルタは音声入力する時だけしか声は出さず無言で引き金を引き続けていく。

「貴様も有罪だ有罪！」

ゾルダは両肩で背負うように装備した砲台ギガキャノンで強力なビームを放ち攻撃する。

「危ねっ！」

龍騎はすれすれで避けるが次の砲撃が放たれまた避ける。

「すばしっこいな！　すばしっこい奴も有罪だ有罪！」

「有罪有罪うるさいな！」

龍騎はドラグバイザーをスライドさせカードの装填口を出すとデッキからカードを出し装填しまたスライドすると【ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ】と電子音が鳴り空から龍の尻尾を模したような剣ドラグセイバーが降ってきてそれを持ちゾルダに突貫していくが。

「バカが！」

「おわっ！」

やはり砲撃の前には歯が立たず接近できなかった。

「こりゃ近付けねーな」

ファイズは木の陰に隠れドレイクのドレイクゼクターによる銃撃を避けていた、オートバジンは自動的に主人の危機を察知しバトルモードに変形しドレイクに向け遠慮無し全力全開の銃撃を行う。

「こういう時に豪快にやれば文句ないのに俺ごと撃つからな～……」

軽くため息吐いていると【Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ】と聞こえ銃撃が止みおかしいと思い振り向くとそこにドレイクは居らず。

「どこ行き……っ！」

何かにぶつかったように弾き跳ばされ地面に落ちる前にまた弾かれ宙を舞う、ドレイクはクロックアップを使い高速移動をしている模様だった。

「こんやろ……」

地面に転がり込み起き上がると弾かれながらファイズポインターを取り外しミッションメモリを挿入し右足に装着し受け身を取りながらチャンスを待つ。

「おわっと!?」

龍騎はゾルダの砲撃をやはり避けるだけでドラグセイバーで受け止めたりする。

「拉致が開かねぇ……」

デッキからカードを出すと首を傾げた。

「アクセルベントなんて有ったっけ?」

それは龍騎のカードにあるはずのないカード、アクセルベントだったがこれはまたのないチャンス。

「まぁありがたく使わせてもらうぜ!」

ドラグバイザーにそのカードを装填するとその効果は発動し一時的に加速。

「くっ!」

「おらぁぁぁぁぁっ!」

加速しドラグセイバーでゾルダに斬撃を食らわせていく。

「……」

龍騎はドラグバイザーにまたファイナルベントという龍騎のマークが描かれたカードを装填し【ＦＩＮＡＬＶＥＮＴ】と鳴り響き赤い龍、無双龍ドラグレッダーが現れ回りを飛ぶと龍騎は高くジャンプする。

「タアァァァァッ！！！！！！！！」

ドラグレッダーの炎で加速を付け炎を纏った必殺キック、ドラゴンライダーキックを炸裂。

「ウワァァァァァァァーッ！！！！！！！！！？」

炎と化した龍騎は突貫しゾルダに突っ込むと爆発しカードデッキも粉砕して倒すがあまりいい気分ではなかった、シンジはライダーバトルではリュウガしかライダーを倒していないからだ、最後までライダーを倒さずに戦い抜いたのだ、城戸シンジは。

「今だ！」

ファイズアクセルからミッションメモリを抜いてファイズフォンに挿入するとアクセルフォームに変身。

「１０秒間付き合ってやる！」

スイッチを押すと電子音と共に加速しクロックアップの速さに着いていく。

ドレイクは銃撃を行うが避けられ追い付かれ蹴り飛ばされると【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】と響き回りに何個もマーカーが現れ。

「ハァァァァァーッ！！！！！！！！！！」

マーカーはドレイクに次々と襲い掛かりアクセルクリムゾンスマッシュで爆発し倒され残ったのはドレイクゼクターを止めるドレイクグリップだけだった。

「僕もそろそろ終わらせるか……」

ある仮面ライダーの金色のＦＦＲのカードをディエンドライバーに装填する。

【ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ．．．】

「犬神くん、痛みは一瞬だよ」

「な、何！？」

銃口を通常フォームに戻ったファイズに向け引き金を引いた。

【ＦＡ　ＦＡ　ＦＡ　ＦＡＩＺ】

光線が放たれファイズを撃ち抜くと巨大な銃型の武器ファイズブラスターにファイナルフォームライドし変形しディエンドの手に渡る。

「おい！　どうなってるんだよ！？」

ファイズブラスターは揺れながら喋るがスルーし今度は金色のファイズのマークが描かれた金色のＦＡＲのカードを装填。

【ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ．．．ＦＡ　ＦＡ　ＦＡ　ＦＡＩＺ】

「行くよ！」
「やけくそだ！」

ファイズブラスターから必殺光線ディエンドフォトンが発射しデルタを直撃し大爆発を起こし炎が消え残ったのはデルタドライバーとデルタフォンだった。

「あだぁっ！？」

ファイズブラスターを放り投げるとファイズの姿に戻る。

「てめえな！」

完全ぶちギレて殴り掛かろうとしていたが軽く避けてデルタドライバーとデルタフォン、ドレイクグリップを拾うと変身を解いた。

「これは使えそうだから貰っておこう」

ニヤリと笑いながらどこぞにそれらを仕舞いまたタクミに殴られそうになるが避ける。

「わるずぎる！？」

勢い余ってシンジが殴られた、海東は山の頂上の方向を見ていた。

「この山、何かあるのかな……」

◆◆◆

「あだだだ～……」

山のどこかにあるブン屋、その小屋の中でユウスケは目覚めた、起き上がろうとしたら全身に痛みが走りまた倒れ込む。

「まだ寝てろよ」

隣には妹紅とキバーラが居り止められるが無理やり起き上がろうとする。

「だから寝てなきゃダメよ～！」

「いや、今やらないと、1分、いや、1秒でも早く」

ユウスケがザインの倒し方に何か掴んだようだった。

「何か掴んだの？」

「ああ、竜巻だ」

脳裏に文がスペルカードで竜巻を放つ場面が浮かんでいた。

「竜巻のように投げ飛ばして落ちてくる時に上に飛んで回転しながらキックをすれば倒せるはず」

外に出て地面にその図を木の枝で描いて説明。

「相手の落下する勢いを利用して当たるのを待つような感じか……なるほどな」

「今からその特訓をな」

「はぁ！？」と声が上がった、理由はもちろんその怪我で何をするつもりなのかである。

「何か手頃な岩を上に向かって投げる」

「やめろ！」と制止されるがユウスケの決意は変わらずもう「やる！」とオーラを醸し出していた。

「こうなったら止まらないわよ……」

「まったく……」

呆れていたがしょうがないと思いつつ付き合う事に。

「やんぞー！」

どこかにある崖の下、横には滝が流れている。

その崖をユウスケは登っていた、生身で、まずは体を温めてから動こうと登っていた。

「ファイト～！」

そして手を伸ばして岩肌に掴むとその岩は崩れて下へ落下。

「あー！」
「おっと」

そこで飛んでる妹紅が腕を掴んで下まで下ろす。

「やっぱやめといたら？」
「まだまだ～！」

また登り始めたのだった。

「これは……」

参道、トライチェイサーはそのまま置いたままでそこに河童の少女、河城（かわしろ）にとりがやってきた。

「バイクという物じゃ……」

興味深そうに見ていた、よくよく見るとトライアクセラーは差しっぱなし、いわゆる鍵は掛けたまま。

「そうだ、これを元にしてこの前香霖堂（こうりんどう）で買ったあの設計図の通りに作ってみよ！“ビートチェイサー２０００”を！」

にとりはトライチェイサーを押して自分の住み家へと戻って行った。

「やっと参道に出たね」

にとりが去った後に海東達三人は森の中から参道に出てきた。

「お前まだ話は終わっちゃ！」

まだタクミは変形された事に怒っていたがシンジが落ち着かせていた。

「さ、頂上を目指そうと」

「勝手に仕切るな！」

三人は頂上へ目指し足を動かした。

「体は十分に暖まったな」

ユウスケ崖を登りきり軽く体操し回りを見渡しながらそこらにある自分の背ぐらいある岩を見つける。

「まずはこれを持ち上げないと話は始まらないよな」

「おいおい持てるのかよ」

妹紅に突っ込まれたが「まぁ見てて」と返し岩を掴んでゆっくり持ち上げる。

「おー、持てましたね～」

文は戻って来ており特訓を見物していた。

「うおぉぉぉぉぉ……」

脳裏に竜巻を浮かべながら回転するかのように体を捻り。

「オリャァァァァーッ！！！！！！」

気合いを入れ声を上げて岩を上へ向けて投げるがあまり飛距離はなく落ちてきた。

「あまり飛びませんね」

「ユウスケ、やっぱ無茶じゃ」

「大丈夫！　竜巻をイメージして……ハァァァァーッ！！！！！！！！」

また岩を持ち上げて上へ向けて放り投げるがやはり飛距離は伸びない。

「まだまだ！」

だが諦めずユウスケは同じ行動を繰り返しまた岩を持ち上げ投げるという行為を繰り返していった。

「アレ、体保ちますかね？」

「保たないかもな」

「わからないわよ、ユウスケは意外性がスゴいから成し遂げちゃう

かも」

遠くから眺めているとユウスケは投げた岩の下敷きとなり身動きが取れなくなった。

「やっぱ訂正しようかしら」

文は仕方ないと思い突風を起こして岩を退かした。

「うーん、どうしたら……」

考えているとまた何処からともなく悲鳴が響いた、その方向へ走りだす一同、走っていると目にしたのは。

「にとり？」
「あ、文！」
「それ俺のバイク！」

やはりザインが現れたのだが襲われていたのはトライチェイサーを運んでいたにとりだった。

「ってなんで人間がいるの！？」
「今はいいから逃げて！」

ユウスケは走りだしクウガ・マイティフォームに変身した。

「アレが……仮面ライダー」

変身のメカニズムが知りたい、そんな目をしていた。
クウガはザインに殴り掛かるが簡単に拳は受け止められ投げ飛ばさ

れるが上手く着地し走り迫るザインに足払いを掛け転ばせる。
持ち上げようとするが蹴られて木に激突、角を前に向け走りだしてきたため横に移動して避けるとザインの角は木を貫通し抜けなくなる。

「くっ！」

ザインを羽交い締めしタイタンフォームとなる。

「うおぉぉぉぉっ！！！！！！」

そのまま持ち上げると上へ向かって投げ飛ばす。

（飛距離が余りない！）

マイティに戻る暇もなくザインは地面に落下。

「ダメか……」

ザインはすぐに立ち上がり突進し跳ね飛ばす。

「くっ……！」

「ダメですね……」

投げ飛ばしても飛距離がなければ意味がない。

「もっと高く投げたいの？」

突然にとりが話し掛けてきた。

「そしたら投げ飛ばす時に文がスペルカードで風起こせばいいんじゃない？」

実に簡単な事だった、ちゃんと話の内容はクウガなも届いており。

「わかった！」

再びザインが突進してくるとそれを受け止めて持ち上げる。

「文お願い！」

「はい！　風符『天狗道の開風』！」

最初の時みたいに竜巻を起こすがクウガを中心にし起こす。

「ハァァァァァ……！」

体を捻りザインを宙に向け放り投げる時自然とこう叫んでいた。

「ライダァァァァァァー！！！！　きりもみシュートォォォォォォォォッ！！！！！！！！！！！！」

と叫んでいた、ザインはそのまま竜巻に打ち上げられ天高く上がり落下してくる、弱くなっていたが竜巻はまだ残っている、反射的にドラゴンフォームに変身し高くジャンプし足を上へ向けマイティフォームに戻り回転を加える。

「ハァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！」

回転を加えた必殺キック、マイティ卍キックを炸裂し落下してくるザインを貫くと同時に爆発しクウガは地面に着地。

「できた……」

最後にそう呟き空を見上げていた。

「それで俺のバイクどうしようとしたの？」

その後、にとりにトライチェイサーを何をするために運んだか聞いていた。

「えっと……バイク作るからそれを元に……」

「バイクを？」

にとりは頷き返した。

「香霖堂でバイクの設計図買ったから……」

「そうだったんだ……だけどダメ、このバイクは大事な人からもらった物だから」

にとりは渋々「はい」と返す。

「だけどまさかあんな風にライダーきりもみシュート使うなんて」

ライダーきりもみシュートとは仮面ライダー1号と2号が使う投げ技である。

「さて、これで妖怪の山も静かになると思うけど……」

シンジが見つからなかったと考えていると光弾が放たれてきた。

「な、なんだ!?」

発射してきた方向を向くとそこにはクラゲのような怪人、ジェリーイマジンが立っていた。

「イマジンだと……!」

先の戦いから時間もあまり経たない内に怪人、ユウスケは変身しようとしたら。

「待ちなさい!」

女性の声が響いた、後ろから走ってやってきたのは。

「早苗さん!?」

守矢神社の東風谷早苗だった。

「そ、それ!」

キバーラの目に止まったのは早苗の腰に巻いてあるベルト、ゼロノスベルトだった。

「下がってください!　あの妖怪は私が倒しますから!　変身!」

ゼロノスカードを取り出しバックルの自動改札口みたいな挿入口に

挿入すると【Ａｌｔａｉｒ　Ｆｏｒｍ】と響き早苗の姿は変わり、緑色の二つの眼に胸のＹ字で線路に見える黄色いラインが目立ちベルトの両サイドに四つのパーツが付いた。

「最初に言っておきます！　私はか～な～り強い！」

仮面ライダーゼロノス・アルタイルフォームに変身した。

第１５話『巻き起こせ、竜巻！ライダーきりもみシュート！！』（後書き）

自力ではなく文の力もありライダーきりもみシュートはなんとか使えましたがユウスケの成長次第で単体で頑張れるかも。
卍キックは回転していので……まぁこれもちゃんと使えるようになるのはまだまだ先。
最後に早苗がゼロノスに！
なぜゼロノスかは色的に、因みに原作キャラがライダーに変身させる基準は色と見た目で決まります、後少し性格？早苗は完璧色です。

次回予告

早苗
「やったー！」

ユウスケ
「スゲー見た事あるような……」

キバーラ
「これマスターカードじゃない！」

にとり
「そのベルトを私に～」

デネブ
「初めまして、デネブと申します」

早苗
「八代さん？」

Aゼロノス
「私も……みんなの笑顔の為に……！」

デネブ
「一緒に戦おう！」

【Ｖｅｇａ　Ｆｏｒｍ】

次回『東風谷早苗の“ゼロのス”タートレール～Ａｃｔｉｏｎ　ＺＥＲＯ～』

サブタイに懲り過ぎた（笑）
感想お待ちしております、結構ライダー寄りのためライダーしか知らない人も、東方好きな人の意見も聞いてみたいのでライダー知らない人もできたら。

第１６話『東風谷早苗の“ゼロのス”タートレール～Ａｃｔｉｏｎ　ＺＥＲＯ～』

タイトルにこだわってます、某トリロジー風に練って更には挿入歌まで……

今回はシンジとタクミは違うライダーに。

第16話『東風谷早苗の“ゼロのス”タートレール～Ａｃｔｉｏｎ　ＺＥＲＯ～』

◆◆◆

「私はか～な～り強い！」

前回、ザインをライダーきりもみシュートとマイティ卍キックで見事倒したユウスケはトライチェイサーをにとりから返してもらいもう妖怪の山は大丈夫と思った矢先、
ジェリーイマジンが襲撃してきてユウスケはクウガに変身しようとしたがそこに守矢神社の巫女、東風谷早苗が現れ仮面ライダーゼロノス・アルタイルフォームに変身し戦い始めたのだった。

「ハアッ！」
「がっ！？」

ゼロノスはジェリーイマジンを思い切り殴り飛ばすとその隙にベルトに付いた四つのパーツを取り外し組み立て巨大な剣、ゼロガッシャー・サーベルモードに組み立てると大きく振り上げジェリーイマジンを斬っていく。

「ゼロノス……電王ライダーズの仮面ライダーよ」

仮面ライダー電王、他のライダーとは異なる点が多いライダーでその戦う相手のイマジンが憑依する事によりそのイマジンの特性に合

った姿に変身するがかなり癖がある連中が多いが味方になると頼もしいイマジンも沢山いる。

「なんで早苗さんがそのライダーに変身するための変身ベルトを……」

文は無意識にカメラで戦闘で撮影していた。

「ハァァァーッ！」

大振りで回転しながら斬撃を食らわしジェリーイマジンの体から火花が散っていき実に豪快な戦い方を繰り広げていく。

「さぁ、トドメです！」

ゼロノスベルトからゼロノスカードを抜きゼロガッシャーに装填すると【Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ】と電子音が鳴り響き刃に電王ライダーズのエネルギーであるフリーエネルギーが注入されていき強く輝く。

「ハァァァァァァー……！！！！！」

両手でグリップを握り足を広げ姿勢を低くし走りだす。

「スプレンデッドエンド！！！！！！！」

技名を叫ぶとジェリーイマジンを一刀両断しＡの文字が浮かび上がりジェリーイマジンは爆散した。

「やったー！」

ゼロノスは飛び跳ねてキャッキャッと喜ぶとベルトを取り変身を解除した。

「見ました見ましたぁ？　あの妖怪を倒しましたよ～！」

怪人を倒した事を自慢する早苗を見てユウスケは首を傾げていた。

「スゲー見た事あるような……」

脳裏にかつてクウガに成り立ての頃八代の前でグロンギ倒して自慢して飯をおごってとせがんだ自分だった。

「ああ、なるほど」

納得してまず本題に、なぜゼロノスベルトとゼロノスカードを持っているかだ。

「落ちてきたんです」

その言葉に全員耳を疑った。

「はい、この前夜に空を眺めていたら流れ星が流れてお願い事しようとしたら後ろに落ちてきたんです」

嘘偽りは無さそうだった、ニコニコしながら言っていたため疑えなかった。

「ちょっとそのベルトを私に～」

にとりはゼロノスベルトに興味を持ち貸してほしそうによろよろと近付くがそれはもちろんダメであった。

「だけどなんで使い方解ったの？」

一番の疑問はそれだった、なぜ使い方を知ったのかを。

「色々試したんです、そしたら変身できるって判ってそれから」

「ねぇ、カード見せて？」

「え？」

キバーラは早苗が持つゼロノスカードを見せるように言い見せてもらうと。

「これマスターカードじゃない！」

「マスターカード？」、全員揃って呟くとキバーラからゼロノスについて説明が、ゼロノスカードはあるものを消費して変身できるようになるのだがこのマスターカードはそれを消費せず変身できると。

「その消費するものってなんだキバーラ？」

「それは……変身者が存在した記憶よ」

驚愕した、ゼロノスは自分が存在したという記憶を引き替えに変身すると、だがこの幻想郷は忘れられたものが辿り着いたりする場所だからあまり意味はなさそうだが。

「よかったね早苗、それがマスターカードってので」

「は、はい～……」

軽く涙目になっておりびくびくしていると妹紅は石を持ち後ろの木に投げ付けた。

「そこに居るのは判ってる、出てこい」

何かしらの気配を感じて石を投げたようだった、その当たった木の影から出てきたのは黒子みたいな怪人だった。

「妖怪!?」

「ありゃイマジンだな……」

黒子イマジンは「こんにちは」と丁寧にお辞儀して挨拶してきたためユウスケ達もお辞儀して挨拶した。

「初めまして、デネブと申します」

黒子イマジンの名前はデネブというらしく目的を聞くと。

「そのベルトを探していたんです」

早苗のゼロノスベルトに指を差して言うと仮面ライダーを抹殺するための刺客だと思いきや違った。

「俺はそのデスショッカーの裏切り者なんだ」

「ショッカーの……裏切り者?」

「ああ、そのベルトは元々デスショッカーの物だったんだがやり方が気に入らなくて一人でそのデスショッカーに立ち向かう仮面ライダーを見てベルトと一緒に組織から出たんだ」

ショッカーの事を知らない妹紅以外の幻想郷組に簡単に説明しデス

ショッカーの魔の手がこの世界にも迫っていると話す。

「じゃあそのお前が味方に付いた仮面ライダーって？」

「その仮面ライダーに君を助けるように言われたんだ」

ユウスケに指を差して「俺ぇ？」と自分に指を差してリアクションを取るユウスケ。

「その仮面ライダーって誰なんだおデブ？」

完全に妹紅から間違った名前で呼ばれたため「デネブです」と訂正し。

「仮面ライダーディケイド、門矢士からだ」

「士から！」

士についてはキバーラが簡単に説明。

「ああ、門矢からクウガの世界に行ってくれって」

「士が……」

少し嬉しそうにするが少し複雑だった、まだ士から見たら未熟なんだなと。

「後これ証拠にしろって」

デネブは一枚の写真を出した、ピンぼけしていたが誰が写っているかわかる写真だった。

「ピンぼけしてますね」

「それがアイツの写真だから」

それにはユウスケともう一人写っていた、そのもう一人を見た早苗は。

「八代さん……」

「え？」

◆◆◆

「なんで俺達追い掛けられてるんだよ～！」

「僕に聞かないでくれたまえ！」

「てめえな！」

『待て～～～！！！！！！』

海東、シンジ、タクミは天狗達に見つかり追い掛けられていた、ユウスケ達は文が話を通しているため出歩き自由だがこの三人は入っていないため天狗達に追跡されていた。

「よし！　城戸くん戦ってきたまえ、戦わなければ生き残れないだよ！」

「絶対嫌だ！」

「じゃあ犬神くん、その疾走する本能で囮になりたまえ」
「お前な……ギャーッ！」
海東に足を掛けられ派手に転ぶと天狗達はタクミを標的し後の二人は森の中に逃げ込んだ。
「海東後で覚えてろよ！」

「私は元々外の世界の人間だったんです」
守矢神社の境内の賽銭箱の前、早苗は八代との関係を語り始めた。
「両親が轢き逃げで死んでしまって、その時の事件を担当して私を励ましてくれたのが八代さんだったんです、いつもいつも神社に来ていっぱいお話して楽しかったな～」
空を見上げながら昔の懐かしい思い出を喋っていく。
「それで八代さんは今？」
知らなかったようだった、守矢神社が幻想入りしたのはグロンギが現れる数年前、知らないのも当然で八代が殉職したとユウスケは自分から話した。
「そうだったんですか……八代さん、どんな最後でした？」
「……笑ってた、俺にこう言い残して、“世界中の人の笑顔のた

めならあなたはもっと強くなれる”って」

ユウスケは空を見上げながら話した、八代の事を思いながら。
その話を聞いていたデネブは号泣していた。

「辛かったんだな……大変だったんだな……」
「お、おデブ……」

文は取り敢えずハンカチを渡したがそれで鼻を咬んだためどん引き。

（まさかな……）

ユウスケは感付いた、早苗の今の戦う理由が。

「早苗の戦う理由って何かな？」
「私の……ですか？」

怪人を倒した後の喜びようから悟っていた。

「八代さんや霊夢さんみたいな強い人になりたかった、それで認めてもらいたかった」

ここで確信できた、彼女は昔の自分だと、八代に振り向いて欲しくみんなに認めてもらいたい為に戦っていた自分だと。

「だけどあねさんは……」
「はい……」

霊夢もというのは同じ巫女だが実力は霊夢の方が上だと言うのが解っているからだろう。

「早苗、その戦う理由さ、悪いとは言わないよ、俺もそうだったから」
「ユウスケさん？」
「だけどね、誰かに認めてもらいたい為に戦うより誰かの笑顔の為に戦う方が今よりもっと強くなれるんだ」
八代に言われた同じような言葉を使い優しく話し掛けていく。
「俺もそうだから、みんなの笑顔をもっと見たい、みんなの笑顔を失わせたくない、だから俺は戦うんだ、それがあねさんとの約束でもあるから」
早苗の頭に手を乗せて微笑むと。
「あねさんがいないから戦う理由や意味がないからもう戦えないなんて言ったらダメだよ、
それが一番のあねさんへの裏切りになるから」
自分もそうだった、命が長くないと言われ戦意を喪失してもう戦えないと言ってしまったが八代のその言葉があったから今があるのだと。
「……できますか？私にもみんなの笑顔の為に戦うこと」
「できるよ、ショッカーから抜け出したデネブだって守るために戦おうとしているんだ、な？　デネブ」
デネブは「うん」と頷くとユウスケは再び微笑みわしわしと頭を撫でる。

「だから自信を持ってもいいんだよ、誰かの笑顔の為に戦う事に」
「はい！」

ユウスケは昔の自分を見ているような気持ちだったため自分と同じ悲しい思いをさせないための思いはちゃんと伝わったようだった。

「ユウスケっていい師匠になりそうだな」
「そうですね妹紅さん」

小野寺ユウスケという人物の凄さを文とにとりは実感し妹紅とキバーラは見方を改める。

「ん？　小野寺くん見っけ」
「海東さん！」
「あー！　シンジさん！」
「あ、文ちゃん」

階段を上って来て境内に立ったのは海東とシンジだった。

「シンジさんなんで勝手にうろつくんですか！？　一応この山は人間禁制の地なんですから」
「ごめんごめん」

注意され謝るシンジ、海東とユウスケも軽く話していると。

「そういえばタクミは？」

沈黙が流れた、知らない者は知らないが全員忘れていたようだった。

「僕達が逃げるために囮にしたからな」

ユウスケは苦笑していた、「変わらないな～この人」と思いつつ。

「ゼェ……ゼェ……ゼェ……」

そこに息を切らせたタクミが上がってきて倒れ込む。

「し、死ぬかと思った……」

「大丈夫かよタクミ」

妹紅が寄ってタクミを立たせる。

「あのこそ泥っぽい奴のせいだよ、背中打たれて変形させられるわ天狗達の囮にさせられるわ散々だった」

哀れみの目でタクミを見る一同、一番の原因の海東もその目だった。

「お前なぁ……」

殴り掛かる元気もなく支えられていた。

海東がデネブの事を聞かれてユウスケが代わりに答えると。

「まさか……おデブくん」

「デネブです」

「君、ここに何で来た？」

「ゼロライナーだけど……」

海東はニヤリと笑い確信した。

「デスショッカーの狙いはそれだよ」

ゼロライナーとは、時を駆ける列車の一つで過去や未来、ましてや異世界も時間の部類に入るためそれらを行き来できる列車である事を海東は説明、その列車なら確かなデスショッカーが狙うはずと納得。

「ゼロライナーはこの神社の近くにある湖の畔の森の中に隠してる！」

「行きましょ！」

一同は守矢神社の近くにある湖へ向かった。

その湖の畔では隠されていたゼロライナーはヤモリをイメージして生まれたゲッコーイマジンとモグラをイメージして生まれた両手が鋭く長い爪だったり左腕がドリルだったりハンマーのよう武器のモールイマジンが多数、
カメレオンの特性を持つカメレオンファンガイアに黄緑色でカメレオンみたいな仮面ライダーベルデがゼロライナーを強奪しようとしていた。

「見付けたぞ！　手間掛けさせやがって」

その中ではベルデがリーダーらしくすぐにでも強奪しようと乗り込もうとしたら足下に火花が散る。

「何者だ！」

ベルデが叫ぶと「通りすがりの仮面ライダーだ」と返って来て横を向くと。

「覚えておきたまえ」

ユウスケや海東達が立っていた。

「貴様は海東大樹に小野寺ユウスケ！」

ベルデは二人の事は知っていた、もっとも注意するべきの仮面ライダーだと。

「裏切り者のイマジンもいるぞ！」

ゲッコーイマジンはデネブを見て叫ぶ。

「お前達のやり方に付いていけなくなったんだ！　俺はお前達を倒すために戦う！」

敵イマジン達はゲラゲラと笑うがデネブは真剣だった。

「早苗、まさか俺が落としたベルトで変身して戦う事になったの、本当に済まないと思っている」

「いいよいいよ、デネブも予想外だったんでしょ？　それに私も戦う理由、見つけたから」

ユウスケを見てそう言うとゼロノスベルトを腰に巻きマスターカードを持つ。

「今回はナイトで行くか」

シンジはナイトのカードデッキを出すと腰にＶバックルが、本当は鏡に映さないといけないが幻想郷の結界がその鏡の代わりになるため現れるのだ。

「シンジさんが仮面ライダー！？」

「文が助けた外来人が！？」

「ごめん、隠してた訳じゃないんだ」

「海東、デルタギア貸せ」

「しょうがないね、さっきの事もあるし」

海東はデルタギアを貸しそのデルタドライバーをタクミは巻きデルタフォンを出し「変身」と音声入力し【Ｓｔａｎｄｉｎｇｂｙ】と響く、なぜデルタなのかはファイズになったらファイナルフォームライドされる可能性があるからだ、妹紅は気になり聞いたが答えてはくれなかった。

【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ．．．】

ディエンドライバーにライダーカードを装填しユウスケの腰にはアークルが現れる。

シンジは右腕を曲げて「変身！」と叫びデッキをバックルに装填すると西洋の騎士のようなダークブルーのスーツで銀色の仮面と鎧の仮面ライダーナイトに変身した。

「んしゃっ！」

クールに見えるナイトに似付かわしくない行動を取ると鍔にコウモリのような飾りが付いたナイトバイザーを抜く。

デルタフォンをビデオカメラ型のツール、デルタムーバと直結させ【Ｃｏｍｐｌｅｔｅ】と流れタクミはデルタに変身。

『変身！』

【ＤＩＥＮＤ】

【Ａｌｔａｉｒ　Ｆｏｒｍ】

そして後はユウスケはクウガ・マイティフォーム、海東はディエンド、早苗はゼロノス・アルタイルフォームに変身する。

「最初に言っておきます！　私はか～な～り強い！」

Ａゼロノスのその台詞で一斉に走りだし戦闘は開始された。

「ハァッ！　ハァッ！」

ナイトバイザーでベルデに斬り掛かる、ベルデはホールドベントのカードをバイオバイザーに装填してヨーヨー型の武器バイオワインダーを召喚して持ちトリッキーな攻撃を仕掛けてきた。

バイオワインダーを投げるとヨーヨーは一旦動きを止めてギザギザとした動きを見せナイトを翻弄する。

「うわっ！？」

ヨーヨーを避けていくナイトだがベルデには狙いがあった、気付くと森の中に入っておりナイトはバイオワインダーで木を使い張り巡らした糸に囲まれ身動きが取れなかった。

「しまっ……」

すると鎧に火花が散る、クリアーベントで姿を消したベルデが攻撃しているのだ。

「こりゃヤバいな……」

デッキからカードを取り出しナイトバイザーのコウモリの飾りは羽根を開くようにスライドしそこの窪みにカードを置きまたスライドして羽根を閉じると【ＴＲＩＫ　ＶＥＮＴ】と音声が流れナイトは８体に分身した。

「あやや！？　分身した！？」
「そのメカニズム、気になりますね」

にとりがニヤニヤしているとナイト達はナイトバイザーで糸を斬っているとベルデに剣が当たり姿を現すと一人に戻り斬撃を食らわしていく。

「ファイヤ！」

フォンブラスターに音声入力し引き金を引いて白いレーザーを発射しモールイマジンを銃撃していく。
オートバジンが到着しバトルモードへ変形して銃撃を加えていく。

「待て待て！　俺に当たる」

オートバジンは広範囲に銃撃しているため危うくデルタに誤射し掛け降りると殴られビークルモードに戻る。

「確か……村上が……」

デルタドライバーのミッションメモリを抜いてグリップに差すと起動し赤ではなく白いフォトンブラッドが流れるファイズエッジとなりデルタはそれを抜く、ファイズエッジ改めデルタエッジでモールイマジンを斬っていく。

「やっぱ俺はこっちの方が性に合ってるな……オラァァァーッ！」

一体を一閃するとそれにフォンブラスターによる銃撃を食らわし後ろから襲い掛かるモールイマジンに前を向いたまま蹴りを放ち飛び掛かるモールイマジンにデルタエッジを突き刺し「チェック」と音声入力するとイクシードチャージが発動し刃は強く輝き必殺技スパークルカットが炸裂されデルタエッジを下に向け振り下ろすとモールイマジンは爆散。

「ふぅ……よし」

「タクミ、お前やっぱり戦い方が……」

「うるせ！　勝てれば問題ないだろ！」

妹紅にやはり正義の味方らしくない戦い方と言われるが反発、残りのモールイマジン二体が襲い掛かってきた。

「挟み撃ちでトドメ刺すけどいいよな？」

「もちろん！」

二手に別れモールイマジンを挟み込むように囲んで戦う。

「海東さん、俺をフォームライドしないでくださいよ？」

「わかってるよ」

カメレオンファンガイアにはクウガとディエンドが相手をしていた。

ディエンドは援護を担当しクウガは接近戦を、いいコンビネーションを見せていた。
Aゼロノスとデネブはゲッコーイマジンと戦っていた。

「ハアァァァッ！」

ゼロガッシャー・サーベルモードを振り回し力強い斬撃を食らわしていく、後ろからはデネブが指から弾丸を放ち援護を担当さていた。

「ありがとうデネブ！」
「いやぁ～」

少し照れるとゲッコーイマジンは光弾を乱射、伏せて避けるとデネブは射撃による攻撃を繰り出す。

「そうだ……早苗！　マスターカードを裏返して黄色の方をが見えるように入れてみて！」
「え？　こう？」

マスターカードを抜いて言われた通り裏返し赤、黄色の面を黄色が出るように挿入すると【Ｖｅｇａ　Ｆｏｒｍ】と流れデネブはＡゼロノスの後ろに立ち腕を交差させ肩に置くと黒いマントが現れ包み込むと胸にデネブの顔が、マントが着いて肩にデネブの指を模した砲台が取り付きドリルのような形状の仮面がスライドし星型に展開され眼は赤い仮面ライダーゼロノス・ベガフォームに変身した。

（これは？）
「これが俺と早苗の力だ！」

デネブは早苗に憑依する事によりこのベガフォームになれるのだ。

「最初に言っておく！　胸の顔は飾りだ！」
『は？』

敵味方問わずVゼロノスの言葉に凍り付いた。

（デネブ？）
「いやぁ、嘘はいけないと思って」

ゲッコーイマジンは「ふざけるな！　真面目にやれ！」と逆上、光弾を乱射してくるが。

「俺はいつも真面目だ！」

ゼロガッシャーを片手だけで持つ、パワーと防御が向上しているため光弾をものともせず肩のゼロノスノヴァから砲撃が放たれゲッコーイマジンを攻撃し少しずつ接近していく。

（けど強い！）
「ハアァァァッ！！」
「グエェッ！？」

ゼロガッシャーを高く振り上げゲッコーイマジンに思い一撃を食らわせると斜めに向けて右下へ振り下ろし更に攻撃。

「強いな……妹紅！　合わせろよ！」

デルタエッジを戻しミッションメモリを抜いてフォンブラスターに挿入すると銃身が伸びる。

「こっちの台詞だよ！」

妹紅もスペルカードを発動しようと準備が整う。

「チェック！」

【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】

「不死『火の鳥－鳳翼天翔－』！」

フォンブラスターから白いマーカーが放たれモールイマジンを拘束、妹紅は火の鳥を放ち残りのモールイマジンを火の鳥は体当たりしそのまま押し出していき拘束されたモールイマジンの方へ飛んでいく。

「ハアァァァァァーッ！！！！！！！！！！！」

デルタはマーカーに飛び込んでルシファーズハンマーを炸裂した瞬間火の鳥に押されたモールイマジンと拘束されたモールイマジンは激突し二つの技に挟み撃ちとなり撃破された。

「やったな」

「ああ」

ナイトの方も決着がつくところだった、ファイナルベントを発動するとダークウイングというコウモリのミラーモンスターと合体し羽根となり羽ばたくとマントとなりナイトはドリルみたいに回転しだしベルデを貫くと爆発、飛翔斬で決めカードデッキごと葬った。

「小野寺くん、後よろしくね」

シアンの光弾を無数放ちカメレオンファンガイアの動きを止めクウガはマイティキックでカメレオンファンガイアを倒した。

「ハアァァァッ！！　デリャァァァーッ！！！！」

Vゼロノスは力強い斬撃を食らわした後左腕で殴り飛ばす。

「トドメだ！」

マスターカードをボウガンモードに組み立てたゼロガッシャーに挿入。

【Ｆｕｌｌ　Ｃｈａｒｇｅ】

銃身は強く輝きゲッコーイマジンに向ける。

「発射ぁっ！」

引き金を引きV字の金色の光弾グランドストライクが放たれゲッコーイマジンを打ち抜くとV字が浮かび上がりゲッコーイマジンは断末魔と共に爆死した。

（勝った勝った～！）

「これで一件落着だ！」

変身を解くとシンジは何かに気付いた。

「文ちゃん？　何やってるの？」

「明日の文々。新聞の記事が決まったのでメモと写真を撮ってるんですよ！」

気持ちは分かった、自分も記者の端くれのため文の記者としての仕

事に情熱を燃やしているのが。

「名前とか伏せておいてね？」

それだけは注意をしておきシンジは元の世界になかなか帰れなそうな事を予想してこのまま残る事に、ブン屋で働く事にした。

そしてデネブは……

「これからお世話になるデネブです～」

守矢神社の居間、そこに二人の神が、綱が目立つ女性の八坂神奈子と帽子の目みたいな飾りが目立つ幼女の洩矢諏訪子が座っており目を見開いていた。

「えっと……人間じゃ……ないわよね早苗？」

「はい、これから四人で仲良くやっていきましょー」

もうデネブの同居は決まっているような物であるため話はどんどん進み。

「これからよろしくお願いします～」

第16話『東風谷早苗の“ゼロのス”タートレール～Ａｃｔｉｏｎ　ＺＥＲＯ～』

タクミはデルタを制御できると思ったので、巧もですし。
シンジはＴＶスペシャル的な感じで。

次回予告

慧音
「犬神起きろ、朝だぞ」

タクミ
「お前は俺のオカンかよ」

妹紅
「アイツも妖怪だから長生きしてるからな……寂しいんだよ」

タクミ
「俺は……オルフェノクだからな……」

カイザ
「マリの次は今度はその妖怪に手を出すのかなぁ？　犬神くん？」

タクミ
「てめえだけは許さねぇ……絶対にな……」

次回『灰色の心』

第17話『灰色の心』（前書き）

最近新作を考えてしまい執筆中小説一覧が大変な事になってしまいそうなので書き上がっているものはすべて時間を空けて今日中に投稿します。

第17話『灰色の心』

◆◆◆

妖怪の山で散々な目にあったタクミ、今日はその寺子屋に居候する犬神タクミにスポットを当ててみよう。

「犬神起きろ、朝だぞ」

扉を開け慧音はタクミを起こしに来るが案の定タクミはまだ爆睡していた。

「後3分～……」

ベタな台詞を返し布団を被りまだ寝ようとしていたが慧音に掛け布団を取られ「寒っ」と囁くと体を丸めるが今度は敷き布団を抜き取られゴロゴロと転がる。

「さっさと起きろ、もう朝食の支度は済んで不動が先に食べ始めているぞ」

「あー……うるせーな……お前は俺のオカンかよ」

グチグチ言いながら起きるがまだ頭は寝ており全には覚醒していなかったため。

「ぐぅぅぅ～………」

また寝始めてしまいそれにはさすがに怒り慧音はタクミの前に立ち上を見上げ勢いよく頭を下へ振り下ろすとタクミの頭に額がぶつかり頭突きを食らわせ。

「いてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーっ！！！！！！！！！！！！！」

大きな悶え苦しむ遠吠えとも取れる叫び声が里中に響き渡った。

「いてぇなぁ上白沢」
「お前が起きないのが悪いんだぞ」

頭に大きなたんこぶができ文句を言い合いながら食べる二人。

「不動はもう里の見回りと出ていったぞ？」
「へいへい」

何かと銃志郎を棚に上げる慧音、確かにいい比較対象であった。

「お前をここに置いているのはそのぐーたらなところを直すために

って！」

会話の途中また寝だすタクミにまたまた頭突きを食らわせ二重にたんこぶを作る。

「目、覚めたか？」

また寝たら頭突きがもう一発やられると思い頷いて朝食を食す。

（まったく……どっかの誰かさんに似すぎなんだよなコイツ……）

ただ怒ってその誰かさんを思い出しているのではなく淋しさと悲しみ、怒りが込み上げながらその誰かさんとの思い出を思いだしていた。

（……マリ……俺は……）

遠くを見るような目をしていた為、慧音に話し掛けられ「何でもない」と素っ気なく返した。

（何でもないという者の顔ではないぞ）

慧音はタクミの表情を見てただならぬ過去を持ち修羅場を何度も潜り抜けてきたのだろうと察していた。

「ごちそうさん、美味かった」

手を合わせて挨拶すると食器を台所に持っていき自分の使った食器は自分で洗い居間に戻ってきた。

「犬神……」
「なんだよ？」

何か聞きたかった、彼の過去を知らない慧音はタクミの過去を聞きたかった、そして自分の過去も、だが聞けず「何でもない」と言ってしまい話は終わる。

「なら話し掛けるなよ……」

同居を始めて以来、少しは遠慮しなくなってきたがどこか壁がまだ間にある感じがしていた、
接しようとするがタクミは自分から離れてしまう、どんなに距離が近くて今のように一緒の部屋で過ごしていても距離は近くなく離れていた、やはりその壁が原因である、彼の心の壁は白くもなく黒くもない、灰色の心だった、その灰色の心を開かせるにはどうしたらいいかを考えていた。

「上白沢」

まずは名前から、名前を名字ではなく下の名前で呼んでもらえるようにしてもらおうと考えた。

「どうかしたかた……犬神？」

馴れというのは恐ろしいものである、一度定着してしまった呼び方を変えるのは一苦労である。

「……いや……何でもない」

タクミも何か言いたげだが躊躇ってしまった、慧音も気付いた、そしてその躊躇いからは恐怖みたいなものを感じていた、タクミは何に恐怖しているのか、それが気になった、それが分かれば近付けるかもしれない、近付けなければ更生どころではないからもある。

「……」

「……」

しばらく沈黙が続くがその沈黙を破ってくれた救世主がやってきてくれた。

「よっ、慧音、タクミ」

『妹紅』

妹紅が訪れ二人は下の名前で同時に言う。

（妹紅は下でか）

それはばっちりと聞いていた。

「今日の授業はわたしも参加させてもらうよ」

「おお、それはありがたい、助かる」

「タクミはどうする？」

妹紅は気軽にタクミと呼び話を振るうと。

「俺はいい、部屋にいるから」

と返した、ここまで明確な答えはタクミから聞いた事無くどんな魔法を使っているのかが気になっていた。

「どうかしたけーねせんせー？」
「あ、いや、何でもないぞ」

授業中、考え事しているのを生徒に感付かれ返していた。

「ホントにー？」
「タクミにーちゃんの事考えてたんじゃないのー？」

図星だった、生徒に当てられた事に少し動揺し始めて黒板に当てていたチョークを折ってしまった。

「ち、違う！　犬神の事なんて考えてない！」
「けーねせんせー動揺し過ぎ～」

生徒の笑い声に混じって聞こえる声が。

「妹紅ぉぉぉぉぉー！！！！！！」
「やば」

中に妹紅も混じって笑っておりそれに気付いた慧音は暫らく鬼ごっこしていた。

「やっぱけーねせんせーはもこーとカップル？」
「いやいや、カップリングは無限大」
「ボクの妄想も無限大！」

「いやいや三角関係も捨てがたい」
男子生徒は何かを話し始めて帰ってくるまで口論が続いたとか。

「で、本当何考えてたんだ?」
授業の後にたんこぶができた妹紅が問い掛けていた。
その問いに答えた、どうすればタクミは普通に話すのか。

「そうだな……やっぱそのお硬い考えを直した方がいいじゃないか?」
「そんなに硬いか?」
「考えもその頭もろとも」

「そんなに硬いか?」と呟きながら頭を擦り「ああ、硬い」と妹紅が頭を撫でる。

「そういうものか……じゃあお前と犬神はなんであんな普通に会話しているんだ?」
「普通に? いや、普通に会話してないよ、わたしにも壁作ってるから」
「下の名前で呼ぶのにか?」
「呼び方はそれほど問題じゃないな」

何が原因なのか、二人は判っていなかった、だがそこで思い出した事が。

「そういえば奏月と小野寺が戦った時に乱入してきた仮面ライダーが犬神のこと知っているようだと紅魔館のメイド長が言っていたな……」

「だけどそいつもうここには居ないだろ」

前に現れた仮面ライダー、カイザなら犬神の過去を何かしら知っているはず、だが都合良く現れるはずなくため息を吐いていた。

「だろうな、妹紅はどう思ってる？　犬神を」

「……素直になれない不器用な奴かな？」

「そうだな……それしか出てこないな」

自分達はタクミの事をまだ何も知らない、彼の事を理解するにはもっといい所を見付けて理解する、それが一番いいのかもしれない、無理に考えたり心を開かせようとするよりは。

◆◆◆

「……」

寺子屋の屋根の上、タクミは横になって空を眺めていた、ボーッと。

「ここにいていいのだろうか……俺はここに」
「君の居場所はどこにも無いんだよ、犬神くん」
突然後ろから声が聞こえ振り向く、そこには一人の男が、ベルトを巻いて。
「草風……！」
男の名は草風マサト、前に現れた仮面ライダーカイザの変身者だ。
タクミは立ち上がり草風を睨む。
「何しに来た？」
「君がどうしているか気になってね～」
ただ興味本位で見に来た、それだけでもタクミの機嫌を悪くさせるには十分だった。
「なるほど……マリの次はあの妖怪に手を出すのかなぁ？　犬神くん？」
「アイツは関係ない！」
「そうやって怒るから関係あるって分かるんだよ」
草風は笑みを浮かべていた、喋る毎にボロが出て本音を口に出してしまうタクミを面白がるように。
「マリの時もそうだったからな、何も関係はないとか言いながらデきていた癖に……俺からマリを奪った化け物の癖に……」
「奪ってねーよ、アイツが俺の所に来たんだ、お前のその性格に耐えられなくてな！」

いつも慧音と接するような素っ気ない態度ではなかった、怒りを露にした悲しみが見え隠れする態度だった。

「君はいつもそうやって熱くなる、暑苦しいんだよ君は……君のそういう所が気に入らないんだよ！」

手に黒い携帯電話、カイザフォンを出しスライドし９１３と入力しエンターを押し【Ｓｔａｎｄｉｎｇｂｙ】とファイズフォンより低い声で響く。

「犬神、どうした？」

そこに慧音が上がって来てしまい。

「来るな慧音！」

今は本音が露になっているからか、名字ではなく名前で呼ぶタクミに少し動揺していると。

「変身」

カイザフォンを閉じカイザドライバーに差し込み【Ｃｏｍｐｌｅｔｅ】と響き草風マサトは仮面ライダーカイザに変身した。

「仮面ライダー……！」

「フッ」

カイザは鼻で笑いながら駆け出しタクミに襲い掛かる。

「くっ！」

パンチが繰り出すが間一髪の所を避け足払いを掛け転ばせる。

「こざかしい真似を！」

デジタルカメラ型の武器カイザショットにミッションメモリを挿入し起動させる。

「逃げるぞ！」

「ちょっとま……！」

タクミは慧音を抱き抱える、所謂お姫様抱っこ状態となり。

「しっかり掴まってろよ！」

タクミはその高い屋根の上を駆け出し大きくジャンプし森の中に消えていった。

「逃げたか……ん？」

下を見ると忘れ物があったのか、一人の女の子が寺子屋の中に入っていった。

「使えるな……」

仮面の下、笑みを浮かべ屋根から飛び降りた。

「おい犬神、あの仮面ライダーは……」
「草風マサト……俺の敵だ」

森の中を暫らく歩いていると寄りかかり休む事に。

「アイツは……俺の大切なものを奪った奴だ……いや、俺もアイツから大切なものを奪ったか……」

その言葉から考えられる草風との関係は互いに好きになった女性が同じだった、という事だ。

「園田マリ……俺を初めてオルフェノクだと分かっても離れなかった変り者だよ、俺はそいつに好意を持っていた、アイツもだ、次第に惹かれていき付き合うようになっていた」

タクミの雰囲気からか、もうその女性はこの世にはいないと悟れたが余計な言葉を挟まず聞く事に。

「草風はマリの幼なじみだった、昔から好意を持っていた、それも会って間もない俺に奪われたのに逆上したんだ、そして草風はマリに手を出した、無理やり」

所謂強姦という奴だ、それによるショックが強かった彼女は。

「自害したというわけか？」
「噂だっちまったんだよ……アイツは美容師なんだ、仕事場や世間からの白い目に耐えられなくなってな……草風はそんな事お構い無しに話し掛け噂は悪化していったんだ……」

ここで話は終わり暫らく沈黙が続くと。

「マリはな、俺がオルフェノクになって初めて目標を持たせてくれた奴なんだ……」

「目標？」と返すと。

「夢を守るってな……アイツは美容師になるのが夢でその夢を叶えた、だけどちゃんと守り切れなかったんだ……だから怖いんだよ……目の前で夢を守れないのが、そいつの夢を守るって言って守れないでそいつの気持ちを裏切るかもしれない自分に」

初めてタクミの本音を聞けた、だがそれは悲しいものだった。

「……だから……あまり関わらないように？」

「ああ、小野寺や他のライダー達にも……もしかしてオルフェノクの本能が抑えきれなくなって襲い掛かったらと思うと」

気持ちだけではなく人の信頼も裏切ってしまったらという思いから人と深く関わらず影から人を守っていこうと思っていたのだ。

「怖いのか？」

「ああ……裏切られるより裏切るかもしれない自分がな……どうしても怖いんだよ……」

「なら、私の夢を……守ってくれないか？」

タクミはなぜ裏切るかもしれない自分に頼んできたか分からなかった、聞いてみると。

「お前は絶対人を裏切らない、その怖さを知っている限り一生な」

と返ってきてタクミは彼女の夢を聞く事にした。

「私の夢は、歴史を教えていく事だ、正しい歴史をな、妖怪に比べたら人間の寿命は短いから書物等で頼り間違った歴史を覚えてしまうかもしれない」

妖怪は遥かに寿命は長く書物等で書かれている歴史を体験しているが人間はそうでもない、間違った歴史を身に付けてしまうかもしれない。

「その間違った歴史で争いを起こせば損をするのは人間だ、だからちゃんとした正しい歴史を後世に残す、それが私の夢だ」

その夢を聞くとフッと優しい笑みを浮かべ。

「いい夢だな……俺の夢は……欲張りだから二つもあるよ」

「なんだ？　言ってみろ、笑わないから」

「人の夢を守るのと……」

空を見上げる、森の中だがはっきりと見えた白い雲が浮かぶ青空を見て。

「世界中の洗濯物が真っ白になるみたいに……みんなが幸せなるように……」

少し恥ずかしそうに自分の夢を語るタクミ、慧音は。

「いい夢だな……」

微笑みながら言い更に恥ずかしがるタクミ。

「なぁ上白沢……」

「慧音だ、さっきみたいに慧音って呼んでくれタクミ」

「……ああ、慧音」

「なんだ？」

「ありがとう」、その一言に気持ちを込めて口に出した。

「お涙頂戴ありがとう犬神くん」

そこにカイザが現れた、二人は立ち上がり身構える、だが今のタクミにはファイズドライバーは無かった。

「草風……！」

「待て待て、あのガキがどうなってもいいのかなぁ？」

カイザの後方にある木に先ほど忘れ物を取りに来た寺子屋の生徒の女の子が縛り付けられ回りにはブロンズのフォトンストリームが流れるライオトルーパーと呼ばれる仮面ライダーが何体も居り専用の武器アクセレイガンを持って立っていた。

「貴様は……！」

慧音は改めてカイザ、草風マサトの外道さを知り目を吊り上げ睨む。

「けーねせんせー！」

女の子は泣き叫び助けを求めていた。

「動くなよ？　動いたらこのガキがどうなっても知らないぞ？」

ライオトルーパーAはアクセレイガンの刃を女の子の首筋に近付ける。

「やめろ！」

「何が目的だ？」

「決まってる、お前のファイズギアを奪いにきたが取引だ、このガキと引き換えだ」

渡そうにも今手元にあるのはファイズフォンだけ、だが渡したからとカイザが返すわけがない、一つだけ策はある、ウルフオルフェノクと化し切り抜ける、だが女の子に見られたらここには居られなくなる、慧音も生徒を盾にされたため動けないでいた。

「ファイズフォンで妙な真似はするなよ？　少しでも変な動きしたら流血ものだぞ？
早くファイズギアを寄越せ」

「今は……ファイズフォンしかない」

ファイズフォンを出して見せる。

「それだけでも寄越せ」

そのまま投げ渡すとカイザはそれ掴む。

「渡したんだ、解放しろよ」

「俺はファイズギアと言った、ファイズフォンだけではなぁ～」

やはりこうなったかと思うとライオトルーパーAはアクセレイガンを振り上げた、女の子は目をギュッと瞑り死を覚悟していた、だが。

バキューン！　と銃声が響きライオトルーパーAが持っていたアクセレイガンは吹き飛ばされた。

「何!?」

突然の事態に焦りを見せるカイザ。

「人質なんて正に外道だな」

「不動のおっさん！」

そこに銃志郎が変身するマグナリュウガンオーと妹紅が駆け付けた。

「後それもな！」

マダンマグナムでカイザの手を射ちファイズフォンが弾き飛び手か離れる。

「しまった……！」

タクミはファイズフォンをキャッチし。

「すまねぇおっさん！」

「ならおっさんって呼ぶのやめろ！」
「大丈夫か？」
その間に妹紅が縄を切り女の子を解放。
「わたしはこの子連れていくから」
「ああ」
妹紅は女の子を連れその場から去った。
「タクミ！」
マグナリュウガンオーはファイズドライバーをタクミに投げ渡した。
「……ありがとよ……」
ファイズドライバーを腰に巻きファイズフォンを開いて変身コードを入力。
「なぁ慧音」
「なんだ？」
背を向け閉じたファイズフォンを持った手を頭上高く挙げる。
「俺はあそこにいていいのか？」
「……もちろんだ、私の夢を、頼む」
そるだけを聞くと目を瞑り、笑い。
「変身！」

一気に真剣な表情となりファイズフォンをファイズドライバーと連結させ仮面ライダーファイズに変身した。

「後は任せたぞ」

カイザはその場から立ち去った、追い掛けるつもりはないようだった、今は目の前の敵を倒す、それだけだ。
手首をスナップさせると走りだしライオトルーパー達に戦いを挑む。

「ダブルショット！」

マグナリュウガンオーはゴウリュウガンとマダンマグナムの両方を使い連続で銃撃をライオトルーパーAとBに食らわしていく。

【不動、後ろ】

「ああ！」

ゴウリュウガンを後ろへ向け引き金を引き背後から斬り掛かろうとしたライオトルーパーCに銃弾を食らわす。

「ハッ！」

次々と襲いくるライオトルーパー達を殴っていきながらファイズフォンを抜いて開く。

「来いよ早く」

オートバジンを呼び出すコードを入力するとすぐにライオトルーパー達に銃弾を浴びせながらバトルモードに変形したオートバジンが

駆け付けビークルモードに戻る。
ミッションメモリをハンドルグリップに差し込みファイズエッジとして引き抜く。

『うおおおおおおおおーっ！！！！！！！！！』

アクセレイガンを片手にライオトルーパーDとEが同時に襲い掛かる。
【Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ】とファイズフォンをフォンブラスターに変形させる。

「フ、ハァッ！」

ファイズエッジを振るいアクセレイガンを持ったライオトルーパーDの腕を切断する。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！？」

切断された腕から灰が零れるのを見てパニックになるのを余所にライオトルーパーEはファイズに斬り掛かるが至近距離からフォンブラスターの銃撃を食らい吹き飛ばされる。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！」

自棄になったライオトルーパーDは片手で殴り掛かるかがファイズエッジを腹部に当てられ、ファイズフォンをファイズドライバーに戻すとエンターを押し。

【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】
「ハァァァァァーッ！！！！！！」

スパークルカットでライオトルーパーDを一閃して倒すとその状態を維持したまま倒れたライオトルーパーEにもファイズエッジを突き刺し倒す。

「おっさん！　退いてな！」
「タクミ？」

マグナリュウガンオーは距離を取りつつ銃撃をしファイズはファイズエッジからミッションメモリを抜いてベルトから取ったファイズポインターに挿入し足に装着する、
そしてファイズアクセルからミッションメモリを抜いてファイズフォンに挿入し【Ｃｏｍｐｌｅｔｅ】と流れるとアクセルフォームにチェンジ。

【Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ】

ファイズは高速移動を開始、ライオトルーパー達は次々と弾き飛ばされ宙を舞い中にはジャイロアタッカーというオートバジンの量産型バイクで逃げようとするものも。

【Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】

そのライオトルーパーも含め赤いマーカーで拘束されてしまう。

「ハァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！！！」

そのマーカーは次々とライオトルーパー達を貫いていく。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！」

そしてジャイロアタッカーで走りだしたライオトルーパーもマーカー、アクセルクリムゾンスマッシュで貫き、ライオトルーパー隊は全滅した。

【３．．．２．．．１】

ラスト3秒、カウントが流れ1秒過ぎると【Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ】【Ｒｅｆｏｍａｔｉｏｎ】と流れ高速移動を止め通常フォームに戻った。

◆◆◆

「タクミ」
「なんだよ」
「何でもない」
「なら呼ぶなよな慧音」

居間の中、名前で呼び合う男女そこに居たのだった、壁もなく呼び合う二人が。

第17話『灰色の心』（後書き）

次回はあの切り札の仮面ライダーが！

次回予告

【ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＡＳＨ】

士
「お前にクウガの世界に行ってきて欲しいんだ」

妖夢
「幽々子様～ご飯できましたよ～」

幽々子
「私のご飯……」

レミリア
「桜が見たいわね」

一魔
「変身！」

次回『駆け抜ける稲妻～Ｒｕｎ　ｔｈｒｏｕｇｈ　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ～』

第18話『駆け抜ける稲妻～Ｒｕｎ　ｔｈｒｏｕｇｈ　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ～』

英語はそのままの意味です、駆け抜ける稲妻。

第18話『駆け抜ける稲妻～Ｒｕｎ　ｔｈｒｏｕｇｈ　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ～』

とある世界、大きな爆発が起こり戦いは終わった。

【ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＡＳＨ】
「ヴゥゥゥゥゥゥ……！　ウエエエエエエエエエエエエーイッ！！！！！！！！！！！」

「これでこの世界のデスショッカーは壊滅したか……」

三つの角みたいな物が伸び赤い二つの眼がある黄金の仮面にスペードのマークが横に付き、黄金の甲冑に胸にスペード、コーカサスオオカブトのマークが刻まれあちこっちに様々な生物のマークが刻まれ左腕には薄い箱みたいなアイテムが装着しておりそれにもコーカサスオオカブトのマークが、黄金の大剣を持った戦士が爆発を見つめていた。

【ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ：：ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ】

もう一つ大きな爆発が起き黄金の戦士の隣に降り立つマゼンタの胸にクウガからキバまでのカードが並べられた鎧を身に付け頭部に自身のカードを付けた戦士が立つ。

「終わったか一魔？」
「そっちもか士」

そうこのマゼンタの戦士こそ門矢士が変身する仮面ライダーディケイド・コンプリートフォーム、黄金の戦士の名は仮面ライダーブレ

イド・キングフォーム。
二人は変身を解く、マゼンタのトイカメラを首からぶら下げ、黒いコートを着た青年が門矢士、
ブレイドの変身者はＢＯＡＲＤと書かれたマークのワンポイントを付けたジャケットにジーンズを履いた黒髪の青年の名前は剣崎一魔（けんざきかずま）、とあるブレイドの世界の人間だったがデスショッカーに占領されてしまい
その世界の仮面ライダーは彼一人になってしまったが士が現れその世界を占領したデスショッカーを壊滅させ後は次世代ライダーに任せ連れ出したのだ。

「さ、次の世界に行くか」

一魔は背伸びしながら促すのだが士は待てと言わんばかりににシャッターを切る。

「お前にはクウガの世界に行ってきて欲しいんだ」
「クウガの？　デネブがゼロライナーで行った？」

「ああ」と返す。

「アイツだけじゃかなり不安なんだよ」
「納得、わかった、行ってやるぜ」

黄金の大剣、醒重剣キングラウザーを出現させ持ち、了承した。

「頼んだ、仲間を」

士はカメラに似たバックル、ディケイドライバーを腰に着けサイドレバーを引いて回転させベルトに掛かったカードアルバム、ライド

ブッカーを開いて赤いカードを取り出す。

「変身！」

カードを装填しサイドレバーを押してバックルを回転するとバーコードのようなマークが浮かび上がり【ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ．．．ＤＥＣＡＤＥ】と音声が響き士はエメラルドグリーンの眼にカードが突き刺さったようなマゼンタの仮面、Ｘの字に流れる白く間に黒が流れる模様とマゼンタと白で着色された鎧を身に付けた仮面ライダーディケイドに変身する。

「じゃあデネブとユウスケによろしく言っておいてくれよ」

「おう！」

ディケイドはライドブッカーを持つとそれから刃が伸びソードモードに、それを振り下ろすと次元の壁が現れ一魔はその中に飛び込んだ。

「……あ、そういやアイツ幻想郷にいるって海東言ってたな、教えるの忘れて行かせちまったけど……まぁ妖怪に殺され掛けても死なないから大丈夫か」

無責任な世界の破壊者だった。

◆◆◆

「幽々子様～ご飯できましたよ～」

ここは幻想郷の冥界に在る白玉楼（はくぎょくろう）と呼ばれる大きな和風な屋敷、そこの庭は見事なもので一般にも公開されており観光名所にも、中庭は見れないがそこも見事なものでその庭の手入れをしている庭師が銀髪で緑を基準にした服を着て隣に白くてふわふわしたような玉が浮かんでいる少女、魂魄妖夢（こんぱくようむ）。

「待ってたわよ～」

居間で昼食が用意できるのを待っていたのが薄い紫だが桃色に近い髪の毛で頭に@のようなマークが描かれた布を掛け、水色を基準にした服を着た女性で回りに白い湯気みたいな塊が何個も浮いているのが西行寺幽々子（さいぎょうじゆゆこ）、この屋敷の主である。

「それじゃ頂きましょ」

丸いテーブルに食事が並べられると向かい合うように座り「いただきま～す」と幽々子はさっさと食べようとしたら。

「ヴェッ！？」

テーブルの上に何か落ちてきて料理が一瞬にして駄目になった。

「……」

持っていた箸を落として呆然とする幽々子。

「な、何奴！？」

妖夢は完全に警戒、横に置いていた刀を掴む。

「痛たた～……士の奴……適当に落としやがって……いい匂いするな……」

落ちてきた、剣崎一魔は手に付いたタレを舐め「美味い！」と呑気な事を言っていたが。

「私のご飯……」

「ヴェッ？」

横を向くと殺気立った黒いオーラを放つ幽々子が、一魔は何かヤバイと感じ苦笑していた。

「ヴェエエエエエエエエエエエエーッ！！！！！！！！！！？」

◆◆◆

「桜が見たいわね」
「藪から棒に、どうかなさいましたかお嬢様？」

紅魔館、咲夜が紅茶淹れながら話しているのはこの屋敷の主、コウモリの羽根を背中に生やした赤い瞳で青っぽい髪の毛の少女、吸血鬼のレミリア・スカーレットである。

「なんか紅が薄くなった淡い桜が見たいのよ、バイオリンの演奏を聴きながら」
「バイオリンならプロがいますが？」

奏歌の事であろう。

「そうね……だけど桜も見たいのよね……」

カーテンを見ながら愚痴を零していく、カーテンを閉めているのは日光が入らないため、日光は吸血鬼の大敵なのだ。

「時間操って桜咲かせない？」
「そんな事をしたら風見幽香が殴り込みに来ます」
「まさしくその通りよ」

いつの間にか屋敷の中に入って紅茶を飲む幽香、外には紅美鈴（ほんめいりん）という妖怪の門番がいるはずだが、それを聞いてみると。

「もしかしてトライチェイサーで轢いちゃったのが……」
「だろうね」

ユウスケと海東も呑気にティーブレイク。
門の前では赤い髪で緑を基準にした中華風な服を着た妖怪、紅美鈴が伸びていた、タイヤの後が付いて。

「何しに来たのかしら？」

勝手に堂々と入ってティーブレイクを楽しむ三人に対して殺気を放ちナイフを持ちながら問うと。

「あなたの弟と霊夢が原因よ」
「あの二人が？」
「読めたわ」

レミリアは察した、今の博麗神社の様子が。

「イチャイチャし始めていられなくなったんだよ、なぁ兄貴？」
「そうだな」
「そうよね」

まだいた、総と蒜、キバーラが。

「咲夜、今回は咲一が悪いから許してあげなさい」
「お嬢様がそう仰るのなら……」

ナイフを仕舞い自分用の紅茶を淹れ始めた。

「そしたら風見幽香は関係ないはずでは？」

「私は……なんとなくよ」

視点を横に向けユウスケを見ていた。

「どうかした幽香さん？」

「な、何でもないわよ、ただ今度はどうやってユウスケを虐めようってね」

「そんな～」

誰もがこの二人は将来いいカップル、もしくは夫婦になると思っていた。

「こんにちは～」

「来てやったぜ～」

するとバイオリンのプロ、奏歌とキバットが訪れた、バイオリンケースを持ち。

「ちょうどいいわね、あなた演奏しなさい」

「まぁそのつもりでしたから、予約も入ってますし」

誰もが誰に予約されたかが気になっていた。

「私です、この前お嬢様が聴きたいと仰っていましたので」

「今度言うのが今日ってよくわかったわね」

「お褒めに預かり光栄です」

奏歌のバイオリン演奏会が始まったのだった。

◆◆◆

「で、私のご飯は？」
「幽々子様、今はそれどころではないかと」

食べ物の恨みは恐ろしいと言わんばかりのオーラを放ちながら縛り上げ横に倒れた一魔を見下す。

「お願いします！　許してください！」
「嫌だ」

即答だった、一魔の叫びを聞かずどうしてやろうか考えていると。

「ここにいたのね」
「あら紫～」

スキマが開いて紫が出てきた。

「よりにもよって食事中の幽々子の所に着いちゃうなんて無責任な破壊者ね……」
「知ってるの？」
「ええまぁ……ちょっとした系列で」

紫は居間に入り縄を解くように言い妖夢が縄を切る。

「死ぬかと思った……」
「死ねないでしょ？　あなたは尚更」
「俺のこと、知ってるのか？」

「ええ」と口元をセンスで隠す笑みを浮かべた。

「仮面ライダーブレイド、剣崎一魔、デスショッカーに占領されたとあるブレイドの世界の最後の仮面ライダーにして最後の切り札」

「最後の切り札」、その言葉が出ると浮かない表情となる一魔。

「あら～ちまたで噂の仮面ライダーなの？」
「あ、ああ……なんでその事を？」

紫に問い掛けるとまた笑みを溢し。

「門矢士の協力者、と言えばいいかしら？」

それだけで十分の答えだった、その言葉で納得すると。

「私は八雲紫、この幻想郷を被う結界を管理するものの一人」

自分の役割も含め名前を紹介すると二人にも自己紹介するようにセンスを閉じて振るって促す。

「私は西行寺幽々子、この白玉楼の主で幽霊よ～」
「庭師の魂魄妖夢、半霊です」

半霊とは幽霊でもあり人間でもある、隣に白くふわふわしたものは半霊の分身である。

「俺は剣崎一魔、仮面ライダーブレイドだ」

背面を向いて背中にスペードのマークが付いた青いヘラクレスオオカブトの絵が描かれたブレイドに変身するためのスペードのカテゴリーAのカードを見せた。

「食事をダメにして悪かったわね、門矢士がちゃんと送る先を調整していれば」

「そうね……お腹空いたわね……」

「今藍が食事の準備してくれてるから後でこっちにいらっしゃい」

「ゆかりん大好き！」

食べ物くれる人は基本好きらしい。

「ブレイド……ブレード……剣ですか？」

「まぁな」

一魔は銀色の刃でグリップの上の部分にスペードの絵が描かれた飾りのような長い箱が取り付けれた剣、醒剣ブレイラウザーと重醒剣キングラウザーを見せた。

「二刀流ですか？」

「基本的はね、君も剣の使い手？」

「はい！　同じく二刀流です」

妖夢は鞘に収められた自分の身長以上の長い刀を二刀見せた。

（身長の割りには長い刀だな……だけど力強い斬撃を繰り出してきそうだな）

まるで昔を思い出すかのように見ていた、自分も身長より長い木刀を持ってたなと。

だけど彼女が持つのは真剣、自分の木刀なんてオモチャ程度だろうなと思ったが今は自分も本物の剣以上の剣を持っていると思い出させていた、自分には重いものを背負っている、仲間や後輩の思いというものを。

「どうかしましたか？」

「ん？　なんでもないよ、そうだ、少し相手しようか？　真剣じゃなくて木刀だけどさ」

「よろしいんですか？」

「ああ、だってすごく戦ってみたい！　って目してるからさ」

自分でも気付かない内にそんな目をしておりそれを指摘され少し恥ずかしがる妖夢。

「あらあら、もう仲良くなってるわね～」

「そうね、少し見物しましょうか？」

◆◆◆

白玉楼の中庭、妖夢が綺麗に整えられた場所で二人は木刀を持ち対峙していた。

「あの娘が動いたら勝敗は決まりね」

「どういうことかしら？　うちの妖夢が瞬殺されるとでも？」

自分の庭師兼護衛がすぐにやられると言われ少し反論するが。

「剣崎一魔はそれほどの実力者なのよ、彼は剣術の戦闘に関しては天才よ」

まるでこの目で見た事があるように語る紫、その会話の中、未だに動かない二人の剣士、二人の耳に入るのは風が吹く音だけ。

「……」

すると一魔が動く素振りを見せ妖夢は身構えるが動かなかった。

（フェイント？　まさか私が動かせるために？）

様々な思考を駆け巡らせるがなかなか答えは出ない、答えが出ないのなら、相手が動きを見せないのなら自分から動けばいいという考えが生まれ駆け出した。

（来た……左か……いや、右だな！）

一魔の方が頭の回転が早く。

「見切られた！？」

木刀を右方向に振るった妖夢だが一魔はそれを紙一重で同じように左方向に動き刃先が顔面ギリギリの所で躱しその刹那、木刀を下から振り上げて妖夢の木刀を弾いた。

「聞いていた通りだわ」

「あらま」

勝敗は一瞬で決まった、暫らく沈黙が続く。

「ふぅ……」

その沈黙は一魔が息を吹いた時に破られた。

「どうしつ私の動きを？」

「分かっちゃうんだよ、その動きを見ると次にどんな風に動くが」

一魔は凄まじい洞察力がありそれを戦いに活かし相手の出方を伺うのだが相手が動かないとどんな戦い方をするか判らないという欠点もある。

「だけど妖夢の振り、強かったよ、当たってたら確実に落ちてたな、当たってたらだけど」

大事なことのため二回、その二回で結構傷付くが戦うものならばそれを乗り越えろと一魔の隠されたメッセージがあったり、だが会って間もないためそのメッセージは届かないだろうがそれを頭ではなく心で感じられた妖夢は「はい」と返事を返した。

（ホント昔の俺見てるよいな感じだな……）

懐かしそうに、さらに切なそうに妖夢を見る一魔。

「剣崎さん！　私に剣術を沢山教えてください！」

突然の弟子入りを頼み込む妖夢、彼女にも師はいるが今はいない。

「う～ん……」

少し考え込む一魔、士に頼まれたこともあるが当分はこの世界にいなければならない、なら自分の住む場所も欲しい。

「なら俺が幻想郷にいる間ここに住む、それが条件！」

妖夢は幽々子に頼み込むようなキラキラした視線を送った。

「いいわよ～」と返ってきた。

「これからよろしくな妖夢」

「はい！」

縁側まで歩いてくると紫は思い出したようにスキマを開いた、「預かってるものがあったわ」と言いながらスキマに手を入れがさごそと何かを探していた。

「これ預かってるの忘れてた」

スキマから出したのは青い装甲に黄色いライトが付きスペード、ブレイドのマークが描かれた二輪車。

「ブルースペイダー！」

ブレイド専用のバイク、ブルースペイダーだった。

「士が一緒に送るの忘れてたからって持ってきたのよ」

紫の口振りから士はこの世界に来たのが伺えるがもう別世界に行っただろう、デスショッカーが悪事をほとんどの並行世界で働いているため世界を渡れる彼は忙しいのだ。

「その暇あるなら一人で行かせるなよ」

ごもっともである、士の性格を知るものは仕方ないと片付ける、彼もその一人のためそう片付けた。

「あなたは取り敢えずユウスケに会いに行きなさい、はいこれ地図」

いつもならカオスな事を好む紫だが幻想郷が危険に曝されているという事もあり一魔に地図を渡した、彼女なりにこの幻想郷があるクウガの世界や様々な並行世界の危機であるというのは感じている、だからおふざけとかはできない。

「どーも」

「そうだわ、妖夢、案内してあげたら？」

幽々子の言葉で一魔に幻想郷を案内することに決め、妖夢と二人でブルースペイダーで出掛けることに。

白玉楼に残ったのは紫と幽々子だけだった。

「ねぇ紫、なんであなた、仮面ライダー達に関わってるの？」

どう言った系列で協力者になったかが気になる幽々子は率直に聞いてみた。

「この幻想郷があるクウガの世界が……始まりだからよ、新しい時代を戦う仮面ライダー達のね」

「新しい？」

それだけしか言わなかったがいずれ紫の口からすべてが話されるだろう、その時は近いかもしれない。

（あの方にも話しておいた方がいいかもしれないわね……）

そして冥界の道を走るブルースペイダー、一魔が運転して後ろに妖夢が。

「空を飛ぶより速いかも」と感想を盛らしていると現世に、着いた先は魔法の森の中だった。

「ここは魔法の森……」

一旦バイクを停車させ地図を見る、ユウスケがいる場所は博麗神社と聞いているためその方向を目指すことに。

その頃ユウスケは……

「そろそろ置賜しよーか」

海東のその言葉に同意して紅魔館から出ようとしていた。

「また来なさい、門番通してからだけど」

門番を轢き逃げて屋敷の中に入ったからそこを突っ込まれつつレミリアに言われユウスケ達は博麗神社への帰路に。

「それじゃ私はここで」

幽香とは別方向、途中で別れを告げると。

「送って行こうか？」

ユウスケが誘った、総達はどんな答えが返されるか耳を向けていた。

「お願いするわ」

ちょっとしたツーリングが実現しユウスケは軽くガッツポーズ、トライチェイサーに二人は乗り走り去った。

「小野寺くん幸せそうだな～」

海東は色々と成長しているユウスケを見てこれからが楽しみだと思いつつ見送った。

「今日は兄貴の鯖味噌食べたいな」
「そうだな……帰りに里に寄るか」
葬の言葉で今日の夕飯は決まるのだった。

「あれ？　なんかトライチェイサーの調子が変だな……」
一度停車させアクセルを回しエンジンを吹かし音を聞き首を傾げる。
「壊れたの？」
「いや、普通に走れるけど……大分整備もしてなかったからな……」
あの際にとりに改造されれば良かったと考えたが過ぎた事はしょうがないと片付け。
「取り敢えず送るよ幽香さん」
「お願いね」
トライチェイサーを再び走らせ太陽の畑へ向かった。

◆◆◆

「ここが博麗神社ですよ剣崎さん」

一魔と妖夢は博麗神社へ上がる階段の前に立っており一段一段上がりながら会話をする。

「なんか少しボロいな」

「まぁお賽銭が集まらないですからね」

上から「大きなお世話！」と響いてきた、聞こえていたのではないかと妖夢は思っていた。

二人は境内に上がるとそこには二人の男女、霊夢と咲一がいた。

「咲一さん！」

「あ、妖夢ちゃん久しぶり～」

咲一は妖夢とも知り合いだったというよりは咲一の顔が広いのだ、この幻想郷の中で、地獄にいる閻魔様とも仲がいいぐらい。

「そっちは誰？」

霊夢に聞かれ自己紹介する一魔、妖夢はつい口が滑り仮面ライダーと教えると咲一は自分はアギトだと教えた。

「ここ、クウガの世界じゃ……まぁいいか」

クウガの世界でありアギトの世界でもあるこの世界、士からはクウガの世界としか聞かされていなかった。

「まさかまた仮面ライダーが来るなんて～」

「それでユウスケって奴は？」

「そういえば」と今頃ユウスケ達がいないのに気付き辺りをキョロキョロしていた。

「そりゃあなた方が二人で……」

想像できた、近寄りがたい雰囲気だったから神社から離れたのだと。

「悪いことしたわね……」

「そういえば屋敷出て三時間……おじょーに怒られそうだな……」

「当たり前よ」

咲一の背後に咲夜が現れた。

「げげっ！？」

「三時間以上も喋って……帰ったらどうなるか分かるかしら？」

「ええっと……まぁ確かに咲夜とイチャイチャするのは悪くないけど～」

咲一はかなりのシスコンである、そのため寝てる途中に咲夜のベッドに潜り込むのもしばしば、胸がどれくらい成長してるか揉むことも。

「アンタまだシスコン治ってないの……」

彼女は呆れていたがそれも込みで受け入れているからとやかく言わない。

「それじゃ私達は」

咲夜は咲一を連れて帰った。

「なんか楽しそうな人達だな～」

一魔は能天気な感想を述べていたがその通り。

「帰って来たわね」

十六夜姉弟が去った後、海東達が帰って来たがユウスケがいないのに気が付いた。

「彼ならゆうかりんを送ってたよ」

なぜかそのようなあだ名で呼ぶが気にせず「そっ」と素っ気なく答えた。

そしてまた一魔は名を名乗った、ブレイドの名も込みで士に頼まれここに来たと。

「士がね～、わかった、小野寺くんには僕から伝えておくよ」

「頼む、じゃあ帰ろうか？」

「はい」

一魔と妖夢は要件を伝え神社をブルースペイダーで駆り後にした。

◆◆◆

「今日の夕飯は鍋にしましょう、剣崎さんの歓迎会的な」
「一魔でいいよ、妖夢」

ブルースペイダーで走りながら他愛もない話をしているとブレーキを掛けて停車させた。

「剣崎さん？」
「何かいる気がする……」
「何かって……」

森の中を覗いてみるとそこにはコーカサスオオカブトのような金色の盾と剣を持った怪人がいた。

「カテゴリーK（キング）だと！？」

一魔は咄嗟に自分が持っているスペードのカテゴリーKのカードを見たがちゃんと手元にある。

「……」

コーカサスオオカブトの怪人、コーカサスビートルアンデッドは無言で襲い掛かってきた。

「くっ！　しっかり掴まってろ！」
「えっ！？　ひゃっ！」

ブルースペイダーによる後輪キックをコーカサスビートルアンデッドに食らわせ吹き飛ばすとそれから降りる。
変身ベルトのブレイバックルにカテゴリーＫのカードを挿入し腰に付けるとトランプを繋いだようなベルトが巻かれていき装着、

ゆっくり右腕を伸ばすと「変身！」と叫び手首を捻り左腕を伸ばし右手でバックルの横に付いたターンアップハンドルを引くとバックルは裏返りスペードのマークが描かれた面に変わり「Ｔｕｒｎ　Ｕｐ」と響く、
そこから本来は青いはずの壁オリハルコンエレメントが現れるが黄金に輝いておりそれはコーカサスビートルアンデッドを弾き飛ばし一魔はそれを潜り抜けると。

「あれが仮面ライダーブレイド……」

仮面ライダーブレイド・キングフォームに変身しキングラウザーを握る。
キングブレイドとコーカサスビートルアンデッドとの戦い、普通では絶対見られない戦いだ、なぜならキングブレイドはコーカサスビートルアンデッドの力を使い変身しているからだ。

「……」

ブレイドはキングラウザーを下に向け仁王立ちをしていた、そのままゆっくりと歩きだす。
コーカサスビートルアンデッドは剣を振り下ろしてきたがそれを左手で掴む。

「っ！」

それには激しく動揺した、すごい衝撃だっただろうにびくともしなかったからだ。

「ウェイッ！」

キングラウザーを翳し振り下ろし一閃するとコーカサスビートルアンデッドの体に火花が走り後方へ吹き飛ぶ。

「なんて力強い剣なんだ……」

妖夢はブレイドの力強い斬撃に見惚れており何か盗めるものはないか注目していた。
キングラウザーの刃に電気が纏いその状態で斬撃を食らわしていく、コーカサスビートルアンデッドは盾で防ごうとするがその盾すら切り落とされ体から火花が散っていく。
そして、鎧の五ヶ所から五つの金色の光が出てカードとなり手元に、１０、Ｊ、Ｑ、Ｋ、Ａのカードだった、それをキングラウザーのカードリーダーに装填していく。

【ＳＰＡＤＥ　ＴＥＮ】
【ＳＰＡＤＥ　ＪＡＣＫ】
【ＳＰＡＤＥ　ＱＵＥＥＮ】
【ＳＰＡＤＥ　ＫＩＮＧ】

【ＳＰＡＤＥ　ＡＣＥ】

五枚のカードが装填し終わると刃に金色の光りが宿り【ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＡＳＨ】と音声が鳴り響き目の前にラウズ、装填したカードの３Ｄが五枚並ぶ。

「ヴゥゥゥゥゥゥ…………！」

キングラウザーを強く握り締め走りだし３Ｄを潜り抜けていく。

「ウェェェェェェェェェェーイッ！！！！！！！！！！！」

そしてコーカサスビートルアンデッドに一閃を食らわすと大爆発が起こる。

「んっ！」

危うく妖夢は吹き飛ばされ掛けたが踏ん張り炎が収まるとそこには仁王立ちをし勝利を収めたブレイドとコーカサスビートルアンデッドのラウズカードだけだった。

「なぜ…………アンデッドが…………他の世界からか？」

変身を解くと一魔は手に四つのスートのラウズカード、カテゴリーＡのカードを持ち見る。

「別のブレイドの世界から連れてきたのか？」

考え込んでいると後ろから呼ばれる声が、妖夢が駆けてきた、長居は無用と思いブルースペイダーに乗りその場を後にした。

第18話『駆け抜ける稲妻～Run through Lightning～』

トライチェイサーのは伏線です、トライゴウラムになりましたから～仕方ない（オイッ

次回予告＋長編

『うおぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！』

銃志郎
「なんだこのエ◯ァンゲリオンみたいな仮面ライダー！？」

タクミ
「俺が知るか！」

白蓮
「聞くところによるとあなた方はグロンギやアンノウンと呼ばれる妖怪を退治しているようですね」

ユウスケ
「確かに………みんなと仲良くなれたらそれがもっといい、だけど…………それができないでみんなの笑顔が失われていくのを………

…黙って見てるわけにはいかないんだ……」

奏歌
「あなたの言うこともわかります、ですがすべて物分かりがいいフアンガイアばかりじゃ……」

シンジ
「人と妖怪、俺は両方を守るためにライダーになったんだ！」

咲夜
「咲一だけに、戦わせたくないから……その力を貸して！」

葬
「兄貴？」

総
「俺の本当の名は……天道……総だ……」

霊夢
「咲一がまた……進化した」

ユウスケ
「だから、見ててください、俺の……変身」

次回『凍てつく暴君～ＰＯＷＥＲ　ｔｏ　ＴＥＡＲＥＲ～』

次回からオーズ編スタート！

第１９話『凍てつく暴君～ＰＯＷＥＲ　ｔｏ　ＴＥＡＲＥＲ～』（前書き）

今回はオーズが最初からエ○ァンゲリオン状態、では始めまります。

第１９話『凍てつく暴君～ＰＯＷＥＲ　ｔｏ　ＴＥＡＲＥＲ～』

◆◆◆

ある日の妖怪の山。

「すみませんシンジさん」

その上空、シンジが変身したナイトがダークウイングと合体し巨大なコウモリの羽根を広げ鴉の翼を広げた文と共に並んで飛行していた。

「いいって文ちゃん、この山に居させてもらってる身だしこのくらいは、俺も気になってたし、空を飛ぶ天狗が何人も落下して大怪我をしたり……」

この先は言い難かった、その空を飛んで落下した天狗が大怪我だけではなく死亡しているのもいると口から言い出せなかった。

「大丈夫ですよ……だけど天狗に追い付くなんてどんな手品を使ったのでしょうか？」

「だよなぁ～、俺だってナイトに変身しても文ちゃんに追い付けないのに」

その襲撃犯は天狗のスピードに追い付くぐらいの速度らしくそこ

で幻想郷最速の文と仮面ライダーであるシンジが調べることに、文はシンジを巻き込むのはよくは思っておらず仲間の天狗が依頼に来た時、断らせようとしたのだがその本人が気になったら首を突っ込まずにはいられないため引き受けてしまったため渋々と一緒に調べに。

「そうだ、これ持ってて」

ナイトは龍騎のデッキを出し文の手に渡した、なぜそんなことをしたのかわからなく聞いてみると。

「俺がナイトになってる時は持ってて、お守り代わり程度に思ってて」

つまりは龍騎の時はナイト、ナイトの時は龍騎のデッキを預けるということである。

「迷惑かな？」

「い、いえ、そんなことはないですよ、ありがとうございます」

取り敢えず礼を言う、使い方はシンジのを見ていたから分かる、だが何かものすごい不安に見舞われた。

「シンジさ」

名前を呼ぼうとしたら「待った」を掛けられ首を傾げる。

「俺は文ちゃんって呼んでるんだから文ちゃんもさんじゃなくてくんでも呼び捨てでもいいんだよ？」

文は大抵敬語だがそれは仕事の時でそれ以外はタメである、だがシンジに対しては何か遠慮があった、基本はさん付けか呼び捨てだがシンジは仲良くしたいという気持ちから出た言葉だった。

「それなら……シンジく」

名前を呼ぼうとした時、突然森の中から紫に輝く強力な光線が放たれ空に向かって伸びていく。

「危ない！」

二人は左右に散開し光線を避け地上を見る。

「今のは……一体……」

「来るよ！」

ナイトバイザーを持ち構えると森の中から紫の異形が飛び出し紫の大きなマントのような羽根を広げ羽ばたく、翼竜が羽根を広げたような紫の仮面に紫色の眼に胸には円、オーラングルサークルの中にプテラノドン、トリケラトップス、ティラノザウルスの絵が描かれておりスーツは白く肘から手、膝から爪先は恐竜のような鋭い爪が生えた腕と脚に手には斧型の武器メダガブリューが持たれており肩にも鋭い爪が、腰には三枚の紫色のメダルが挿入された傾いたバックルのベルトが巻かれていた。

「仮面、ライダー……」

それは仮面ライダーと呼べる姿だった、そう、彼は欲望のエネルギーをセルメダル等にしそれを使い戦う仮面ライダーオーズ・プト

ティラコンボだが眼の色が違った、通常は緑だが今二人の目の前にいるのは紫の凶暴そうな目付きをしたまるで暴君のようなものだった。

「かなり危険な感じがします……！」

「ああ……文ちゃん、山を降りてタクミやおっさん、慧音や妹紅に伝えてきて、仮面ライダーが出たって」

近場ならゼロノスに変身できる早苗がいるのだが相手のオーズが実力者であると感じたため経験が少なく未熟なため危険だと感じ里にいる経験豊富なタクミと戦闘のプロと言ってもいいぐらいの銃志郎の名前を上げたのだ。

「……わかりました」

自分も戦いたいと思ったがここは戦闘経験があるナイト＝シンジに任せ人里へ向かって飛行するがオーズは獣のような唸り声を上げつつ羽根を羽ばたかせ文を追い掛け。

『速い！』

その速さは幻想郷で最速の速さを誇る文と引けを取らないぐらいだった。

「待ちやがれ！」

ナイトはオーズを追い掛けたがスピードが段違いだった、このままでは彼女が危ない、そう感じその場しのぎで使うのも癪だが今はこれしかないためファイナルベントのカードを出しナイトバイザーに装填した。

【ＦＩＮＡＬＶＥＮＴ】

足をオーズに向け回転しながらダークウイングの羽根がマントに変化し体に纏わせドリルとなり突貫し加速していき。

「ガウゥゥ！」

オーズはメダガブリューにセルメダルを三枚以上挿入していき上部の恐竜の顔みたいな飾りをスライドさせ口を閉じるような動作をすると【ゴックン！】と何かを飲み込む音が響いてから飾りを上げると【プットッティラ～ノヒッサ～ツ！】という歌みたいな音声が流れメダガブリューの刃にエネルギーが纏い。

「ウガァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！」

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーっ！！！！！！！！！！」

ナイトの飛翔斬とオーズはメダガブリューから繰り出す一撃、グランド・オブ・レイジを炸裂し二つの必殺技はぶつかり、大爆発を起こした。

「キャッ！？」

文はその爆風で遠くに吹き飛ばされ森の中に落ちるが木の枝がクッション代わりとなり難を逃れ身体中が痛むが木を掴んで立ち上がり空を向き消えていく炎を直視、そこにはナイトもオーズも居なかった。

「シンジ……さん……」

飛び立とうとしたが羽根を痛めたらしく思うように飛べず渋々歩いて山を下る事に、山道ではなく森の中を歩く、
理由は山の妖怪は縄張り意識が高いためこの天狗襲撃事件によそ者が介入するのをよくは思っていないからだ。

（ただの天狗や妖怪では歯が立たない）

先の戦いでオーズの尋常ではない速さを目の当たりにしたため恐ろしさはわかった、
山の妖怪だけでは解決できない、それは理解しているため山の妖怪の縄張り意識など関係なしに桀に向かって足を動かしていった。

◆◆◆

「ネズミ」
「ネズミね」

ユウスケとキバーラの前に一匹のネズミ……ではあるがネズミの妖怪の少女が立っていた。

「この耳、某あの有名で著作権が厳し過ぎるキャラクターに似てるよね」

「ええ……大丈夫かしら？」
「要件を言わせてもらえない？」

ようやくその少女がユウスケ達のトークに口を挟んだためそのトークは終わった。

「あんたが小野寺ユウスケ？」
「そうだけど？」

なぜ自分に用があるのかわからなかったが話は最後まで聞いた。

「今日の正午過ぎ、命蓮寺（みょうれんじ）へお越しをと」

「命蓮寺？」と首を傾げ互いを見合わせると。

「やっぱり目を付けたのね、怪人を倒してる仮面ライダーや私達に」

後ろから声が聞こえ振り向くと賽銭箱の前に霊夢が立っていた。

「居たんだ」
「そりゃここは私の家だからね、異変がないか茶葉がない限りは出掛けないわよ」

いつもの霊夢とは違う、そう感じているユウスケは身構えていた。

「聖に伝えておきなさい、妖怪と人間が分かり合えてもアンノウンとは分かり合えないって」
「う、うん」

少女は頷くと博麗神社を後にした。

「霊夢、今の子は？」
「里にある寺知ってるわよね？　そこの命蓮寺って所に住む妖怪のナズーリンって奴よ」
イラつきながら説明していく霊夢、言葉を返すことも許されない雰囲気を醸し出しており言葉を挟めないでいた。
「その寺の主、聖白蓮（ひじりびゃくれん）って魔法使いがいるの、妖怪や神、仏に人間は全て同じって絶対平等主義なの」
「それっていいことじゃない？」
ユウスケから見たらそうであるが幻想郷の人間や妖怪からはそうではないらしいようだが。
「それで怪人も仮面ライダーも平等って言い出したのよきっと……」
「……アンノウン……咲奈さんのこと？」
まさかユウスケに当てられるとは思わず頷く。
「ユウスケ、キバーラ、怪人と人間が分かり合えて共存してる世界って見てきたんでしょ？」
「そうよ……だけどアンノウンと分かり合えてる世界は……」
「グロンギもだよな」
霊夢は咲一の肉親を殺された憎しみからアンノウンとは分かり合えない、そう考えていた、確かにそうである、アンノウンと人間では見方が違う、アンノウンは人間を自分達が管理できるように力を奪おうとアギトになりえる人間を葬っていった。

「命蓮寺には私も行くわ」
「……ああ、ちょっとその平等主義を考え直させた方がいいかもしれないかもな」
怪人達により何人も犠牲者が出ている、そう考えるとその平等主義は少し直した方がいいと思い始めた。
「総達はどうする？」
屋根の上を掃除している総と蒜に聞いてみる。
「そうだな……兄貴どうする？」
話し掛けるが総は上の空だった、何かを思い出しているかのように。
「兄貴？」
「ん？　なんの話だ？」
聞いていなかったらしく蒜は始めから簡単に説明した。
「俺は残るよ、蒜が行ってこい、少しは勉強になるかもしれないから」
「わかった」
するとまた空を見上げて何か考え込み始めた。

◆◆◆

寺子屋の職員室、タクミ、銃志郎、慧音、妹紅に山での事件を話し文がその事件を起こしていた仮面ライダーの事を話していた。

「シンジが？」
「はい……」

「大天狗には？」
「いえ、許可なんて取ろうとしても山の妖怪だけで解決しようと見栄を張ると思ったので」

大天狗とは天狗で二番目に偉い天狗で主に管理職を勤めている。

「なるほどな……それに永遠亭に行ってきたらどうだ？」

文の傷んだ羽根を見て慧音は進めてきた。

「ですが……シンジさんが」

一緒に飛んでいたシンジの安否が気になり傷の手当てどころではないようだが。

「んな傷で着いてこられても迷惑だ」

面倒くさそうにタクミは立ち上がるが山には行く気があるみたいだった。

「そうだな、ここの人達には恩があるからな、ゴウリュウガン」

【ああ】

銃志郎も立ち上がりサングラスを掛けた。

「妹紅とおっさんと行くからてめえは永遠亭に行ってこい」

「わたしは強制的かよ」

「……分かりました」

するとタクミはデルタフォンを慧音に渡す。

「なんかあったらこれで俺のファイズフォンに電話しろよ、使い方は声で番号を言えば俺のに繋がるから」

ファイズフォンの番号を教え外に出るとオートバジンに跨る。

「おっさんは後から着いてきてくれよ」

「だからお……まぁいい、分かった」

タクミと妹紅が先に出発し銃志郎は後から着いていく形で出発した。

「では行くか」

「はい」

慧音は文を連れ永遠亭に向かっていった。

◆◆◆

「ん……あ……ここは……」
「気が付きましたシンジさん？」

その頃シンジは気絶から覚ますと目に入ったのは早苗とデネブだった、ここは守矢神社らしい。
起き上がろうとしたらデネブに止められ。

「まだ寝てなきゃダメだよシンジ」
「俺……ナイトデッキは！？」

早苗の手にちゃんと握られておりホッとした。

「森の中で倒れてるのを見付けたんですよ？」

だんだんと何があったかを思い出し始めていた、オーズと戦っていたことを。

「そっか……ちゃんと生きてるんだ……」

オーズ、仮面ライダーと戦っていた事を二人に伝えると。

「その仮面ライダーでしたら……」

隣の部屋の襖が開いておりそこには一人の短い黒髪の青年が布団で眠っていた。

「すごい爆発が見えたので何事かと森に入って、それから見付けた時に紫の仮面ライダーがいたんです、私はすぐにゼロノスに変身しようとしたのですが急に苦しみだして変身が解除されて倒れちゃったんです」

正直戦わないでよかった、そう思っている、それはデネブもだった。

「腰にベルトが着いているんですが取れなくて、その中の紫のメダルも」

青年はまるで死んでいるかのように眠っており寝息もあまり聞こえていなかった。

「目が覚めてまた暴れるなんて事がなければいいのですが……」

ユウスケと葬、キバーラと霊夢は言われた通り命蓮寺に訪れていた。

「妖怪の寺なんだけど元々は宝船だったのからそれが妙に人間が感心を持っちゃって人間の信者も来るのよ」

要は博麗神社と守矢神社の商売敵。

「なるほどね……確かに興味湧くわ」

「海東が聞いたら颯爽と侵入するわね」

「そうだな」

ユウスケ、キバーラ、蒜と喋っていくと命蓮寺の扉に手を掛けその中に入っていく。

「ようこそ命蓮寺へ」

入るとすぐ目の前に金髪っぽい長髪で黒い服を着た女性がそこにいた、彼女がこの寺の主である聖白蓮である。

「初めまして、小野寺……」

ユウスケが自己紹介しようと前に出ようとしたが霊夢が先に出てしまい。

「要件は何かしら?」

「分かっていますよね? 私の考えが」

「そうね、どうせ妖怪や人間は平等だから怪人も仮面ライダーも平等とか言いたいんでしょ?」

完全に喧嘩腰な霊夢、これでは話にならないと感じたユウスケは一旦話を止めた。

「一回落ち着こ霊夢ちゃん？　そんな喧嘩腰じゃできるものもできないから」
「……ごめん」
明らかに自分は冷静じゃなかった、そう思い謝り後はユウスケに任せた。
「小野寺ユウスケ、仮面ライダークウガです、こっちは影山葬、仮面ライダーパンチホッパー、この子はキバーラ」
後の二人を紹介すると寺のもっと奥に進んでいき居間のような部屋に入り座る。
「それで話とは」
「先ほど彼女も言っていた通り怪人と仮面ライダーについてです」
やはりと言う表情をし白蓮の話を聞く。
「私は人間も妖怪、神も仏も対等であると思っています、それを広めるためにこの寺を建てました」
「それは立派なことです、聖さん」
目的を聞くと賞する言葉を送る。
「俺は人や、この幻想郷に住む妖怪達の笑顔を守るために怪人や悪の道に入ってしまった仮面ライダーと戦っています」
ユウスケも自分が戦う理由を話す。
「確かにそれは立派なことです」

その言い方からして怪人やライダーを倒すことをよくは思っていないと判断できた。

「ですが私は怪人も仮面ライダーも平等だと思っております」

「人や妖怪を殺してでもですか？」

その質問に白蓮は頷くと霊夢は少しピクッとなるがキバーラが肩に乗り耳元で話し掛け落ち着きを取り戻す。

「あなたが言う通り怪人も仮面ライダーも平等かもしれません、ですがすべてがあなたと同じ考えではないことは分かりますよね？だからこの命蓮寺を建てた、そうですね？」

少し圧されつつ頷く白蓮。

「俺が戦ってきたグロンギは人間を見下していました、そして人間を自分達のゲームのための動く的としか見ていませんでした……そしてアンノウン、アンノウンは人間を自分達の管理下に置けるように特殊な能力を持った人間を次々と殺しています、今も」

ここでアンノウンの話が終わると思いきや。

「だから霊夢はアンノウンを憎んでます、自分が好きな人の姉をそのためだけに殺され不幸な目に会うことになったので」

まさか自分がアンノウンを敵視し憎んでいる理由を言うとは思わず呆気に取られていた。

「自分がなんで敵視しているか、なんで嫌いなのか、それを伝えな

いと分からないよ」

考えてみれば自分の口から言ってはいなかった、それを代わりにユウスケが言ってしまった、自分が話さなければならないのに。

「悪かったわね……また」

「いいよ、俺も経験あるから、理由も聞かないで殴り掛かった事がね」

苦笑しつつ昔の事を思い出していた。

「ですが中にも人間と共存を求める怪人もいます、オルフェノクやファンガイア、味方になってくれるイマジンも、だからその志を間違った方向にさえ行かなければ」

それ以上は言わなかった、後の答えは自分で見付けるしかないから。

「……分かりました、お時間を取らせてしまいすみませんでした」

「いえ、あなたみたいな人と会えて良かったと思います」

微笑みながら言葉を返し立ち上がろうとしたのだが。

「あ……足が痺れた」

正座をしていたため足が痺れ立ち上がろうとしたのだが倒れてしまった。

「兄貴……さっきまでかっこ良かったのに」

「ごめん」と蒜に詫びを入れると起き上がり痺れが取れるまで座ることに。

「だけどユウスケがここまで成長してたなんて思わなかった」
「俺だってただ情報収集をしていただけじゃないよキバーラ」

ニッと笑いながら喋ると蒜は何か気になっていた様子だった。

「どうかした蒜？」
「ちょっと総の兄貴が気になって」
「総を？」

蒜は頷くと口を開いた。

「俺、兄貴のこと全然知らないんだ、昔何をやっていたのかも、聞いても話してくれないし……組織に入ってたのは知ってるけど他は全然」
「蒜でも知らないことがな……」

博麗神社では。

「……お前は必要ない、二度と俺の前に現れるな」

総の前に赤いカブトムシ型のメカが飛んでいたが目を背けていた。

「太陽の英雄……そんなの過去の栄光だ、俺は自分の妹を守れなかった……だから名前を偽った……過去を忘れるために……天道総真と決別するために……だからもうお前は必要ないんだ、カブトゼクター」

カブトゼクターはしょんぼりとしたような反応を見せその場から消え代わりにキックホッパーとは別のベルトが落下してきた。

第19話『凍てつく暴君～POWER to TEARER～』（後書き）

次回予告

タクミ
「どうする？」

妹紅
「道はここだけじゃないからな」

エイジ
「ウガァァァァァァァッ！！！！！！！！！！！！」

ゼロノス
「一体何が！？」

霊夢
「妖怪の山が……」

魔理沙
「凍っちまったぜ……」

次回【メダルと暴走と氷河期】

第２０話『メダルと暴走と氷河期』（前書き）

守矢神社がェ……大変な事に（爆）
プトティラが好き過ぎてたまりません！

第２０話『メダルと暴走と氷河期』

◆◆◆

「どうする？　バカ正直に参道から入るか？　天狗が見張ってるぞ？」

「お前が何バカ言ってるんだよ、モコるぞ」

妖怪の山の禁、茂みの中ではタクミと妹紅は山に入るための参道を見張る天狗達を見て話していた。

「じゃあタクミ、お前が囮になれ」

「またかよ！」

つい大声を出して口を塞がれる、見張りの天狗達は身構えて更に見張りに力を入れる。

「おいおい……力入っちまったじゃん」

「わりぃ……」

考え込んでいるとタクミは後ろに停めていたオートバジンを見て。

「そうだ」

「なんだアレ！？」

天狗達の目に入ったのはバトルモードとなり飛び回るオートバジンだった。

「逃がすな！　もしかしたら襲撃事件の犯人かもしれない！」

天狗達はオートバジンを追い掛け飛び去っていった。

「いつも俺を巻き込むのが悪いんだから」

日頃の恨みを晴らしたかのように笑みを浮かべていた。

「お前なぁ……慧音にちくるぞ？」

「じゃあお前が職員室でタバコ吸ってたのちくるぞ？」

「スミマセンデシタ」

「行くぞ」と言い見張りがいなくなった参道を登り始め妖怪の山に入っていった。

「ここにいたか小野寺と博麗は」

命蓮寺にユウスケ達を探して慧音が訪れてきていた。

「あら慧音さん」
「白蓮殿、どうもだ」
寺の主と軽く挨拶を交わすと座るように進められたので自分も座る。
「私達を探してたの？」
「一応お前達にも話しておいた方がいいと思ってな」
妖怪の山での襲撃事件の話をし始めシンジが行方不明、謎のライダー、文が永遠亭にいるとこの順番で説明していく。
「シンジが……その恐竜みたいな仮面ライダーって……」
キバーラは色合いで名前はすでに浮かんでおりオーズ・プトティラコンボであると教え簡単にオーズについて説明、初めて幻想郷でグムンと戦った時にグムンに力を与えたセルメダルを使い戦うと。
「だけど……プトティラコンボの眼は緑のはずなのよね、なぜかしら？」
「暴走してるのかな？」
蒜も自分の意見を上げその意見に皆は注目し「それだ」と声を揃えた。
「あり得るわね」
「あり得る……」
眼の色が違う暴走した仮面ライダーにはユウスケが一番知ってい

た、なぜなら自分もであるからだ。

「タクミ達を追い掛けよう」
「そうね」
「賛成」

これはさすがに心配だと思いユウスケ達も妖怪の山に向かうことに。

「これじゃ完璧異変ね、私も着いていくわ」

霊夢も名乗りを上げ役者達は立ち上がろうとした刹那、突然大きな爆発音が轟いた、
急いで外に出てみると目にしたのは。

「妖怪の山が噴火？」

妖怪の山の頂上から煙が上がっていた。

「山は火山ではない、となると何かが爆発したのでは？」

様々な意見が出ていた。

◆◆◆

ユウスケ達が外に出る数十分前。

守矢神社でシンジがお茶を飲んでいた。

「どうですかお加減は？」

「大分良くなったよ、ありがと早苗ちゃん」

「いえいえ」

早苗に対しては年下の友達であるからしてさん付けは仕方ないと考えている。

「だけどあの男、全然起きないな」

「だよな」

オーズの変身者である青年を見ながら三人は話していた。

「起きないと何も分からねーよ」

「あ、俺そろそろ夕飯の準備してくるよ」

デネブが立ち上がろうとしたその時、青年はピクリと動きだし何かにうなされているような苦痛の声と表情をしながら目覚めそうだった。

「起きる！」

「大丈夫ですか？」

三人は青年の元に近付き完全に目覚めるのを待っていたが「逃げ

て……」と小さく弱々しく囁いた。

「逃げて？」

だが遅かった、青年の瞼が上がると目は紫に輝いておりまるで何かに取り付かれているように。

これには危険と察しデネブは二人を担いでできるだけ遠くに離れ青年に掛けられていた掛け布団が吹き飛びベルトの右側に掛けられていた丸いアイテム、

オースキャナーが勝手に浮遊し変身ベルトのオーズドライバーのバックルが傾きオースキャナーをバックルの上でスライドさせ中の三つのプテラメダル、トリケラメダル、ティラノメダルを読み込ませてしまう。

「うわぁぁっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

断末魔にも聞こえる叫び声を上げると【プテラ！　トリケラ！ティラノ！　プッ卜ッティラ〜ノザウル〜ス！】と歌のような音声が流れ青年はオーズ・プトティラコンボに変身してしまい立ち上がる。

「ウガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！！！！！！！！」

手にはメダガブリューが持たれており振り回し暴れ始める。

「おい何が起きてるんだ？」

神奈子と諏訪子がやってくるが。

「二人も逃げた方がいいですよ！」
「どうかしたの？」

首を傾げ聞いてみるがデネブは二人を担いだまま走り去った。

「一体何が……え　〝？」

部屋を覗くと獲物を探し辺りを見渡すオーズが立っており唖然としていると。

「グルル？」

【プットッティラ～ノヒッサ～ツ！】とメダガブリューをバズーカモードという形態にし銃口に紫色のエネルギーが溜まりゆき神奈子達に目が付いた。

「あ、いや……お邪魔しました！」
「ちょっと先に逃げないでよ！」

二人も走りだしオーズから逃げた、するとメダガブリューに溜まったエネルギーを放つシンジがナイトに変身している時にも使ったストレインドゥームを炸裂してしまった。

そして現在、大きな爆発音が響いた後に至る。

「あの辺り、守矢神社がある辺りよ！」
「何かすごく嫌な予感してきた」

「なんだよ今の爆発？」
「わたしに聞くなよ」

山を登るタクミと妹紅にも爆発音が聞こえ頂上の辺りから煙が上がっているのが見えた。

「守矢神社の辺りだなあそこ……」
「最悪かもしれないぜ」

頂上の辺りから紫色に輝く光線が天に向かって放たれているのが見えたためファイズフォンを出し変身コードを入力し腰にあらかじめ巻いておいたファイズドライバーに連結しファイズに変身した。

「行くぞ」
「ああ」

二人は走りだし頂上を目指した。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

守矢神社、だが神社自体はストレインドゥームで吹き飛び崩れており焦げた柱や崩れた壁しか残っていなかった。

「グルル……！」

オーズはメダガブリューを斧型のアックスモードに変形させ振り回し暴れていた。

「神社が……」

茂みに隠れ涙目になる早苗と神奈子と諏訪子。

「どうする？　このまま戦っても」

返り討ちに会うのは目に見えていた。

「俺は……アイツを助けたい」

いきなり何を言いだすのかとシンジに注目する。

「アイツ、苦しんでたからさ……本当はあんなことしたくないんじゃないかな」

オーズは獣のような遠吠えを上げながら神社の階段を降りようと残っていた鳥居を潜ろうとしたら鳥居の柱に火花が散り崩れてその下敷きとなった。

「鳥居がぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！」

早苗は血の涙を流しつつ叫ぶ。

「いいのか？　壊して」

「構わねーよ」

境内にファイズと妹紅が上がってきた。

「お前らかぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！」

御柱をどこからか出して持ち上げ神奈子が殴り掛かろうしていたがデネブとシンジに止められる。

「今はそれどころじゃないでしょ！」

「落ち着きましょうよ神奈子様～！」

ファイズは正直面倒くさそうに右手をスナップさせるとオートバジンが隣に着地しビークルモードに変形しミッションメモリをハンドルグリップに挿入し引き抜きファイズエッジとして起動させる。

「さて……コイツやれば天狗襲撃事件も終わりか」

と走りだそうとしたのだが。

「タクミ後ろ！」

シンジは腰にVバックルが巻かれている状態で出てきて注意をするような呼び掛けをし後方から光弾が飛んできてすぐに振り向きファイズエッジで切り払いする。

「なんだ！？」

目に入ったのは鷹のようにも鷲にも鴉のようにも見える黒い怪人で腰に鷲のマークが刻まれたバックルが付いたベルトが巻かれ大きな黒い羽根を羽ばたかし空を飛ぶショッカーグリードが迫っていた。

「なんだよあの鴉！」

「結構ヤバいな」

左右に飛び込みショッカーグリードの突進を避けるファイズと妹紅、ショッカーグリードは足を地面に付く。

「ショ～ッカァァァァァァァーッ！！！！！！」

「変身！」

シンジはナイトに変身しソードベントのカードをナイトバイザーに装填し巨大な黒い槍ウイングランサーを召喚し手に持つ。

「早苗ちゃんとデネブは離れろ！　多分……君が適う相手じゃない」

腰にゼロノスベルトを巻いた早苗に告げた。

「ですが！」

「早苗、城戸の言う通りだ」

「まだなって間もないんだから……」

二人の神に言われ渋々無理やり納得するとマスターカードを装填しゼロノス・アルタイルフォームに変身。

「分かりました」
「妹紅も着いていけよ、もしかしたらおっさんが来てる途中かもしんねーから」
「任せるぞ」

Aゼロノスと妹紅達は神社から離れていくのを見て。

「俺が仮面ライダーと戦うからタクミは」
「ああ」

ファイズはショッカーグリード、ナイトはオーズに向かって一斉に走りだした。

【チェンジ！　マグナリュウガンオー】
「轟龍変身！」

銃志郎はマグナリュウガンオーに変身しウルフキーというマダンキーを取り出しゴウリュウガンに挿入する。

【マグナウルフ】

ゴウリュウガンの銃口から光線が放たれると赤い魔方陣が現れそこにメカニカルな銀色の狼が召喚された、
これがマグナウルフである、マグナウルフはバイク形態であるビークルモードに変形しマグナリュウガンオーを乗せると走りだす。

「頂上で何が起きているんだ……」

マグナウルフの走行音が響き渡る妖怪の山、そして頂上から聞こえ、見える爆発音と閃光、不安を抱きながらも進んでいった。

守矢神社では二大ライダーはほとんどショッカーグリードとオーズに圧されてしまい苦戦を強いられていた。

「強すぎるだろコイツら……！」

倒れ、ファイズエッジを杖代わりにし立とうとするファイズ、ナイトもナイトバイザーを杖代わりにし立ち上がっていた。

「ショ～ッカァァァァーッ！！！！！！！」

「がぁぁぁぁぁっ！！！！！！！」

オーズはメダガブリューにセルメダルを挿入しグランド・オブ・レイジを炸裂し地面に突き立てると地割れが発生しファイズ達の方へ向かっていき岩等で吹き飛ばされてしまう。

「ぐわぁぁぁぁっ！！！？」

「がはっ！？」

階段から転がり落ちてしまい二人の姿は見えなくなってしまった。

「グルル……がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！」

オースキャナーでメダルを読み込むと【スキャニングチャージ！】と鳴り響きオーズの足下から広範囲に掛けて凍結していく。

「霊夢～！」
「魔理沙！」

魔理沙がユウスケ達と合流し妖怪の山がある方を向くとその緑豊な妖怪の山がみるみるうちに真っ白に凍っていってしまっていく。

「妖怪の山が…………」
「凍っちまったぜ…………」
「タクミ…………」

「山が！」

森の中を走るAゼロノス達、足下や木々が凍っていくのを見て立ち止まる。

「上で何かあったんじゃ…………」

心配そうに頂上の方向を向く妹紅だがそこでデネブが。

「早苗！　イマジンだ！」

「こんな時に！」

身構えていると凍った森の奥からこちら側に向かって歩いてくる足音が聞こえてくる、いつでも攻撃できるようにスペルカードを出しているとその足音の主を直視した。

「やっと人が見付かったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！！！」

その現れた赤鬼のイマジンは感激の声を上げて喜びを表していた。

「お前は？」

妹紅が恐る恐る聞いてみると。

「俺か？　俺の名前はモモタロス、ちょっと訳有ってこの森の中に迷い込んじちまったんだよ」

モモタロスは首を左右に動かし体をほぐしながら説明しているとモールイマジンが地面から飛び出し回りを囲んでしまった。

「なんか楽しいことになってるじゃねーか」

するとどこからかバックルがＩＣカード専用の改札機みたいなＴ字のマークが描かれたターミナルバックルが付き右横に赤、青、黄色、紫色のスイッチが付いたベルト、デンオウベルトを取り出し腰

に巻く。

「俺に前振りはいらねー、最初から最後までクライマックスだぜ！」

「意味わからん」

神奈子に突っ込まれつつ黒い定期券入れのようなケース、ライダーパスを持ちターミナルバックルにタッチ、セタッチという行為をすると【Ｓｗｏｒｄ　Ｆｏｒｍ】と電子音が流れ駅で流れるようなメロディーがベルトから流れるとモモタロスの姿は変わっていく、赤い桃が開いたようなデンカメンに赤い鎧の仮面ライダーに。

「アレは電王！」

驚いたように声を上げていくイマジン達。

「電王ってなんだおデブ？」

「電王は……イマジンから時間を守る時の守護神……まさかあのイマジンは電王に変身する、時間の影響を受けない特異点に取り付いた……」

モモタロスが変身した仮面ライダーの名は仮面ライダー電王・ソードフォーム。

「俺、参上！」

親指を立て顔に向け左腕を前に、右腕を後ろに伸ばし姿勢を低くしポーズを取った。

◆◆◆

「妖怪の山が……」

博麗神社からも妖怪の山の異変は見えており総は握りこぶしを作り今にでも飛び出しそうだった。

「凍ってしまった妖怪の山……それを溶かせるのは太陽の輝き……」

カブトゼクターが残したライダーベルトを見て手を伸ばす。

「俺は再びコイツを……」

総は悩むのだった、過去の栄光であったものになっていいのかと、その栄光に浮かれ取り返しの付かない事をしてしまった事を思い出していた。

第２０話『メダルと暴走と氷河期』（後書き）

今回はかなりフラグが立ちましたよ！
ショッカーグリードにモモタロス！、そしてオーズ！これでやることはただ一つ！セイヤーッ！ですよ！

次回予告

タクミ
「助けたいなら手加減するな、全力で立ち向かえ」

マグナリュウガンオー
「なんだよあのエ○ァンゲリオンは！？」

早苗
「あなたは？」

健太郎
「僕は野上健太郎」

文
「龍騎を届けないと……シンジくんに」

白蓮
「聖輦船使いますか？」

シンジ
「まさか……アレは！」

次回『仮面と伝説とダブルライダー』

『ライダーダブルキィィィィィィーック！！！！！！！！！』

第２１話『仮面と伝説とダブルライダー』（前書き）

タイトルがいいものに（笑）
最近昭和やダブルライダーが出る確率が高いような。

第２１話『仮面と伝説とダブルライダー』

◆◆◆

シンジとタクミは肩を貸し合い見つかりにくくするために凍り付いた森の中を歩いていた。

「大丈夫かシンジ！」
「なんとかな……」

「ったくシンジ、お前手加減してただろ？」
「バレたか……」

オーズと戦っている時、明らかに手加減し戦っていたのを気付いていた。

「アイツ、苦しんでるんだよきっと……暴れたくないのに、何かに取り付かれてるような」
「……シンジ、そいつ助けたいなら手加減するな、全力で立ち向かえ」
「タクミ？」
「……」

後は何も言わなかった、言う必要はない、後は自分で考えろと。

「わかった……」
「タクミ！　シンジ！」

そこに銃志郎が変身したマグナリュウガンオーが合流した。

『おっさん！』
「おっさん言うな！」

同時におっさんと呼ばれ言い返すが今はそれどころではない。

「大丈夫かよ」
「ギリギリな」
「妖怪の山全体が凍り付いてしまった」

マグナリュウガンオーの言葉に耳を疑った、まさかここだけだと思っていたからだ。

「山だけではなく冷気は桀にも侵攻してる、このままじゃ幻想郷が凍り付いちまう」
「そこまで騒ぎが広がるなん……おっさん後ろ！」

マグナリュウガンオーが振り向くとそこにはオーズ・プトティラコンボが獣のような呻き声を上げながらゆっくりと迫っていた。

「なんだよあのエ〇ァンゲリオンみたいな奴！」
【不動、例えが何とも言えないのだが】

ゴウリュウガンの静かなる突っ込みが放たれたがそれを完全スルー、マグナリュウガンオーはマダンマグナムを持ち身構えていた。

「相手が何であろうと関係ない、行くぞゴウリュウガン」
【……ああ】
「今の間はなんだ？」
【なんでもない】
マグナリュウガンオーは走りだしオーズに立ち向かった。

「奏歌、外見てみろよ」
「分かってるよキバット」
キャッスルドラン、キバットが外を見て騒いでいた、妖怪の山が凍り付いているのを見たのだ。
「だけどあのままでいいのか？」
奏歌はエプロンを掛けバイオリンを作っており外に見向きもしていなかった。
「う～ん……」
考え込んでいると部屋の扉が開き中に咲夜と咲一が入ってきた。
「失礼します」
「お、メイドの姉ちゃんにその弟じゃん」
「どうかしましたか？」

作業を止めて二人に近寄る。

「お嬢様からのお依頼です、山で起きている異変を解決して欲しいようです」

「あのまま棹も凍結したら紅魔館を巻き込むからね、冬支度もできてないから大変なんだよ」

要件を伝えると奏歌は掛けていたエプロンを取り椅子に掛けるとクローゼットから上着を出した。

「わかりました、レミリアさんの頼みならば、行くよキバット」

「おしゃ！　キバッて行くぜ！」

三人と一匹はキャッスルドランから出て妖怪の山へ向かった。

「ダブルショット！」

マグナリュウガンオーとオーズは激しい戦いを繰り広げていた、シンジとタクミは接近戦だったのに対しマグナリュウガンオーは長距離戦、接近戦が特異のオーズに取っては厳しい戦いである。

「俺達があんなに苦戦したライダーにあそこまで有利な戦いするなんて……」

自分達がまだ青臭い若造だと改めて思い知らされた。

「まだまだだ！」
「ガルゥゥ！」

マグナリュウガンオーとオーズが戦っている頃、モモタロスと遭遇した早苗達、モモタロスはソード電王、早苗はＡゼロノスとなり妹紅、神奈子、諏訪子、デネブは１０体以上のモールイマジンと激闘を繰り広げていた。

「オラオラ！」

ソード電王はベルトの両側に掛けていたパーツを組み立てた剣、デンガッシャー・ソードモードを振り回しモールイマジンを斬り付けていた。

「ありゃタクミ以上の癖の悪さだな……」

タクミより酷い戦い方に唖然としつつも向かってくるモールイマジンの顔面を蹴り付ける。

「あの紫の暴君よりは……」

オーズに破壊された神社をどう再建しようかと計画を立てながら御柱でモールイマジンを叩き付けていく。

「神奈子様、すごく面倒くさいって雰囲気が……」
「そうでしょ早苗……あそこまで骨組みまで木っ端微塵に……」

「神奈子……その怒りをこのモグラ達にぶつけよう……」
「そうだな……」

モールイマジン達は何か悪寒を感じていた、この神二人を相手にしていいのか、だが遅かった。

『おらぁぁぁぁぁーっ！！！！！！』
『ぎゃぁぁぁぁぁっ！！！！！？』

モールイマジン達はばったばったと凪ぎ倒されていく。

「気の毒だな……あのイマジン達」
「そうだな」

デネブの言葉にソード電王に便乗しつつモールイマジンを哀れみの目で見ていた。

「そろそろトドメだ！」

ライダーパスをターミナルバックルにセタッチすると【Ｆｕｌｌ Ｃｈａｒｇｅ】と流れデンガッシャーの刃に電王ライダーズのエネルギーの源であるフリーエネルギーが溜まっていき。

「必殺、俺の必殺技、パート１！」

刃が外れブーメランのように回転し飛び交い次々とモールイマジンを切り裂いていく。

「バジンとタクミが合わさった以上か！」

モールイマジン達はエクストリームスラッシュにより爆死していった。

「これで終いだ、悪く思うなよ」

デンオウベルトを取ると変身が解けモモタロスの姿に戻るとＡゼロノスも続く。

「で、お前も仮面ライダーなのか？」

「そうだぜ、俺は仮面ライダー電王、まぁだけど俺の契約者とはぐれちまってな……迷ってたところなんだよ」

イマジンの契約や特異点についてなどはユウスケやデネブに聞き済みであるため深く聞かなくてもわかる。

「ちょっと知らね？　不幸そうな奴なんだけどさ」

だが知る訳もなく首を横に振る。

「そっか……ならいいや、ならさ着いていっていいか？　俺の契約者が見つかるまで」

「別にいいんじゃないか？」

「そうだね～」

神二人は何かスッキリした様子だった、それほどまでにストレスが発散できたのだろう。

「あれだけモコればスッキリするか」

「モコるってなんですか」

デネブのごもっともな突っ込みに「言ってない、ボコるって言ってる」と全否定。

「じゃあよろしく頼むぜ！」

【プットッティラ～ノヒッサ～ツ！】、【ファイナルキー発動！】と響きマグナリュウガンオーのマグナドラゴンキャノンとオーズのストレインドゥームが放たれ光線は激突しものすごい衝撃が走り凍った木々を粉々に砕け散っていく。

「おっさん俺達のこと考えろよ！」

だが言い返す暇がなかった、少しでも気を抜けば自分の攻撃が返されるからだ、ストレインドゥームの威力は今ので分かった、直撃したら一溜まりもないだろう。

（状況は最悪だな、どうするか）

だんだん後ろへ押されていき後がない状況に陥っていく。

（剣司が居れば攻撃してくれるんだけどな……）

自分のもう一人の相棒と呼べる男の名前を心中で呟く、だが今はいないし同じような魔弾戦士の力も今はない、なので今は自分でどうにかするしかなかった。

「ゴウリュウガン！　威力上げれるか？」
【当然】
光線の輝きが強まり押し返していくと照射時間も限界が訪れ攻撃は止まる。
「ハァ……ハァ……ハァ……」
オーズはマグナリュウガンオーとの戦いで息を切らしておりメダガブリューを落とし膝を付いた。
「よし……」
「おっさん！　あのベルトのメダルを撃ち抜いてくれ！」
「無茶を……だが無茶でもやるのがプロだ、な、ゴウリュウガン」
【その通りだ】
ゴウリュウガンをふらつくオーズの腰にオーズドライバーに向け狙いを定め引き金を引こうとした刹那、光弾が飛んできてマグナリュウガンオーの胸部に直撃した。
「うわぁぁぁっ！？」
火花を散らしながら吹き飛ぶが地面に足を付きふらつきながらも立つ。
「ショ～ッカァァァァァァーッ！！！！！！！！」
ショッカーグリードが加勢に来てしまったのだ。
「またアイツか……気を付けろおっさん、あの怪人、めちゃくちゃ

ゃ強いから」

タクミからそんな注意をされるとは思わずそれほど強い怪人だと理解し身構える。

「ガァ……ガァ……」

オーズはメダガブリューを拾おうとしていたがショッカーグリードに腕を蹴り上げられ苦戦した事により暴行を受ける。

「アイツ仲間を……！」

マダンマグナムとゴウリュウガンの引き金を引いていき弾丸を連射しショッカーグリードに浴びせていくが効果は余りないようだった。

「？」

ショッカーグリードは何事もなかったようにマグナリュウガンオーに狙いを変える。

「効いてない……」

【気を付けろ不動、あの怪人、ものすごく危険だ】

「ああ……」

ゴウリュウガンの銃口を向け横にジリジリと動き相手の出方を見ていた。

「剣崎さん剣崎さん！」

その頃白玉楼、妖夢が一魔を探し襖をバンバン開いていくが見付からず居間に入り幽々子が呑気にお茶してた。

「どうかしたの？」

「妖怪の山がすごいことになっているんですよ！」

「あー、凍っちゃってるんでしょ？」

「はい、なので剣崎さんに知らせようと探しているのですが……」

だが見当たらない、その事に首を傾げていると。

「一魔くんならもう行っちゃったわよ？」

「え〝……剣崎さん私を置いていかないでくださーい！」

それを聞いた途端白玉楼を出て妖怪の山へ向かった。

「元気がいいわね～二人とも」

一魔は冥界を出ておりブルースペイダーで妖怪の山を目指していた。

「オーズ・プトティラコンボか」

一魔には山の異変をオーズが起こしているのを感付いていた。

「急ぐか」

アクセルを深く回して更に加速した。

◆◆◆

「あのまま飛んだら打ち落とされるわよね」

命蓮寺、ユウスケ達はまだ出発しておらず。

「天狗のスピードに着いていけんだろ？　わたしでもお手上げだぜ」

オーズ・プトティラのストレインドゥームを食らえばまず助からない、ここのメンバーは知らないがショッカーグリードもいる、このまま行っても返り討ちだろうと考えていると。

「なら船で行きますか？」

白蓮が手を上げてニコニコしながら話に入ってきた。

「船って……なぁ兄貴？」

「そんなもんどこに……」

「あるぞ」

慧音の言葉に耳を疑うライダー組。

「言ったじゃない、この命蓮寺は宝船が変形したものって」

「一発ぐらいなら耐えられるかと」

言ってたなと思い出していると命蓮寺が慌ただしかった。

「なんか騒がしいですね？」

再び寺の中に入るとその中ではナズーリンや他の妖怪が見知った顔の男を追い掛けていた。

「……」

「やぁ小野寺くん！　ここすごいよ！　宝の山だ！」

海東が侵入していたようだった。

「海東さんェ……」

「夢想封印」

「マスタースパーク」

「え？　ぎゃぁぁぁぁぁっ！！！！！！！？」

霊夢と魔理沙はスペルカードによる攻撃で海東を黙らせておいた。

「これでいいわよね」

「え、まぁ……いいか」

海東の後始末はナズーリン等に任し。

「じゃあ変形させましょう」
「ジャ○ファイト！　とかトラ○スフォーム！　やトラン○フォーメーションとかみたいな掛け声するの？　もしかしてマク○スになるの！？」

妙なことで興奮するユウスケ、どこでそんな知識を身に付けてきたのだろうか。

「ユウスケ、なんかキモい」
「あ、ごめん、つい興奮しちゃった」
「と、取り敢えず……配置に着いてください」

白蓮の指示で妖怪達は動き出しアナウンスが響く。

「えっ！？　なんで放送機器があるんだよ！？」
「河童に付けてもらいました」

里の文化を考えれば無理もないが妖怪の山の河童は技術が進んでいるから放送機器を取り付けるのも簡単である。

「兄貴、なんか緊張してきた」
「ああ、この寺が船に……」
「男ってホントこういうの好きね」

すると準備が整ったのか辺りから機動音が鳴り。

「では命蓮寺はこれより聖輦船に変形します」

ガシャン！　ギシャン！　と響き命蓮寺は変形し船に変形した。

「海賊船っぽい！」

なぜか放送機器から機動戦士クロスボーンガン○ムのＢＧＭが流れ始めた。

「宇宙海賊！？　何？　ク○スボーン・バ○ガード！？」

「兄貴！　それよりもゴーゴーボイジャーだよ！」

「キバーラ、軽くユウスケ達、壊れてない？」

「軽くじゃないわ、かなりよ霊夢」

ユウスケと葬のテンションに呆れていた。

「では聖輦船！　出航してください！」

聖輦船は妖怪の山に向かって出航した。

◆◆◆

「ダブルショット！」

「ショ～ッカーッ！」

ゴウリュウガンとマダンマグナムの銃弾とショッカーグリードの

光弾が激突し爆風を起こした。

「そろそろキツい！」

オーズもそろそろ回復しそうでこのままではショッカーグリードと二対一となりかなり不利な状況に陥る。

「タクミ！　無理でも行くぞ！」

「ああ！」

二人は変身しようとしたが突然バイクのエンジン音が響いた。

「誰だ？」

マグナリュウガンオーは振り向きそのエンジン音を響かせているバイクに乗った者を直視、だがシンジとタクミは驚倒する、そのバイクに乗った者を見て。

「まさか……アレは！」

タクミが高ぶっている気持ちで喋る。

赤い眼にマフラー、二人の共通点は深い緑の胸部と黒く二本の白いラインが流れるスーツを着て腰に赤い風車を埋め込んだライダーベルトを巻いている、

片方の仮面は薄い緑で銀色の手袋とブーツ、もう片方は黒で赤い手袋とブーツの仮面ライダー……

「伝説の仮面ライダー……！」

銀色の手袋とブーツを履いたのは仮面ライダー新1号、赤い手袋

とブーツのは仮面ライダー新2号、そうこの二人は全仮面ライダーの原点の、様々な悪の組織と戦ってきた伝説のダブルライダーだった！

「仮面ライダーだと……アレも」

二台の新サイクロンは停車しダブルライダーは降りる。

「ここは我々に任せろ！」

1号は右腕を左斜めに上げポーズを取る。

「ショッカーグリードは俺達が倒す！」

2号は左腕を曲げ力強さをアピールするポーズを取る。

「ダブルライダー……だけどあの仮面ライダーは！」

オーズをどうしても助けたい、シンジは訴えようとしていた。

「大丈夫だ、我々のライダーパワーを注入すれば仮面ライダーオーズは正気に戻る！」

「マグナリュウガンオー、君はこの二人を連れて離れるんだ！」

「分かりました」

マグナリュウガンオーはシンジとタクミを連れて離れた。

「ショ～ッカーッ！」

ショッカーグリードは声を上げるとダブルライダーに襲い掛かっ

た。

「行くぞ一文字！」

「ああ本郷！」

◆◆◆

「なんかまたすごい音がしてますよ」

落ち着いたと感じ早苗達は山を登り始めていた。

「なんか楽しそうなことになってるじゃねーか」

楽観的な視点でモモタロスは言葉を出す。

「楽しくないだろ」

「そうだよ……神社がねぇ……」

守矢神社の神と巫女（一応神だが）、イマジンはお先真っ暗だった。

「まぁ元気出そうぜ！」

「そ、そうだ！　元気があればなんでもできる！」

妹紅も元気付けようと言葉を掛けるがどんよりする一方だった。

「逆効果だな」

「ああ」

何か関係ない二人も気持ちが暗くなってきていた。

「イマジンだ！」

「俺も感じた！」

モモタロスとデネブはイマジンの気配を察知し一同は身構える。

「スゥ……ハァ……」

目の前に現れたのは灰色のモモタロスに似ているが角が長く巨大な鎌を持つデスイマジンと右腕に鉤爪、左手に杖のライオンに似た金色のイマジン、アルビノレオイマジンと兵隊としてモールイマジンが数体現れた。

「気を付けろ早苗、藤原さん達、このイマジン達かなりのやり手だ！」

「これちっとやべーな」

腰にデンオウベルトを巻くモモタロス、それに続いて早苗もゼロノスベルトを巻く。

「デネブ、ベガフォーム行くよ」

「おう！」

一斉に変身しようとさたのだが。

「ん？　この気配は……」

モモタロスは何かを感じた、懐かしい気配を。

「モモタロス見付けた！」

「お！　健太郎～！」

デスイマジン達とは反対方向からやってきたのは茶髪の少し小柄な青年だった。

「やっと見付けたよ」

青年はモモタロスの元に駆け寄ると「誰？」という目で見られたため。

「僕は野上健太郎、仮面ライダー電王です」

自己紹介を済ませると早苗は健太郎の腰に巻かれたターミナルバックルに赤い携帯みたいなケータロスが装着されたデンオウベルトを見た。

「モモタロスのとは違う……」

だがデスイマジンとアルビノレオイマジンは光弾を放ち座談をする自由を与えてくれなかった。

「今はそれどころじゃないな」

「うん、そうだね」

健太郎とモモタロスはライダーパスを持つ。

『変身……！』

セタッチすると健太郎のベルトからは【Ｌｉｎｅｒ　Ｆｏｒｍ】と流れモモタロスはソード電王、健太郎は鎧が電車の真っ正面を描いたようなもので仮面は新幹線のようなデンカメンの仮面ライダー電王・ライナーフォームに変身した。

「変身！」

早苗もゼロノスに変身しデネブが憑依しＶゼロノスとなる。

「最初に言っておく！　胸の顔はやはり飾りだ！」

『やっぱりそれ言うの』

神奈子達のその言葉が空を切った。

「嘘はいけないから」

かっこつけて言うが言葉が言葉なため全然決まらない。

「健太郎、ダブルライダーは？」

「ショッカーグリードとエイジの所だよ」

「まぁアイツらなら大丈夫か」

ソード電王はデンガッシャー・ソードモード、ライナー電王はソード電王の仮面以外に青や黄色、紫のデンカメンが付き峰打ちにラ

イダーパスを挿入したデンカメンソードを持つ。

（すごい派手な剣）

早苗は内心思っていたがライナー電王はその剣を大切そうな感じだった。

「ふぅ……翼も楽になってきた」

文は永遠亭から出て里に行くと聖輦船が妖怪の山へ向かっているのが見えていた。

「……」

龍騎デッキを出して見ていると。

「これを……龍騎を届けないと、シンジくんに」

呟くとデッキを仕舞い羽根を広げ羽ばたき飛翔していった。

第２１話『仮面と伝説とダブルライダー』（後書き）

今回は次回予告なしでサブタイだけ。

次回『落ちる太陽』

第２２話『落ちる太陽』（前書き）

今回は過去編です。
彼の過去が明らかに。

第２２話『落ちる太陽』

◆◆◆

今から１２年も前、あるカブトの世界の少年が銀色のベルトと出会った。

「これは……」

拾うとどこからか助けを求める声が聞こえ辺りを見渡している、今いる場所は隕石が落下した事により新宿が瓦礫の山となっていた。

「助けて……！」

その声は弱々しかったが生きたいという強い意志が籠もった声だった、少年は探した、その助けを求める声の主を一生懸命。

「見付けた！」

少年はその助けを求める声の主の下半身が瓦礫に埋まった少女を見付けた、だが瓦礫に阻まれ少女がいる場所に入れないが手だけは伸ばせたため差し伸ばす。

「掴まって！」

「うーん！　届かない……！」

後少しのところ、少年は乗り出して少女の手を掴み瓦礫から引っ張り出した。

「ありがとう、お名前は？　わたしは矢車日和（やぐるまひより）」

「僕は……」

なぜか少年は名前を言うのを躊躇ったが自分の名を日和に教えた。

「天道（てんどう）……総真（そうま）」

それから七年の歳月が経ち少年と少女は大人になっていた。

「お兄ちゃんおはよう」

「おはよう日和」

少女だった黒髪の長いまだ体は成長途中である日和は高校を卒業し大学生に、少年だった総真は祖母の資産があるため働かず家でニート生活だがやる事は何もかも完璧にこなしていた。

日和は両親が新宿での隕石の落下により死亡してしまったため総真の祖母に引き取られ天道の性をもらい正式に兄妹となった、本当の兄妹のようであると評判がいい二人である。

「忘れ物ないか？」
「ないよ、ご飯いただきます」

朝食を食べ始めると総真は新聞を読んでいた、記事には「連続失踪事件多発！だが一週間後には帰ってくる！」というものだった。

「ごちそうさま、じゃあお兄ちゃん、行ってくるね」

トートバッグを持つと食器を台所に置いて「行ってきます」と行ってから外に出た。

「行ってらっしゃい日和」

総真は微笑みながら日和を見送るとそこに赤いメカニカルなカブトムシのメカ、カブトゼクターが飛来する。

「ワームか」

ワームとは、カブトライダーズの敵である地球外生命体で人間に擬態する能力がある。

「行ってやるか」

総真は赤いバイク、カブトエクステンダーに乗り走りだしていった。

港にある廃倉庫で黒いライダースーツにヘルメットを被り右腕に丸いマシンガンを装着したワームと戦うための組織ＺＥＣＴの兵隊ゼクトルーパーが緑色の虫みたいな怪人、サナギワーム数匹と交戦していた。

数はゼクトルーパーが勝っているが力量では。

「脱皮します！」

一匹のサナギワームの体が赤く光ると皮が向け脱皮し新たな姿となる、ムカデに似たジオフィリオワームとなってしまった。

「ギュルル！」

ジオフィリオワームはクロックアップをしゼクトルーパー達を攻撃、弾き飛ばしていく。

「少隊が！」

そこにＺＥＣＴの隊員である青年、加賀美新人（かがみあらと）が駆け付けたが後の祭りとも言える状況でゼクトルーパー隊は全滅しサナギワームが次々とジオフィリオワームへ脱皮していた。

「来い！　ガタックゼクター！」

右手を翳すと青いメカニカルなクワガタのメカ、ガタックゼクターが飛来し手に収まる。

「変身！」

腰のライダーベルトに装着すると【Ｈｅｎｓｈｉｎ】と電子音が流れ新人は重装甲の銀色の鎧に肩に大砲を備え赤い眼の仮面ライダーガタック・マスクドフォームとなる。

「行くぜ！」

二つの大砲から光弾を放ちジオフィリオワーム達に直撃させると爆発が起き吹き飛んでいく。

「ギュルル！」

ジオフィリオワーム達はクロックアップして散開してしまうがガタックゼクターの顎を動かすと鎧が浮かび上がる。

「キャストオフ！」
【Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ】

装甲は弾け飛び頭に二本の角が上がり薄い青の装甲が見える、ガタック・ライダーフォームに変身したのだ。

「クロックアップ！」

ベルトの右側のスイッチを押しクロックアップを作動させて自分も光速の空間の中に入りワームを追う。

「待て！」

ガタックは肩の双剣ガタックダブルカリバーを抜きジオフィリオワームを一匹一閃する。

「オリャァァァッ！！！！！！」

ガタックダブルカリバーをハサミのように組み立てジオフィリオワームを挟み込む。

「ライダーカッティング！」

ガタックゼクターのスイッチを押し【Ｒｉｄｅｒ　Ｃｕｔｔｉｎｇ】と流れカリバーにタキオン粒子の光が纏われそのままジオフィリオワームを切り倒した。

「まずは一体！」

次の敵がいる方向へ走りだし仮面の下、その目でジオフィリオワームを確認するとガタックゼクターのスイッチを押していき顎を動かす。

【１．２．３】

「ライダーキック！」

【Ｒｉｄｅｒ　Ｋｉｃｋ】

ジオフィリオワームの前に立ちジャンプして上段回し蹴りを食らわし。

「ギュルルル！！！？」

ライダーキックで倒したのだが残りの一匹が見当たらず探しているとその一匹が見つかるが一組の親子の方へ向かっておりどうしても間に合いそうになかったがそこに赤い閃光が通り過ぎると最後の一匹は爆死した。

「天道！」
「爪が甘いな加賀美」

赤い角に薄い鎧、水色の眼にカブトゼクターがライダーベルトに装着された総真が変身すれ仮面ライダーカブト・ライダーフォームだった。

二人は人気がない場所に移動しクロックアップが解除されると同時に変身を解く。

「すまねー天道、助かった」
「気にするな、俺も助けられることもあるからな」

二人は拳をぶつけ合い感謝の意を見せ合うと新人は。

「なぁ天道、最近の連続失踪事件知ってるよな？」
「朝刊にも載っていた、一週間後には戻る、そして」
「その失踪した人間が帰るとその家族の一人が失踪する」

あの新聞の記事には「失踪した人物が戻るとその人物の家族の一人が失踪していく」とのようなことを書かれていたのだ。

「その失踪し帰ってきた奴を調べた結果、完全にワームだった」

「そうか」と繋げるとカブトエクステンダーに跨る。

「何かあったら連絡してくれ」
「わかったぜ」

二人は別れそれぞれの戻る場所へと向かっていった。

そして学校など部活やサークルに入っていない学生の下校時間、総真は自宅で日和の帰りを待っていた。

「遅いな……」

だが帰ってこず、遅くなるなら連絡があるはずと思い電話を掛けるが繋がらない、ふと今朝の朝刊の記事や新人との会話の内容を思い出す。

「まさか……」

最悪な展開を予想してしまった、事件に巻き込まれたのではないかと。

「だが日和は……」

日和には秘密がある、自分と祖母、新人にしか知らない秘密が。

「……探しに行くか」

総真は探しに行こうと支度し自宅から飛び出ていった。

ＺＥＣＴ本部では。

「クロックダウンシステム？」

新人はＺＥＣＴが提案した計画の資料を読み部下に聞いていた。

「なんでもワームにクロックアップを使わせないでゼクトルーパーでも倒せるようにするためだそうですよ」

資料を一通り目を通していると携帯に着信が入り電話に出る。

「もしもし？　天道か、どう……日和ちゃんが！？　わかった、もう上がりだからすぐに行く！」

携帯を閉じると走りだしすぐに日和を探しに外へ出ていった。

◆◆◆

「日和！」

「日和ちゃん！」

名前を呼び暗い夜道の中探しているが全然見付からなかった。

「日和ちゃん見付かったか？」

「ダメだ……く、もし例の事件に巻き込まれていたら……」

「だけどあの子は！」

「ああ……まさかとは思うがワームはそれを狙っているかもしれない……」

ワームは知能が高い、ライダーの変身者は独自のネットワークで知れているため身内を狙われる可能性も十分にあるが日和は特別であった。

「加賀美、後は俺が探す、お前は帰って休んでくれ」

「けどよ！」

「いい、俺が探す」

新人は迫力に圧され渋々了承し帰宅し総真だけは日和を探し走り回った、朝日が昇るまでずっと、だが見付からず帰宅した。

「日和！」

だが自宅に帰宅した形跡もなくまだ帰って来ていないのがわかった、携帯に電話を掛けても電源が入っていないためと流れる。

「くそ……」

そこに朝早くにも関わらず呼び音が鳴り日和が帰ってきたのだと思いすぐに玄関に出向き叱ろうと考えていた。

「日和、こんな朝にかえ……て……」

絶句した、目の前にいたのは胸、口から血を流し倒れていた日和だったからだ。

「日和！　大丈夫か！　おい！」

すぐにしゃがみ抱き抱えてお超し揺さ振り目覚めさせようとする。

「おにい……ちゃん……」

薄らと目を開け弱った声で呼ぶ。

「何があったんだ！？」

「ワームに……誘拐されてね、擬態されそうになったんだけどわたし……ネイティブだから」

ワームは二種類存在する、地球に逃亡してきたネイティブ、それを追うワーム、日和はネイティブのワームだったのだ。

「もう喋るな、すぐに病院に！」

首をゆっくり横に振りもう助からないと示す。

「お兄ちゃん……楽しかったよ……」

「お、おい！　日和ぃ！」

目からボロボロと涙を流し日和の頬に落ち弾けていく。

「あり……がと……おにい……ちゃん……」

最後の力を振り絞りその言葉をするとカゲロウに似たシシーラワームとなり息耐えてしまった。

「日和……」

自分の衣服は血塗れだった、だがそれにも気付かず呆然と空を眺めていると。

「天道！　日和ちゃんは……」

新人が心配してやってきたが時は遅かったのだ。

「嘘だろ……誰だよ、誰がやったんだよ！」

地面に膝を付いて日和の死を悔やむ新人。

「くそ……くそぉおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！！！！」

総真の叫びは虚しく空へ消えていった。

その後、新人に勧められＺＥＣＴに入ったが馴染めず、カブトゼクターとライダーベルトを放棄し組織から姿を消したがホッパーゼクターと別のライダーベルトを持ち姿を現した、天道総真ではなく矢車総として。

◆◆◆

そして現在。

「俺は一度お前を捨てた、それなのになぜ出てくるんだ、カブトゼクター」

カブトゼクターは再び総の前に現れており問い質していた、それほどにまでカブトに変身しろと言うのかを。

「なぜなんだ……なぜ俺を選ぶんだよ……」

地面に膝と手を付き苦悩していると。

「それがお前の運命だからだ、天道総真」

後ろに何者かが現れた、立ち上がり振り向くとそこには茶髪で白いジャケットに茶色いズボンを履いた男が立っていた。

「誰だ……俺の本当の名を知っているのは」

「俺の名は……」

「風見志郎」

第２２話『落ちる太陽』（後書き）

Ｖ３とアギトが大好きです！
歌もデザインも！

次回予告

総
「風見……志郎だと……」

風見
「お前のプライドを取り戻すためだ」

風見
「変……身……ブイスリャアアアアーッ！！！！！！！！」

キックホッパー
「やられ続けているのは俺の性に合わないからな……」

村紗
「右方向から砲撃が！」

キバーラ

「デストロンの改造人間じゃない！」

風のエル
「人は人のままでいればいい」

霊夢
「アンノウン……！」

咲一
「お待たせ霊夢ちゃん！」

「天の道を往き、総ての真を司る男……」

次回『1の技と2の力とプライドのV3』

第２３話『１の技と２の力とプライドのＶ３』

◆◆◆

「風見……志郎だと……」

総には聞き覚えがあった、この男、風見志郎の名に。

「なぜ……俺の前に……」

「お前のプライドを取り戻すためだ」

腰には二つの赤い風車が取り付けられその間にＶの文字が描かれたベルト、ダブルタイフーンが巻かれていた。

「俺のプライドを？　そんなもの、当の昔に捨てた……」

「妹を守れなかったからか？」

静かに頷いた、なぜその事を知っているのかわからないが風見が言っている事は間違いではないからだ。

「風見志郎、なぜ俺のプライドを取り戻しに来た？　牙を抜かれた俺の」

「牙を？　いや、お前はまだ抜かれていない、むしろ鋭くなってきている」

その言葉が分からなかった、なぜそう言い切れるのか。

「家族が殺され牙が抜かれるとは無いことだ、お前は休息をしていたんだ、牙を鋭くするための」

「何がわかる？　お前に何がわかる！」

「わかるさ……妹が殺された気持ちも……牙が抜き取られそうになった気持ちも」

その雰囲気は少し寂しげだった、そして悲しみと怒りが入り混じるがそれを口に出しては言わない、彼はプライドが高い男だからだ。

「天道総真」

「その名前で俺を……！」

捨てた名前で呼ばれるのは気に入らなかった、目を吊り上げ怒気を放ちながら睨み付けると。

「俺と戦え」

思いもよらない言葉だった、だが今のむしゃくしゃした気持ちを抑え切れず誰かに当たりたかったため。

「いいだろう」

ホッパーゼクターが飛び跳ねてきてそれを手に収める。

風見は両手を右に水平に伸ばし左へ大きく回す。

「変……身……ブイスリャァァァァーッ！！！！！！！！」

左腕を引きそして右腕を引いてから左腕を右斜めに伸ばすとダブ

ルタイフーンの風車は回転し強い風が巻き起こり風見の姿を変えた。
その姿は赤い仮面、緑の眼にライダースーツ、白と赤の体に白いマフラーとブーツ、手袋のトンボのようにも見える姿をした、仮面ライダー1号と2号の技と力を受け継いだ仮面ライダーV3（ブイスリー）。

「変身！」

総はキックホッパーに変身。

「お前から掛かってこい」
「望み通りそうさせてやろう！」

キックホッパーは声を荒上げV3に向かって走りだし飛び跳ね上段回し蹴りを繰り出すが。

「何……？」

右腕一本で止められ左手で足首を掴まれる。

「お前の力はその程度か？」
「ぐわっ！？」

そのまま遠くへ投げ飛ばされるが木に足を付きバネのように飛び跳ね突撃する。

「トオウ！」
「っ！」

だがその目論みも虚しくV3は高く飛び上がるとその落下を利用

し。

「Ｖ３ィィィ……キィィィーック！！！！！！」

Ｖ３の基本の必殺技Ｖ３キックが炸裂さた！

「ぐわぁぁぁぁっ！！！！！？」

Ｖ３は背中に直撃し地面に叩き付けられ石でできた道は吹き飛び倒れたキックホッパーを中心に小さなクレーターができていた。

「これで終わりか？」

「な、舐めるな！」

左足を軸にし足払いを掛けようとするが避けられる、そして立ち上がる。

「Ｖ３ィィィ……パァァァーンチ！！！！」

次に強力なＶ３パンチが炸裂し拳が空を切りキックホッパーの右頬に直撃し殴る。

「くっ……」

その拳で何かが目覚めたのか仮面の下、目付きが鋭くなりあまり使わない腕でＶ３の左頬に拳を叩き込んだ。

「やっと本気になったか」

もう一度Ｖ３パンチを繰り出すがキックホッパーは左手だけで拳

を受け止めるとキックを繰り出し直撃するとＶ３は後退る。

「……」

キックホッパーは身構えないで腕を下げただＶ３を見るだけで余裕を見せてきた、Ｖ３キック、Ｖ３パンチを連続で受け総の中で何かが目覚めていた。

「少しは戻ったか？」

「やられ続けているのは俺の性に合わないからな……」

「なら本気で来い」

だがキックホッパーは変身をホッパーゼクターを取り解いた。

「どうした？」

「もういい……牙は磨ぎ終えた」

今巻いているライダーベルトを外しゆっくりと歩き賽銭箱の上に置くとそこに置いておいたもう一つのライダーベルトを腰に装着する。

「どうしてもやりたいなら山で起きている異変を終らせてからにな」

「取り戻したな、プライドを」

「ああ……先も言ったがやられ続けているのは俺の性に合わないからな、

日和みたいな悲劇、繰り返してはならないんだ……お前もだろ、風見志郎」

「ああ」

風見志郎がＶ３になったのは家族が悪の組織デストロンに殺害さ

れ復讐心から来たものだった。

「日和を殺したワームがなんだったのかは分からない、だが同じような悲劇を繰り返さない事はできる」

「そうだな」

妖怪の山の方を向き。

「太陽の輝きで山の……いや、この幻想郷を被う氷を溶かすか」

「行くぞ、天道総真」

二人は妖怪の山へ向かって行くのだった。

◆◆◆

聖輦船の中……

『スゲー！』

ユウスケと葬は船内を走り回っていた。

「コイツらガキか」

「ガキよ霊夢、それも寺子屋の子供以上の、だから慧音、生徒にしない？」
「ごめんこうむるキバーラ」
二人と一匹はかなり呆れており白蓮は「あらあら」と近所かお隣さんの奥さんかお姉さんみたいな反応をしてニコニコとしていた。
「元気だなぁ二人は！」
海東は縄にぐるぐる巻きにされ頭を下に向け宙吊りにされていた。
「アンタはバカ？」
「お宝バカよ」
「こっちなら生徒にしてもいいな」
「いえいえ、そしたら私達の方で引き取りますよ？」
山ではとてつもない大異変が起きているのに船内はかなり緩やかだった。
「ん？　山の裏側に何か……」
学生が着るセーラー服ではなく船乗りが着るセーラー服を着用した青っぽい緑の髪と瞳のこの聖輦船の船長、村紗水蜜（むらさみなみつ）が何かを目撃しよく確かめると目を大きく開いて驚愕した。
「なんか見つけたのか？」
なんとかなく操舵室にいた魔理沙は村紗が向いている方向を向いて唖然とした。

「え゛…………」

同じようにその山の裏側から見せる巨大な影を見て言葉を失った。

『なんじゃありゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～！！！！！！！！！！！！？』

二人の叫びはシャウトし船内のスピーカーから響き渡り何事かと慌て始める。

「どうかしましたか！？」

すぐに白蓮が操舵室に駆け付けその悲鳴の原因を直視した。

「アレは………巨人？」

目に写ったのは山の裏側からゆっくりと姿を表す黒くマントを付け二つの角を生やした巨人だった。

「キングダークじゃない！」

キバーラはその巨人、キングダークを見て声を上げた。

「確かGOD機関の幹部だっけ？」
「そうよ、だけどアレ、ロボットでその幹部の呪い博士はあの中に隠れてたからね」

キングダークの正体について説明していると霊夢は何かに気付いた。

「てことはああいうのが何個もあるってこと？」
「そうだけど……」
「アレ」と言って指を差した方向には裏側から現れたのを合わせ五体のキングダークだった。
「キングダークが五体もぉ！？」
キングダーク達は聖輦船に向かって角から破壊光線を発射。
「面舵いっぱい！　緊急回避！」
右に向け大きく動き船体は急な動きのため激しく揺れ船内では転ぶものが多かったが破壊光線はどうにか避けれたがキングダーク達は再び破壊光線を放とうとエネルギーを貯め始めた。
「ヤバイヤバイ！　海東さん行くよ！」
「ならこの縄を解いてくれないか？」

甲板に出るユウスケ、海東、キバーラ、蒜、霊夢、魔理沙。
「キングダークがすごい数……よく隠してたよな……」
「確かにね……」
チャージに時間が掛かるのか、キングダーク達は動きを止めていた、今がチャンスと思い早く変身して破壊しようと考えたのだが。

「胸が開いたぜ？」

キングダークの胸部が開き中から大量の飛行系の怪人達が放たれた。

「用意周到過ぎるぜ！」

怪人達は真っ直ぐ聖輦船に向かってきている、このまま船内に侵入されでもしたら厄介な事になる。

「海東さん、射撃系のライダー召喚して」

「オッケー……」

「変身！」と叫びユウスケはクウガ・マイティフォーム、海東はディエンド、蒜はパンチホッパーに変身。

「じゃあ今日は出血大サービスと行きましょうか！」

何枚かディエンドライバーにカードを装填し仮面ライダーＧ３－Ｘ、仮面ライダーゾルダ、クワガタのような仮面ライダーギャレン、仮面ライダーラルク、青い鬼の仮面ライダー威吹鬼に仮面ライダードレイク・ライダーフォーム、メカニカルな銀と緑の仮面ライダーバースを召喚した。

「じゃあ一斉射撃ね！」

威吹鬼は音撃管・烈風というトランペット型の武器の引き金を引き鬼石と呼ばれる弾丸を放ち怪人達に命中させていく。

「じゃあ行くよ」

召喚した仮面ライダーの必殺技を炸裂させるクロスアタックのカードを装填すると各ライダーは必殺技の準備に入る。

ゾルダは契約モンスターであるマグナギガの背中にマグナバイザーを連結させＧ３－ＸはＧＸランチャーをＧＸ－０５に取り付けギャレンは醒銃ギャレンラウザーに三枚カードをラウズしていきラルクもラルクラウザーにカードをラウズ、

威吹鬼は音撃管を口に近付けドレイクゼクターに水色の光弾を生成していきバースは胸部に大砲を付けると一斉に必殺技が放たれ怪人達を打ち落としていく。

「やっぱ弾幕はパワーだぜ！」

その光景を見て叫ばずにはいられずミニ八卦炉を向けてマスタースパークを放ち後方にいた怪人達を砲撃が飲み込んでいく。

「これもオマケ！」

ディメンションシュートも放ちほとんどの怪人を打ち落としたがまだ残りがおり船に取り付いてしまった。

「やっぱり残っちゃったか」

召喚したライダーは消えると次のカードを装填していた。

「弾幕は難しいな」

今にでも船体に穴を空けて船内に侵入しようとしている怪人、主にグロンギやアンノウン、イマジンを見て呑気に言っているが。

「呑気なこと言ってないでさっさと落として！」

スピーカーから村紗の声が響く、彼女も大変なのだ、船の操舵に。

「しょうがねーな」

箒に跨り空を飛び降下していきレーザー等を放ち取り付いている怪人達を落としていく。

「じゃあ僕も」

紫の鬼の仮面ライダー、響鬼を召喚しＦＦＲさせ赤い鷹を模したようなヒビキアカネノタカに変形させその足に掴まり飛び立ちディエンドライバーの銃弾で敵を打ち落としていく。

「さて、私も……」

主にアンノウンを潰そうとお札を出したがどのアンノウンよりも比べ物にならないぐらいの速さで接近するアンノウンを目撃した。

「何アレ！？　速くない！？」

「アレは風のエル！　アンノウンの中であり得ないぐらい速い奴よ！」

アンノウンの中で高位に立つ鷹のよいな姿で弓を持つ風のエル、文以上かもしれない速さで飛行し甲板に降り立つ。

「人は人のままでいればよい……」

決まった言葉を言うと弓を向け矢が現れる。

「その矢に刺さったら消滅するから気を付けて！」

キバーラが注意し終えた瞬間矢は放たれ霊夢は間一髪のところを避けるがその刹那、また風のエルは弓に矢を掛ける。

「クロックアップ！」

パンチホッパーはクロックアップをし攻撃を仕掛けるがいとも簡単に避けられてしまった。

「はや……うわっ！？」

突如パンチホッパーは何者かの攻撃を受けて弾き飛ばされ危うく甲板から放り出されそうになった。

「葬！」

「大丈夫……それに今のはクロックアップ……いや、ハイパークロックアップだ」

風のエルの隣に現れたのは黄金で青い眼の巨大な角が付き左腕にはカブトゼクターのような金色のカブティックゼクター、コーカサスゼクターが装着され右手に青いバラを持つ仮面ライダーだった。

「コーカサスだと……！」

ディエンドすら驚愕させるライダーだった、その名は仮面ライダーコーカサス、ベルトの右側に装備されたハイパーゼクターにより超高速のクロックアップを越えるハイパークロックアップを使用し

超光速戦闘を行え時空や時間も越える事ができペガサスフォームでも直視はできても追い付けないだろう、通常のペガサスならば。

「厄介なのが二体もいるなんて……」

ディエンドやキバーラの反応からして風のエルとコーカサスが強敵だと霊夢は察した。

「これは骨が折れるよ……」

下ではライナー電王、ソード電王、Vゼロノス、妹紅、神奈子、諏訪子がイマジンの軍団と激戦を繰り広げていた。

「おりゃーっ！」

どこか抜けているが強い意志が籠もった掛け声を上げデンカメンソードを振るいデスイマジンに一太刀、二太刀と叩き込んでいくが鎌で受け止められてしまう。

「デェエリャァァァァーッ！！！！！！」

Vゼロノスも一緒になりゼロガッシャー・サーベルモードを振るうがやはりデスイマジンは強敵で攻撃は全て受け流されていく。

「デネブ大丈夫かぁー？」

「こっちは大丈夫ですからお構い無く～」

神奈子の言葉を返すものもとてもそんな余裕は見えない。

「案外強いものだな……怪人も」

「そうだね……数も多いし」

神である彼女らが言うからには冗談ではないだろう、モールイマジンも倒しても倒しても判らないが地底を掘り進んで姿を現す、数が減らないのだ。

「山ごと燃やしていいか？」

「それは犬神並に質が悪いだろ」

もちろんその考えは却下、その瞬間モールイマジンの何体かが赤いマーカーに貫かれ倒されていきファイズ・アクセルフォームが姿を現し通常フォームに戻るとマグナリュウガンオーも駆け付ける。

「タクミにおっさん！」

「だからおっさんじゃない！」

「結構やばいみたいだな」

だが一人いないのに気付くのに時間は掛からなかった。

「シンジは？」

「知るかあんなバカ！」

喧嘩でもしたかのように怒鳴っておりファイズエッジを持ちモールイマジンを次々と斬っていく。

「まさかな……」

◆◆◆

「ライダァァーキィィーック！」

1号はライダーキックを炸裂するがショッカーグリードは腕をクロスし受け止めてしまう。

「ライダァァーパァァーンチ！」

2号はオーズ・プトティラコンボにライダーパンチを繰り出すが赤い拳をメダガブリューに受け止められ後ろの腰から生えた長い尻尾で弾かれ吹き飛ばされてしまう。

「くっ……」

ダブルライダーでも相手がショッカーグリードとオーズ・プトティラコンボとなると苦戦を強いられてしまっていた。

「どうする本郷？」

「風見を呼びたいがすぐに来られるか分からない……」

ショッカーグリードは光弾を放とうと手に力を入れるが。

「キシャァァーッ！！」

ダークウイングが現れオーズもろとも体当たりをし怯ませる。

「ダークウイング……」

横を向くとシンジが走ってきた。

「なぜ戻ってきた？」

「やっぱり、自分で決めたことは自分でやらないとダメだと思ったので」

自分でオーズを助けたい、その思いだけでここに戻ってきたようだった。

「そうか……」

ナイトに変身しようとデッキを出すのだがオーズがメダガブリューを翳し迫ってきていた。

「危ない！」

助けに入ろうとしたがショッカーグリードに邪魔をされ動けずこのままでは取り返しが付かないことになる、最悪な考えが脳裏を過った時だった。

「グガッ！？」

「ガッ！？」

何かに跳ねられショッカーグリードに激突し倒れ込み何事かと思っていると目の前に見慣れた人物が立っていた。

「清く正しく射命丸文です～」

「文ちゃん!?」とお決まりの反応をするとそれを言われ。

「お決まりの反応乙です～シンジ“くん”」

呼び方が変わっているのに気付いたが今はそれを気にする余裕はなかった。

「仮面ライダー！　そっちの怪人を頼みます」

「ああ、任せろ！」

ナイトデッキを出すと龍騎デッキを出す文。

「お届けものですよ」

「これを……届けるために?」

「はい、こっちの方が慣れていると思ったので」

ニコッと笑うとシンジは「ありがとう」と言いデッキを受け取るが。

「そっちは私が使いますね」

代わりにナイトデッキを手にしてしまった。

「文ちゃん?」

「言いましたよね？　ナイトになる時は龍騎、龍騎になる時はナイトのデッキを預かってくれって、だからです……よ！」

そのまま腕を伸ばし腰にＶバックルが現れる、変身しようとする意志があるようでシンジは止めようとしたが。

「使わないと宝の持ち腐れじゃないですか」

「……う〝……わかったよ、もう何も言わない」

シンジも龍騎デッキを持った腕を突き出しＶバックルが腰に現れる。

『変身！』

同時にバックルにデッキを装填すると龍騎やナイトの影がオーバーラップし体に重なると通常の姿ではなく龍騎は赤い龍の顔を模したような鎧と左手にもその顔を模したドラグバイザー・ツヴァイが握られ、

ナイトはコウモリの姿を模した青と金色のライン、左腕には剣が収められたダークバイザー・ツヴァイを装備した、

サバイブという形態に変身したのだ。

「んしゃっ！」

龍騎はいつもの掛け声を発するとオーズに向けて構える。

「ダブルライダーが怪人を倒すまで俺達が止めてやるからな」

「あやや……シンジくんの無茶に突き合わされるんですね」

龍騎とナイトはオーズを食い止めるため、倒す戦いではなく止め

る戦いを始めた。

「行くぞ本郷！」
「ああ一文字！」

ダブルライダーはショッカーグリードとの本格的な戦闘が始まっていた。

「ショ～ッカァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！」

するとショッカーグリードはセルメダル、ショッカーグリードはコアメダルのショッカーメダルとセルメダルで構成された怪人でありそのセルメダルを使用し怪人を生み出すことができる。

ショッカーグリードは自らの体のセルメダルを削り二体の怪人を生み出した、一体はイカのような改造人間、もう一体は蛇のような改造人間だった。

「イカデビルに……」
「ガラガランダー……！」

ショッカーの幹部の怪人のイカデビルとガラガランダーだったがそれはセルメダルで生み出したコピーであるが実力は本物以上だろう。

ショッカーグリードを倒す前にこの二体の怪人と戦いを始めた。

◆◆◆

「ハイパークロックアップ」
【Ｈｙｐｅｒ　Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ】
コーカサスはハイパークロックアップをしクウガとパンチホッパーを一瞬で攻撃していく。
「くっ……追い付けない！」
ペガサスフォームになるが眼で追い掛けられるが体が追い付かず攻撃を食らい制限時間が訪れそうになるがマイティフォームに戻り凌いでいた。
「クロック……」
「遅い」
クロックアップをしようとするがハイパークロックアップには適わず拳を食らい吹き飛ぶとその攻撃の衝撃で変身が解けてしまった。
「蒜！」
コーカサスに殴り掛かろうとしたが一瞬にして攻撃を食らわされ動きを止められる。
「貴様から息の根を止めてやろう」

コーカサスはゆっくりと蒜に近付いていきハイパーゼクターの角を動かしライダーキックより強力なハイパーライダーキックで確実に殺そうとしていた。

「蒜！　……く、夢想封印で！」

スペルカードを出し使用しようとするのだが。

「霊夢！　危ない！」

「えっ！？」

動きを一瞬止めてしまったため風のエルの矢が放たれ一直線に向かっていた。

「キャッ！？」

反射的に横に傾くが肩を霞めバランスを崩し落下していきその恐怖により目を瞑る。

「れい……邪魔だぁぁぁぁっ！！！！！」

回りに怪人がおり助けに行ける余裕はなかった、このままではと最悪な事態を考えたその時だった。

「お待たせ霊夢ちゃん！」

聞き覚えがある男の声が響いた、霊夢は誰かに抱き抱えられると感覚がし目を開けて見えたのは赤い六つの角だった。

「咲一！？」

白い鋼のボディに赤い展開されたクロスホーンに黄色い眼、咲一が変身したアギト・シャイニングフォームだった。
アギトが乗っているのはアギト・トルネイダーに似たマシントルネイダー・スライダーモードだった。

「その姿は？」
「気付いたら変身できるように、多分トリニティになった時からなれたんじゃない？」

余り気にしていないらしい。

「アギト……！」

風のエルは自分が抹殺するべき対象が目の前に現れた事により目の色を変えた。

コーカサスは一刻と蒜に迫る、だがカブトゼクターが体当たりをしハイパーライダーキックを阻止された。

「アレは……カブトゼクター」

カブトゼクターは船の先端にいつの間にか立っていた男の手に収められた。

「兄貴！？」

総なのだが。

「済まない蒜……俺は矢車総じゃないんだ」

ゆっくりと歩きだすと右手の人差し指を天に向けた。

「おばあちゃんが言っていた、俺は天の道を往き、総ての真を司る男……天道総真」

左手に掴んだカブトゼクターを右手で掴み。

「変身」

ライダーベルトにカブトゼクターを装着すると【Ｈｅｎｓｈｉｎ】と鳴り響き銀の重装甲の鎧を纏ったカブト・マスクドフォームへと変身した。

「兄貴が……」

「総が……カブトだなんて……」

カブトゼクターのゼクターホーンを動かすと鎧は浮かび上がり。

「キャストオフ」

【Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ】

鎧は吹き飛び赤い角が上がりカブトはライダーフォームに変わる。

「カブトか……だがいかにカブトが強くともハイパークロックアップには適わない」

コーカサスにはハイパーゼクターがある、クロックアップを上回るハイパークロックアップを使えるためカブトの苦戦は確実だと思ったのだが。

「生憎、俺は未来を掴んでいるんだ」

右手を挙げるとその手にコーカサスと同じハイパーゼクターが収められた。

「な、なんだと……！」

「おばあちゃんが言っていた、俺が望みさえすれば運命は絶えずに俺に味方すると……ハイパーキャストオフ」

ハイパーゼクターをライダーベルトに装備し【Ｈｙｐｅｒ　Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ】と電子音が響き渡りカブトの装甲が形を変えていき角も巨大な物となり仮面ライダーカブト・ハイパーフォームへと強化変身を遂げた。

第２３話『１の技と２の力とプライドのＶ３』（後書き）

最強フォームが勢揃いする今回、次回で各戦いの決着がつくかと。

次回予告

カブト
「遅いな」

霊夢
「咲一！　合わせて！」

アギト
「オッケー！」

ブレイド
「着いてきちゃったのかよ……」

妖夢
「黙って行くなんてあんまりです！」

ライナー電王

「電車切り！」

ダブルライダー
『ライダーパワー！』

次回『ＮＥＸＴ　ＬＥＶＥＬ～今の自分を越えて～』

第２４話『ＮＥＸＴ　ＬＥＶＥＬ～今の自分を越えて～』

「遅いな」

ハイパーカブトとコーカサスは超光速空間の中で目に見えない速度で戦闘を繰り広げていたがカブトは余裕を見せていた。

「当たれ！　当たれ！」

コーカサスは攻撃が当たらない事に焦りを見せていた、その焦りで空回りしかえって攻撃が直撃せずカウンターを食らわされる。

「その程度か？」

超光速空間を抜け通常空間（幻想郷内は通常じゃないが）を出るとカブトは倒れたコーカサスに背を向けていた。

「くっ！　ハイパー……」
「遅い！　ハイパークロックアップ！」
【Ｈｙｐｅｒ　Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ】

ハイパーゼクターのゼクターホーンを動かし再び超光速空間の中に突入しコーカサスにハイパークロックアップを使用させる暇を与ず、
コーカサスは身体中から火花が散る度に宙を無残な格好で舞っていき度々カブトの優雅な姿が浮かぶ。

「強ぇ……」

蒜はカブトの強さに驚いているとトドメを射そうとハイパーゼクターとカブトゼクターのゼクターホーンを動かす。

【Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｒｉｄｅｒ　Ｐｏｗｅｒ】

次にカブトゼクターのスイッチを押していきゼクターホーンを動かし。

「ハイパー……キック」

【１．２．３．．．Ｒｉｄｅｒ　Ｋｉｃｋ】

右足にタキオン粒子のエネルギーが集結していく。

「ハッ！」

ジャンプすると背中から翼みたいな形で光が放たれ加速し右足を前に突き出しコーカサスに突撃し。

「らぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！！！」

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！！？」

必殺キック、ハイパーライダーキックはコーカサスを直撃、コーカサスは甲板から放り出され空中で爆死した。

【Ｈｙｐｅｒ　Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ】

船の先端の上、カブトはコーカサスが起こした爆発を背に優雅に立ち右手の人差し指を天に翳し勝利を示していた。

「フ、ハッ！」

聖輦船の上でシャイニングアギトは白銀の赤いラインが走る龍を模したような双剣シャイニングカリバー・ツインモードを両手に握り、
トルネイダー・スライダーモードを駆り、霊夢と共に風のエルの攻撃を掻い潜っていた。

「咲一！　どうするの！？」
「奴を甲板に落としてからが本当の戦い！　だから落として！」

トルネイダー・スライダーモードでは高速で飛び回れてもまだ慣れていないため自由が効かない、
最近ちょくちょく外の世界に行きバイクの免許を取りに行っていたがまだ乗り始めて間もないのだ。

「無茶言うわね」
「霊夢ちゃんには言われたくないな」

風のエルは次の矢を弓に掛け狙いを定めていた、自分の使命がアギトを葬ることだからか、アギトを優先的に狙っているためそこが一番の隙だった。

「確かにね……」

自分でも納得ができた。
そして風のエルは矢を放つがシャイニングカリバーで弾き返される。

「じゃあ私に合わせなさいよ！」
「G・I・G！」

何か別の某未来は無限大な巨大ヒーローに出てくる組織の返事をするとトルネイダー・スライダーモードを減速させその隣を霊夢が並んで飛ぶ形となり一直線に突貫する。

「っ！　くっ！」

風のエルは上手くいけば二人同時に倒せると思考を始め弓に矢を二本掛けて狙いを一瞬で定めたが。

「今よ！」
「うん！」

トルネイダー・スライダーモードが上昇しアギトが最優先のためそっちの方に注意が向く、それが二人の作戦でもあった、アンノウンの特性を利用した。

「よそ見してる暇なんて……ないわよ！」

前方から霊夢がお札を乱射、それに対応し切れず腕を交差し攻撃を防いでいると照らした太陽が雲に隠れたのか、自分を影が被い頭を上げ見たものは。

「ハァァァァァッ！！！！！！！！」

トルネイダーがバイクモードに変形し自分に向かって落下してきている、避けようにも前方から霊夢の攻撃を受けているため動けず……

「ぐわぁぁぁっ！！！？」

重さが何百キロとある車体が激突し更にはタイヤが回転しているためその摩擦熱で体が焦げながらそのまま甲板に落下、トルネイダーは走り風のエルから距離を取るとアギトはマシンから降りる。

「ハァァァァァ……！」

姿勢を低くし右腕を左斜めに翳し肩を風のエルに向け構えると目の前に白く輝くアギトの紋章が三枚現れる、通常は一枚、強化は二枚だがこのシャイニングアギトは三枚も出していた。

右腕を捻ると正面を向けて走りだし、そして飛び上がり体を丸め回転し右足を突き出し紋章を潜り抜けていき。

「タァァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！」

必殺キックである超強化シャイニングライダーキックを炸裂し風のエルに直撃させ甲板から放り出すと更に。

「追い討ちだ！」

クウガがライジングマイティフォームとなっておりライジングマイティキックを風のエルに直撃させると大きく吹き飛び一体のキングダークに激突しそれを巻き込み爆発を起こし倒されクウガはクウガゴウラムとなり空を舞っていた。

地上でのイマジン軍団との戦いは……

「ちっ！」

ファイズエッジを手放し大きく飛ばされるが武器がなくても素手でアルビノレオイマジンに殴り掛かるファイズ、そして後ろから援護射撃を行うマグナリュウガンオー。

「大丈夫かよタクミ、おっさん！」
「心配すんな、こんな猫、片付けてやっから……」
「ああ、だけどキツいな」

疲れを見せていた、妹紅も死なないからと言っても疲れたり痛みを感じる、普通に死ぬ痛みでも死なないがそれはそれでかなりの負担が掛かる。

「無茶すんなよ、慧音が心配するから」
「ああ……アイツの夢を守り切らなきゃなんねーからな……」
「後その言葉は自分もだろ」

マグナリュウガンオーは妹紅がタクミに掛けた言葉に突っ込む。
敵から距離を取るとオートバジンがバトルモードで隣に立ち何かケースみたいだが穴が空いていた、ちょうどΦの字に、それを受け取るとファイズフォンを抜きそれに連結させ【Ａｗａｋｅｎｉｎｇ】と電子音が鳴り響きファイズの姿を変えた、黒いライダースーツが赤く輝きフォトンブラッドの流れが止まりフォトンストリームが黒くなった、ファイズ・ブラスターフォームへと。

「アクセル以外なれたのか」
「まぁな……奏歌と咲夜か」

そこに奏歌が変身したキバ・エンペラーフォームと咲夜が駆け付けた。

「遅くなりました」

タツロットからザンバットソードを抜き刃先をアルビノレオイマジンに向ける。

「まだいるみたいよ」

次にまたエンペラーキバのように黄金の騎士が、一魔のブレイド・キングフォームだった、

一魔自身会いたい人物に直接会えず顔は余り知られてないが名前だけ一人歩きしていて白玉楼に住んでいるぐらいだろう有名なのは。

「なんかめちゃくちゃ失礼なことを……」

「気にしない、気にしない方がいいわよ」

アルビノレオイマジンに銃撃しナイフを投げ付けながら突っ込みをされていると。

「酷いですよ一魔さん！　一人で黙って行っちゃうなんて！」

刀を二本持った妖夢が姿を見せブレイドは軽く驚いた、バイクで来たのに後を着いてきたのかと。

「夕飯前までには終わらせましょう！　でないと幽々子様が材料つまみ食いして無くなっちゃうんですから！」

「ラジャー！」

こっちは某ダイナミックな巨大ヒーローに出る組織の返事をするとキングラウザーを持つ。

「取り敢えず早く決めて」

「こっちで動きは止めておくから！」

気付けばアルビノレオイマジンの回りに炎が囲みナイフが飛び交い。

【ファイナルクラッシュ！】

「マグナドラゴンキャノン！　発射！」

マグナドラゴンキャノンの直撃を受けていた。

「じゃあまず僕から」

ザンバットフエッスルをキバットに吹かせ「ウェイクアップ」と叫ぶとザンバットバットを刃先まで上げてから元の位置に戻す。

「ハァァァァァ……ハァッ！　ハァッ！　ハァァァァァァッ！！！！！！」

炎の中を駆けファイナルザンバット斬による斬撃をアルビノレオイマジンに食らわせると次に【ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＡＳＨ】と響く、通常ならばカードの３Ｄを潜るのだが今回は五枚のカードの３Ｄはキングラウザーの刃に吸収され黄金に輝く。

「じゃあ行くよ妖夢！」

「はい！」

妖夢と同時に走りだし炎には構わず走り。

「ウェエエエエエエエエエーイィィッ！！！！！！！！！！」

「でりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーっ！！！！！！！！！！」

ブレイドと妖夢の斬撃が繰り出されるとファイズはケースを変形させる。

「後は任せな」

変形させたファイズブラスターに付いているボタンを「５２４６」と入力し【Ｆａｉｚ　Ｂｌｓｔｅｒ　Ｔａｋｅ　Ｏｆｆ】と流れ背中に装備されたマルチユニット、フォトン・フィールド・フローター、訳してＰＦＦが起動し空中を飛行し高く上昇していき「５５３２　ＥＮＴＥＲ」の順に入力すると【Ｆａｉｚ　Ｐｏｉｎｔｅｒ　Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ】と長い電子音が流れると右足が赤く光る。

「ハァァァァァッ！！！！！！！！！」

右足を向けて突貫し必殺技ブラスタークリムゾンスマッシュ、又の名を超強化クリムゾンスマッシュをアルビノレオイマジンに叩き込むと赤く輝くフォトンブラッドの渦が生まれる。

「しゃがめぇ！」

言われた通り咄嗟にしゃがむとフォトンブラッドの渦は回りにいたモールイマジンを倒していきそしてアルビノレオイマジンは大爆発を起こし絶命した。

「これでいいだろ」
「タクミ危ねーよ！」
「あだっ！？」

妹紅の飛び蹴りを後頭部に食らい喧嘩を始めてブレイド達は仲裁に入るのだった。

デスイマジンと戦うライナー電王、途中から加勢したソード電王、Vゼロノス、神奈子と諏訪子は何としてでも動きを止めて大技を叩き込もうと奮闘していた。

「コイツと戦うのは二回目だが強過ぎるだろやっぱ」
「さっきまでの威勢はどうしたんだ赤鬼？」
「うっせー、蛇」

軽口を叩いているとデスイマジンは三日月状の光の刃を放ち咄嗟にエクストリームスラッシュで受け止める。

「アイツらがいれば楽なのによ！」

向かってくるモールイマジンをエクストリームスラッシュを炸裂した状態のデンガッシャーで一閃していくとデスイマジンにライナー電王とVゼロノスが接近しそれぞれの大剣で斬り掛かる。

「だけど諦めちゃダメだ」
（そうですよ！）

Vゼロノスはボウガンモードに組み換えたゼロガッシャーにゼロノスカードを挿入しゼロ距離でグランドストライクを発射しデスイマジンは大きく後ろへ後退ると。

「はぁぁーっ！」

ライナー電王のデンカメンソードによる強烈な攻撃に吹き飛び木に激突。

「よし今……おわぁっ！？」

その時、ソード電王に異変が起きた、デンカメンの桃のようなマスクの皮が向け左肩に青いオレンジの眼のデンカメン、右肩に金色の斧のようなデンカメン、胸に紫の龍のようなデンカメンに背中に白と青の翼のようなデンカメンが装着されるとデンオウベルトにケータロスが連結され【Ｓｕｐｅｒ　Ｃｌｉｍａｘ　Ｆｏｒｍ】と流れスーパークライマックスフォームに変身した。

「先輩、まさか僕達を必要にしてくれるなんてね」

青いデンカメンからモモタロスではない別のイマジンの声が響いた。

「亀！　それに熊と小僧！　手羽先まで！」

青はウラタロス、金はキンタロス、紫はリュウタロス、白はジークと呼ばれるイマジンの意志が宿っていた。

「みんな来てくれたんだ！」

「当然や、それにわいらだけやないで！」

赤いデンカメンに青を基準にした体に胸に電王のマークが刻まれ剣でありイマジンでもあるマチェーテディを持ったＮＥＷ電王・ス

トライクフォームがそこに現れた。

「じいちゃん来たよ！」

「幸太郎！」

どうやら祖父と孫の関係らしいが二人共まだ若い。

「こうなったらこっちも張り切るぞ！」

Ｖゼロノスはゼロノスカードを赤い面が見えるように差し替え【Ｚｅｒｏ　Ｆｏｒｍ】、ゼロノスはベガフォームだが緑ではなく赤いゼロフォームとなり分離したデネブはデネビックバスターと呼ばれるガトリング型の武器となる。

「デネブがガトリングになっちゃった！」

「あれ？　ばあちゃん？」

いきなりＮＥＷ電王はＺゼロノスに向かってそう呼び回りは間が抜けた感じとなるが。

「幸太郎」

「あ、やばい、まずった」

マチェーテディに注意されて謝り。

「さぁ～て、全員揃ったみたいだし全員でクライマックスと行こうか！」

ＳＣＸ電王はケータロスのボタンを押し【Ｃｈａｒｇｅ　ａｎｄ　Ｕｐ】と音声を鳴らすと背中のジークのデンカメンの羽根が大き

く広がり右足にフリーエネルギーが貯まってゆく。

「う〝……がっ！？」

デスイマジンは動こうとしたが回りを御柱に挟まれ更には雨のように降り注ぐ弾幕に動きを封じられると。

「動きの方は」

「私達に任せて！」

御柱と弾幕は神奈子と諏訪子によるものでＺゼロノスはデネビックバスターを構えゼロノスカードを挿入していた。

「最初に言うの忘れてました、私はか～な～り、強いですよ！」

「プトティラは無茶だけどね」

水を刺すような事を言うが今は気にせず金色に輝く砲撃バスターノヴァを放ち更に動けなくするとそのＺゼロノスの右にフリーエネルギーのレールが現れその上をライナー電王が駆け、左をＮＥＷ電王が挟むように駆け抜けていく。

「電車切りっ！」

『センス無(な)っ！』

ほとんど全員からそのネーミングを非難する声が上がるが一人だけ「かっこいい！」とＺゼロノスは叫んでいた。

ライナー電王はデンカメンソードで繰り出す電車切り、正式名称フルスロットルブレイク、ＮＥＷ電王はマチェーテディから繰り出す斬撃カウンタースラッシュで一閃するとＳＣＸ電王は空を舞っており必殺キックを炸裂しようと突貫した。

「俺達の必殺技！　全員集合だよ！　スーパークライマックスバージョン！　＋αァッ！」

ライナー電王に負けないあまりセンスの欠けらも見られない必殺技名を言うがこれの正式名称は超ボイスターズキック、今回は全員で次々と必殺技を繰り出したから先ほど避けんだ名前となり必殺キックはデスイマジンを粉砕した。

「よっしゃぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！」

ＳＣＸ電王は歓喜余って喜びの叫びを上げるとそれぞれのデンカメンに意志が宿っているため色々な方向に跳ねていく。

「そういえばあの俺からあると思わなかったコアメダル抜いた赤い手羽先野郎は？」

「アンクならもうエイジの所に飛んでったよ～」

◆◆◆

ショッカーグリードが生み出したイカデビルとガラガランダーと戦うダブルライダーと、ダブルライダーが怪人を倒すまでオーズ・

プトティラコンボを止めようと戦うシンジの龍騎サバイブと文のナイトサバイブ。

「結構使いやすいですね……！」

初変身にも関わらずナイトを使いこなしダークバイザーツヴァイからソードベントを使わず引き抜ける剣ダークブレードを持ち、引き抜かれた後のダークバイザーツヴァイはダークシールドとなる。

文自身の持ち前の速さを活かしオーズの隣を一瞬で横切り一太刀入れていきドラグバイザーツヴァイのドラグブレードを起動させている龍騎は「すげぇ」と呟き見ているしかなかった、彼女一人に任せれば大丈夫ではないかと思い始めていたがそうはさせないのが城戸シンジというバカ、辺りが凍っているため使える戦法があるのに気付いていた。

「文ちゃんも速いけどこっちも負けないぜ！」

「ガルッ！？」

突然龍騎が視界から消えて焦るオーズだがナイトの斬撃により捜索ができず背中に火花が散り振り向くが何もなくまた背中に火花が散るがナイトは目の前にいた。

光を反射するものならばなんでも鏡となる、氷もそうだ、そう龍騎は光を反射する氷を鏡として使いミラーワールドに入って奇襲を仕掛けていたのだ、当面はオーズの動きは止まったままだろう。

ダブルライダーはイカデビルとガラガランダーの邪魔によりショッカーグリードを倒せずにいたが。

「本郷先輩！　一文字先輩！」

「来たか風見！」

Ｖ３がやってきた、彼にならショッカーグリードを任せられる。

「風見、お前はショッカーグリードを頼む」

「はい！」

Ｖ３は飛び上がり白いマフラーをなびかせショッカーグリードの前に降り立ち戦闘を開始。

「Ｖ３キィィーック！」

先制としてＶ３キックをショッカーグリードに食らわす。

「トオォーウ！」

１号はイカデビルの頭部を狙いライダーキックを炸裂、そこが弱点なのだがそこを攻撃させないのが怪人である。

「やはりそこが弱点か」

セルメダルから生まれても弱点は同じだと察し頭部を狙うように打撃を加えていく。

「ライダーパンチ！　ライダーチョップ！」

次々と技をガラガランダーに決めていく2号、その猛攻に防戦一方のガラガランダー。

「ギシャァァーッ！！」

右腕の鞭を伸ばすが逆に掴まれ接近を許し体を持ち上げられ。

「ライダァァァァーきりもみシュート！！！！！！」

数話前にユウスケが文と協力して炸裂したライダーきりもみシュートを一人で炸裂しガラガランダーを空高く投げ飛ばすと高く飛び上がり体を捻り回転を加え。

「ライダー卍キィィィィィィィィーック！！！！！！！！！」

「ガラガランダァァァァァァァァー！！！！！！！！！！？」

回転キック、ライダー卍キックでガラガランダーを粉砕するとセルメダルが辺りに散らばる。

「ゲソ！？」

ガラガランダーが倒された事に動揺していると1号に体を掴まれライダー返しという投げ技を食らい地面に弱点である頭部から叩き落とされると1号は空高く飛び上がり。

「電光ぉライダァァァァーキィィィィィィィィーック！！！！！！！！」

必殺技の電光ライダーキックがイカデビルの腹部を直撃し閃光が走り爆発を起こしガラガランダーと同じようにセルメダルが飛び散る。

「しょっ……！」

ショッカーグリードは勝てないと感じ大空へ舞い逃走を測る。

「逃げられると思うなショッカーグリード！」

青いバイク、ハリケーンが自動運転が走ってきて飛び跳ねるとＶ３も高くジャンプ、ハリケーンは空中で逆さまになるとその回転する後輪を踏み台にし蹴りもっと高く飛びブーメランのように回転しショッカーグリードを追跡する。

ショッカーグリードは追い掛けてくるＶ３に激しく動揺するが右へ飛ぶ、方向転換できないと思ったのだろうか見当違いだった。

Ｖ３はなんと旋回してショッカーグリードを追尾したのだ、これにはもう小細工は効かないと思い真っ直ぐ逃げるがだんだん距離を詰められ。

「Ｖ３ィィィィィーッ！！！！！！」

Ｖ３は必殺技の態勢に入り。

「マッハ……キィィィィィィィィィィィーック！！！！！！！！！」

必殺技、体をブーメランのように回転しながら炸裂するＶ３マッハキックでショッカーグリードに直撃し上半身と下半身が別れて空中で爆発しセルメダルが散らばるとショッカーグリードのコアメダル、金色の鷲の絵が刻まれたショッカーメダルも飛ばされたが赤い鳥のような爪が生えた手でそれを掴むものがいた。

「こっちは終わったぞ！」

ダブルライダーとＶ３は龍騎達の元に駆け付ける。

「こっちもいつでも！」

オーズを挟み腕を掴み身動き取れないようにしているとダブルライダーは変身ポーズ、Ｖ３は右腕を曲げ人差し指と中指を伸ばしＶを表し、左腕を横に曲げ人差し指、中指、薬指を伸ばし３を表すポーズを取るとベルトの風車が高速回転し強烈なエネルギーがオーズのオーラングサークルに直撃しライダーパワーが注ぎ込まれていく。

「ガァァァァァァァァァッ！！！！！！！！？」

オーズは苦痛の声を上げるが薬は苦いほど効果があると同じく痛みが強いほど暴走した心が正気に戻るというものである。

「よし、今だアンク！」

１号が誰かに合図をすると。

『えっ！？』

背後に赤い鳥のようなグリード、アンクが右腕をオーズの背中に突き刺しており何かを探していた。

「あったあった」

腕を引き抜くとオーズの瞳は緑に戻り正気に戻った。

「アンク！」

腕を放しライダーパワーの照射を止めるとオーズはふらつきつつも自分の足で立ち後ろを振り向く。

「ようエイジ、まんまとんなもん入れられやがって」

アンクの手の平には鮫、鯨、オオカミウシの三つのコアメダルが乗っておりそれを握り潰し粉々に粉砕する。

「ごめん、ショッカーグリードと戦ってたらデスイマジンに入れられて……」

申し訳なさそうにするが助かったからよしにした。

「君の声、聞こえてたよ、ありがとう」

今度は龍騎に礼を言った、見ず知らずの自分を一生懸命助けようとしてくれたからだ。

「当然、人や妖怪を助けるために変身するんだ、ライダーだって助けるさ」

ここで天狗襲撃の事を思い出したがそれは保留にした、自分の意志でやったのではないからだ。

「俺は城戸シンジ、仮面ライダー龍騎さ」

「俺の名前は狭間エイジ、仮面ライダーオーズ」

第２４話『ＮＥＸＴ　ＬＥＶＥＬ～今の自分を越えて～』（後書き）

ダブルライダーとＶ３のトドメの技がＳＰＩＲＩＴＳのからだったり。

あとＮＥＷ電王の言葉は気になさらずに。

次回はかなりタイトルだけで予想がつくのでサブタイだけ発表。

次回『ＯＯＯ　Ｆｕｌｌ　Ｃｏｍｂｏ　Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｍｅｄｌｅｙ　Ｅｄｉｔ．』

第25話『OOO Full Combo Change Special Mix』

オーズ編は今回でお終いです、オーズ無双っす、OPの映司版聞きながら読むとムービー大戦っぽくはなりませんよ？（爆）

第25話『OOO Full Combo Change Special Mission』

◆◆◆

「ダブルライダー、仮面ライダーV3、キングダークは俺に任せてください」

一人でキングダークを全体倒すと言い出すオーズ・プトティラコンボ、龍騎はそれを止めようとしたがV3は必要ないと首を横に振った。

「できるな、仮面ライダーオーズ」

1号に問われ「はい！」と2号の力技と同じ以上力強い返事をし。

「なら思い切りやれ！」

アンクは軽くため息を吐いたがそれが仮面ライダーオーズ、狭間エイジだとわかっていた、長い付き合いだからだ。

「ならコイツ使ってさっさと終わらせろ」

アンクは緑のクワガタ、カマキリ、バッタのコアメダルを渡す。

「じゃあ、行きます！」

オーズドライバーのメダルを受け取ったものと入れ替えオースキャナーで読み込むと左腕を右斜めに胸の前に翳し捻り。

「変身！」

【クワガタ！　カマキリ！　バッタ！　ガータガタッキリバ！　ガタキリバ！】と歌が流れオーズの姿が緑を基準にしたものに変わって行く、

クワガタみたいな頭にオレンジの眼のクワガタヘッド、腕にカマキリソードが付いたカマキリアーム、足は緑のラインが流れるバッタレッグとなりオーラングサークルは読み込んだメダルの絵となりガタキリバコンボとなった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！！」

雄叫びを上げるとなんと分身を始めていき１０体に増え。

「分身した！？」

ナイトはカメラを持ちシャッターを切って撮影しているとアンクは十数枚以上もコアメダルを投げ渡し分身したオーズ達は一体だけガタキリバのままにしすべてメダルを入れ替え一斉にオースキャナーでスキャンし。

『変身！』

最初は【タカ！　トラ！　バッタ！　タットッバ！　タトバ　タットッバ～！】と流れ頭がタカみたいな仮面で緑の眼のタカヘッド、腕は黄色い爪トラクローが装備されたトラアームにバッタレッグの

オーズの基本コンボのタトバコンボに変身、ガタキリバももう一度スキャンし【ガータガタガタキリッバ！　ガタキリバ！】と流した。

次に【ライオン！　トラ！　チーター！　ラタラタァッ！　ラトラーター！】、仮面が青い眼でライオンのようなライオンヘッド、トラアームに足は黄色いライン流れるチーターレッグとなった俊敏なラトラーターコンボ。

【サイ！　ゴリラ！　ゾウ！　サゴーゾ……サゴーゾォ！】、次は眼が赤く白い一本の角が伸びるサイヘッドに腕に太いアーム、ゴリバゴーンを装備したゴリラアームに銀色のライン流れるゾウレッグの重量系のサゴーゾコンボ。

【タカ！　クジャク！　コンドル！　タァ～ジャァ～ドォル～】、タカヘッドとは違う赤い眼とバイザーが付いたタカブレイズヘッドに左腕に盾型の武器タジャスピナーが装備されたクジャクアームに鋭い爪が伸びるコンドルレッグ、

オーラングサークルがまるで不死鳥を描いたような絵となり、飛行能力が備えられたタジャドルコンボ。

【シャチ！　ウナギ！　タコ！　シャシャシャウタ！　シャシャシャウタ！】、青を基準にし眼が黄色くシャチヘッドに鞭、ボルタームウィップを装備したウナギアームにタコのような吸盤が付いたタコレッグの水棲系のシャウタコンボに。

【プットッティラ～ノザウル～ス！】、そして今回の主な被害の原因である緑眼のプトティラコンボ。

【タカ！　イマジン！　ショッカー！　タァマァシ！　タマシー！　タァマァシ！　……ライダァァー……タァマァシィ！】、そしてタカヘッド、モモタロスのような腕と肩に角を生やしたイマジンアームに足はコンドルレッグのようだが色は金のショッカーレッグの特殊なタマシーコンボ。

【コブラ！　カメ！　ワニ！　ブラカ～ワニ！】、茶色を基準に紫の眼、けして暴走はしていない、コブラヘッドにカメの甲羅を肩や腕に装備したカメアームにワニを表すようなラインが入ったワニ

レッグの爬虫類系の防御のブラカワニコンボに。

【スーパータカ！　スーパートラ！　スーパーバッタ！　スーパー！　タトバ　タットッバ！　スーパー！！】、タカブレイズヘッドにに爪が更に鋭くなったトラクロー・ソリッドが装備されたにトラアームにバッタレッグ、タトバコンボとは違うのはスーツの色が反転している所である、未来のコアメダルで変身したスーパータトバコンボである。

「オーズのフォーム多いな！」

龍騎が仰天している中、職務を全うしようとシャッターを切りまくるナイト。

「あ、ついでにそちらの三人もお願いします」

声を掛けられてダブルライダーとＶ３はポーズを決めてカメラに収められた。

「職務と欲望に忠実なんだな～」

職務が似ている所が多い２号は関心していると。

『ハッ！』

オーズ達は一斉に走ったり飛び立ったりしキングダークを倒しにいった。

◆◆◆

「なんとか怪人達は倒したよ」

甲板にディエンドと魔理沙は降りた時には聖輦船はボロボロで煙が上がっていた。

「あ、ねーさん」

アギトが言うねーさんは白蓮の事でやはり顔が広い咲一。

「咲一さん帰って来てたんですか～」

「ご心配をおかけしました、まぁそれはいいとして聖輦船の修理費は紅魔館のレミリア・スカーレットの方に請求しておいてください」

自分が仕える主に請求するように言うとは怖いもの知らずだがシャイニングアギトに歯向かうのも怖いもの知らず。

「終わったか？」

怪人の死体を引きずって慧音が甲板に出てきた。

「どうやって倒したの！？」

クウガのごもっともな突っ込みが空を切る、スペルカードの発動

すれば船内が更に被害がと思ったからだ。

「あ、それは頭突きでな」

『頭突きスゲー！』

蒜も一緒に叫ぶが。

「あのでかぶつどうする？」

カブトはキングダークを見て問う、破壊しないとならないのだが。

「なんか見えるぜ？」

キングダーク達の回りを飛び回る影が見えた。

「アレは……仮面ライダー！？」

それはタジャドルが赤い翼、クジャクウィング、プトティラが翼を広げて飛ぶ姿だった。

「ハァァァァッ！！！！」

タジャスピナーから火炎弾を連射していきキングダークに取り付こうとするが暴れるためなかなか接近できない。

「セイヤーッ！！！！」

プトティラが獣の如く素早く取りつきメダガブリューでキングダークの装甲に穴を空けると。

「セイヤァァァァーッ！！！！！！」

同じ掛け声でメダジャリバーという大剣に三枚セルメダルを入れオースキャナーで読み込み【トリプル！　スキャニングチャージ！】と鳴り響き必殺技オーズバッシュが炸裂した状態でタトバはその穴に剣を突き刺す。

【ゴックン！　プットッティラ～ノヒッサ～ツ！】とプトティラがグランド・オブ・レイジをキングダークに叩き込み更にスキャニングチャージしたラトラーターがトラクローで相手を切り裂くガッシュクロスを炸裂しキングダークの一体は沈黙し倒れ機能を停止させた。

「嘘！？　倒しちゃったよ！？」

まさか倒すとは思わず驚いているとキングダークの一体が破壊光線を発射してしまった。

「ダメ！　損傷が激しくて反応が鈍い！」

聖輦船は損傷が酷く反応が鈍く方向が変えられずこのままでは直撃とは思われたその時、タジャドルがブラカワニを連れて現れ、腕の盾で破壊光線を防ぎ切る。

「大丈夫ですか？」

「え、あ、ありがとうございます」

白蓮が代表した感じで礼を言うと。

「キングダークは俺に任せてください！　セイヤーッ！！」

それを言い残しブラカワニを連れてキングダークの方へ飛んでいく。

今度はサゴーゾがスキャニングチャージをし重力を操り一体のキングダークを持ち上げ地表に叩き付けていき背中を向け倒れたところをガタキリバがまた分身して一斉にガタキリバキックとブラカワニのスライディングキック、ワーニングライトを炸裂しまたキングダークを倒した。

「まだまだ！」

タマシーはイマジンの砂球とショッカーマーク型の炎をぶつける魂ボンバーを炸裂しキングダークを貫くとスーパータトバキックのスーパータトバキック。

【タカ！　クジャク！　コンドル！　ギン！　ギン！　ギン！　ギガスキャン！】

タジャスピナーに自らのタジャドルのメダルとセルメダル四枚を装填しオースキャナーで起動させ火の鳥のように炎を体に纏い突貫するマグナブレイズを炸裂しシャウタもタコレッグがタコの足のように変化して放つドリルキック、オクトバニッシュを炸裂、三体目のキングダークを倒す。

「最後の一体、全員で行くよ！」

一斉に【スキャニングチャージ！】と鳴り響くとまずはプトティラが冷気を放ちキングダークの足を凍らせ動きを封じると今度は【ゴックン！　プットッティラ～ノヒッサ～ツ！】とストレインドゥームとタマシーの魂ボンバー、サゴーゾのゴリバゴーンを放つバゴーンプレッシャー、更にはタジャドルが巨大な火炎弾、タジャドル・

フレイム・スリーと呼ばれる必殺技を放ちキングダークに一斉に攻撃。

ラトラーターはガッシュクロス、ブラカワニはワーニングライトを足に同時に炸裂しキングダークを仰向けに倒れさせるとタジャドルは再びスキャニングチャージをし。

『ハァァァァァ……セイヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！』

タトバのタトバキック、ガタキリバのガタキリバキック、コンドルレッグが鳥の爪のように変化し放つプロミネンスドロップにシャウタのオクトバニッシュ、そしてスーパータトバのスーパータトバキックが炸裂しキングダークを粉砕するのであった。

◆◆◆

キングダークを倒した後、エイジは何度も謝っていた。

「すみません！　神社を壊して！」

「まったくだな」

全壊した守矢神社の境内で早苗達に謝っていた、天狗襲撃の方は反省しているため大天狗等に言う必要ないと考え文が怪人達の仕業と報告することに、後、金髪で赤いズボンを履き右腕の裾が赤くなった白い服を着た青年となったアンクも一緒になり怒っているような感じだった。

「直してくれるなら別にいいが」
「本当ですか！？　わかりました！」

神奈子は冗談のつもりだったらしいがかなり本気らしく神社の修理は彼らに任せる事に。

「そういえばダブルライダー達は？」

いつの間にかダブルライダーが居なくなっているのに気付きシンジは空を見上げると白く赤いラインの新幹線が空を走り光の渦に入っていった。

「ってかデンライナーが！？」

健太郎やモモタロス、青い亀のウラタロスに金の熊のキンタロス、紫の龍のリュウタロスに白い鳥のジークが取り残されてしまった。

「オーナーが当分はここに居てだって」

健太郎はその消えた新幹線、デンライナーのオーナーからの伝言を伝え納得させた、ＮＥＷ電王もそのデンライナーに乗っていたためこの場に姿はなかった。

（だけど幸太郎はあの娘の事を……まさかね）

ウラタロスは何かを悟り始めていた。

「健太郎くん達はこれから？」

早苗に聞かれ考え始めた、野宿でもいいが食料も現金もない、どこか泊まる事を考えていると。

「なら命蓮寺に泊まりますか？」

まるで聖人君子の如くの微笑みで話し掛けてきた白蓮の申し出に縋った。

「ありがとうございます、これからお世話になります」

後エイジと健太郎は電王とオーズの世界が合わさった世界の住人であり、エイジが神社を建てる事を言い健太郎やモモタロス達もそれを手伝うことになった。

博麗神社、総真と葬は話し合っていた。

「済まない……もう矢車総に戻らない」

「いいよ兄貴、兄貴は本当の自分を取り戻したんだから」

総が総真に戻ろうともこの二人の仲が変わるような事はないのだろう。

「良かった良かった」
「そーね」

ユウスケ、キバーラ、咲一、霊夢はその二人を見ていた。

「そろそろ自分の宿見つけなきゃな……俺達も」
「まだいてもいいわよ？」
「だって男が住むのもアレでしょ？　霊夢ちゃんには咲一がいるんだから」
「そうよ」

顔を見合わせると咲一は微笑む、霊夢は顔を赤くした。

「そ、そうね」
「一応いいとこ何個か見付けたから今週中には総真達とそっちに行くよ」

◆◆◆

「チッ……デスショッカーの奴……あんなん持っていやがったのか……」

とある世界、士が変身したディケイドがクウガに似ているが体は白く、瞳は黒く残忍な性格を表していた。

「門矢さん！」

そこにはユウスケではないクウガがいた、そのクウガは四本の金の角にアークルがライジングとなりアマダムは黒く輝き鎧も黒く金色のラインが流れ優しさを表した赤い眼、仮面ライダークウガ・アルティメットフォームがいた。

「五代……奴は……」

「グロンギの最強の怪人……ン・ダグバ・ゼバです……俺が自分の世界で倒した」

五代と呼ばれたクウガとディケイドはいつでも戦えるように構えていたのだがダグバは興味がないかのように背を向けた。

「どういうつもりだ？」

「僕は自分の世界に帰るだけだよ」

無邪気な声を上げ今の自分の目的を告げると目の前に次元の壁が現れる。

「自分の世界……」

「僕はオリジナルクウガの世界の僕じゃない……僕は……」

表情は判らないがにやりと笑っているようにも見えていた。

「ガミオが封印された時、別の世界に飛ばされたリイマジネーショ

ンのクウガの世界の僕だから」

ダグバは次元の壁の中に入りオーロラは消えた。

「リイマジネーション……まさかユウスケ……」

「門矢さん」

二人は変身を解く、クウガの変身者は口元にほくろができた優しそうな青年だった。

「行くか、リイマジのクウガの世界に……」

第25話『OOO Full Combo Change Special Movie』

今回のフルコンボは夏の映画でタマシーもいたらいいのにと思ってムービー大戦のスーパータトバも合わせてやっちゃいました。
冬のアレはすごかった……だけどプトティラ涙目、ＰＯＷＥＲｔｏ　ＴＥＡＲＥＲが好きなんです！
二番目はラトラーターですかね？一人じゃカラオケで歌えませんがタジャドルならギリギリ！
そして最後のクウガはもう一つの始まりでもある仮面ライダーでした。

次回予告

キバット
「今日は里で演奏会だったよな」

妖夢
「ウゾダドンドコドーン！」

慧音
「奏月、少しいいか？」

奏歌
「ファンガイア……」

一魔
「ギャレンの資格者は彼女がいいかもしれない……」

一魔／奏歌
「「変身！」」

次回『仮面組曲・二人の黄金騎士』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9946x/

仮面ライダーディケイド・IF 仮面ライダークウガ～小野寺ユウスケの幻想録～

2011年12月18日10時56分発行